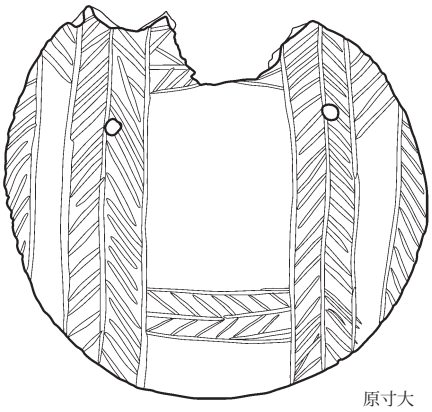
喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書（17）

－畑地帯総合整備事業（担い手育成型）手久津久地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

川尻遺跡



2021年2月

喜界町教育委員会

川尻遺跡出土遺物 集合写真

序　　文

この報告書は，畑地帯総合整備事業（担い手育成型）手久津久地区に伴い，平成 24 ～ 26 年度に実施した川尻遺跡の埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめたものです。

本遺跡では，縄文時代土器や古代末の土坑墓，中世の溝状遺構など数々の重要な発見がありました。特に古代末の兼久式土器と，彫刻された貝製品や骨製品が多数見つかったことは重要な成果です。ヤコウガイ製の貝匙や開元通寶などは本町で初めての出土事例であり，奄美や沖縄の歴史を考えるうえで重要な遺跡です。

今回の発掘調査報告書が，学術書籍としての役割だけでなく，多くの町民の皆様に地元の歴史・文化へ関心を寄せていただく機会になると共に，私たちの足元にかつて広がっていた世界に目を向けていただき，先人のすばらしさを学ぶ学習教材としても活用していただけたら幸いです。

最後に，新型コロナウイルス感染症の影響を受ける中で，発掘調査や整理作業に従事していただいた町民の皆様をはじめ，発掘調査から報告書作成にいたるまで御指導・御協力いただきました鹿児島県教育庁文化財課，県立埋蔵文化財センター，御指導並びに玉稿を賜りました先生方，調査に御配慮くださいました大島支庁喜界事務所農村整備係，その他関係機関の方々に対し，深く感謝の意を表すとともにお礼申し上げます。

令和３年２月

喜界町教育委員会
教育長　久保康治

例　　言

1　本報告書は，畑地帯総合整備事業（担い手育成型）手久津久地区に伴う川尻遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は平成24年度～26年度に喜界町教育委員会が鹿児島県農政部農地整備課（大島支庁喜界事務所農村整備係）の受託事業として，鹿児島県教育庁文化財課・鹿児島県立埋蔵文化財センターの指導・支援のもと実施した。

3　整理作業及び報告書作成は，喜界町教育委員会が平成29～令和元年度事業として鹿児島県教育庁文化財課・鹿児島県立埋蔵文化財センターの指導・支援のもと実施した。

4　本書に用いたレベル数値は絶対海抜高による。

5　遺構・遺物の縮尺はそれぞれの挿図内に提示してある。遺構は20分の1，遺物は土器3分の1・石器４分の１を基本とするが，一部100分の1・250分の１などで示しているものもある。

6　遺物番号は全て通し番号とし，本文及び挿図，表番号とも一致する。

7　本報告書の遺構番号（土坑墓・土坑・溝など）は，発掘調査中に付与した遺構通し番号である。調査年度よっては番号が連続でない部分が存在する。

8　貿易陶磁器については，沖縄県立埋蔵文化財センター瀬戸哲也氏の指導のもと分類を行った。石器類の石材同定の一部は鹿児島大学名誉教授大木公彦氏，鹿児島大学准教授ハフィーズ ウル レーマン氏のご教授による。貝類の分類・同定については，千葉県立中央博物館黒住耐二氏からいただいた指導を基に野﨑が行った。

9　遺物の実測は，会計年度任用職員の協力のもと野﨑拓司（土器・貝製品・骨製品）・松原信之（石器）・安武憲史（陶磁器）・岩元さつき（貝製品）・安栖祐樹（骨製品）が行った。遺構・遺物のトレースは，会計年度任用職員の協力のもと野﨑拓司・松原信之・岩元さつき・安栖祐樹が行った。遺物写真撮影は，会計年度任用職員の協力のもと安武憲史が行った。遺物のカウント・データ入力等については澄世津代・澄田直敏の協力を得た。

10　第Ⅵ章自然科学分析では，炭化物の年代測定及び樹種同定は(株)加速器分析研究所，パリノ・サーヴェイ（株），琥珀のFT-IR（赤外分光）分析は（公財）元興寺文化財研究所に委託した。また，国立歴史民俗博物館・研究部　齋藤努氏に玉稿をいただいた。

11　第Ⅶ章分析・同定では，鉄製品については愛媛大学アジア古代産業考古学研究センター，人骨については鹿児島女子短期大学，動物骨については鹿児島大学農学部，魚骨については早稲田大学樋泉岳二氏に委託した。

12　発掘調査（当時）・整理作業にあたっては，次の方々に御指導・御助言をいただいた。記して感謝申し上げます。
金沢大学国際文化資源学研究センター助教覚張隆史氏，千葉県立博物館黒住耐二氏，早稲田大学非常勤講師樋泉岳二氏，奈良大学教授坂井秀弥氏，愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター長村上恭通氏，西南学院大学教授高倉洋彰氏，西南学院大学教授伊藤慎二氏，熊本大学教授木下尚子氏，鹿児島大学名誉教授西中川駿氏，鹿児島大学松元光春氏，鹿児島大学教授渡辺芳郎氏，鹿児島大学埋蔵文化財調査センター助教新里貴之氏，鹿児島女子短期大学教授竹中正巳氏，鹿児島県立埋蔵文化財センター所長堂込秀人氏，奄美市立奄美博物館館長中山清美氏，琉球大学教授池田榮史氏，沖縄県立埋蔵文化財センター主任専門員瀬戸哲也氏，沖縄県立埋蔵文化財センター調査班主任亀島慎吾氏，瀬戸内町教育委員会学芸員鼎丈太郎氏

13　本書の編集は野﨑が担当した。また，主な執筆分担は以下のとおりである。
第Ⅰ章，第Ⅲ～Ⅴ章，第Ⅷ・Ⅸ章・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・野﨑拓司
第Ⅱ章・・・安武憲史
第Ⅸ章　４石器類・・松原信之

14　出土した遺物は喜界町埋蔵文化財センターで保管し，展示・活用する計画である。

位置図
甑島
宇治群島
馬毛島
竹島
黒島
硫黄島
口永良部島
種子島
屋久島
口之島
中之島
吐噶喇列島
諏訪瀬島
悪石島
宝島
奄美大島
喜界島
加計呂麻島
徳之島
奄美群島
沖永良部島
与論島
沖縄島
喜界島
喜界空港
赤連
池治
ハイキ崎
中里
荒木
荒木崎
手久津
上嘉鉄
ソツル崎
羽里
山田
城久
滝川
百之台
阿伝
蒲生
花良治
浦原
先山
川嶺
中熊
先内
中間
西目
大朝戸
島中
坂嶺
伊砂
伊実久
長嶺
嘉鉄
自衛隊通信所
湾
0
(1 : 50,000)
2km

第１図　喜界島位置図

目　次

第Ⅰ章　調査の経過

第１節　調査に至るまでの経緯…… 1
第２節　調査の組織…… 1
第３節　遺跡調査の経過…… 4

第Ⅱ章　遺跡の立地

第１節　地理的環境…… 5
第２節　歴史的環境…… 5

第Ⅲ章　試掘・確認調査等の成果

第１節　試掘・確認調査の概要 …… 9

第Ⅳ章　平成24年度の調査の方法と成果

第１節　調査の概要…… 13
第２節　Ⅱ層・Ⅰｂ層検出遺構 …… 17
第３節　Ⅲ層検出遺構…… 25
第４節　Ⅲ層出土遺物…… 28
第５節　Ⅱｄ･e 層 (Ⅲ層・Ⅳ層の間) 検出遺物… 33
第６節　Ⅳ層 (白砂層) 出土遺構 …… 33
第７節　Ⅳ層中出土遺構…… 39
第８節　Ⅳ・Ⅴ層検出遺物…… 63
第９節　川尻遺跡 B 地点 …… 68

第Ⅴ章　平成25･26年度の調査の方法と成果

第１節　調査の概要…… 69
第２節　表土～Ⅱ層出土資料…… 72
第３節　Ⅲ層出土資料…… 77
第４節　平成 25 年調査区北側Ⅳ層検出
遺構・遺物…… 79
第５節　H25 調査区南側 …… 119
第６節　Ⅳ層出土遺物…… 134
第７節　Ⅴ層出土遺物…… 136
第８節　Ⅵ層出土遺物 …… 136
第９節　ピット出土遺物 …… 136

第Ⅵ章　自然科学分析

第１節　川尻遺跡における放射性炭素年代（AMS
測定）…… 137
第２節　川尻遺跡における放射性炭素年代（AMS
測定）…… 139
第３節　川尻遺跡出土炭化材の樹種・…… 141
第４節　川尻遺跡出土炭化物の放射性炭素年代
測定 (AMS 法) 及び樹種同定 …… 143
第５節　川尻遺跡出土人骨の年代測定…… 146
第６節　鹿児島県大島郡喜界町川尻遺跡出土遺物の
自然科学分析…… 148
第７節　川尻遺跡黒曜石産地推定分析…… 151
第８節　喜界町手久津久地区川尻遺跡出土青銅
鋤先の鉛同位体比分析結果…… 155

第Ⅶ章　分析・同定

第１節　鉄製品・鍛冶関連遺物…… 156
第２節　喜界町川尻遺跡出土の動物遺体
－平成 24、25 年度調査－…… 169
第３節　川尻遺跡の平成 24 ～ 25 年度調査で
採集された魚類遺体…… 200
第４節　喜界町川尻遺跡石蓋土坑墓出土の人骨… 217

第Ⅷ章　基礎資料

第１節　概要…… 218

第Ⅸ章　総括 …… 230

図目次

第１図　喜界島位置図
第２図　川尻遺跡調査図…… 1
第３図　南西諸島の諸島・群島・列島の名称と範囲… 5
第４図　主な遺跡位置図…… 8
第５図　上:16T遺物出土状況　下:16･17T連結部土層堆積状況…… 9
第６図　トレンチ配置図…… 9
第７図　トレンチ出土遺物…… 10
第８図　表採資料…… 11
第９図　手久津久地区の遺跡群…… 12
第10図　平成24年調査Ⅱ層検出遺構配置図 …… 13
第11図　土層断面図 …… 14
第12図　土層堆積概念図 …… 15
第13図　調査範囲空中写真 …… 15
第14図　先行調査出土遺構・遺物 …… 16
第15図　SD02・SD05 …… 17
第16図　焼土１・２ …… 18
第17図　貝集中#１出土遺物 …… 18
第18図　貝集中#２出土遺物（１） …… 19
第19図　貝集中#２出土遺物（２） …… 20
第20図　貝集中#２出土遺物（３） …… 21
第21図　貝集中#３出土遺物 …… 22
第22図　貝集中#４出土遺物 …… 23
第23図　Ⅲ層遺構検出状況 …… 25
第24図　焼土３・P004 …… 26
第25図　SD01・03出土遺物 …… 26
第26図　SK01 …… 27
第27図　SK05 …… 28
第28図　SK06 …… 28
第29図　SK10 …… 29
第30図　Ⅲ層出土遺物（１） …… 30
第31図　Ⅲ層出土遺物（２） …… 31
第32図　Ⅱd･e層出土遺物 …… 32
第33図　Ⅳ層・Ⅳ層中検出遺構配置図 …… 33
第34図　SK03･04 …… 34
第35図　SK07 …… 34
第36図　SK08 …… 35
第37図　SK09 …… 35
第38図　SX01・02 …… 36
第39図　SX03 …… 37
第40図　SX04（１） …… 37
第41図　SX04（２） …… 38
第42図　SX05 …… 38
第43図　SX05･06検出状況 …… 39
第44図　SX06 …… 40
第45図　SX07 …… 41
第46図　SX08・39（１） …… 42
第47図　SX08・39（２） …… 43
第48図　SX09（1） …… 44
第49図　SX09（2） …… 45
第50図　SX10・SK18（１） …… 47
第51図　SX10・SK18（２） …… 48
第52図　SX11・12 …… 49
第53図　SX13・19 …… 49
第54図　SX14・15・16 …… 50
第55図　SX17 …… 51
第56図　SX20・21・40 …… 51
第57図　SX22・23・24・25・26…… 52
第58図　SX27 …… 53
第59図　SX30・34・41（１） …… 54
第60図　SX30・34・41（２） …… 55
第61図　SX31 …… 57
第62図　SX32 …… 57
第63図　SX33 …… 58
第64図　SX35・37 …… 59
第65図　SX36・44（１） …… 60
第66図　SX36・44（２） …… 61
第67図　SX42 …… 61
第68図　SX43 …… 62
第69図　SX45 …… 62
第70図　SX46 …… 63
第71図　Ⅳ層出土遺物 …… 64
第72図　Ⅴ層出土遺物（１） …… 65
第73図　Ⅴ層出土遺物（２） …… 66
第74図　川尻B地点調査状況図…… 68
第75図　平成25年調査区全景 …… 69
第76図　土層堆積状況 …… 70
第77図　川尻遺跡遠景①（東から奄美大島側を望む）…… 71
第78図　表土～Ⅱ層出土遺物 …… 72
第79図　平成25年調査区北側Ⅱ･Ⅲ層検出遺構 …… 73
第80図　SD06出土遺物（１） …… 74
第81図　SD06出土遺物（２） …… 75
第82図　SD10出土遺物 …… 75
第83図　焼土跡５・６ …… 76
第84図　Ⅲ層出土遺物 …… 77
第85図　Ⅳ層貝だまり・集石位置図 …… 79
第87図　貝だまり４ …… 80
第86図　貝だまり１～３ …… 80
第88図　貝だまり５（１） …… 81
第89図　貝だまり５（２） …… 82
第90図　貝だまり５（３） …… 83
第91図　貝だまり６（１） …… 84
第92図　貝だまり６（２） …… 85
第93図　貝だまり７ …… 86
第94図　貝だまり８ …… 86
第95図　貝だまり９・10 …… 87
第96図　貝だまり11（１） …… 88
第97図　貝だまり11（２） …… 89
第98図　貝だまり11（３） …… 90
第99図　貝だまり12 …… 90
第100図　H・I96区Ⅳ層出土遺物…… 92
第101図　J96区Ⅳ層出土遺物 …… 93
第102図　K・L・M96，I・K97区Ⅳ層出土遺物 … 94
第103図　K～N97区Ⅳ層出土遺物 …… 95
第104図　H98区Ⅳ層出土遺物 …… 96
第105図　H・I・J98区Ⅳ層出土遺物 …… 97
第106図　J・K98区Ⅳ層出土遺物…… 98
第107図　L・M98区Ⅳ層出土遺物 …… 99
第108図　N98，H・I99区Ⅳ層出土遺物 …… 100
第109図　J・K・L99区Ⅳ層出土遺物 …… 101
第110図　M99区Ⅳ層出土遺物 …… 102
第111図　Ⅳ層出土遺物（１） …… 102
第112図　Ⅳ層出土遺物（２） …… 103
第113図　Ⅳ－Ⅴ層出土遺物 …… 104
第114図　Ⅴ層出土遺物 …… 105
第115図　Ⅳ－Ⅵ層出土遺物 …… 105
第116図　集石47～49・52…… 110
第117図　集石51出土人骨・遺物 …… 111
第118図　SK41 …… 112
第119図　SK45 …… 112
第120図　SK50 …… 113
第121図　SK60 …… 115
第122図　SK61 …… 116
第123図　ピット出土遺物（１） …… 117
第124図　ピット出土遺物（２） …… 118
第125図　南側調査区Ⅱ層･土坑墓遺構配置図 …… 119
第126図　表土・カクラン範囲白砂層出土遺物 …… 120
第127図　Ⅱ層・SD08出土遺物 …… 120
第128図　獣骨集中01出土遺物 …… 120
第129図　SK21 …… 122
第130図　人骨集中02出土遺物 …… 123
第131図　SK23 …… 124
第132図　SK27 …… 126
第133図　SK28 …… 128
第134図　SK29 …… 129
第135図　SK30 …… 130
第136図　SK31 …… 130
第137図　SK32 …… 131
第138図　SK34 …… 132
第139図　Ⅳ層出土遺物 …… 133
第140図　Ⅴ-Ⅵ層出土遺物 …… 134
第141図　ピット出土遺物 …… 135
第142図　炭化材 …… 142
第143図　暦年校正結果 …… 145
第144図　暦年校正結果 …… 147
第145図　川尻遺跡出土資料の赤外吸収スペクトル　148
第146図　標準琥珀の赤外吸収スペクトル …… 149
第147図　コパール樹脂等の赤外吸収スペクトル … 149
第148図　川尻遺跡、川寺遺跡出土資料および瑞浪市産琥珀のTGA・DTA曲線 …… 149
第149図　標準琥珀のTGA・DTA曲線 …… 149
第150図　黒曜石産地一覧 …… 152
第151図　黒曜石産地推定結果（１） …… 154
第152図　黒曜石産地推定結果（２） …… 154
第153図　袋状鉄斧 …… 156
第154図　刀子・小刀・庖丁・鑿 …… 157
第155図　釣針・モリ・ヤス・ケージャー …… 157
第156図　釘・鋲 …… 158
第157図　棒状鉄製品 …… 159
第158図　鋳鉄製容器（１） …… 159
第159図　鋳鉄製容器（２） …… 160
第160図　鋳鉄製容器52 …… 160
第161図　鋳鉄製容器（３） …… 161
第162図　板状鉄製品 …… 161
第163図　鞴羽口・鉄塊・鉄滓 …… 163
第164図　Ⅳ層以下出土鉄製品 …… 164
第165図　古代(80)と中世(84)の羽口…… 165
第166図　川尻遺跡平成24～25年度調査で採集された魚類遺体の組成の変遷（１）：MINI比 …… 209
第167図　川尻遺跡平成24～25年度調査で採集された魚類遺体の組成の変遷（２）：NISP比 …… 210
第168図　川尻遺跡Ⅳ層（兼久期）における貝だまりと包含層の魚類遺体の組成の比較：NISP比… 210
第169図　川尻遺跡平成25年度調査において水洗選別によって採集された魚類遺体のメッシュ別検出率：NISP比 …… 213
第170図　川尻遺跡平成25年度調査において水洗選別によって採集された魚類遺体の組成比(1)4mmメッシュ：NISP比 …… 213
第171図　川尻遺跡平成25年度調査において水洗選別によって採集された魚類遺体の組成比(2)1.5mmメッシュ：NISP比 …… 213
第172図　川尻遺跡平成25年度調査において水洗選別によって採集された魚類遺体の組成比(3)4mm+1.5mmメッシュ：NISP比 …… 213
第173図　川尻遺跡石蓋土坑墓出土人骨(上段:正面観,下:左側面観)…… 217
第174図　平成24年度川尻遺跡遺構配置図 …… 225
第175図　平成25年度川尻遺跡遺構配置図（１） … 226
第176図　平成25年度川尻遺跡遺構配置図（２） … 227
第177図　平成25年度川尻遺跡遺構配置図（３） … 228
第178図　平成25年度川尻遺跡遺構配置図（４） … 229
第179図　川尻遺跡主要遺物 …… 231

表目次

第１表　主な島内遺跡地名表…… 7
第２表　表採資料……11
第３表　トレンチ出土遺物観察表……11
第４表　Ⅱ層遺物観察表（１）……21
第５表　Ⅱ層遺物観察表（２）……23
第６表　Ⅱ層遺物観察表（３）……24
第７表　Ⅲ層遺構観察表（１）……27
第８表　Ⅱ～Ⅲ層遺構出土遺物観察表（２）……29
第９表　Ⅱ～Ⅲ層遺構観察表（３）……30
第10表　Ⅱ～Ⅲ層遺構観察表（４）……31
第11表　Ⅳ層遺構出土遺物観察表（１）……35
第12表　SX出土遺物観察表（１）……39
第13表　SX出土遺物観察表（２）……43
第14表　SX出土遺物観察表（３）……45
第15表　SX出土遺物観察表（４）……47
第16表　SX出土遺物観察表（５）……52
第17表　SX出土遺物観察表（６）……55
第18表　SX出土遺物観察表（７）……58
第19表　SX出土遺物観察表（８）……63
第20表　Ⅳ・Ⅴ層出土遺物観察表（１）……66
第21表　Ⅳ・Ⅴ層出土遺物観察表（２）……67
第22表　表土出土遺物観察表……71
第23表　Ⅱ層・溝状遺構出土遺物観察表……72
第24表　溝状遺構出土遺物観察表……76
第25表　Ⅲ層・貝だまり出土遺物観察表（１）……78
第26表　貝だまり出土遺物観察表（２）……83
第27表　貝だまり出土遺物観察表（３）……85
第28表　貝だまり出土遺物観察表（４）……87
第29表　貝だまり・Ⅳ層出土遺物観察表……91
第30表　Ⅳ層出土遺物観察表（１）…… 106
第31表　Ⅳ層出土遺物観察表（２）…… 107
第32表　Ⅳ層出土遺物観察表（３）…… 108
第33表　Ⅳ～Ⅵ層，遺構出土遺物観察表…… 109
第34表　ピット出土遺物観察表…… 117
第35表　表土～Ⅳ層出土遺物観察表…… 121
第36表　Ⅳ層～Ⅴ層出土遺物観察表…… 134
第37表　Ⅴ層・Ⅵ層・ピット出土遺物観察表…… 135
第38表　石蓋土坑墓測定値（１）…… 138
第39表　石蓋土坑墓測定値（２）…… 138
第40表　SX出土炭化物測定値（１）…… 140
第41表　SX出土炭化物測定値（２）…… 140
第42表　樹種同定結果…… 141
第43表　放射性炭素年代測定・樹種同定結果…… 145
第44表　放射性炭素年代測定結果…… 147
第45表　黒曜石原産地試料一覧…… 153
第46表　スペクトル強度と判別指標値…… 153
第47表　黒曜石判定結果…… 154
第48表　釘・鎹製品計測表…… 158
第49表　棒状鉄製品計測表…… 159
第50表　鋳鉄製容器・板状鉄器計測表…… 162
第51表　川尻遺跡の24年度調査区別・動物別出土骨量…… 182
第52表　川尻遺跡の25年度調査区別・動物別出土骨量…… 183
第53表　川尻遺跡の遺構・調査区別動物遺体の出土状況(H24年度調査)（１）…… 184
第54表　川尻遺跡の遺構・調査区別動物遺体の出土状況(H24年度調査)（２）…… 185
第55表　川尻遺跡の遺構・調査区別動物遺体の出土状況(H24年度調査)（３）…… 186
第56表　川尻遺跡の遺構・調査区別動物遺体の出土状況(H24年度調査)（４）…… 187
第57表　川尻遺跡の遺構・調査区別動物遺体の出土状況(H25年度調査)（１）…… 187
第58表　川尻遺跡の遺構・調査区別動物遺体の出土状況(H25年度調査)（２）…… 188
第59表　川尻遺跡の遺構・調査区別動物遺体の出土状況(H25年度調査)（３）…… 189
第60表　川尻遺跡の遺構・調査区別動物遺体の出土状況(H25年度調査)（４）…… 190
第61表　川尻遺跡の遺構・調査区別動物遺体の出土状況(H25年度調査)（５）…… 191
第62表　川尻遺跡の遺構・調査区別動物遺体の出土状況(H25年度調査)（６）…… 192
第63表　川尻遺跡の遺構・調査区別動物遺体の出土状況(H25年度調査)（７）…… 193
第64表　川尻遺跡平成24～25年度調査で採取された魚類遺体の種名一覧…… 200
第65表　川尻遺跡平成24～25年度調査で採取された魚類遺体の同定結果（１）
(SK･SP･集積･集石･ドット取上げ出土資料を除く）…… 202
第66表　川尻遺跡平成24～25年度調査で採取された魚類遺体の同定結果（２）
(SK･SP･集積･集石･ドット取上げ出土資料を除く）…… 204
第67表　平成24年度(H24)SK･SP･SXおよび平成25年度(H25)SK･SP･集石から採取
された魚類遺体の同定結果（１）…… 206
第68表　平成24年度(H24)SK･SP･SXおよび平成25年度(H25)SK･SP･集石から採取
された魚類遺体の同定結果（２）…… 207
第69表　平成25年度(H25)ドット取り上げ資料における魚類遺体の同定結果…… 208
第70表　川尻遺跡平成24～25年度調査で採取された魚類遺体の組成（１）
：最小個体数（MIN）…… 208
第71表　川尻遺跡平成24～25年度調査で採取された魚類遺体の組成（２）
：同定標本数（NISP）…… 209
第72表　川尻遺跡平成25年の調査において貝だまりの水洗選別によって採集された
魚類遺体の同定結果…… 211
第73表　川尻遺跡平成25年の調査において水洗選別によって採集された魚類遺体の
組成…… 212
第74表　出土人骨の頭蓋計測値(mm)…… 217
第75表　遺構内出土遺物一覧（１）…… 218
第76表　遺構内出土遺物一覧（２）…… 219
第77表　遺構内出土遺物一覧（３）…… 220
第78表　遺構内出土遺物一覧（４）…… 221
第79表　遺構内出土遺物一覧（５）…… 222
第80表　遺構内出土遺物一覧（６）…… 223
第81表　遺構内出土遺物一覧（７）…… 224
第82表　変更した遺構番号…… 230
第83表　SX計測・重複関係…… 230
第84表　変成岩早見表…… 233
第85表　遺構別石器出土一覧…… 235
第86表　石材別の石器一覧(縄文時代～古代)…… 236
第87表　石材別の石器一覧(サンゴ・変成岩詳細)…… 236

第Ⅰ章　調査の経過

第１節　調査に至るまでの経緯

鹿児島県農政部農地整備課（大島支庁喜界事務所農村整備係，以下県農政部）は，大島郡喜界町手久津久地内において，畑地帯総合整備事業（担い手育成型）手久津久地区を計画し事業区域内の埋蔵文化財の有無について，喜界町教育委員会（以下，町教育委員会）に照会した。

これを受けて，鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下，県埋蔵文化財センター）と町教育委員会が平成19・21年度に分布調査を実施したところ，事業区域内に5つの遺物散布地（崩リ遺跡・中増遺跡・川尻遺跡・川寺遺跡・水洗遺跡）が確認された。

この分布調査の結果をもとに，県農政部，鹿児島県教育庁文化財課（以下，県文化財課），町教育委員会は，埋蔵文化財の保護と事業の調整を図るために協議を行った結果，事業着手前に埋蔵文化財確認調査（以下，確認調査）を実施することとなった。

川尻遺跡の確認調査は，町教育委員会が調査主体となり，平成21年6月～11月に実施した（第５図）。調査の結果，縄文時代～古代と考えられる遺構・遺物を確認した。

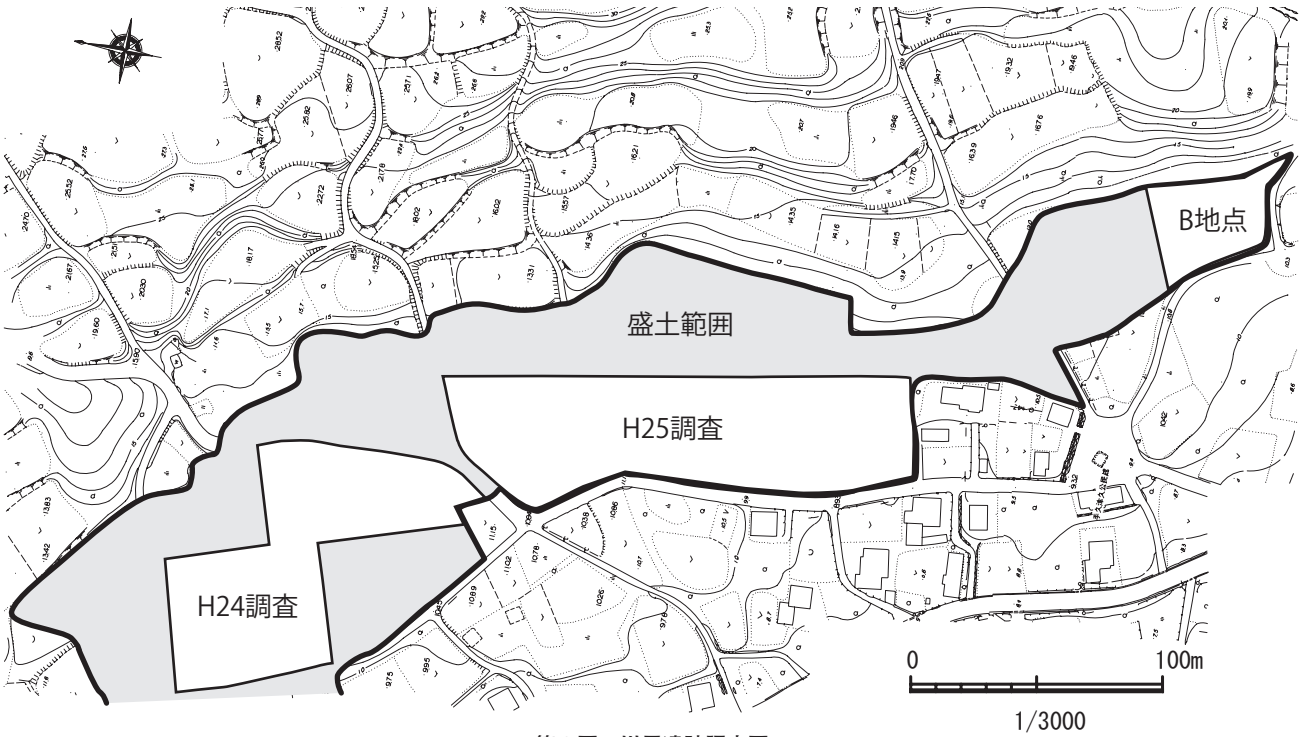
この結果をもとに，再度県農政部，県文化財課，町教育委員会は協議を行った。遺跡が広範囲にわたって残存していることから，埋蔵文化財の保護と事業の調整を図るために記録保存を目的とした本調査を実施することとなった。なお，遺跡の一部約31,600㎡については調査を実施せず，盛土保存されることとなった（第２図）。

本調査は，町教育委員会が調査主体となり，県埋蔵文化財センターの支援を受け平成24～26年度にかけて実施した。

第２節　調査の組織

平成24年度　本調査

事業主体者　　鹿児島県農政部農地整備課
（大島支庁喜界事務所農村整備係）
調査等主体者　喜界町教育委員会
企画・調整　　喜界町教育委員会生涯学習課
調査等責任者
　喜界町教育委員会　教育長　　晴永　清道
調査等企画者
　喜界町教育委員会生涯学習課長　　吉本　　実
　　〃　　課長補佐　　岩松　利和
調査等担当者
　喜界町教育委員会生涯学習課
　　埋蔵文化財係長　　澄田　直敏
　喜界町教育委員会生涯学習課主事　　野﨑　拓司
　　〃　　松原　信之
事務担当者
　喜界町教育委員会生涯学習課主査　　竹内　　功
調査等指導者
　琉球大学教授　　池田　榮史
　鹿児島県教育庁文化財課
　　文化財主事　　馬籠　亮道
　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　　所長　　寺田　仁志
　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　　第一調査課長　　堂込　秀人



第２図　川尻遺跡調査図

鹿児島県立埋蔵文化財センター
　第二調査課長　冨田　逸郎
鹿児島県立埋蔵文化財センター
　第一調査係長　東　和幸
鹿児島県立埋蔵文化財センター
　文化財主事　中村　幸一郎
鹿児島県立埋蔵文化財センター
　文化財主事　有馬　孝一
鹿児島県立埋蔵文化財センター
　文化財研究員　川口　雅之
鹿児島県立埋蔵文化財センター
　文化財研究員　岩永　勇亮
早稲田大学客員研究員　樋泉　岳二
愛媛大学
東アジア古代鉄文化研究センター長　村上　恭通

平成25年度　本調査
事業主体者　鹿児島県農政部農地整備課
（大島支庁喜界事務所農村整備係）
調査等主体者　喜界町教育委員会
企画・調整　喜界町教育委員会生涯学習課
調査等責任者
　喜界町教育委員会　教育長
　（～1月５日）　晴永　清道
　喜界町教育委員会　教育長
　（1月６日～）　積山　泰夫
調査等企画者
喜界町教育委員会生涯学習課長　吉本　実
　〃　課長補佐　岩松　利和
調査等担当者
喜界町教育委員会生涯学習課
　主幹兼埋蔵文化財係長　澄田　直敏
喜界町教育委員会生涯学習課主事　野﨑　拓司
　〃　生涯学習課主事　松原　信之
　〃　生涯学習課主事　早田　晴樹
　〃　埋蔵文化財調査員　岩元　さつき
　〃　埋蔵文化財調査員　安武　憲史
　〃　埋蔵文化財調査員　安栖　祐樹
　〃　埋蔵文化財調査員　横山　幸平
　〃　埋蔵文化財調査員　照屋　真澄
事務担当者
　喜界町教育委員会生涯学習課
　主幹兼埋蔵文化財係長　澄田　直敏
調査等指導者
鹿児島大学名誉教授　西中川　駿
西南学院大学教授　高倉　洋彰
愛媛大学
　東アジア古代鉄文化研究センター長　村上　恭通
鹿児島女子短期大学教授　竹中　正巳
ラ・サール高校教諭　永山　修一
国立歴史民俗博物館特任助教　渋谷　綾子
鹿児島県立埋蔵文化財センター
　所長　井ノ上　秀文
鹿児島県立埋蔵文化財センター
　第一調査課長　堂込　秀人
鹿児島県立埋蔵文化財センター
　第一調査係長　東　和幸
鹿児島県立埋蔵文化財センター
　第二調査係長　大久保　浩二
鹿児島県立埋蔵文化財センター
　文化財研究員　今村　結記

平成26年度　本調査
事業主体者　鹿児島県農政部農地整備課
（大島支庁喜界事務所農村整備係）
調査等主体者　喜界町教育委員会
企画・調整　喜界町教育委員会生涯学習課
調査等責任者
　喜界町教育委員会　教育長　積山　泰夫
調査等企画者
　喜界町教育委員会生涯学習課長　岩松　利和
　〃　課長補佐　中山　佳也
調査等担当者
喜界町埋蔵文化財センター
　主幹兼埋蔵文化財係長　澄田　直敏
　喜界町埋蔵文化財センター主事　野﨑　拓司
　〃　主事　松原　信之
　〃　主事　早田　晴樹
　〃　埋蔵文化財調査員　岩元　さつき
　〃　埋蔵文化財調査員　安武　憲史
　〃　埋蔵文化財調査員　安栖　祐樹
　〃　埋蔵文化財調査員　照屋　真澄
事務担当者
　喜界町埋蔵文化財センター
　主幹兼埋蔵文化財係長　澄田　直敏
調査等指導者
愛媛大学
　東アジア古代鉄文化研究センター長　村上　恭通
鹿児島女子短期大学教授　竹中　正巳
　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　文化財研究員　今村　結記
琉球大学教授　池田　榮史

平成29年度　整理作業
事業主体者　鹿児島県農政部農地整備課
（大島支庁喜界事務所農村整備係）
調査等主体者　喜界町教育委員会
企画・調整　喜界町教育委員会生涯学習課
調査等責任者

喜界町教育委員会　教育長　積山　泰夫
調査等企画者
喜界町教育委員会生涯学習課長　岩松　利和
〃　課長補佐　中山　佳也
調査等担当者
喜界町埋蔵文化財センター
埋蔵文化財係長　壽　満夫
喜界町埋蔵文化財センター主査　野﨑　拓司
〃　主事　松原　信之
〃　主事　岩元　さつき
〃　主事　安武　憲史
〃　埋蔵文化財調査員　安栖　祐樹
〃　埋蔵文化財調査員　島袋　未樹
事務担当者
喜界町埋蔵文化財センター
埋蔵文化財係長　壽　満夫
調査等指導者
早稲田大学非常勤講師　樋泉　岳二
千葉県立中央博物館
主任上席研究員　黒住　耐二
愛媛大学
東アジア古代鉄文化研究センター長　村上　恭通
鹿児島県立埋蔵文化財センター
文化財研究員　今村　結記

平成30年度　整理作業
事業主体者　鹿児島県農政部農地整備課
（大島支庁喜界事務所農村整備係）
調査等主体者　喜界町教育委員会
企画・調整　喜界町教育委員会生涯学習課
調査等責任者
喜界町教育委員会　教育長
（～１月１日）　積山　泰夫
喜界町教育委員会　教育長
（１月２日～）　久保　康治
調査等企画者
喜界町教育委員会生涯学習課長
兼埋蔵文化財センター長　來　和法
喜界町教育委員会生涯学習課
課長補佐　中山　佳也
調査等担当者
喜界町埋蔵文化財センター
埋蔵文化財係長　初　千加子
〃　野﨑　拓司
喜界町埋蔵文化財センター主事　松原　信之
〃　主事　岩元　さつき
〃　主事　安武　憲史
〃　埋蔵文化財調査員　安栖　祐樹
事務担当者
喜界町埋蔵文化財センター
埋蔵文化財係長　初　千加子
調査等指導者
早稲田大学非常勤講師　樋泉　岳二
熊本大学埋蔵文化財調査センター　助教　山野ケン陽次郎
金沢大学
国際文化資源学研究センター特任助教　覚張　隆史
鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　堂込　秀人
沖縄県立埋蔵文化財センター
主任専門員　瀬戸　哲也
沖縄県立埋蔵文化財センター
調査班主任　亀島　慎吾
瀬戸内町教育委員会学芸員　鼎　丈太郎

平成31年度（令和元年度）　整理作業
事業主体者　鹿児島県農政部農地整備課
（大島支庁喜界事務所農村整備係）
調査等主体者　喜界町教育委員会
企画・調整　喜界町教育委員会生涯学習課
調査等責任者
喜界町教育委員会　教育長　久保　康治
調査等企画者
喜界町教育委員会生涯学習課長
兼埋蔵文化財センター長　來　和法
喜界町教育委員会生涯学習課
課長補佐　竹内　功
調査等担当者
喜界町埋蔵文化財センター
埋蔵文化財係長　初　千加子
〃　野﨑　拓司
喜界町埋蔵文化財センター主事　松原　信之
〃　主事　岩元　さつき
〃　主事　安武　憲史
〃　主事　島袋　未樹
〃　埋蔵文化財調査員　安栖　祐樹
事務担当者
喜界町埋蔵文化財センター
埋蔵文化財係長　初　千加子
調査等指導者
愛媛大学
アジア古代産業考古学研究センター長　村上　恭通

令和２年度　整理作業
事業主体者　鹿児島県農政部農地整備課
（大島支庁喜界事務所農村整備係）
調査等主体者　喜界町教育委員会
企画・調整　喜界町教育委員会事務局
文化財保護チーム
調査等責任者
喜界町教育委員会　教育長　久保　康治

調査等企画者
　喜界町教育委員会事務局長　　菊地　典子
　喜界町教育委員会事務局
　　文化財保護チームリーダー
　　兼埋蔵文化財センター長　　澄田　直敏
調査等担当者
　喜界町教育委員会事務局
　　文化財保護チームリーダー
　　兼埋蔵文化財センター長　　澄田　直敏
　喜界町教育委員会事務局
　　文化財保護チームサブリーダー　　野﨑　拓司
　　〃　　主査　　松原　信之
　　〃　　主事　　岩元　さつき
　　〃　　主事　　安武　憲史
　　〃　　主事　　島袋　未樹
　　〃　　埋蔵文化財調査員　安栖　祐樹
事務担当者
　喜界町教育委員会事務局
　文化財保護チーム　主事　　安武　憲史
調査等指導者
愛媛大学
　アジア古代産業考古学研究センター長　村上　恭通
鹿児島県立埋蔵文化財センター
　文化財主事　　馬籠　亮道
鹿児島大学名誉教授　　大木　公彦
鹿児島大学大学院理工学域地球科学
　准教授　　ハフィーズ　ウル　レーマン
鹿児島大学埋蔵文化財調査センター
　助教　　新里　貴之
喜界島サンゴ礁科学研究所
　理事長　　渡邊　剛
　所長　　山崎　敦子
　研究員　　駒越　太郎

第３節　遺跡調査の経過

１　確認調査（平成21年度）

平成21年6月～11月まで喜界町教育委員会が調査主体となって確認調査を実施した。調査は3m×6mのトレンチを基本として実施した。その結果，16～18トレンチで古代と考えられる遺構・遺物を確認した。

２　本調査（平成24～26年度）

平成21年度の確認調査の結果を受けて平成24年4月～12月，平成25年4月～3月，平成26年4月～５月まで本調査を実施した。

調査では，調査区内に10m×10mのグリッドを任意の方角で設定し実施した。本調査は表土を重機により除去し，その後，各遺構面にて発掘調査を行った。

以下，調査の経過については概略を記載する。

平成24年度

４月　調査開始。機材運搬・伐採などの環境整備を行う。
５月　重機による表土剥ぎ。グリッド設定。
６月　先行トレンチを設定し，土層堆積の確認を行う。
　　Ⅲ層調査開始。
7・8月　集石(以下SX)01～05掘り下げ。
　　親子サマースクール発掘体験実施。
９月　川尻南側地区調査。
10月　SX07～33掘り下げ。
11月　SX34の下(白砂層)からSX43を検出。白砂の分層を試みるが，まったく同じにしか見えず，分層には至らなかった。
12月　SX35～46掘り下げ。浸透池設定予定箇所の浸透率を測るために遺構を確認していなかった白砂層の範囲で新たにSX45･46を確認。
　　今年度の調査終了。機材撤収。

＊検出した遺構については各調査の過程において写真撮影等を行い，平板による1/50遺構配置図･1/10遺構個別図面作成などを行った。

平成25年度

４月　調査面積の増により，調査員３名体制で発掘調査を開始。表土掘削。グリッド設定。
５～６月　Ⅲ層の調査。ベルトを残し土層を確認しながら調査を行う。ベルトコンベアを調査で初めて導入。
７月　Ⅳ層の調査開始。大量の遺物が出土し始める。
８～３月　貝・土器が大量に出土している部分を貝だまりという名称で調査を行う。遺物は可能な限りドットを取りながら掘削をしたため，検出と取り上げを繰り返し行った。
９～２月　調査区南側の白砂層から人骨が次々と出土。
　　SK23など１基に複数体埋葬されている人骨群を検出。随時図面を作成し取り上げを行った。
　　人骨については鹿児島女子短期大学の竹中正巳教授の指導をえながら調査を行った。

＊検出した遺構については今年度から電子平板測量を導入し，遺構配置図を作成した。遺物の取り上げも同様に電子平板測量で行い，作業の効率化を図った。土坑墓などは1/5遺構個別図面作成などを行い，記録保存した。

平成26年度

４月　SK50・60・61の調査。白砂層検出遺構の完掘。
５月　完掘写真撮影。調査終了。機材は川寺遺跡へ。

３　整理作業・報告書刊行（平成29～令和2年度）

平成29年～令和２年度にかけて炭化物などの科学分析，出土鉄製品・動物骨・魚骨分析，土壌サンプルのフローテーション，出土遺物の注記・接合・拓本，実測・図面整理・トレースなどの作業を行い，報告書を刊行した。

なお，出土遺物量が膨大であったため，本報告書では平成24年調査Ⅳ層，平成25年調査Ⅳ・Ⅴ層を中心に報告することとした。Ⅰ～Ⅲ層については特徴的な資料のみを抽出し，大部分は未整理の状況である。

第Ⅱ章　遺跡の立地

第1節　地理的環境

九州島の南端薩南半島と台湾の間，1,200kmにわたり弧状に連なり点在する島々を南西諸島と呼ぶ。

南西諸島は，北から薩南諸島（大隅諸島，吐噶喇列島，奄美群島）と琉球諸島（沖縄諸島，先島諸島），大東諸島（北大東島（東，北）～沖大東島（西，南））の大きく3つの島嶼群に分けられる（第3図）。喜界島は薩南諸島の奄美群島の中に位置づけられる。

喜界島は，鹿児島本土から南へ380km，沖縄本島から北へ約330km，奄美大島から東へ25kmの北緯28度19分，東経130度線上の太平洋と東シナ海の洋上に浮かぶ島である。1島で1町をなし，北東～南西方向を長軸に14km，北東部から南西部に向けて次第に島幅を拡げ最大幅6,5km，周囲48,6km，面積56，9㎢の島である。

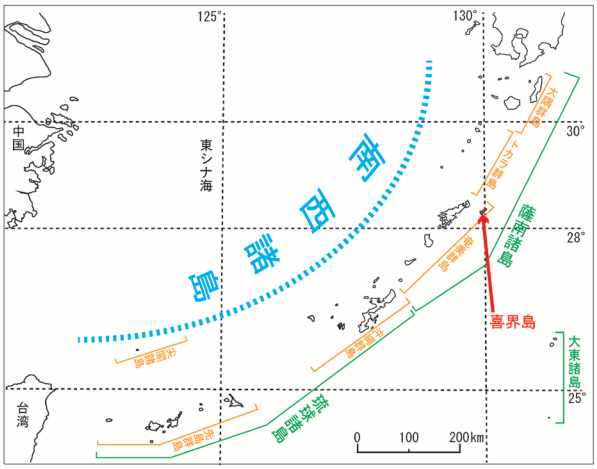
概して平坦な隆起サンゴ礁の島であり，巨視的に見て4段の海岸段丘が形成されている。島内最高所は中央東側にある百之台であり，標高は211mを測る。この百之台を中心に北西側へは緩やかに傾斜し，広い段丘地形が見られる。これに対して南東部には急峻な200mあまりの崖が切り立ち，海岸線に沿ってわずかな平坦地が見られる。

本島の基盤をなしているのは，新生代新第三紀鮮新世の島尻層群で，琉球石灰岩や志戸桶層，隆起サンゴ石灰岩，砂丘が上層を形成している。石灰岩の上にはそれが風化したマージと呼ばれる暗赤褐色土壌が堆積し，島の大部分を覆っている。島の大部分が多孔質のサンゴ礁石灰岩に厚く覆われており，河川の発達は乏しく用水のほとんどは地下水や湧水に依存している。また，隣接する奄美大島にはハブが生息するが，喜界島にはハブは生息していない。奄美群島内では他に沖永良部島，与論島にも生息していないが，これらの島はいずれも隆起石灰岩に覆われている標高の低い低島である。

海岸線は裾礁からなっており，砂浜が広がる場所は少なく，また，港として利用できる場所も限られている。湾・早町・志戸桶・小野津の４箇所が代表的な港として挙げられ，各港の後背地には砂丘が形成されている。砂丘上では，縄文時代から近世までの遺物が採取でき，古くから人々の生活が営まれていたことをうかがい知ることができる。

気候は亜熱帯気候で年平均気温21.9℃と，年間を通じて温暖であり，年間の降水量は1,900㎜に達する。全島にガジュマルをはじめとする亜熱帯性植物が自生し，島の基幹作物であるサトウキビ畑が広がっている。12月後半から2月にかけては冬の季節風が吹きつけ，最大風速が秒速10mを超えることがある。この時期は悪天候が続き，海上交通が途絶えやすい。

川尻遺跡は，喜界島南西部の手久津久集落付近に位置する。標高約10m前後の海岸段丘の麓に立地し，周辺には，中増遺跡・川寺遺跡・崩リ遺跡が広がっている。川尻遺跡から海岸までは約300mの距離がある。



第３図　南西諸島の諸島・群島・列島の名称と範囲

（安城・割田2009　第11図を改変）

第2節　歴史的環境

喜界島における考古学的研究は，戦前は昭和6年の重野豊吉による荒木貝塚の発見に始まり，三宅宗悦による湾貝塚・手久津久貝塚の報告がある。戦後においては，昭和30年代に九学会連共同調査委員会考古学班による分布調査が行われ，荒木農道遺跡，荒木小学校遺跡，湾天神貝塚，伊実久巌島神社貝塚，七城などが紹介されている。

島内で一番古い遺跡は縄文時代のものであり，大多数の遺跡が古代・中世に属している。主な遺跡について研究史を踏まえながら述べることとする。

1. 縄文時代

島内における縄文時代早期～前期の遺跡としては，総合グラウンド遺跡と赤連遺跡がある。総合グラウンド遺跡では3層の貝層が確認されており，土器や石器が出土している。土器は口縁端部に刻目があり，両端の尖った施文具による連続刺突文と4～6条の横条線が交互に施された砲弾型の器形をなす大型の深鉢や，4条程度を1単位として押し引き条線が施される砲弾型の小型のものがある。大型土器に付着していた煤を放射性炭素年代測定にかけたところ，約7，000年前の数値が出ている。また，県立喜界高等学校校庭拡張工事に伴い出土した土器は河口貞徳により赤連系土器と命名されている。

つづく縄文時代中期であるが，この時期にあたる遺跡は少なく，喜界島における当該期の様相はよくわかっていない。

縄文時代後期～晩期の遺跡としては，宇宿上層式期の住居跡群が確認されたハンタ遺跡がある。遺物は面縄西洞式・喜念Ⅰ式・宇宿上層式などの土器と，石斧・敲石などの石器がある。また，平成16年には喜界町役場新庁舎工事に伴い，見付山遺跡の発掘調査が行われ，縄文時代晩期頃の土器・石鏃・黒曜石の剥片などが出土している。

縄文時代の遺跡からは多量の石器が出土しており，その多くが砂岩や緑色岩を石材として使用している。喜界島は隆起サンゴ礁の島で，島内には石器としての使用に耐えうる石材は産出せず，これらの石器や石材は他地域から持ち込まれたものと推察される。

これらの遺跡のほか，近年畑地帯総合整備事業荒木中央地区の調査が進み，縄文時代後期～晩期の遺跡として最近調査が行われている次の遺跡がある。島の南西部に位置する荒木地中央区では，上才遺跡・カ子ンテB遺跡・クマテ遺跡があり，手久津久地区では崩リ遺跡と中増遺跡がある。

上才遺跡では竪穴状遺構跡が約20基と屋内炉，土坑などを確認しており，土器は宇宿上層式を主体とし，喜念Ⅰ式，面縄西洞式が出土している。カ子ンテB遺跡では竪穴状遺構跡を100基以上と屋外炉，柱穴などを確認している。土器は面縄西洞式，喜念Ⅰ式，宇宿上層式，犬田布式などが出土している。石器では石斧，磨敲石，石皿・有溝砥石などが出土している。特筆すべき点として長さ約30cmの大型石斧が出土していることが挙げられる。クマテ遺跡では竪穴状遺構跡が約15基と廃棄土坑などが確認されている。土器は無文土器を主体とし，わずかに面縄前庭式，松山式，市来式，面縄西洞式が出土している。石器では石斧，磨敲石やチャート製の石鏃が出土している。

崩リ遺跡では平成23・24年に本調査を実施し，面縄東洞式や嘉徳ⅠA式・Ⅱ式など縄文後期土器が出土した。これらは主に27基の竪穴状遺構から出土した。有溝砥石や円形状石器など特徴的な石器類も多く出土している。

中増遺跡では平成27年度の調査において竪穴状遺構跡を約50基確認している。竪穴状遺構跡は素掘りのものと石組みを伴うものの2種類を確認している。素掘りの竪穴状遺構跡は嘉徳系の土器を主体とし，石組みの竪穴状遺構跡では無文土器が多く出土しているが，仲原式や宇宿上層式も確認されている。

2. 弥生～古墳時代併行期

弥生時代の遺跡は，発掘調査は行われていないが，分布調査などで荒木小学校遺跡などの数遺跡が確認されている。

古墳時代併行期の遺跡には昭和61年に調査が行われ，兼久式土器や貝斧などが出土した先山遺跡などがある。この時期については確認されている遺跡が少なく様相が判然としない。

3. 古代・中世

古代・中世の発掘調査が実施された遺跡は，昭和63年に島中Ｂ遺跡が，平成4年にオン畑・巻畑Ｂ・巻畑Ｃ遺跡，平成5年に前ヤ遺跡，平成6年に提リ遺跡，平成18年に和早地遺跡などがある。いずれも小規模な調査面積ではあるが，土師器・須恵器・カムィヤキ・龍泉窯系青磁・白磁・滑石製石鍋などが出土している。これらの遺跡からは奄美在地の土器である兼久式土器はほとんど出土していない。

平成14年～20年にかけて調査が行われた城久遺跡（山田中西遺跡・山田半田遺跡・半田口遺跡・小ハネ遺跡・前畑遺跡・大ウフ遺跡・半田遺跡・赤連遺跡）では，450棟を超える掘立柱建物跡や製鉄・鍛冶関連遺構，土坑墓などが見つかった。出土遺物は，越州窯系青磁や白磁，朝鮮系無釉陶器，滑石製石鍋といった島外産の遺物がほとんどである。城久遺跡は，古代日本国家とのかかわりの中で交易拠点として成立し，古代から中世にかけて奄美地域の交易圏において中心的な役割を果たしていたと評価され，平成29年10月に国指定史跡に指定された。令和２年現在追加指定の答申を行っている。

平成21年度からは，県営畑地帯総合整備事業（手久津久地区）に伴う調査を実施し，崩リ遺跡・川尻遺跡（本報告書）・中増遺跡・川寺遺跡においてこの時期の掘立柱建物跡や土坑墓などを確認している。これらは，城久遺跡の前後段階に相当する遺跡群であり，喜界島の歴史的変遷を考える上で重要であると考えられる。

参考・引用文献

安城たつひこ・割田育生　2009　「我が国の広域な地名及びその範囲についての調査研究」『海洋情報部技報』Vol. 27

岩元さつき　2016　「喜界町の発掘調査近況-主に縄文時代遺跡について-」『南西諸島の縄文時代後晩期の南北交流』第7回沖縄考古学会・鹿児島県考古学会合同学会研究発表会資料集

太田陽子　1978　『琉球列島喜界島の完新世海成段丘』地理学評論

澄田直敏・堂込秀人・池畑耕一　2003　「喜界町総合グラウンド遺跡（弓道場）出土の土器」『鹿児島考古』第37号　鹿児島県考古学会

町田洋・江波戸照　1969　『薩南諸島の総合的研究』平山輝男編　第１編　地理的環境　明治書院

貝塚爽平ほか編　「4．西南諸島」『日本の地理』

喜界町　2000　『喜界町誌』

鹿児島県埋蔵文化財センター　2008　『荒木貝塚・和早地遺跡』　鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書（119）

喜界町教育委員会　1987　『先山遺跡』　喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書（1）

喜界町教育委員会　1987　『ハンタ遺跡』　喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書（2）

喜界町教育委員会　1989　『島中B遺跡』　喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書（3）

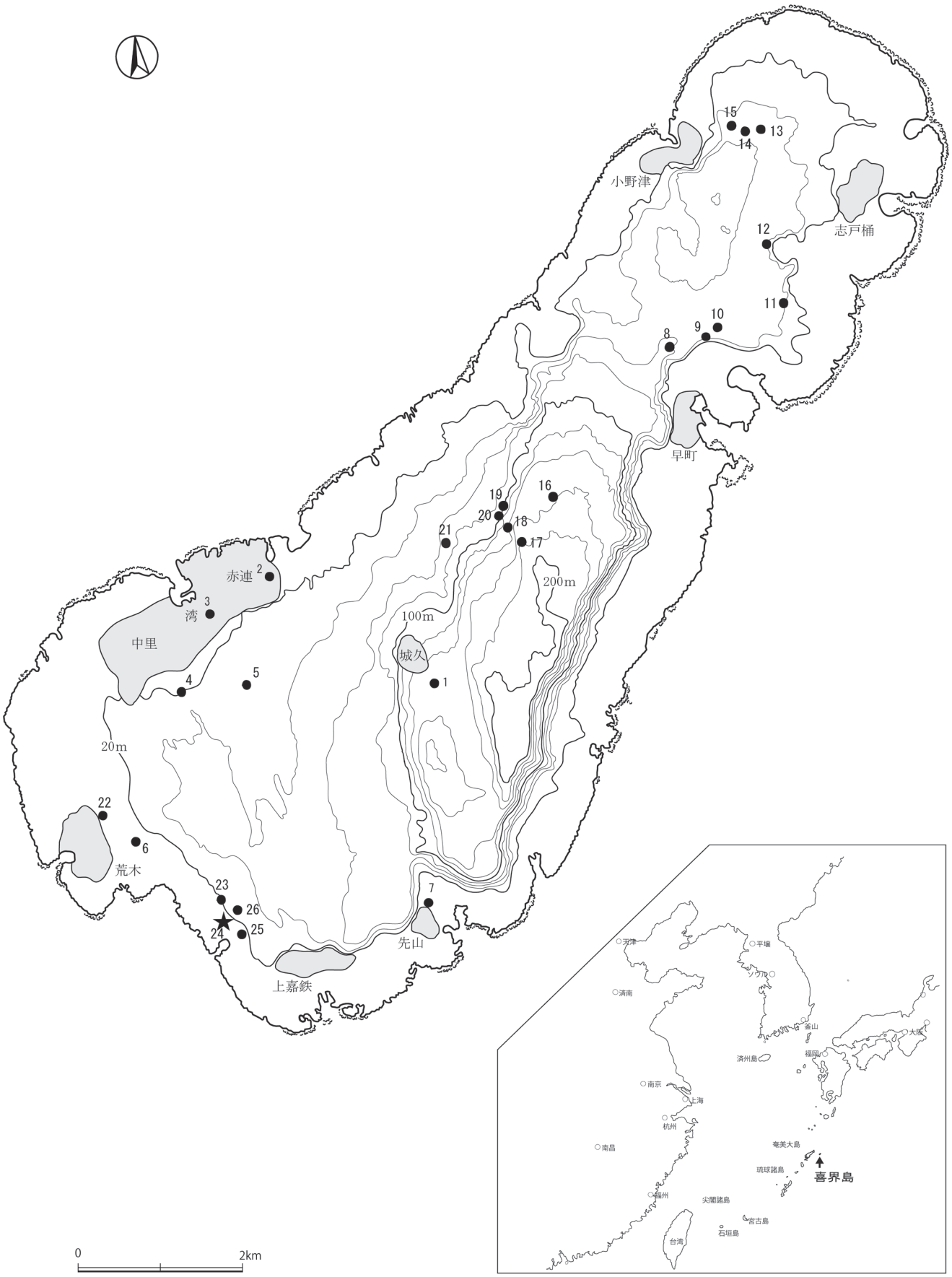
喜界町教育委員会　1987　『島中B遺跡Ⅱ』　喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書（4）

喜界町教育委員会　1993　『オン畑遺跡・巻畑B遺跡・巻畑C遺跡・池ノ底散布地』　喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書（5）

喜界町教育委員会2015『城久遺跡群』総括報告書　喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書（14）
喜界町教育委員会　2015　『中増遺跡Ⅰ』畑地帯総合整備事業（担い手育成型）手久津久地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　喜界町埋蔵文化財発掘報告書（15）
喜界町教育委員会　2018　『崩リ遺跡Ⅰ』畑地帯総合整備事業（担い手育成型）手久津久地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　喜界町埋蔵文化財発掘報告書（16）

第１表　主な島内遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	主な遺構・遺物	備考
1	城久遺跡	喜界町城久ほか	海岸段丘	古代～中世	掘立柱建物跡，土坑墓，炉跡，土師器，須恵器，越州窯系青磁，布目圧痕土器，灰釉陶器，白磁，初期高麗陶器，朝鮮系無釉陶器，カムィヤキ，滑石製石鍋，青磁，銅製品，鉄製品，鞴の羽口，ガラス玉ほか	平成 14・15・17・18・19・20 年度確認調査、平成 14・15・16・17・18・19・20 年度本調査
2	赤連	喜界町赤連	海岸段丘	縄文	赤連系土器	現喜界高校
3	湾天神	喜界町湾	海岸段丘	縄文	土器，石器，貝製品，獣骨	
4	総合グラウンド	喜界町湾	砂丘	縄文	土器，石器，貝，獣骨	
5	竿ク	喜界町湾	海岸段丘			削平により消失した可能性
6	荒木貝塚	喜界町荒木	低地	縄文	石器，貝	
7	先山	喜界町浦原	海岸段丘	縄文～近世	面縄前庭式・兼久式土器，石器，貝，獣骨	昭和 61 年度調査
8	平家森	喜界町早町	山頂	中世	規模・形状：200 × 200，複郭	
9	後田	喜界町塩通	海岸段丘			削平により消失した可能性
10	水口	喜界町塩通	海岸段丘			削平により消失した可能性
11	堤り	喜界町塩通	海岸段丘	古代～中世	須恵器，カムィヤキ，白磁，青磁，滑石製石鍋，石器，獣骨，	平成 6 年度調査
12	七城	喜界町志戸桶	台地	中世	規模・形状：200 × 200，複郭	
13	オン畑	喜界町小野津	海岸段丘	古代～近世	掘立柱建物跡，炉跡，溝状遺構，カムィヤキ，鉄滓	平成 4 年度調査
14	巻畑Ｃ	喜界町小野津	海岸段丘	古代～中世	土師器，カムィヤキ，滑石製石鍋	平成 4 年度調査
15	巻畑Ｂ	喜界町小野津	海岸段丘	古代～中世	土師器，須恵器，滑石製石鍋，鞴の羽口，鉄滓	平成 4 年度調査
16	ハンタ	喜界町西目	海岸段丘	縄文	住居跡群，かまど状遺構，宇宿上層式土器，土製品，石器，カムィヤキ，青磁	昭和 61 年度調査
17	前ヤ	喜界町島中	海岸段丘	古墳～中世	青磁，カムィヤキ	平成 5 年度調査
18	ウ川田	喜界町島中	海岸段丘	縄文～中世	土器，土師器，白磁，青磁，カムィヤキ，滑石製石鍋	平成 5 年度調査
19	上田	喜界町島中	海岸段丘	縄文～中世	柱穴，土器，青磁，カムィヤキ	平成 5 年度調査
20	向田	喜界町島中	海岸段丘	縄文～中世	土器，土師器，白磁，青磁，カムィヤキ，滑石製石鍋	平成 5 年度調査
21	島中Ｂ	喜界町島中	海岸段丘	古代～近世	土器，内黒土師器，須恵器，白磁，青磁，鞴の羽口，鉄滓，石器，染付	昭和 63 年度調査
22	和早地	喜界町荒木	海岸段丘	縄文～近代	土器，白磁，青磁，鉄製品，鞴の羽口，鉄滓，石器，魚骨，獣骨，染付，薩摩焼	平成 18 年度調査
23	中増	喜界町手久津久	海岸段丘	縄文～中世	掘立柱建物跡，土坑，焼土跡，青磁，石器，鉄製品，銅製品，鉄滓，鞴の羽口ほか	平成 23・24・26 年度本調査
24	川尻	喜界町手久津久	低地	縄文～近世	大型円形土坑，土坑，溝状遺構，土器，土師器，須恵器，貝ほか	平成 24 ～ 26 年度本調査
25	崩リ	喜界町手久津久	海岸段丘	縄文～中世	竪穴状建物跡，掘立柱建物跡，土坑墓，土坑，焼土跡，土器，白磁，カムィヤキ，石器，鉄製品，鉄滓，鞴の羽口ほか	平成 23・24 年度本調査
26	川寺	喜界町手久津久	海岸段丘	縄文～中世	竪穴状建物跡，掘立柱建物跡，土坑墓，土坑，焼土跡，白磁，青磁，石器，鉄製品，銅製品，鉄滓，鞴の羽口，ガラス玉，琥珀ほか	平成 24 ～ 26 年度本調査


小野津
志戸桶
早町
赤連
湾
中里
城久
荒木
先山
上嘉鉄
200m
100m
20m
0
2km
天津
平壌
ソウル
済南
釜山
大阪
福岡
済州島
南京
上海
杭州
南昌
奄美大島
琉球諸島
喜界島
福州
尖閣諸島
宮古島
石垣島
台湾

第４図　主な遺跡位置図

第Ⅲ章　試掘・確認調査等の成果

第1節　試掘・確認調査の概要

喜界町教育委員会が主体となって調査を実施した。

調査は各畑の調査可能な範囲にトレンチを設定した（第６図）。これらの中で特徴的な出土状況が見られた2トレンチについて報告する。

（1）16・17トレンチ（第７図，第３表）

遺跡中央部付近に実施。当初別々に調査していたが，堆積状況の確認をするために両トレンチを連結した。16トレンチの方は堆積が浅く，17トレンチに向かって深く堆積していることを確認した。

17トレンチ付近では貝・土器が包含層中からまとまって出土している状況を確認した。

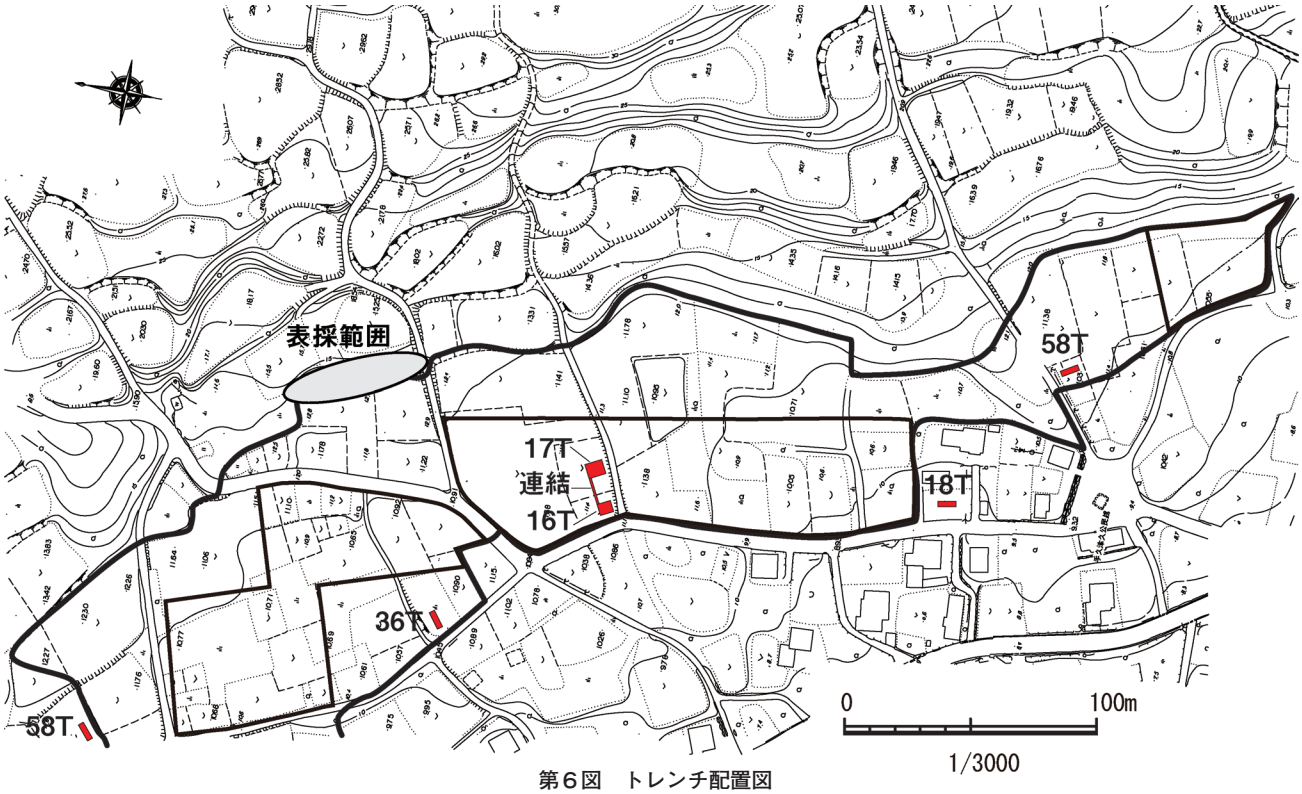
16・17トレンチ連結部

１～４は兼久式土器である。１は胴部に非常に薄い突帯が貼付られている。5～８は貝製品である。８はイモガイ科を用いた製品である。各側面・裏面が丁寧に擦られており，表面には沈線で文様が施されている。広田上層式に類似する。

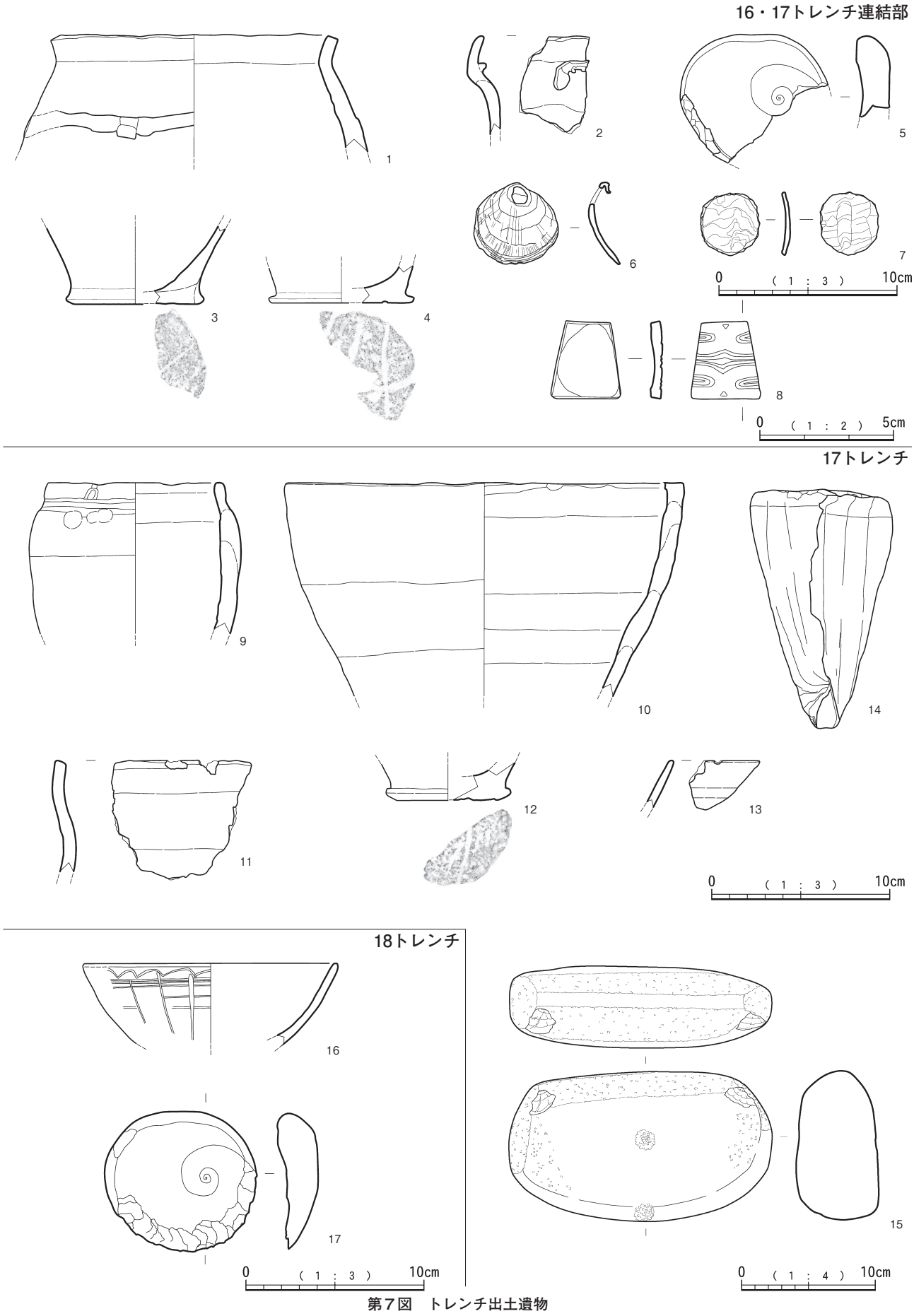
17トレンチ

９～12は兼久式土器である。10は口縁部が平坦に成形され，ラッパ状に開く器形である。13は土師器椀の口縁部である。14はイモガイの殻頂部が割られている資料で，出土したイモガイの中でも最大のサイズであった。15は石器である。形状よりクガニイシとみられる。

第5図　上:16T遺物出土状況　下:16･17T連結部土層堆積状況



第６図　トレンチ配置図



第７図　トレンチ出土遺物

（２）18トレンチ（第７図，第３表）

遺跡中央部付近に5.5m×4.5mのトレンチを設置。包含層を確認したが，遺物はわずかであった。

16は龍泉窯系青磁椀である。連弁が崩れているタイプである。17はヤコウガイ蓋製品である。

第2節　表採資料（第８図，第２表）

発掘調査終了後，遺跡周辺の工事が始まった際に川寺遺跡の人骨調査指導に来島されていた鹿児島女子短期大学の竹中正巳氏が露出している遺物を発見した。周辺に見られた遺物は回収し，工事に当たっては現状以上下がらないことを確認し，工事現場へ引き渡した。

58トレンチ遺構検出状況

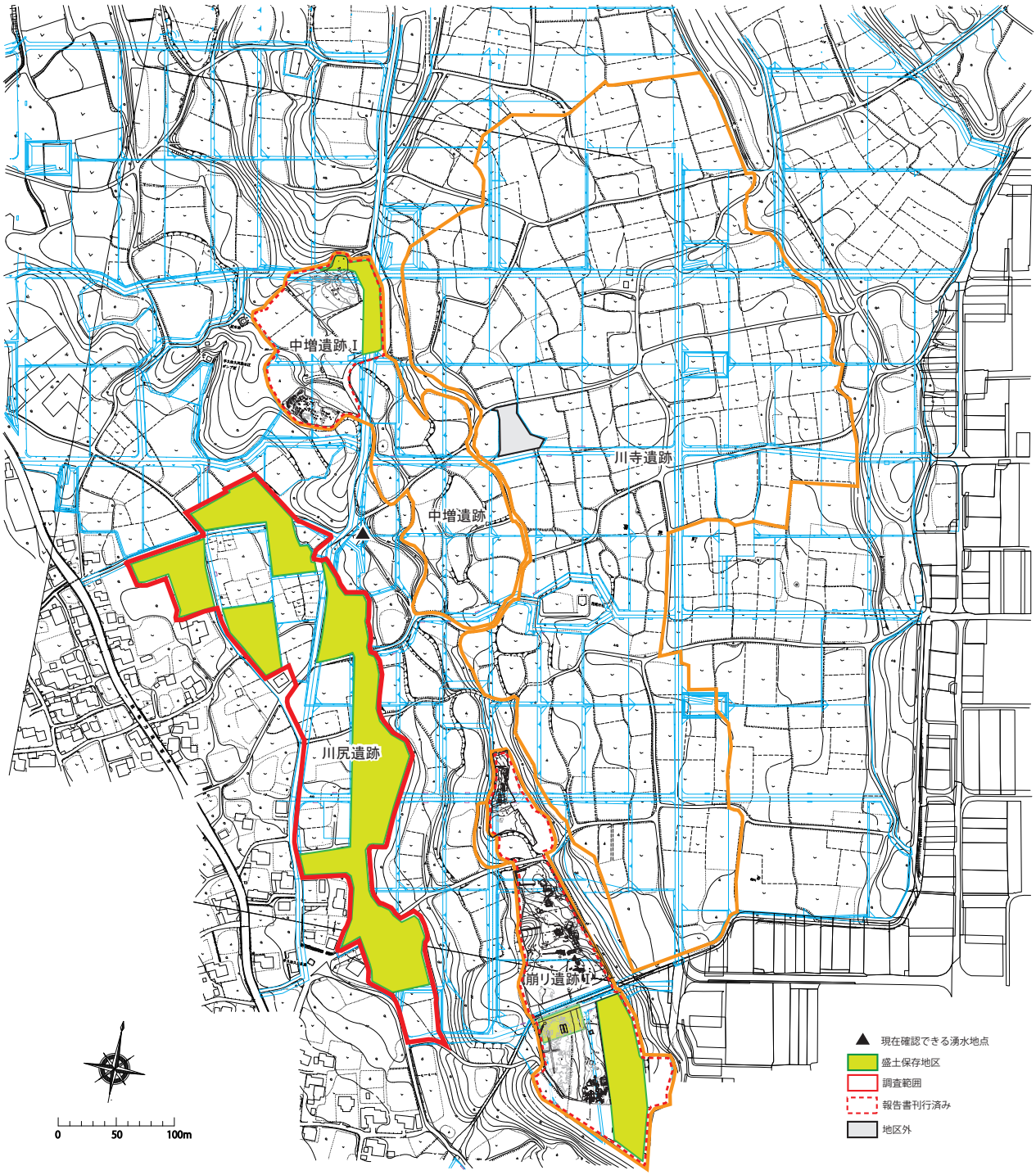
第８図　表採資料

第２表　表採資料

表採資料	遺物名											
	曽畑系	条痕文系	土器	兼久式	カムィヤキ	龍泉窯系青磁	近世施釉陶器	貝	動物骨	魚骨	チャート	石器
点数	5	9	3	1	1	6	3	10	48	12	3	1

第３表　トレンチ出土遺物観察表

図番号	掲載番号	遺構名	層	種類	器種(最大長)	部位(最大幅)	口 / 底径(最大厚)	分類 L1	分類 L2	重量(g)	備考
第５図	1	16･17T 連結	貝・土器集中	兼久式土器	甕	口縁	15	内湾	方形状	-	-
	2	16･17T 連結	貝・土器集中	兼久式土器	甕	口縁	-	-	-	-	-
	3	16･17T 連結	貝・土器集中	兼久式土器	甕	底部	7	-	-	-	-
	4	16･17T 連結	貝・土器集中	兼久式土器	甕	底部	7.2	-	-	-	-
	5	16･17T 連結	貝・土器集中	貝製品	-	-	-	ﾔｺｳｶﾞｲ	-	-	-
	6	16･17T 連結	貝・土器集中	貝製品	-	-	-	ﾄﾄﾞﾛｷｶﾞｲ	-	-	貫通穿孔 (1)
	7	16･17T 連結	貝・土器集中	貝製品	-	-	-	ﾔｺｳｶﾞｲ	-	-	-
	8	16･17T 連結	貝・土器集中	貝製品	-	-	-	ｲﾓｶﾞｲ科	-	-	広田上層に類似
	9	17T	貝・土器集中	兼久式土器	甕	口縁	9.7	内湾	丸状	-	-
	10	17T	白砂	兼久式土器	鉢	口縁	22.2	直口	方形状	-	-
	11	17T	暗褐色	兼久式土器	甕	口縁	-	-	方形状	-	-
	12	17T	貝・土器集中	兼久式土器	-	底部	5.6	-	-	-	-
	13	17T	貝・土器集中	土師器	椀	口縁	-	-	-	-	-
	14	17T	貝・土器集中	貝製品	-	-	-	ｲﾓｶﾞｲ科	-	-	殻頂部が割れている
	15	17T	一括	石器	(11.2)	(19.6)	(6.2)	ｹｶﾞﾆｲｼ	変成岩 1	2550	-
	16	18T	暗褐色	龍泉窯系青磁	椀	-	14.2	細連弁文	-	-	-
	17	18T	暗褐色	貝製品	製品	-	-	ﾔｺｳｶﾞｲ	-	-	-



第９図　手久津久地区の遺跡群

第Ⅳ章　平成24年度の調査の方法と成果

第１節　調査の概要

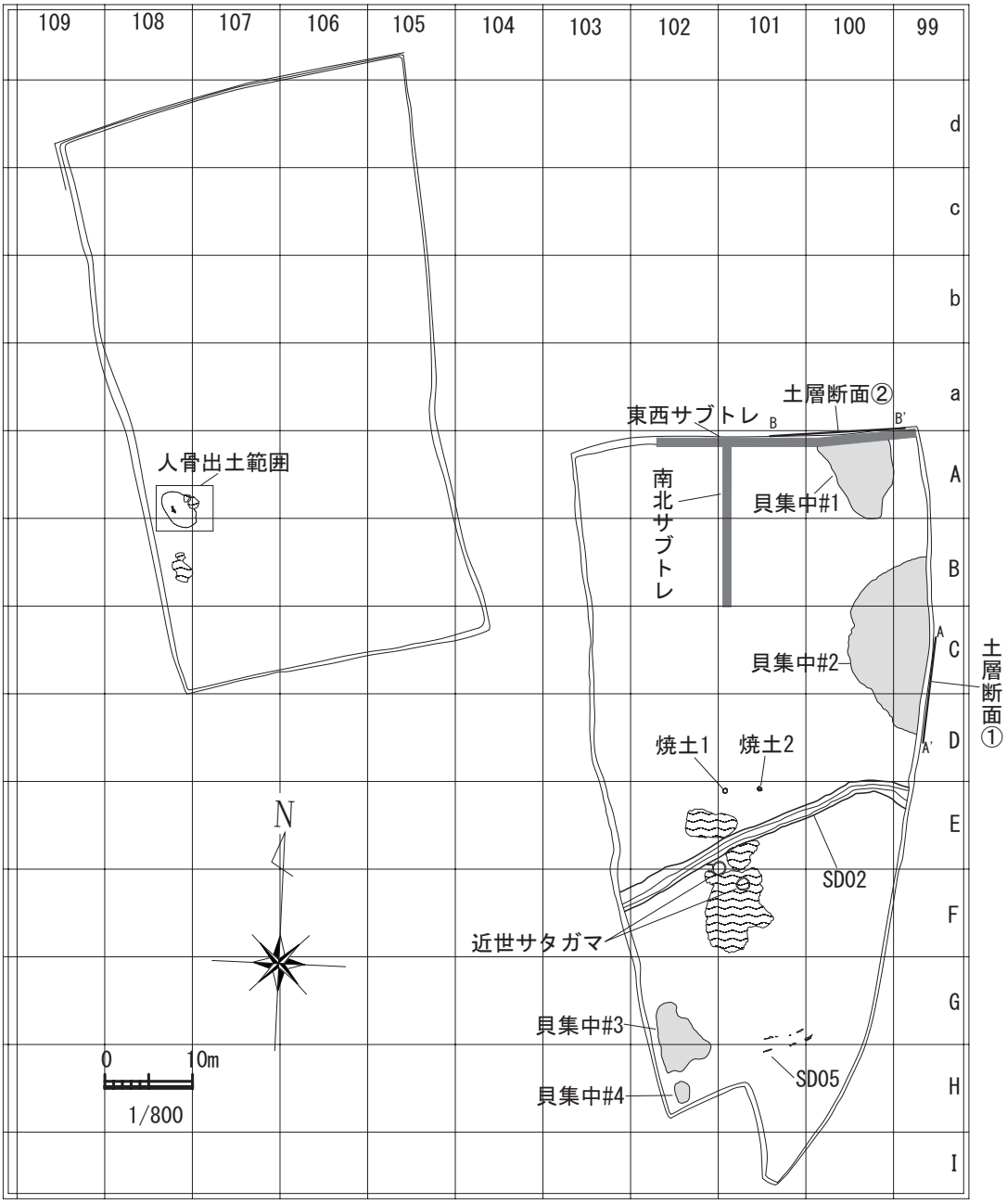
（1）発掘調査の方法

本調査開始にあたって，先行トレンチを実施し，土層の堆積を確認しながら調査を実施した。西側に入れた先行トレンチからは人骨が出土した。その後，重機により調査区一帯の表土剥ぎを行った。

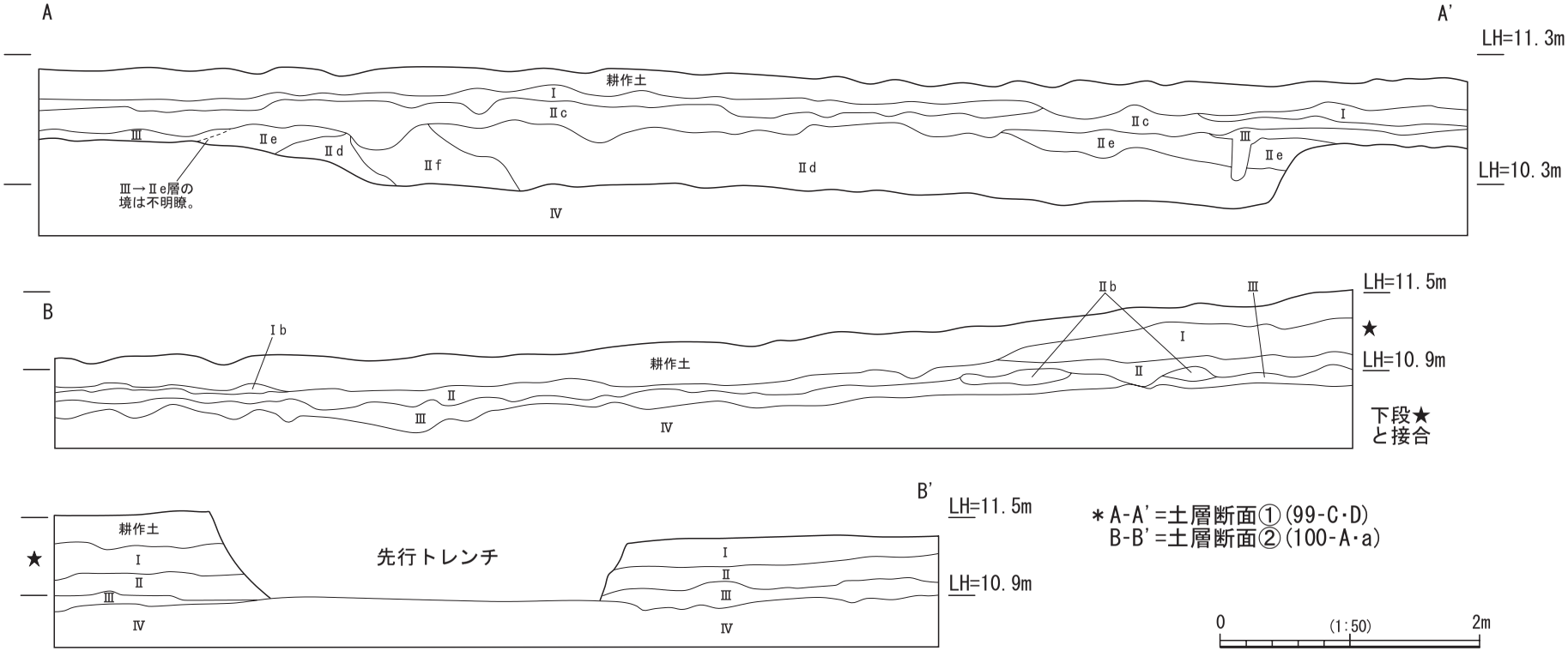
表土を掘削すると調査区北端，現在泉がある周辺には固く締まった貝・土器が混入する層(Ⅱ・Ⅱc層)を確認した。この層には弥生系土器片や兼久式土器などが大量の遺物が出土したが，非常に硬くしまっており，鍬等の歯がたたない状況であったため，重機で掘削を行った。これらは貝集中#1と#2と呼称し，調査を行った。

調査は10m×10mのグリッドを任意方向に設定し，開始した。以降，層ごとに遺構検出を行い，遺構を確認した際は，記録保存を行った後，人力で掘り下げを行った。

検出した遺構の記録は発掘の各過程において写真撮影や，1/10の個別図・平板測量による1/50全体図等を作成した。



第10図　平成24年調査Ⅱ層検出遺構配置図



第11図　土層断面図

層名	土層説明
Ⅰb	硬くしまった土。鋤床層か。昭和初期頃までは湧水を利用した水田があったそうである。
Ⅰ	黒褐色 (Hue10YR3/2) 粘質土層。砂混じり。
Ⅱ	暗褐色 (Hue10YR3/4) 層。貝や礫が集中する層。
Ⅱb	断面②のⅡ層下に堆積。ほぼ礫のみで構成される。
Ⅱc	貝集中層。硬く締まって貝や礫がくっつき，石のようになった硬い層。
Ⅱd	黒褐色 (Hue7.5YR3/2) 砂層。
Ⅱe	褐色 (Hue7.5YR4/4) 砂層。
Ⅱf	黒褐色 (Hue7.5YR3/1) 砂層。
Ⅲ	暗褐色 (Hue10YR3/4) 砂層。しまりあり。
Ⅳ	白砂層。SX06 以降はⅣ層を掘り下げた白砂層中から検出した。

B-B'堆積状況

A-A'堆積状況

（2）発見された遺構・遺物

調査では主に縄文時代後～晩期と古代末(9~10世紀頃)の遺構・遺物が出土した。

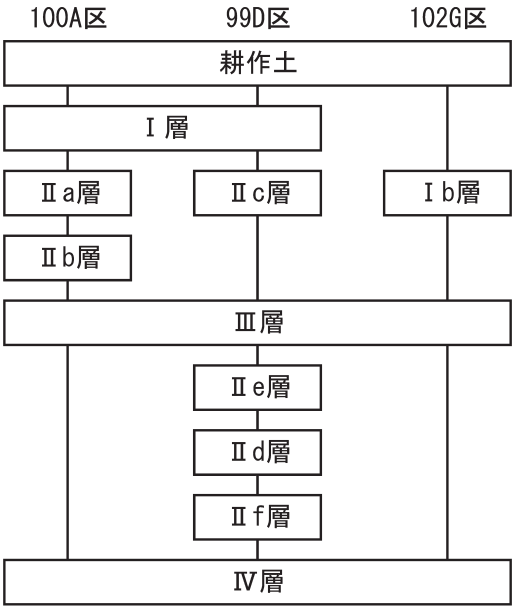
縄文時代後～晩期の遺構はSX43基などを検出し，面縄西洞式土器を中心とした遺物組成である。遺物は土器・石器・貝製品などの遺物が出土している。

古代末の遺構は土器・石器・貝などが集中して出土する範囲を確認した。貝集中＃１～＃４が該当する。縄文土器に混じって兼久式土器が出土しているため，兼久期の堆積であると判断した。

（3）基本層位

出土遺物から大きくⅠ~Ⅳ層に大別し，土色・土質の違いにより細分を行った。

調査範囲の西側調査区d105～C108区付近は堆積が浅く，表土を剥ぐとすぐに白砂層(Ⅳ層)を検出した。東側調査区A100～H102区付近は堆積が異なり，各地点で右概略図のような堆積が見られた。



第12図　土層堆積概念図

第13図　調査範囲空中写真

（４）先行調査（第14図，第４表）

調査にあたり先行トレンチを設定し，土層を確認しながら調査を実施した。A108区付近にトレンチを入れたところ白砂層の下から板状の石灰岩に当たった（右図）。下層確認のため掘り下げたところ人骨が出土した。重機で掘削していたため，検出時点で土坑の掘り込み面は確認できず，残存していた人骨のみ検出した。調査終了後，付近を拡張したがこれ以外に同様の遺構は確認できなかった。

人骨は主に骨盤から下部分が残存していた（下図）。取り上げ時の所見は以下のとおりである。

観察所見

・性別：不明

・年齢：子供。左大腿骨・左脛骨の両骨端未癒合。

・埋葬方法：仰臥伸展葬

・その他：左右寛骨の位置が動いている（解剖学的位置関係を保っていない）。

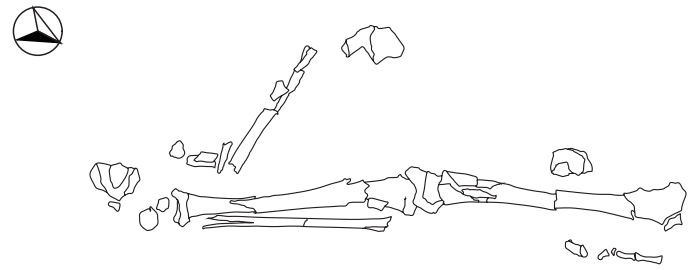
出土した板状石灰岩

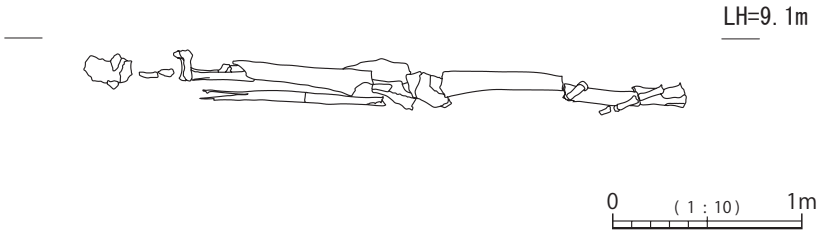
上面に板状の石灰岩が乗っていたため，石蓋土坑墓と呼称し，整理作業を行った。

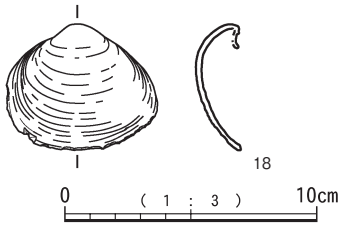
骨コラーゲンを用い年代測定を実施した結果，3,000±20yrBPの年代がえられている（第Ⅵ章第１節参照）。

出土遺物

18は土坑墓周辺から出土した貝製品である。シレナシジミの腹縁面を刃部状に加工している。







土坑墓検出状況

人骨検出状況

第14図　先行調査出土遺構・遺物

第２節　Ⅱ層･Ⅰb層検出遺構

耕作土を除去し，確認した遺構は第10図のとおりである。

（1）溝状遺構

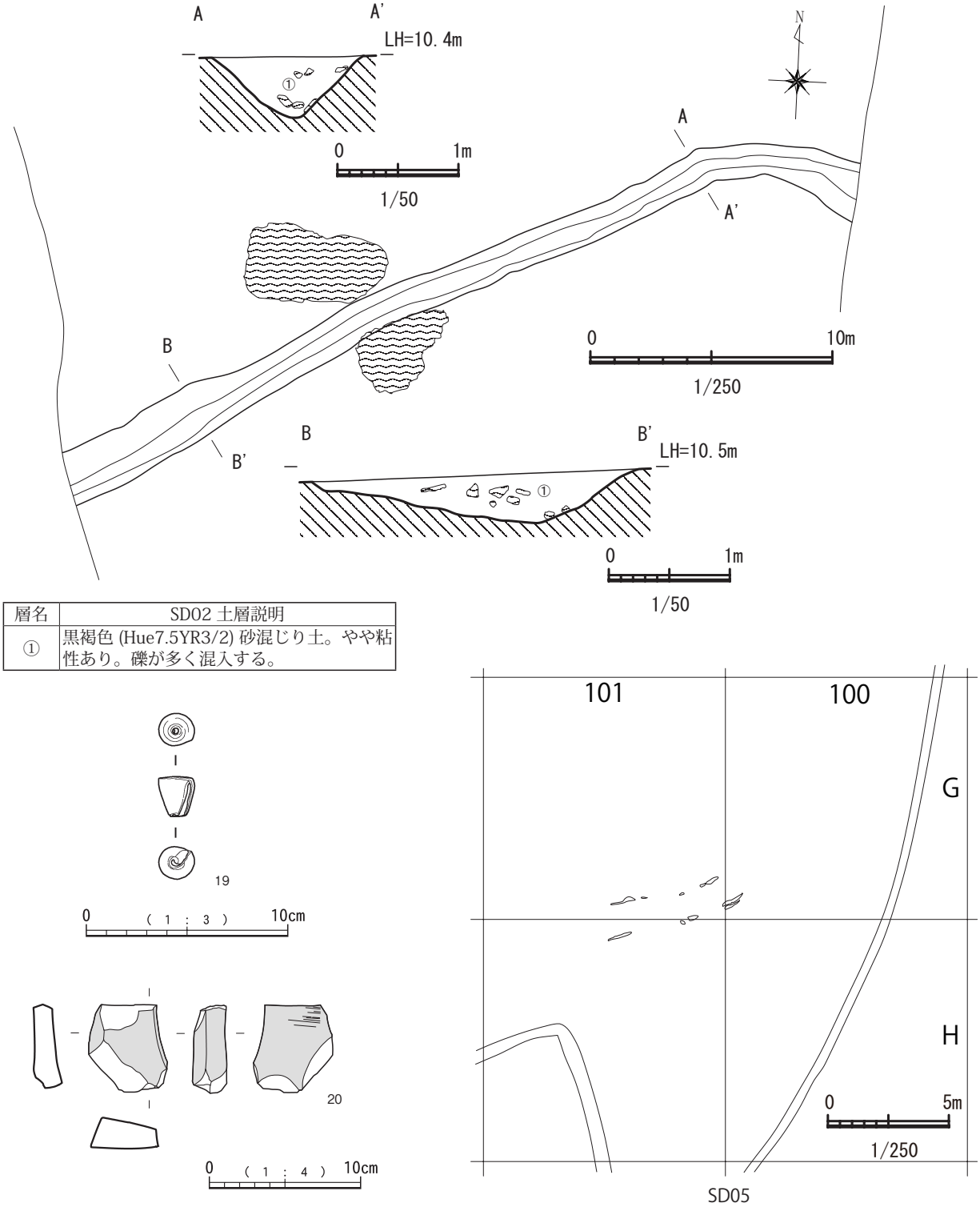
SD02（第15図，第４表）

SD02は調査区を横断する溝状遺構である。層中からは近世陶磁器等も出土したことから，近世～近代の遺構と考えられる。

19は上下面が擦られた小型のイモガイ科貝製品である。20は砥石片である。

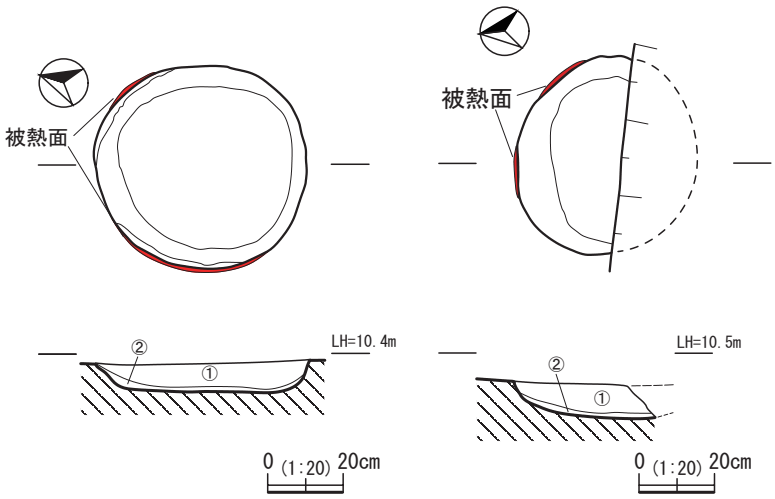
SD05（第15図）

SD05はG･H-101区付近で検出。幅5cm×深さ1cmほどで非常に薄い堆積をしていた。調査時では遺構の用途の推定な



層名	SD02 土層説明
①	黒褐色 (Hue7.5YR3/2) 砂混じり土。やや粘性あり。礫が多く混入する。

第15図　SD02・SD05



焼土１堆積状況

層名	焼土1・2土層説明
①	黒褐色(Hue10YR3/2)土層。炭化物・焼土粒が混じる。
②	炭化物層。

第16図　焼土１・２

どには至らなかった。

（２）焼土跡（第16図）

焼土1・焼土2はE-101区で検出。いずれも直径20cmほどで底面に炭化物層が堆積している。周囲には被熱面が所々に見られた。

（３）包含層資料

Ⅱ層は各地点において細かく分かれているが，貝・土器等が混在する層をそれぞれ検出した(Ⅱa・Ⅱc・Ⅰb層)。発掘調査時は分層したが，出土遺物を整理作業で出土遺物を確認したところ，ほぼ同時期に堆積したものと考えている。

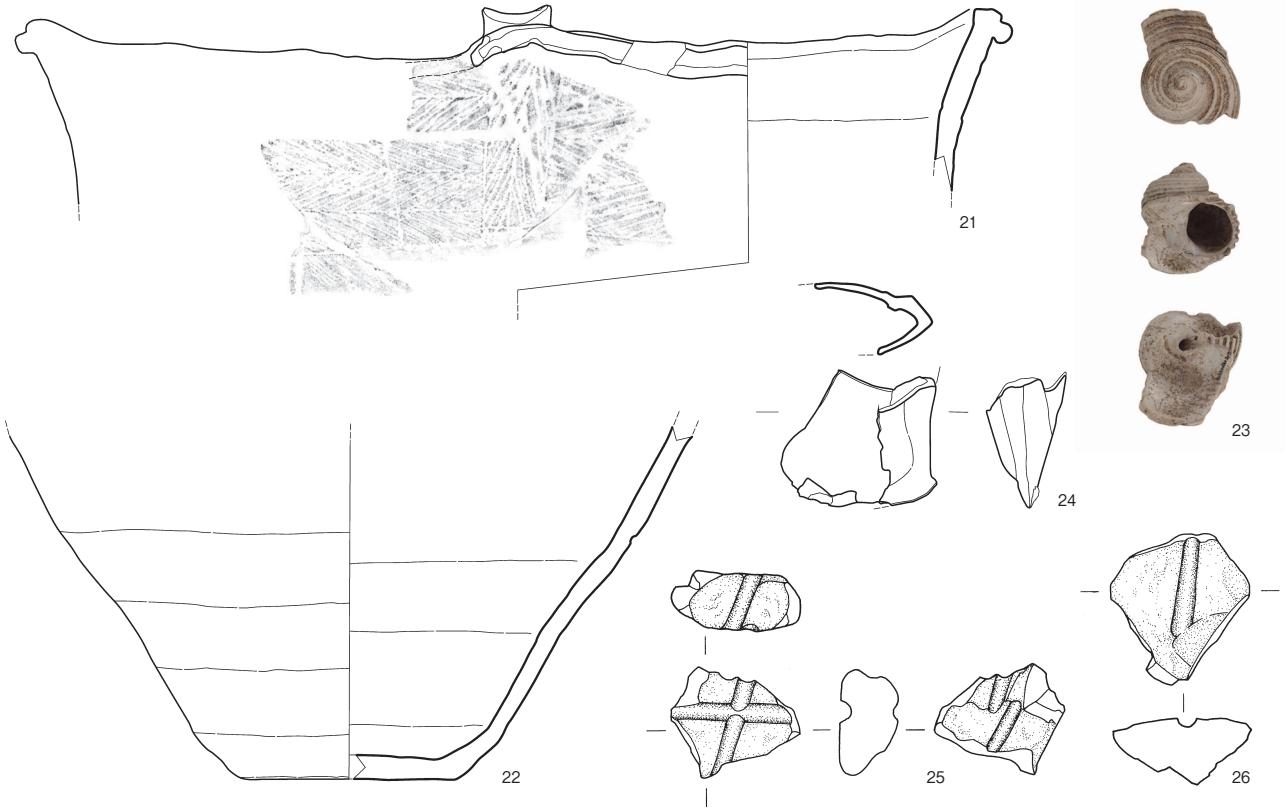
貝集中#１（第17図，第４表）

21・22は縄文土器である。21は口径37.9cmを測る大型の深鉢である。口縁部は波状で直下には突帯をめぐらす。縦位・横位で区画された中に有軸羽状文が施されている。口唇部にも施文されている。

23は貝製品である。チョウセンサザエの殻頂部を残し腹部の一部を擦っている。

24は青銅製。鋤先である（第Ⅵ章第8節参照）。

25・26は有溝砥石である。各面に溝が見られる。



第17図　貝集中#１出土遺物

0 (1:3) 10cm

貝集中#２（第18～20図，第４～６表）

27～46は縄文土器である。27・28は室川下層式の範疇に含まれると考えられる。29･30は搬入系の土器である。

34～38は面縄西洞式である。37は口径15.4cmで口縁上部に2条の突帯をめぐらす。突帯の間には鋸歯文を施した後，隙間を横線で充填している。

39・40は口縁を肥厚する資料である。幅広短沈線が施されるのが特徴的である。

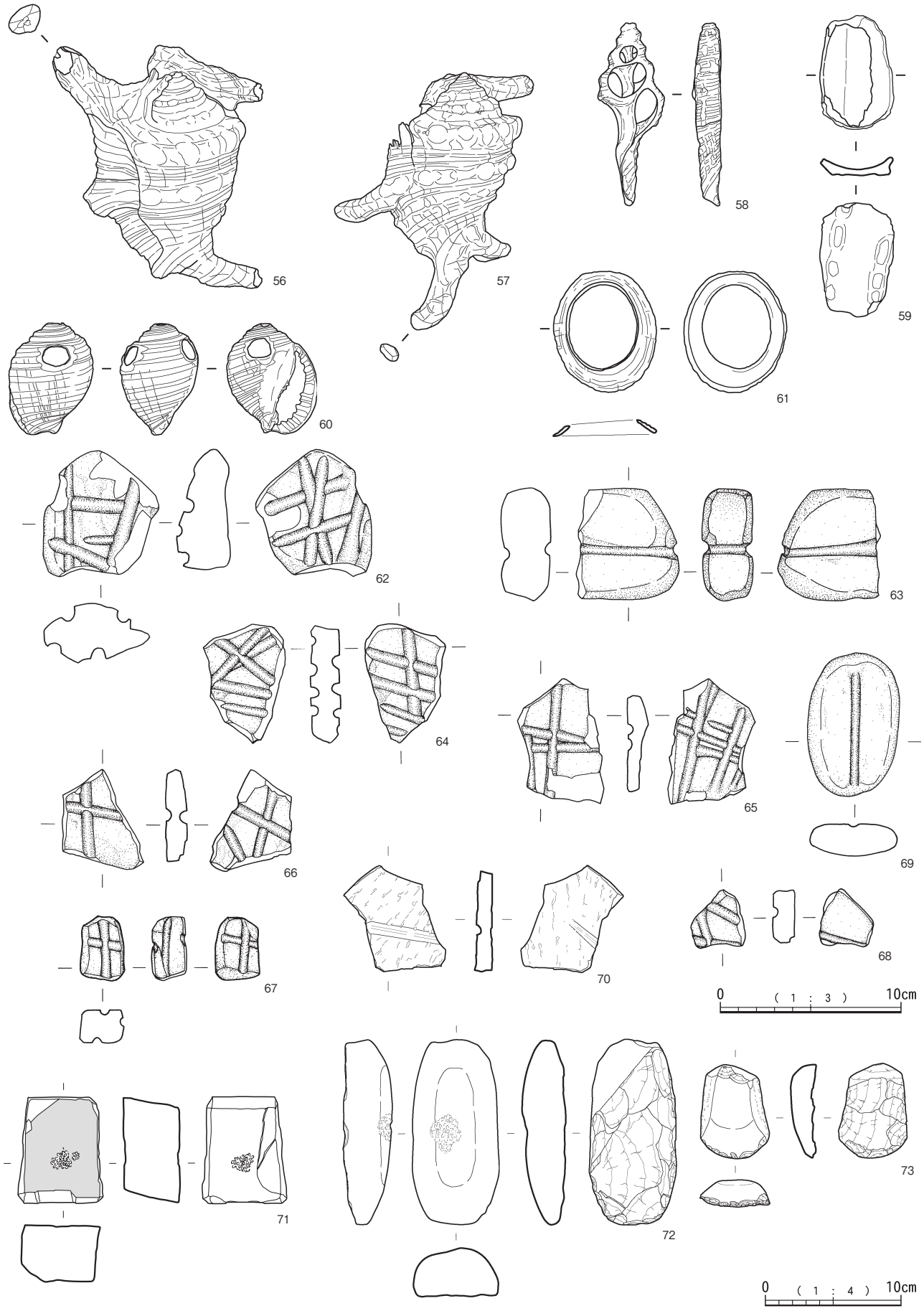
47～50は兼久式土器である。47は第１文様帯に沈線が施されている。51は土製品である。円形状で２か所貫通穿孔がある。

52～55は骨製品である。52はイノシシの牙を用いている。53は先端を加工している。54･55は磨かれている。

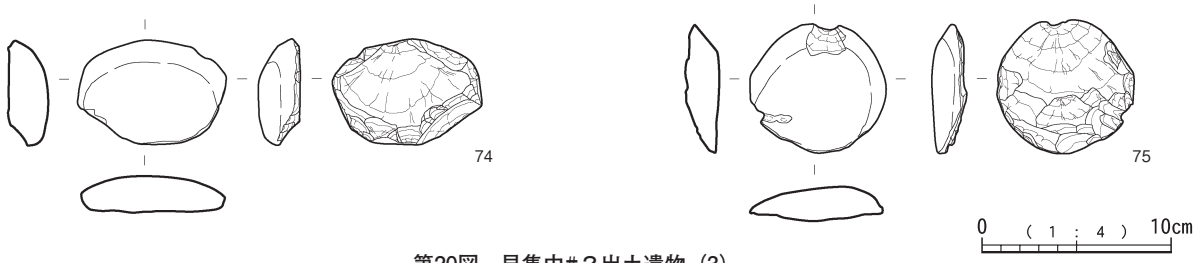
56～61は貝製品である。擦って加工しているものが多い。56・57のように先端を加工するものが見られる。

62～75は石器である。62～70は有溝砥石である。70はビーチロック製である。この石材を利用した有溝砥石は現在喜界島では唯一のものである。

第18図　貝集中#２出土遺物（１）



第19図　貝集中#２出土遺物（２）



第20図　貝集中#２出土遺物（3）

第４表　Ⅱ層遺物観察表（１）

図番号	掲載番号	遺構名	区	層	種類	器種(最大長)	部位(最大幅)	口 / 底径(最大厚)	分類 L1	分類 L2	重量(g)	土質	備考
第 14 図	18	石蓋土坑墓周辺	-	-	貝製品	-	-	-	ｼﾙﾅｼｼﾞﾐ	-	-	-	-
第 15 図	19	SD02	-	①	貝製品	-	-	-	ｲﾓｶﾞｲ科	-	-	-	上下面研磨
	20	SD02	-	①	石器	(5.7)	(5.3)	(2)	砥石	細粒砂岩	78	-	-
第 17 図	21	貝集中 #1	A100	Ⅱ	縄文土器	深鉢	口縁	37.9	面縄西洞	-	-	-	-
	22	貝集中 #1	A100	Ⅱ	縄文土器	深鉢	底部	8.4	面縄西洞	-	-	-	-
	23	貝集中 #1	A100	Ⅱ	貝製品	-	-	-	チョウセンサザエ	-	-	-	端部を擦っている。
	24	貝集中 #1	A100	Ⅱ	銅製品	-	-	-	鋤先	-	18.8	-	-
	25	貝集中 #1	A100	Ⅱ	石器	(4.5)	(5.2)	(2.2)	有溝砥石	細粒砂岩	42	-	3 面に計 4 条の溝
	26	貝集中 #1	A100	Ⅱ	石器	(6)	(5.5)	(2.5)	有溝砥石	細粒砂岩	72	-	1 面に 1 条の溝
第 18 図	27	SK14	D99	Ⅱc	縄文土器(搬入系)	-	胴部	-	室川下層	-	-	砂質	調整を貝殻文。
	28	貝集中 #2	D99	Ⅱc	縄文土器(搬入系)	-	口縁	-	室川下層式系	-	-	砂質	-
	29	貝集中 #2	C99	Ⅱc	縄文土器	-	口縁	-	-	-	-	砂質	-
	30	貝集中 #2	C99	Ⅱc	縄文土器	-	口縁	-	-	-	-	砂質	-
	31	貝集中 #2	C99	Ⅱc	縄文土器	深鉢	口縁	-	直口	方形状	-	砂質	-
	32	貝集中 #2	D99	Ⅱc	縄文土器	-	口縁	-	-	-	-	砂質	-
	33	SK14	D99	Ⅱc	土器	-	口縁	-	外反	方形状	-	砂質	突帯なし
	34	貝集中 #2	D99	Ⅱc	縄文土器	深鉢	口縁	-	外反	丸状	-	砂質	-
	35	貝集中 #2	C99	Ⅱc	縄文土器	深鉢	口縁	-	外反	方形状	-	砂質	-
	36	貝集中 #2	D99	Ⅱc	縄文土器	-	瘤状突起	-	-	-	-	砂質	-
	37	SK14	D99	Ⅱc	土器	-	口縁	15.4	外反	丸状	-	砂質	縦鋸歯風に施文後、間を横位沈線で充填。
	38	貝集中 #2	D99	Ⅱc	縄文土器	深鉢	口縁	-	外反	丸状	-	泥質	-
	39	貝集中 #2	D99	Ⅱc	縄文土器	深鉢	口縁	-	外反	丸状	-	砂質	-
	40	貝集中 #2	D99	Ⅱc	縄文土器	深鉢	口縁	-	直口	丸状	-	砂質	-
	41	貝集中 #2	D99	Ⅱc	縄文土器	壺	口縁	6.1	-	-	-	泥質	-
	42	貝集中 #2	C99	Ⅱc	縄文土器	浅鉢	口縁	-	外反	丸状	-	泥質	-
	43	貝集中 #2	D99	Ⅱc	縄文土器	-	底部	5.2	-	-	-	泥質	-
	44	貝集中 #2	D99	Ⅱc	縄文土器	-	底部	6.4	①	-	-	泥質	-
	45	貝集中 #2	C100	Ⅱc	縄文土器	深鉢	底部	6.5	①	-	-	泥質	-
	46	SK14	D99	Ⅱc	土器	-	底部	4	-	-	-	泥質	-
	47	貝集中 #2	D99	Ⅱc	兼久式土器	-	口縁	-	直口	丸状	-	砂質	-
	48	貝集中 #2	D99	Ⅱc	兼久式土器	-	口縁	-	外反	丸状	-	砂質	-
	49	貝集中 #2	D99	Ⅱc	兼久式土器	-	口縁	-	外反	丸状	-	砂質	-
	50	貝集中 #2	D99	Ⅱc	兼久式土器	-	胴部	-	-	-	-	砂質	-
	51	貝集中 #2	D99	Ⅱc	土製品	-	完形	-	-	-	-	泥質	円盤状。貫通穿孔 (2)
	52	貝集中 #2	D99	Ⅱc	骨製品	垂飾品	牙	-	-	-	-	-	基部に貫通穿孔 (1)
	53	貝集中 #2	C100	Ⅱc	骨製品	-	-	-	-	-	-	-	端部を尖らしている。
	54	貝集中 #2	D99	Ⅱd	骨製品	-	-	-	-	-	-	-	断面半竹状
	55	貝集中 #2		Ⅱd	骨製品	-	-	-	-	-	-	-	-

貝集中#3（第21図，第６表）

G･H-102区で検出。貝・土器がまとまって出土した。

76は面縄西洞式土器である。77は弥生系土器である。78～84は兼久式土器である。78は逆ハ字状に開く器形で，兼久式土器の範疇に入るものかと考えられる。

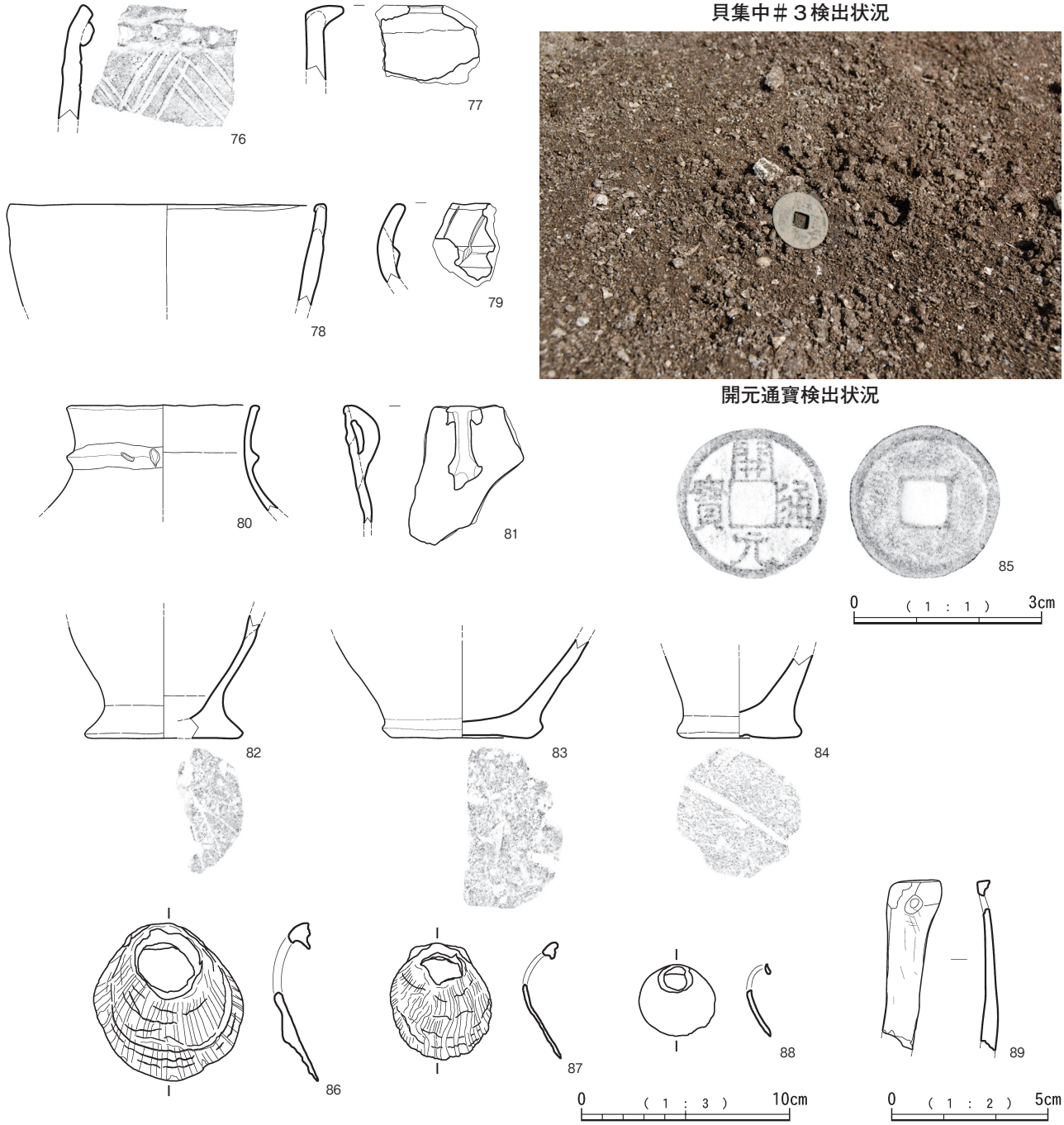
85は開元通寶である。貝集中#3検出時に出土した。

86～88は貝製品である。いずれも上部に貫通穿孔が見られる。86・87はメンガイ，88はトドロキガイである。

89は骨製品である。破断面も丁寧に擦られ平滑に仕上げられている。上部に貫通穿孔が１か所ある。

貝集中＃３検出状況

開元通寶検出状況



第21図　貝集中＃３出土遺物

貝集中#4（第22図，第６表）

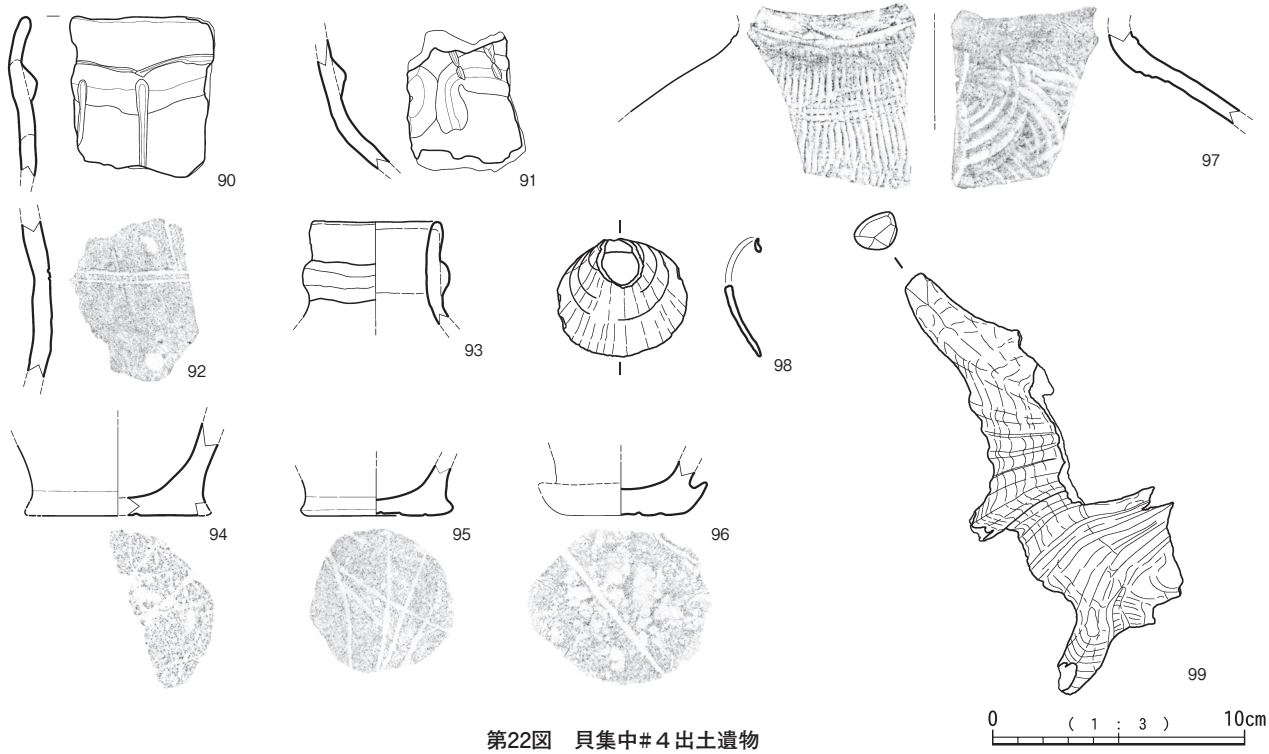
H-102区で検出。貝集中#3に隣接し，#3より狭い範囲に集中していた。

90～96は兼久式土器である。90は頸部に突帯を貼り付け，突帯に沿うように沈線が入れられている。92は沈線文で区画されている。94～96は底部である。いずれも木葉痕が見られる。

97は須恵器甕である。外面に並行状叩き・内面に同心円状当て具が見られる。

98･99は貝製品である。99はスイジガイの先端を尖らせた製品である。

貝集中＃４検出状況



第22図　貝集中＃４出土遺物

第５表　Ⅱ層遺物観察表（２）

図番号	掲載番号	遺構名	区	層	種類	器種(最大長)	部位(最大幅)	口 / 底径(最大厚)	分類 L1	分類 L2	重量(g)	土質	備考
第 19 図	56	貝集中 #2	C100	Ⅱ d	貝製品	-	-	-	ｽｲｼﾞｶﾞｲ	-	-	-	先端を尖らせている
	57	貝集中 #2	D99	Ⅱ c	貝製品	-	-	-	ｽｲｼﾞｶﾞｲ	-	-	-	先端を尖らせている
	58	貝集中 #2	D99	Ⅱ c	貝製品	-	-	-	巻貝	-	-	-	両面研磨し平坦に加工
	59	貝集中 #2	D99	Ⅱ c	貝製品	-	-	-	ﾔｺｳｶﾞｲ	-	-	-	縁部・肋部を研磨
	60	貝集中 #2	D99	Ⅱ c	貝製品	-	-	-	ﾄｶﾜﾄｷﾜ	-	-	-	体層上部に研磨・穿孔 (2)
	61	貝集中 #2	D99	Ⅱ c	貝製品	-	-	-	ｵﾊﾞｯｺｳｶﾞｻ	-	-	-	完形，内側研磨
	62	貝集中 #2	D99	Ⅱ c	石器	(6.9)	(6.2)	(3.2)	有溝砥石	細粒砂岩	119	-	2 面に計 10 条
	63	貝集中 #2	D99	Ⅱ c	石器	(5.7)	(6.2)	(2.7)	有溝砥石	細粒砂岩	157	-	3 面に渡る溝
	64	貝集中 #2	D99	Ⅱ c	石器	(6.5)	(4.4)	(1.5)	有溝砥石	細粒砂岩	48	-	2 面に計 10 条
	65	貝集中 #2	D99	Ⅱ c	石器	(6.8)	(4.6)	(1.2)	有溝砥石	細粒砂岩	33	-	2 面に計 11 条
	66	貝集中 #2	D99	Ⅱ c	石器	(5.5)	(4.4)	(1.4)	有溝砥石	細粒砂岩	24	-	2 面に計 5 条
	67	SK14	D99	Ⅱ c	石器	(3.5)	(2.5)	(1.8)	有溝砥石	細粒砂岩	21	-	3 面に計 5 条
	68	SK14	D99	Ⅱ c	石器	(3.1)	(3)	(1)	有溝砥石	細粒砂岩	12	-	2 面に計 4 条
	69	貝集中 #2	D100	Ⅱ c	石器	(7.9)	(5)	(1.3)	有溝砥石	細粒砂岩	101	-	1 面に 1 条の溝。未凝固砂泥岩か。
	70	貝集中 #2	C99	Ⅱ c	石器	(5.9)	(5.7)	(1)	有溝砥石	ﾋﾞｰﾁﾛｯｸ	28	-	2 面に計 2 条

第６表　Ⅱ層遺物観察表（３）

図番号	掲載番号	遺構名	区	層	種類	器種(最大長)	部位(最大幅)	口 / 底径(最大厚)	分類 L1	分類 L2	重量(g)	土質	備考
第 19 図	71	貝集中 #2	D99	Ⅱ c	石器	(7.9)	(6.3)	(4.2)	磨敲石	細粒砂岩	356	-	側面に溝
	72	貝集中 #2	D99	Ⅱ c	石器	(13.5)	(6.4)	(3.7)	敲石	中粒砂岩	436	-	円形状石器的特徴。
	73	貝集中 #2	C99	Ⅱ c	石器	(7)	(5.2)	(2.1)	石斧	安山岩	83	-	円形状石器的特徴。
第 20 図	74	貝集中 #2	D100	Ⅱ c	石器	(5.6)	(8)	(2.3)	円形状石器	緑色岩	130	-	-
	75	貝集中 #2	D99	Ⅱ c	石器	(6.8)	(7.2)	(19.9)	円形状石器	緑色岩	122	-	-
第 21 図	76	貝集中 #3	G102	-	縄文土器	深鉢	口縁	-	外反	丸状	-	砂質	-
	77	貝集中 #3	G102	-	弥生系土器	-	口縁	-	-	-	-	砂質	逆 L 字型口縁。弥生中期前半。
	78	貝集中 #3	G102	-	兼久式土器？	-	口縁	15	外反	丸状	-	泥質	無文土器
	79	貝集中 #3	G102	-	兼久式土器	壺	口縁	-	外反	丸状	-	泥質	-
	80	貝集中 #3	dot	17	兼久式土器	甕×壺	口縁	8.9	外反	丸状	-	泥質	頸部に突帯。突帯短い。
	81	貝集中 #3	G102	-	兼久式土器	甕×壺	口縁	-	内湾	丸状	-	泥質	口縁直下に縦耳がつく
	82	貝集中 #3	G102	-	兼久式土器	-	底部	7.1	-	-	-	泥質	-
	83	貝集中 #3	G102	-	兼久式土器	-	底部	6.6	-	-	-	泥質	-
	84	貝集中 #3	G102	-	兼久式土器	-	底部	5.2	-	-	-	泥質	-
	85	貝集中 #3	G102	-	古銭	-	-	-	-	-	1.9	-	開元通寶
	86	貝集中 #3	G102	-	貝製品	製品	-	-	メンガイ	-	-	-	貫通穿孔 (1)
	87	貝集中 #3	-	-	貝製品	製品	-	-	メンガイ	-	-	-	貫通穿孔 (1)
	88	貝集中 #3	G102	-	貝製品	製品	-	-	ﾄﾞﾛｷｶﾞｲ	-	-	-	貫通穿孔 (1)
	89	貝集中 #3	G102	-	骨製品	-	-	-	-	-	-	-	貫通穿孔 (1)
第 22 図	90	貝集中 #4	G102	-	兼久式土器	-	口縁	-	外反	丸状	-	泥質	-
	91	貝集中 #4	H102	-	兼久式土器	壺	胴部	-	-	-	-	泥質	-
	92	貝集中 #4	H102	-	兼久式土器	-	胴部	-	-	-	-	砂質	-
	93	貝集中 #4	H102	-	兼久式土器	壺	口縁	4.9	-	-	-	泥質	-
	94	貝集中 #4	H102	-	兼久式土器	-	底部	7.2	-	-	-	砂質	-
	95	貝集中 #4	H102	-	兼久式土器	-	底部	5	-	-	-	泥質	-
	96	貝集中 #4	H102	-	兼久式土器	-	底部	4.4	-	-	-	泥質	-
	97	貝集中 #4	H102	-	須恵器	甕	胴部	15.6	-	-	-	-	表：平行状、裏：同心円状
	98	貝集中 #4	H102	-	貝製品	-	-	-	ﾄﾞﾛｷｶﾞｲ	-	-	-	貫通穿孔 (1)
	99	貝集中 #4	H102	-	貝製品	-	-	-	スイジガイ	-	-	-	先端を尖らせている

Ⅱ層調査状況

貝集中＃１近景

第３節　Ⅲ層検出遺構（第23図）

焼土跡（第24図）

焼土3はG-102区で検出した遺構である。②層は炭化物・焼土粒が多く混入している。

ピット（第24図，第７表）

P004はF-101で検出した遺構である。100は柱穴内から出土した皇宗通宝である。断面見通し図のため図上は浮いているが，遺構の底面から出土した。宋は篆書体である。

溝状遺構（第25図，第７表）

SD01はB･C-101で検出した遺構である。堆積は浅く最下層部から後述するSX30が露出した。SK10に切られている。

101・102は縄文土器である。いずれも上下に突帯を有し，その間を鋸歯文を充填する面縄西洞式土器である。

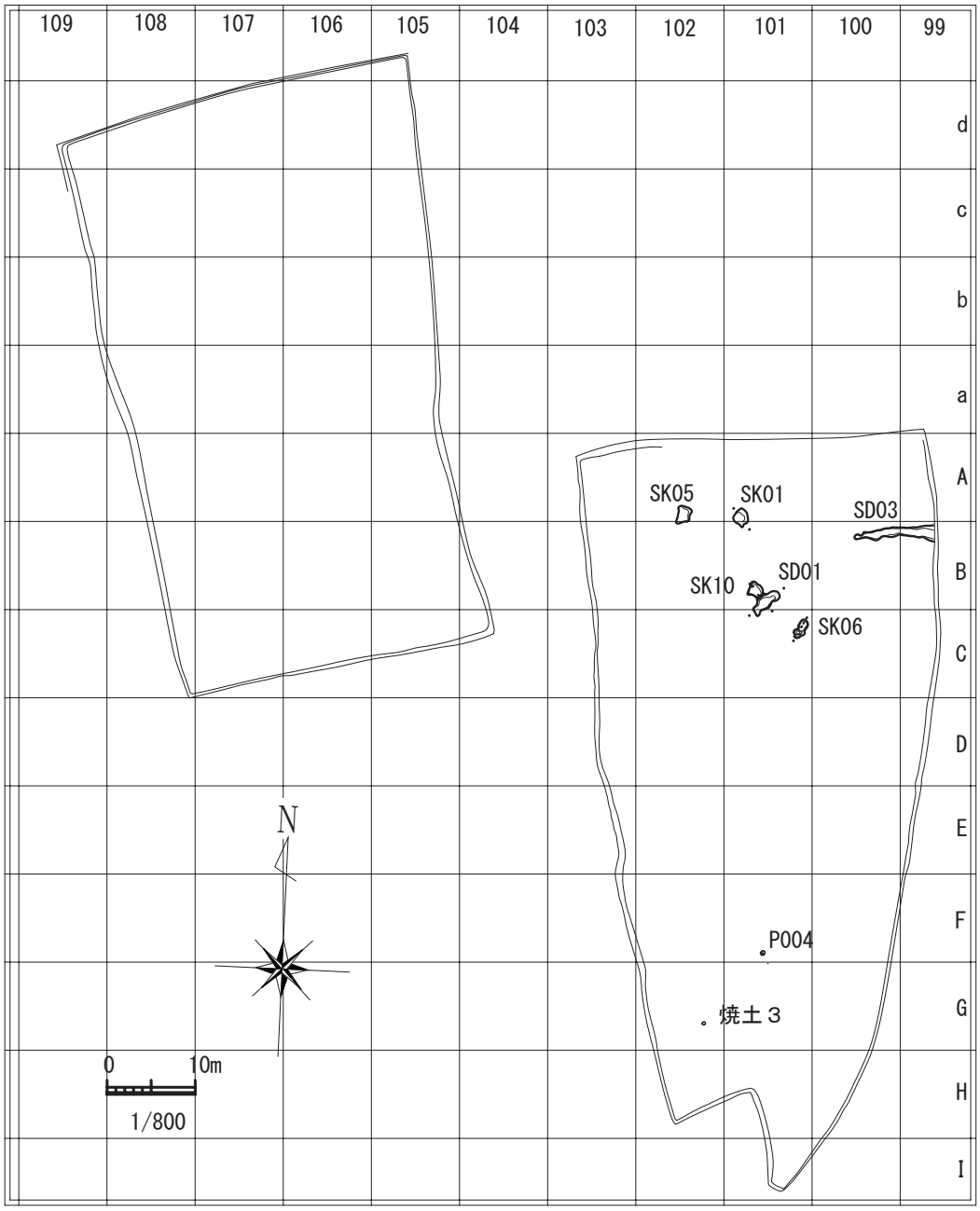
103 はクガニイシである。一部に鉄が付着している。

土坑

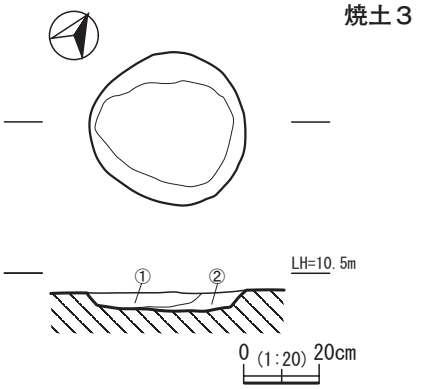
SK01（第26図，第７・８表）

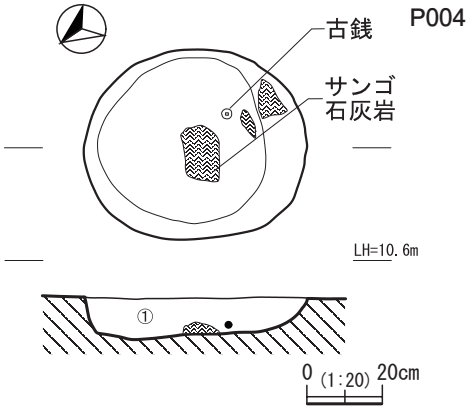
SK01はA・B-101で検出した遺構である。

104～114は縄文土器である。105・106は口唇部に大き

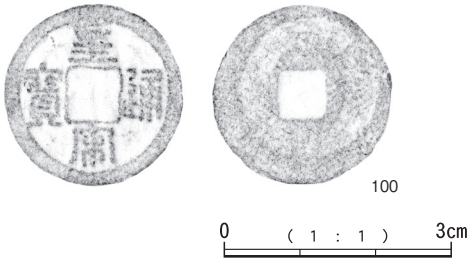


第23図　Ⅲ層遺構検出状況





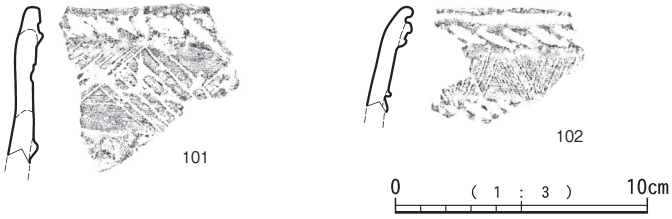
P004内皇宗通寶検出状況



層名	焼土３土層説明
①	暗褐色土(10YR3/3)に砂が混じる。やや粘性有
②	①層の土に炭化物・焼土粒が多く混入。

層名	P004土層説明
①	黒褐色土層。やや砂が混じる。

第24図　焼土３・P004



な突帯が貼り付けられている。107は全形の60％ほどが残存している。突帯の間にラフな放射状の沈線を施す。110は口唇部に突帯が貼り付けられており，外面と上面に押し引き文が施される。111は壺の口縁部，112は浅鉢の口縁部である。

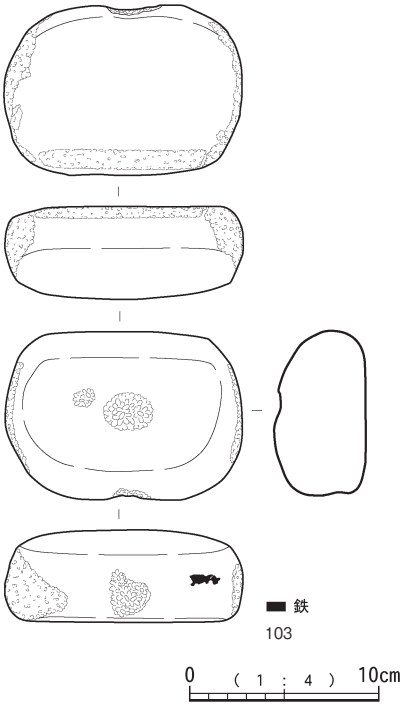
115 は有溝砥石である。十字状に削られている。

SK05（第27図，第8表）

A・B-102区で検出。堆積は非常に浅かった。116と117は検出時に出土した縄文土器である。117は波状口縁で口唇部が肥厚し，頸部下に突帯を持つ。第１文様帯には沈線が施されている。

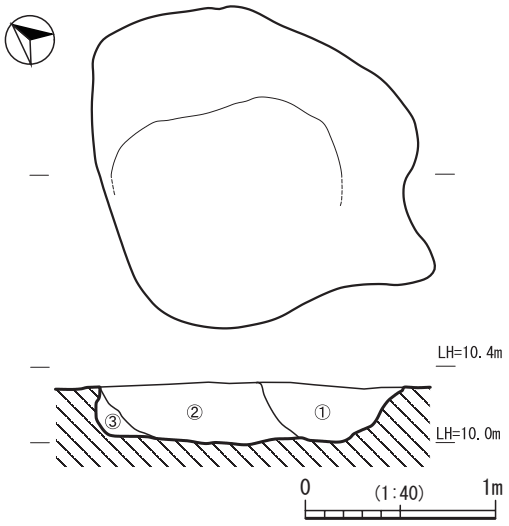
SK06（第28図，第8表）

C-101区で検出。複数回穴が掘られ平面形状がややいびつである。検出時は土坑の境界の見分けがつきにくかった。



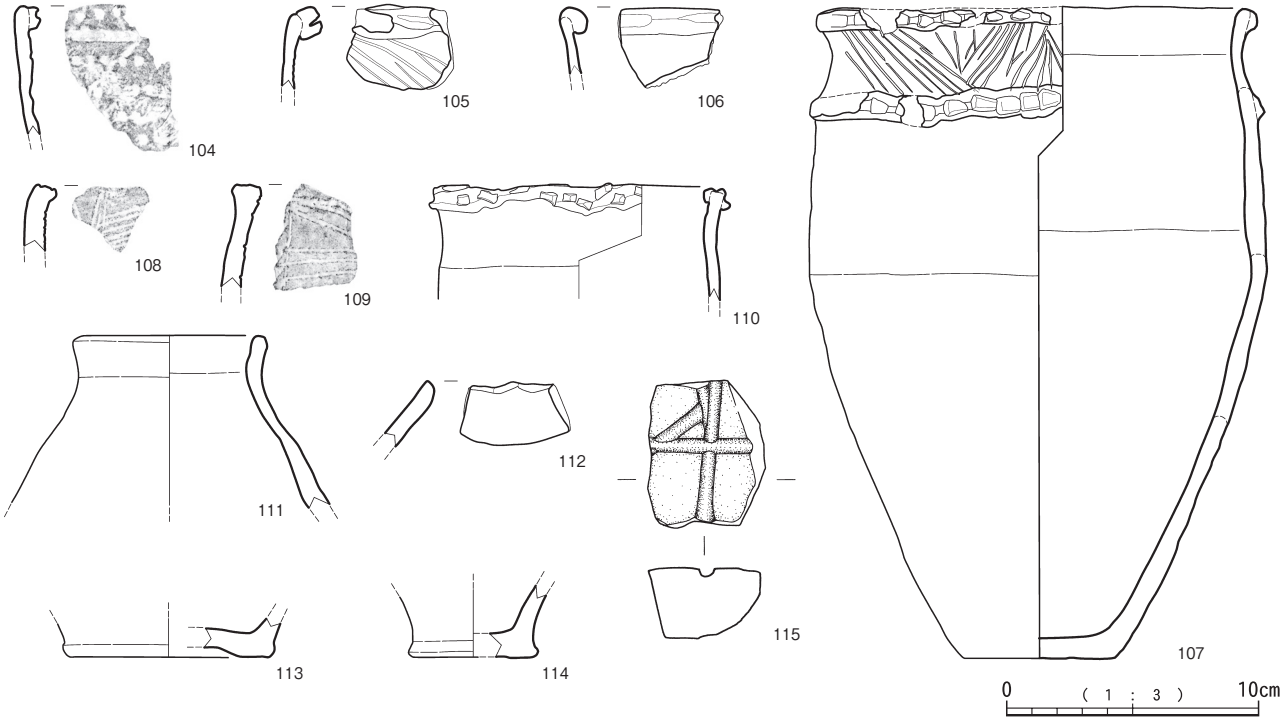
第25図　SD01・03出土遺物

118は口径25.1cmを測る面縄西洞式である。突帯は３条貼り付けられ，２番目と３番目の間に横位鋸歯文が充填され



SK01土層堆積状況

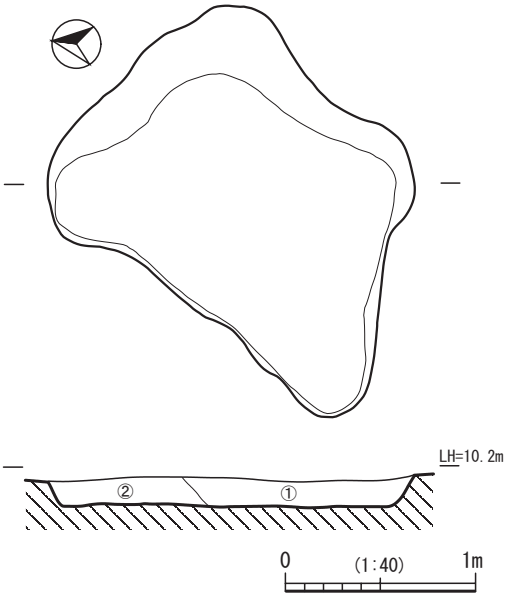
層名	SK01　土層説明
①	黒褐色 (Hue10YR3/2) 砂層。貝や礫などが多く入る。
②	黒色 (Hue10YR1.7/1) 砂層。貝や礫などが多く入る。
③	黒褐色 (Hue10YR2/2) 砂層。



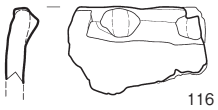
第26図　SK01

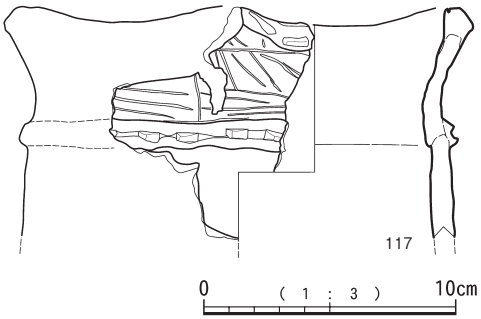
第７表　Ⅲ層遺構観察表（１）

図番号	掲載番号	遺構名	区	層	種類	器種(最大長)	部位(最大幅)	口 / 底径(最大厚)	分類 L1	分類 L2	重量(g)	土質	備考
第 24 図	100	P0004	F101	-	古銭	-	-	-	-	-	3.8	-	皇宋通寶
第 25 図	101	SD01	B101	①	縄文土器	深鉢	口縁	-	外反	丸状	-	砂質	-
	102	SD01	B101	①	縄文土器	深鉢	口縁	-	外反	舌状	-	泥質	-
	103	SD03	B99	-	石器	(8.9)	(12.5)	(4.9)	ｹｶﾞﾆｲｼ	細粒砂岩	924	-	鉄付着
第 26 図	104	SK01	B100	①	土器	深鉢	口縁	-	直口	丸状	-	泥質	-
	105	SK01	B100	②	土器	深鉢	口縁	-	直口	丸状	-	泥質	口唇部施文。施文荒い。
	106	SK01	B100	②	土器	深鉢	口縁	-	直口	丸状	-	泥質	貼り付け突帯のみ。
	107	SK01	B100	②	土器	深鉢	口～底部	口 16.4/底 6-6.5/高 25.9	外反	丸状	-	砂質	沈線は放射状で鋸歯風に仕上げられている



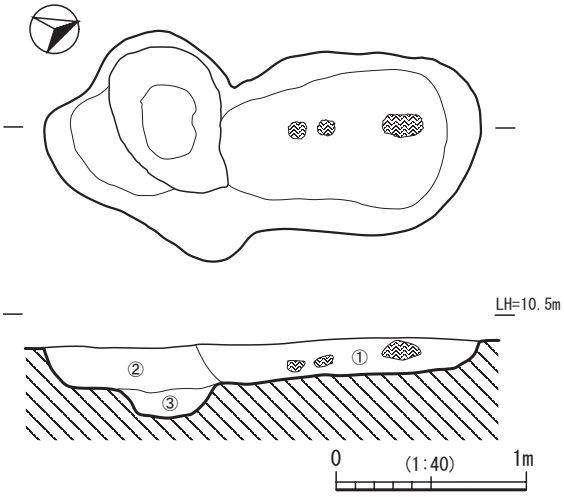
SK05半裁状況

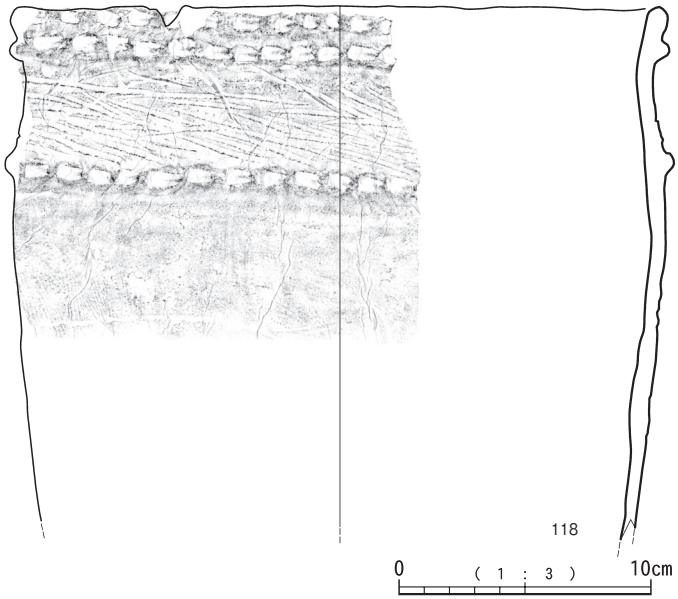




層名	SK05　土層説明
①	暗褐色 (Hue7.5YR3/2) 砂層。焼けた礫が多く入る。
②	褐色 (Hue7.5YR4/3) 砂層。礫入る。

第27図　SK05





層名	SK06　土層説明
①	黒褐色 (Hue7.5YR3/2) 砂質層。礫が多く入る。
②	灰黄褐色 (Hue10YR4/2) 層。二枚貝などが入る。
③	黒褐色 (Hue7.5YR3/2) 砂質層。Ⅰ層よりはしまりがなくさらさらの砂。焼けたサンゴ礫 (小) が混入。

第28図　SK06

ている。下層よりSX27が出土している。

SK10（第29図，第8表）

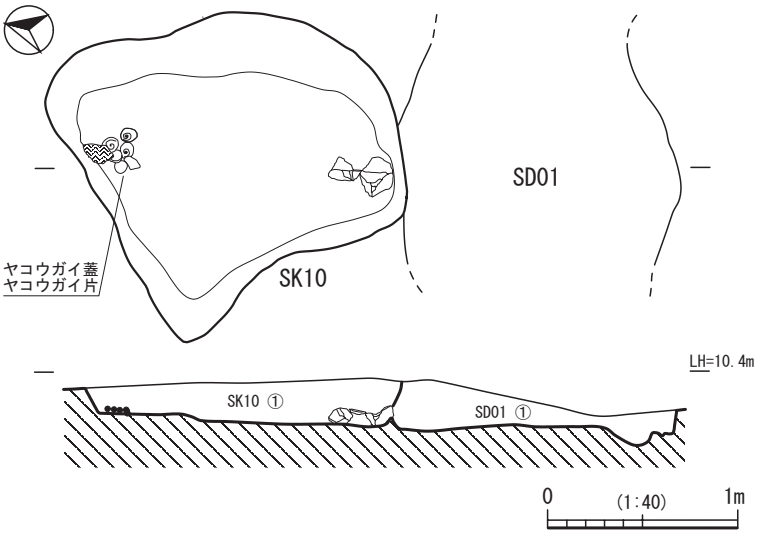
B-101区で検出。SD01を切っている。土坑の端部にはヤコウガイ蓋が集められていた。

119は内湾する土器片である。壺類の口縁部である。

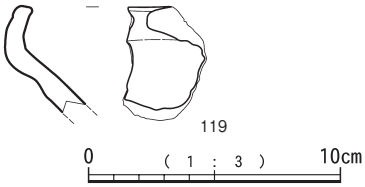
第４節　Ⅲ層出土遺物（第30･31図，第8･9表）

120・121は口縁が逆L字状を呈する弥生系土器である。122～134は縄文土器である。125～128・130は面縄西洞式の範疇に入る資料である。122～124に関しては他の資料と文様構成が異なるため，違う型式や時代の土器である可能性がある。

135はイノシシの牙を用いた製品である。



ヤコウガイ蓋検出状況

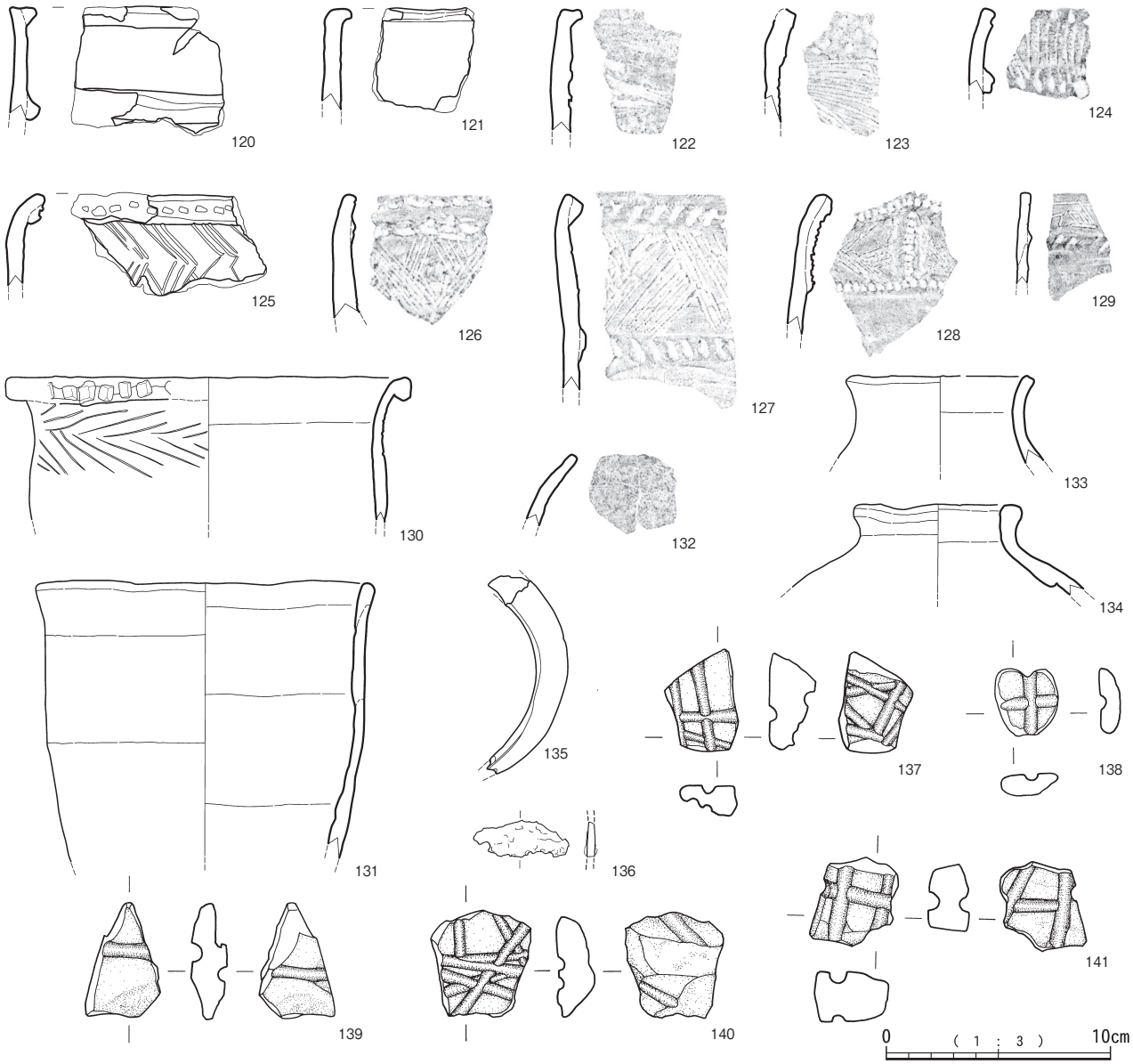


層名	SK10　土層説明
①	黒褐色 (Hue10YR3/2) 砂層。焼けた小礫 (灰色化している) が含まれる。また底部よりヤコウガイのフタが集中している箇所がある。
層名	SD01　土層説明
①	暗褐色 (Hue10YR3/4) 砂層。

第29図　SK10

第８表　Ⅱ～Ⅲ層遺構出土遺物観察表（２）

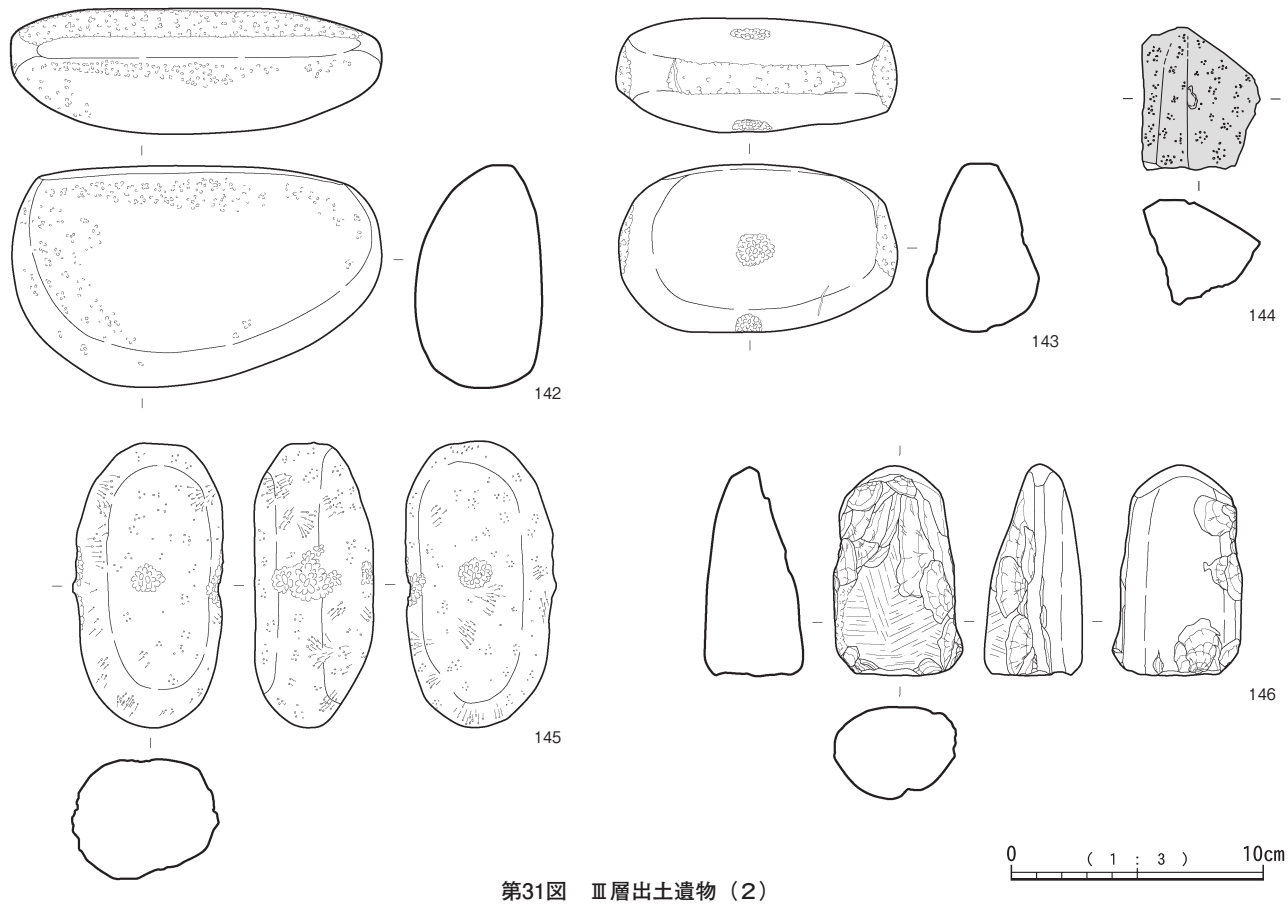
図番号	掲載番号	遺構名	区	層	種類	器種(最大長)	部位(最大幅)	口 / 底径(最大厚)	分類 L1	分類 L2	重量(g)	土質	備考
第 26 図	108	SK01	B100	②	土器	深鉢	口縁	-	直口	方形状	-	砂質	縦区画有。口唇部も施文
	109	SK01	B100	②	土器	深鉢	口縁	-	直口	方形状	-	砂質	口縁波状か。縦区画有。
	110	SK01	B100	②	土器	深鉢	口縁	11.3	直口	丸状	-	泥質	口縁部突帯のみ。口唇部にも施文。
	111	SK01	B100	②	土器	壺	口縁	7	直口	丸状	-	泥質	無文
	112	SK01	B100	②	土器	浅鉢	口縁	-	外反	丸状	-	泥質	精製された胎土を使用
	113	SK01	B100	②	土器	-	底部	8	③	-	-	泥質	-
	114	SK01	B100	①	土器	深鉢	底部	4.6	③	-	-	泥質	-
	115	SK01	B100	-	有溝砥石	(5.9)	(4.6)	(2.7)	細粒砂岩	-	78		1 面に 4 条の溝
第 27 図	116	SK05	A102	-	土器	浅鉢？	口縁	-	外反	方形状	-	砂質	検出面で出土。突帯に幅広凹み。
	117	SK05	A102	-	土器	深鉢	口縁	17.4	外反	丸状	-	砂質	検出面で出土。横位沈線による区画＋斜沈線。
第 28 図	118	SK06	C101	②	面縄西洞式	深鉢	口～胴部	25.1	外反	丸状	-	砂質	横位鋸歯状。横位区画線有。
第 29 図	119	SK10	B101	-	土器	壺	口縁	-	外反	方形状	-	泥質	-
第 30 図	120	-	F101	Ⅲ	弥生系土器	-	口縁	-	-	-	-	砂質	逆 L 字状口縁
	121	-	A102	Ⅲ	弥生系土器	-	口縁	-	-	-	-	泥質	逆 L 字状口縁
	122	-	B100	Ⅲ	縄文土器	深鉢	口縁	-	直口	丸状	-	砂質	-
	123	-	B103	Ⅲ	縄文土器	深鉢	口縁	-	外反	方形状	-	砂質	リボン状口縁
	124	-	B102	Ⅲ	縄文土器	深鉢	口縁	-	外反	丸状	-	泥質	-
	125	-	B102	Ⅲ	縄文土器	深鉢	口縁	-	外反	丸状	-	泥質	-
	126	-	C101	Ⅲ	縄文土器	深鉢	口縁	-	外反	丸状	-	砂質	口縁部と凸帯の間にも列点風沈線が巡る
	127	-	C101	Ⅲ	縄文土器	深鉢	口縁	-	直口	三角	-	砂質	-
	128	-	D100	Ⅲ	縄文土器	深鉢	口縁	-	外反	丸状	-	砂質	-
	129	-	EF-100	Ⅲ	兼久式土器	甕	口縁	-	直口	丸状	-	砂質	-
	130	-	A102	Ⅲ	縄文土器	深鉢	口縁	17.4	外反	丸状	-	泥質	-
	131	-	B102	Ⅲ	兼久式土器	-	口縁	14.4	外反	丸状	-	泥質	縄文の可能性



第30図　Ⅲ層出土遺物（1）

第９表　Ⅱ～Ⅲ層遺構観察表（3）

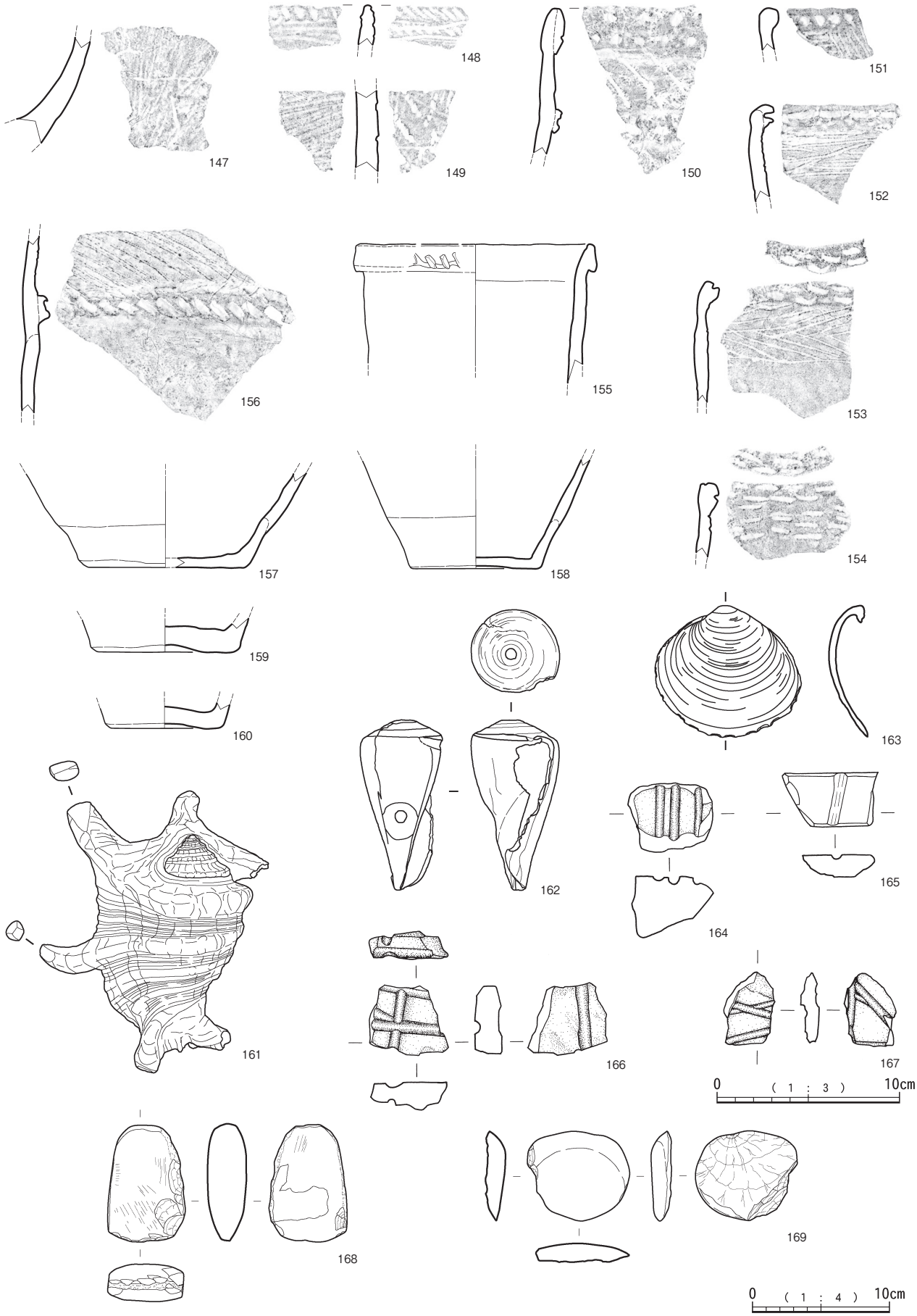
図番号	掲載番号	遺構名	区	層	種類	器種(最大長)	部位(最大幅)	口 / 底径(最大厚)	分類 L1	分類 L2	重量(g)	土質	備考
第 30 図	132	-	C101	Ⅲ	兼久式土器	甕	口縁		外反	丸状	-	砂質	-
	133	-	F100	Ⅲ	兼久式土器	壺	口縁	7.7	外反	丸状	-	泥質	-
	134	-	C100	Ⅲ	縄文土器	壺	口縁	6.7	外反	丸状	-	泥質	-
	135	-	B102	Ⅲ	骨製品	垂飾品	牙	-	-	-	-	-	イノシシ牙製品。先端分に貫通穿孔 (1)
	136	-	F101	Ⅲ	鉄製品	-	-	-	板状	-	-	-	-
	137	-	東西サブトレ	Ⅲ	石器	(4.5)	(3.2)	(2)	有溝砥石	細粒砂岩	27	-	2 面に計 10 条
	138	-	B102	Ⅲ	石器	(3)	(2.7)	(0.9)	有溝砥石	細粒砂岩	7	-	1 面に 2 条の溝
	139	-	C100	Ⅲ	石器	(5)	(3.3)	(1.5)	有溝砥石	細粒砂岩	19	-	2 面に計 2 条
	140	-	B102	Ⅲ	石器	(4.6)	(4.4)	(1.6)	有溝砥石	細粒砂岩	34	-	2 面に計 9 条
	141	-	B102	Ⅲ	石器	(4)	(3.9)	(2.3)	有溝砥石	細粒砂岩	33	-	3 面に計 7 条溝
第 31 図	142	-	F100	Ⅲ	石器	(11.7)	(19.5)	(6.6)	クガニイシ	粗粒砂岩	2310	-	-
	143	-	B101	Ⅲ	石器	(8.9)	(14.8)	(6)	クガニイシ	粗粒砂岩	1136	-	-
	144	-	B102	Ⅲ	石器	(7.5)	(6.3)	(5.5)	不明石製品	ハマサンゴ属	162	-	表面研磨、平滑
	145	-	H101	Ⅲ	石器	(15)	(8)	(6.3)	敲石	ハマサンゴ属	618	-	-
	146	-	南北サブトレ	Ⅲ	石器	(11)	(6.9)	(5.2)	不明石製品	緑色岩	549	-	下部を平たく加工。



第31図　Ⅲ層出土遺物（２）

第10表　Ⅱ～Ⅲ層遺構観察表（４）

図番号	掲載番号	遺構名	区	層	種類	器種(最大長)	部位(最大幅)	口 / 底径(最大厚)	分類 L1	分類 L2	重量(g)	土質	備考
第 32 図	147	-	C100	Ⅱ d	縄文土器	-	胴部	-	-	-	-	砂質	条痕文系
	148	SK15	D99	Ⅱ d	室川下層	-	口縁	-	直口	-	-	砂質	口唇部に刻目
	149	SK15	D99	Ⅱ d	室川下層	-	胴部	-	-	-	-	砂質	列点文
	150	SK15	D99	Ⅱ d	土器	深鉢	口縁	-	直口	丸状	-	泥質	上段突帯は２段
	151	SK15	D99	Ⅱ d	土器	深鉢	口縁	-	外反	丸状	-	砂質	-
	152	-	-	Ⅱ d	縄文土器	深鉢	口縁	-	外反	丸状	-	泥質	-
	153	-	-	Ⅱ d	縄文土器	深鉢	口縁	-	外反	丸状	-	泥質	-
	154	-	-	Ⅱ d･e	縄文土器	-	口縁	-	直口	丸状	-	泥質	-
	155	-	-	Ⅱ d	縄文土器	深鉢	口縁	12.4	外反	丸状	-	泥質	-
	156	-	-	Ⅱ d	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	-	-	泥質	-
	157	-	-	Ⅱ d	縄文土器	深鉢	底部	8.4	②	-	-	泥質	-
	158	-	C100	Ⅱ d	縄文土器	深鉢	底部	6.9	②	-	-	泥質	-
	159	SK15	D99	Ⅱ d	土器	深鉢	底部	7	②上げ底	-	-	泥質	-
	160	SK15	D99	Ⅱ d	土器	深鉢	底部	5.3	②上げ底	-	-	泥質	-
	161	-	CD99	Ⅱ d	貝製品	-	-	-	ｽｲｼﾞｶﾞｲ	-	-	-	先端を尖らせている
	162	-	CD99	Ⅱ d	貝製品	-	-	-	ｶﾊﾞﾐﾅｼ	-	-	-	殻頂・外唇部研磨，体層穿孔 (1)
	163	-	CD99	Ⅱ d	貝製品	-	-	-	ｼﾙﾅｼｼﾞﾐ	-	-	-	連続的に剥離。
	164	-	D99	Ⅱ d	石器	(3.6)	(4.6)	(3.2)	有溝砥石	細粒砂岩	64	-	島尻層砂泥岩の可能性
	165	-	C103	Ⅱ d	石器	(2.9)	(5.3)	(0.7)	有溝砥石	頁岩	27	-	さげ砥的形状。
	166	-	D99	Ⅱ d	石器	(3.9)	(4.3)	(1.5)	有溝砥石	細粒砂岩	27	-	３面に計５条
	167	SK16	D99	Ⅱ e	石器	(4)	(2.6)	(1)	有溝砥石	細粒砂岩	9	-	２面に計８条
	168	-	CD99	Ⅱ d	石器	(8.3)	(5.5)	(2.7)	石斧	緑色岩	215	-	-
	169	-	C103	Ⅱ d	石器	(6.5)	(7.5)	(1.5)	円形状石器	緑色岩	101	-	自然面が残る



第32図　Ⅱd･e層出土遺物

137～141は有溝砥石である。142・143はクガニイシである。144･145はハマサンゴ属のサンゴ製石器である。

第５節　Ⅱd･e層(Ⅲ層・Ⅳ層の間)検出遺物（第32図，第10表）

この層からSK15・16を検出しているが，遺構でないと判断したため，本節に含む。

147～160は縄文土器である。147は条痕文系土器の胴部である。149は室川下層系である。151～153･156は面縄西洞式である。153は頸部に突帯を持たず，沈線文で区画される。154は口縁を肥厚させ，幅広連続短沈線で文様を施す。

161～163は貝製品である。

164～167は有溝砥石である。165は頁岩製の有溝砥石である。表面は平滑で砥石等からの転用の可能性もある。169は円形状石製品である。

第６節　Ⅳ層(白砂層)出土遺構（第33図）

土坑

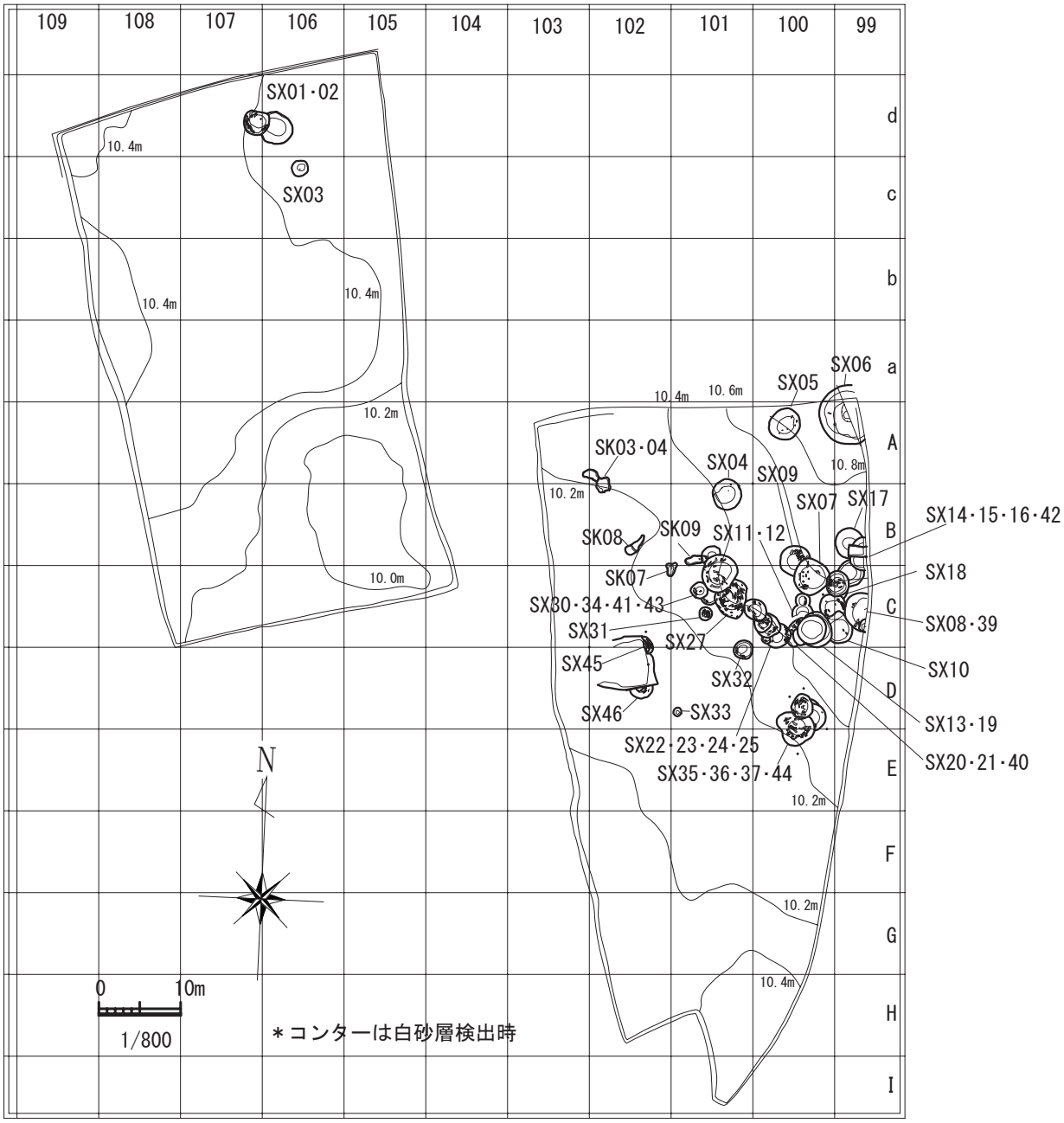
SK03・04（第34図）

SK03・04はA・B-102区で検出した。いずれも単層で堆積も浅かった。被熱したサンゴ礫が多く出土した。

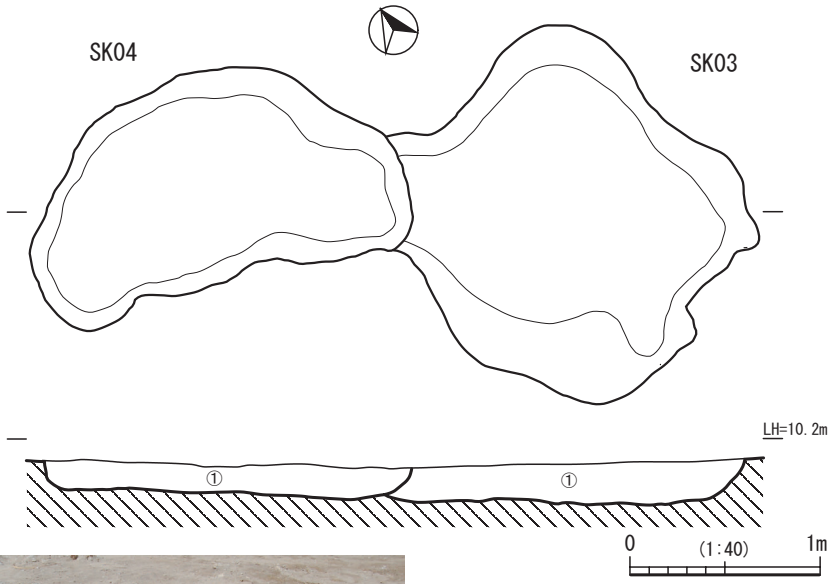
SK07（第35図，第11表）

B・C-101・102区で検出。単層で堆積は非常に浅かった。SK03･04と類似するような堆積をしていた。

170は骨製品である。表面は丁寧に研磨され，端部が尖らせている。



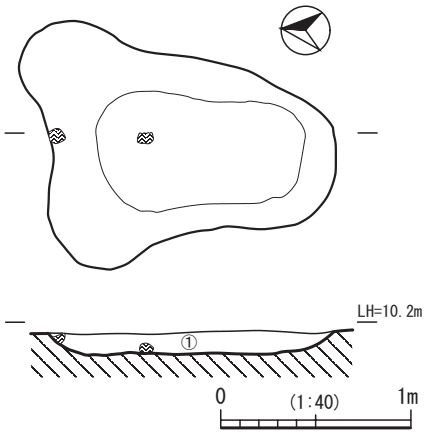
第33図　Ⅳ層・Ⅳ層中検出遺構配置図

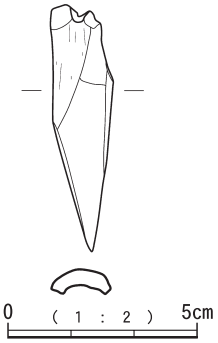


SK03･04半裁状況

層名	SK04　土層説明
①	灰褐色 (Hue7.5YR4/2) 砂層。火の作用を受け，灰色化したサンゴ礫を多く含む。
層名	SK03　土層説明
①	黒褐色 (Hue7.5YR3/2) 砂層。SK-04 と同じく火の作用を受け，灰色化したサンゴ礫を多く含む。

第34図　SK03･04





170

層名	SK07　土層説明
①	黒褐色 (Hue10YR3/3) 砂層。焼けたサンゴ礫や貝などが混入。

第35図　SK07

SK08（第36図，第11表）

B-101区で検出。細長い土坑で南側がやや厚く堆積していた。遺物がやや多く出土した。

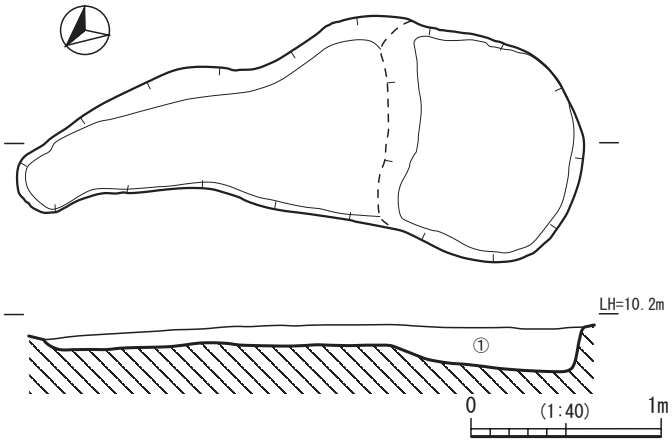
171・172は縄文土器である。いずれも小破片である。

173・174は有溝砥石である。縦横に擦痕が見られる。

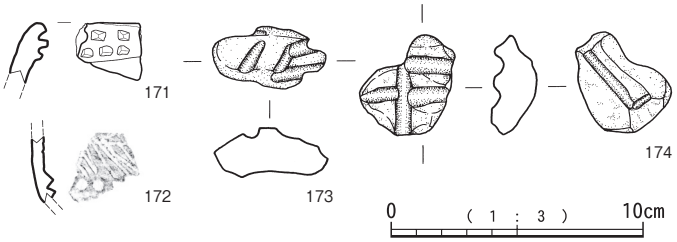
SK09（第37図，第11表）

B-101区で検出。堆積は非常に浅かった。

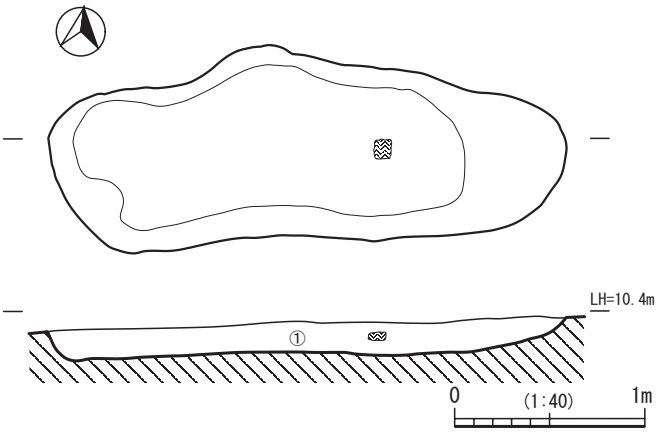
175はヤコウガイ製品である。破断面は平滑に仕上げられている。貝匙の可能性がある。

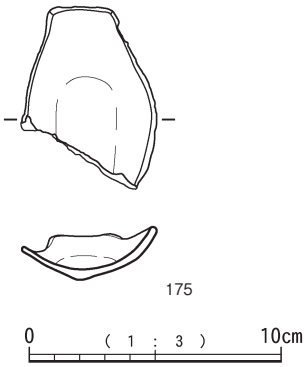


層名	SK08　土層説明
①	暗褐色 (Hue7.5YR4/2) 砂層。焼けて炭色化したサンゴ礫や灰色化した貝，土器出土。



第36図　SK08



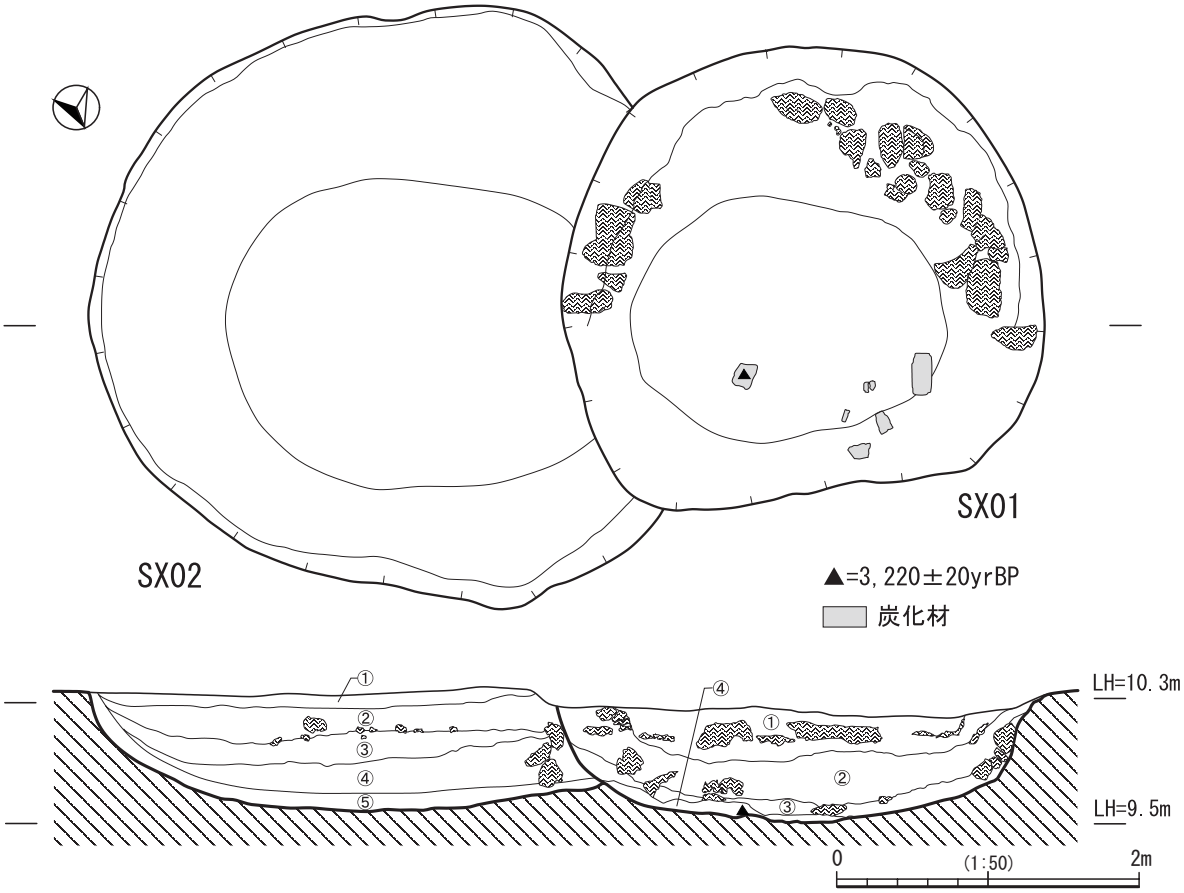


層名	SK09　土層説明
①	黒褐色 (Hue7.5YR3/2) 砂層。焼けて灰色化したサンゴ礫や二枚貝などが入る。多くはないが炭も入る。

第37図　SK09

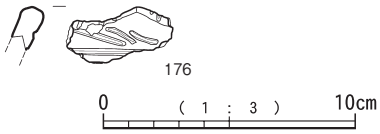
第11表　Ⅳ層遺構出土遺物観察表（1）

図番号	掲載番号	遺構名	区	層	種類	器種(最大長)	部位(最大幅)	口 / 底径(最大厚)	分類 L1	分類 L2	重量(g)	土質	備考
第 35 図	170	SK07	-	-	骨製品	-	-	-	-	-	-	-	端部を尖らしている。
第 36 図	171	SK08	B102	-	土器	-	口縁	-	直口	舌状	-	泥質	-
	172	SK08	B102	I	土器	-	胴部	-	-	-	-	泥質	-
	173	SK08	B102	I	石器	(2.4)	(2.4)	(1.7)	有溝砥石	細粒砂岩	17	-	2 面に計 5 条
	174	SK08	B102	I	石器	(4)	(3.8)	(1.7)	有溝砥石	細粒砂岩	18	-	2 面に計 5 条
第 37 図	175	SK09	B101	①	貝製品	-	-	-	ヤコウガイ	-	-	-	小型貝匙か
第 38 図	176	SX01	d106	①	縄文土器	-	口縁	-	外反	方形状	-	砂質	指宿式×嘉徳Ⅱ式



層名	SX01　土層説明
①	灰層。小礫を含む。
②	灰褐色砂層と白砂層が交互に堆積する層。
③	灰褐色砂層。
④	黒褐色砂層。炭化物含む。

層名	SX02　土層説明
①	灰褐色層。
②	白砂層。
③	暗褐色砂
④	灰褐色土層。礫が多く入る (80%以上)。
⑤	黒色土。炭などが多く混入する。



SX01･02検出･一部掘り下げ状況

第38図　SX01・02

不明遺構

調査時は集石●●という名称で行ったが，本報告ではSX●●として報告する。これらは以下の特徴が見られた。

①検出時の外周に黒色の帯が見られることが多い。

②土坑内には拳大以下の焼けた石灰岩礫などが詰まっており炭化物層と灰の層が互層をなすことが多い。

③最下層は炭化物層であることが多い。一部の土坑にはまるで炭化材を並べたかのような状態で出土している。

なお，遺構番号は調査時の番号をそのまま活かしているため，SX28・29・38は欠番である。不明遺構は全部で43基完掘したが，盛土保存等で調査外になった部分にも広がりを確認している。

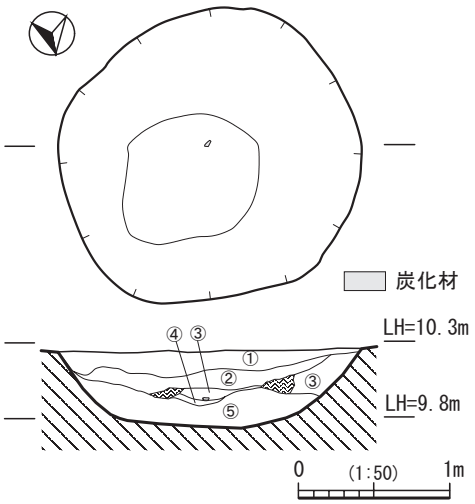
SX01・02（第38図，第11表）

d-105・106区で検出。SX01は直径約3.1×2.8mで深さ約0.7m，SX02は直径約3.9mで深さ約0.7mの円形状である。SX01最下層から出土した炭化物からは3,220±20yrBPの年代がえられている(第Ⅵ章２節参照)。

176はSX01から出土した縄文土器である。器壁はやや厚く波状口縁を呈する。

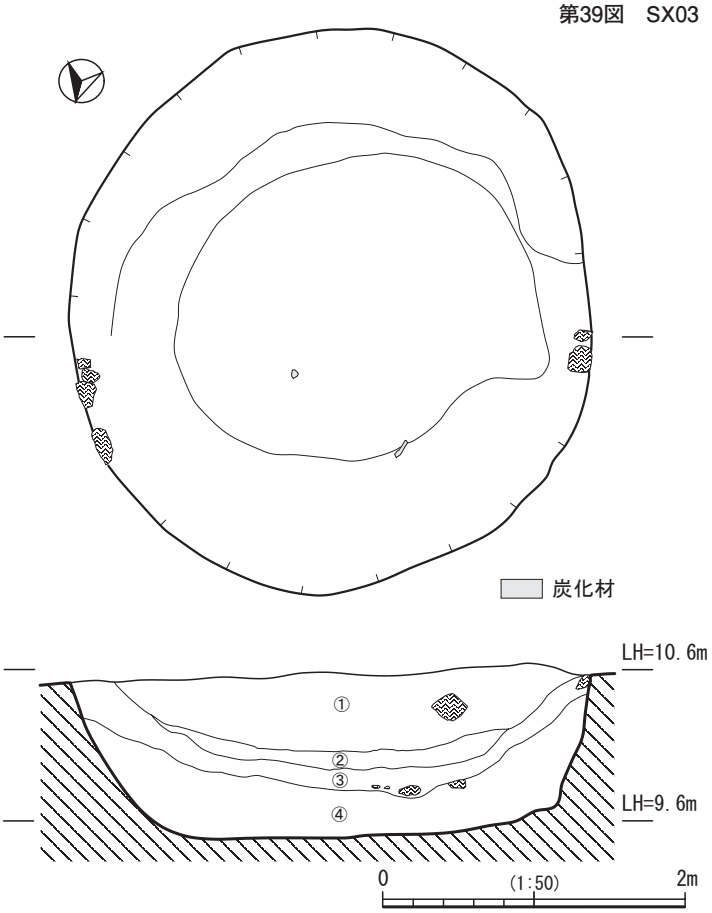
SX03（第39図）

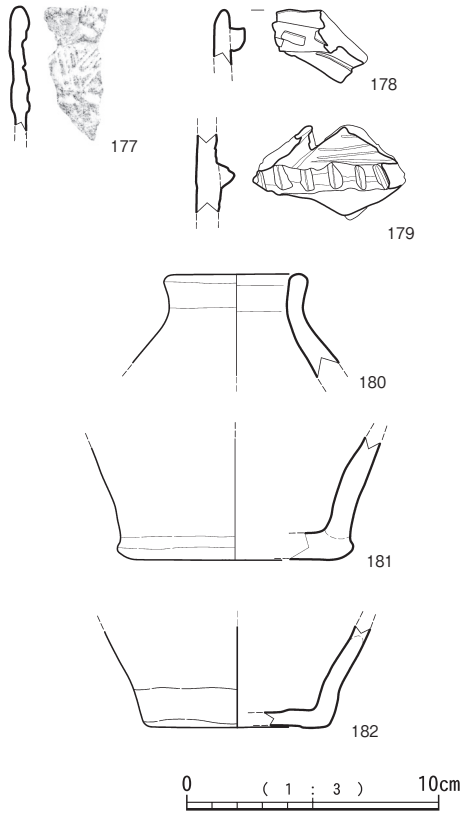
c-106区で検出。直径約2×2mで深さ0.5mの円形状である。⑤層が比較的厚く堆積している。



層名	SX03　土層説明
①	褐灰色 (Hue7.5YR4/1) 砂質土層。粘性はない。被熱したサンゴ礫が多く入る。礫は灰色または黒色化しているものが多く脆い。
②	黒褐色 (10YR3/1) 砂質層。
③	黒褐色 (Hue7.5YR) 砂質層。粘性あり。礫・炭が混入する。石灰が一度砕けて再度固まったような塊がみられる。
④	黒褐色 (Hue10YR3/1) 土層。粘性あり。砂が少し混じる。
⑤	黒色 (Hue10YR1.7/1) 砂質土層。炭を多く混入する。

第39図　SX03





第40図　SX04（1）

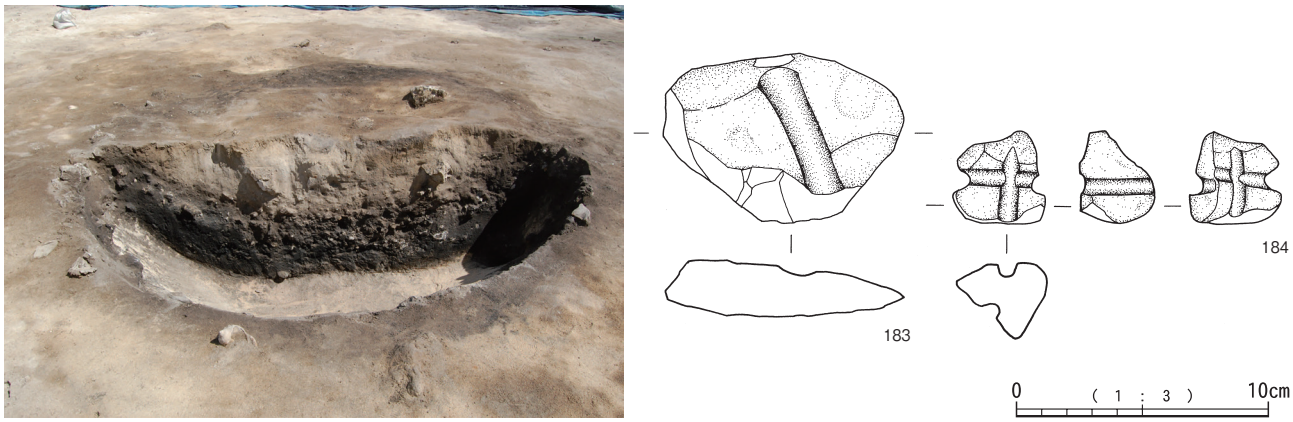
層名	SX04　土層説明
①	白砂層。
②	灰褐色砂質層。小礫・マイマイを多く含む。
③	暗灰色砂質層。焼けた石灰岩や礫を多く含む。
④	黒色 (Hue10YR1.7/1) 砂質層。炭を多く含む。

SX04（第40・41図，第12表）

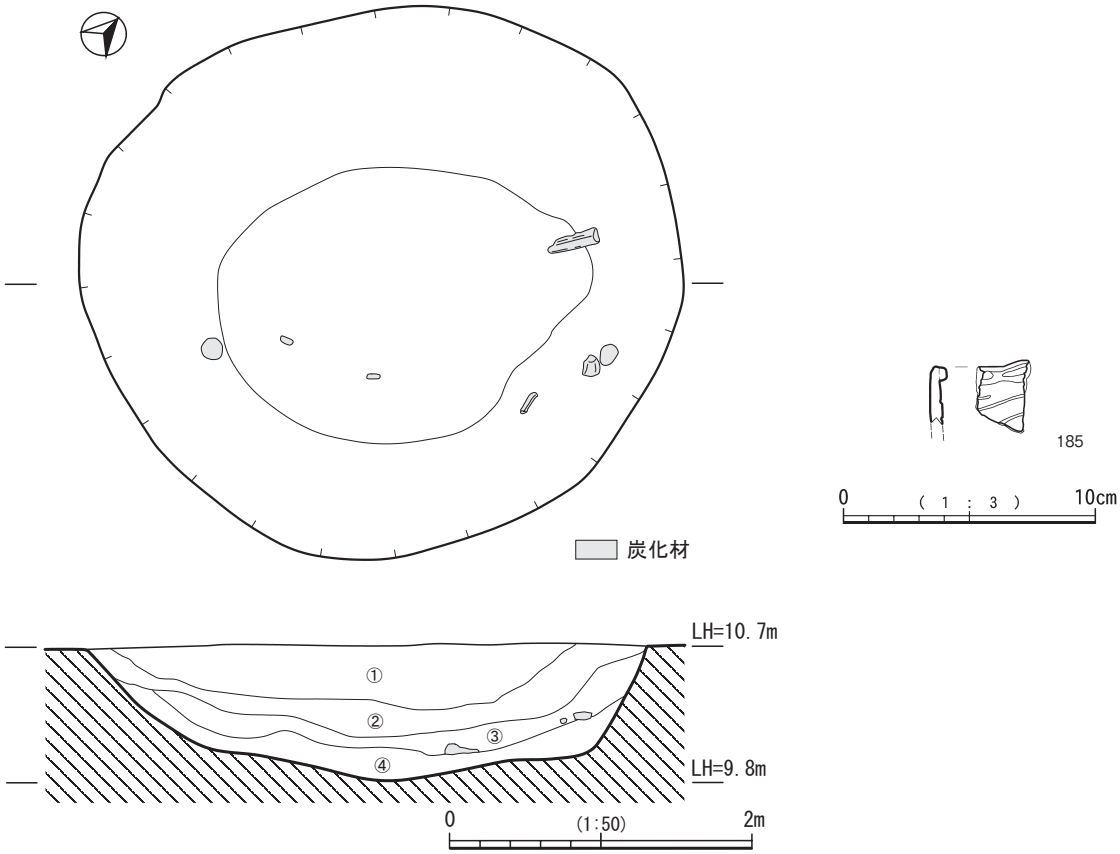
A・B-101区で検出。直径約3.7×3.4mで深さ約1mの円形状である。

177～182は土坑内から出土した縄文土器である。

文様構成からは面縄西洞式の範疇に含まれる資料と考えている。177は全体的に摩滅している。



第41図　SX04（2）



第42図　SX05

層名	SX05　土層説明
①	白砂層。
②	黒褐色 (Hue10YR3/1) 砂層。焼けた石灰礫が多くまじる。
③	褐灰色 (Hue10YR4/1) 砂層。Ⅱ層に比べ粘性がある。石灰の小礫，石灰が再度固まったような塊なども混入する。
④	黒色 (Hue2.5YR2/1) 砂質層。灰を多く含む。

183・184は有溝砥石である。183は凹み幅が広く，やや浅い。

SX05（第42図，第12表）

A-100区で検出。直径約2×1.8mで深さ約0.4mの円形状である。

185は土坑内から出土した縄文土器である。直口する口縁で口唇部に突帯を貼り付けている。外面に斜線を施す。

SX06（第44図，第12表）

A・a-99・100区で検出。直径約7.3mで深さ約1.1mである。アスファルト道路の下まで遺構が延びている。確認された同様の遺構の中で最大の遺構である。調査は安全のため道路から幅を残し調査を行った。また，SX06底面より出土した別遺構（第43図右下）はこれ以上工事で下がらないことから，掘削をせず，埋め戻した。

186・187は縄文土器である。186は嘉徳ⅠB式の波状口

第43図　SX05･06検出状況（左：SX05，右上：SX06検出，右下：SX06半裁（最下層から別のSXを検出））

縁部分である。187はリボン状突起をもつ面縄西洞系の深鉢である。

188は骨製品である。先端を擦って尖らせている。尺骨を使用している。

189は台石である。盃状の凹みが３か所見られる。

第７節　Ⅳ層中出土遺構

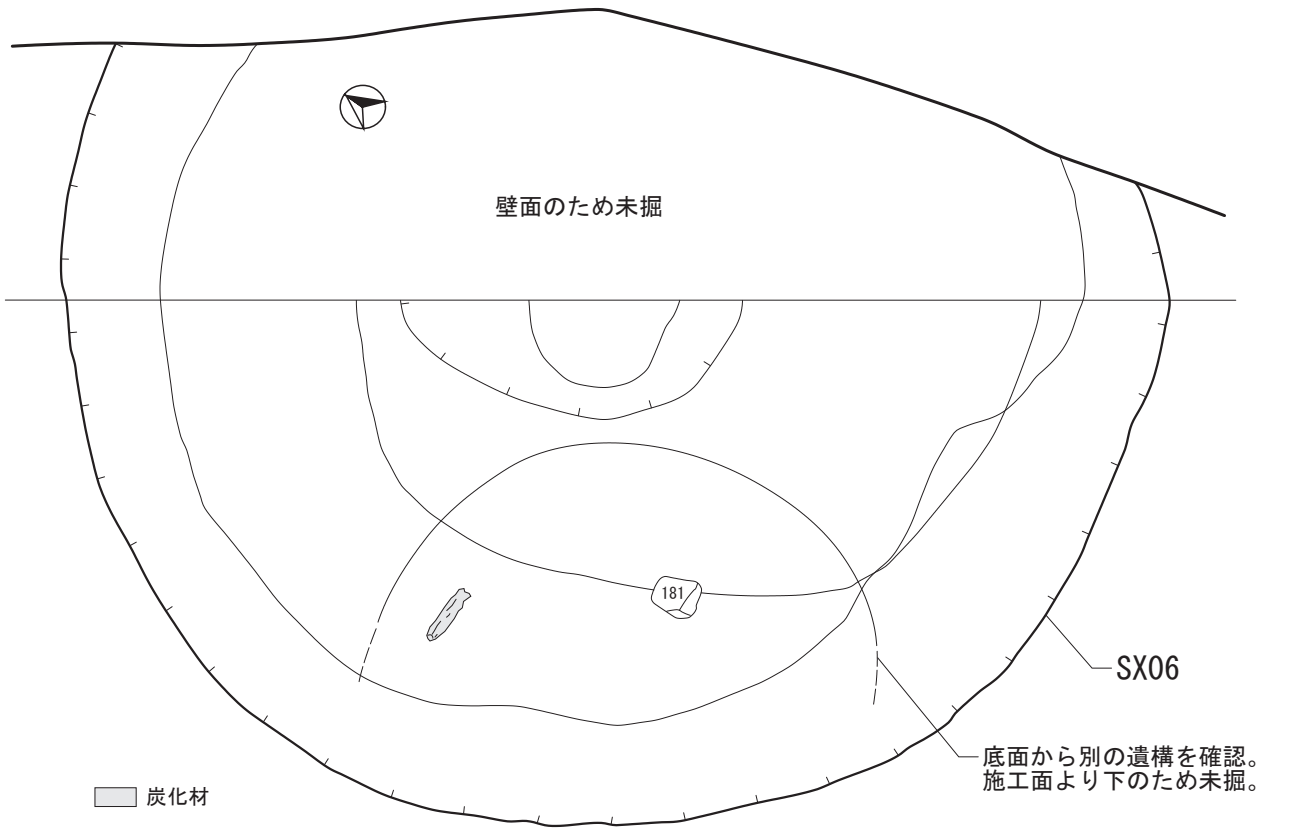
下層確認のために，Ⅳ（白砂）層を少し掘り下げると黒色の帯が見え始めた。周辺を拡張すると地山と思っていた白砂層の中にも遺構が埋没していることが判明した。以下はⅣ層中から出土した遺構である。

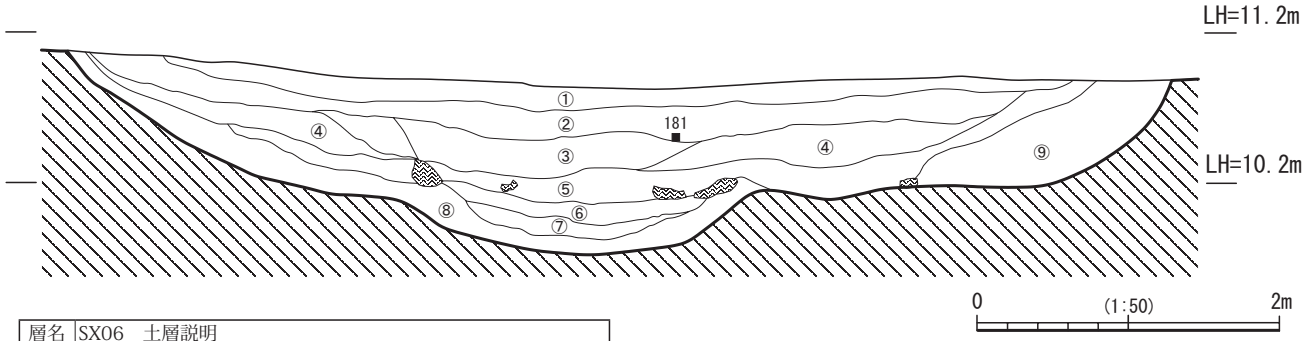
SX07（第45図，第13表）

B・C-100区で検出。直径約4.5×4.3mで深さ約0.5mであ

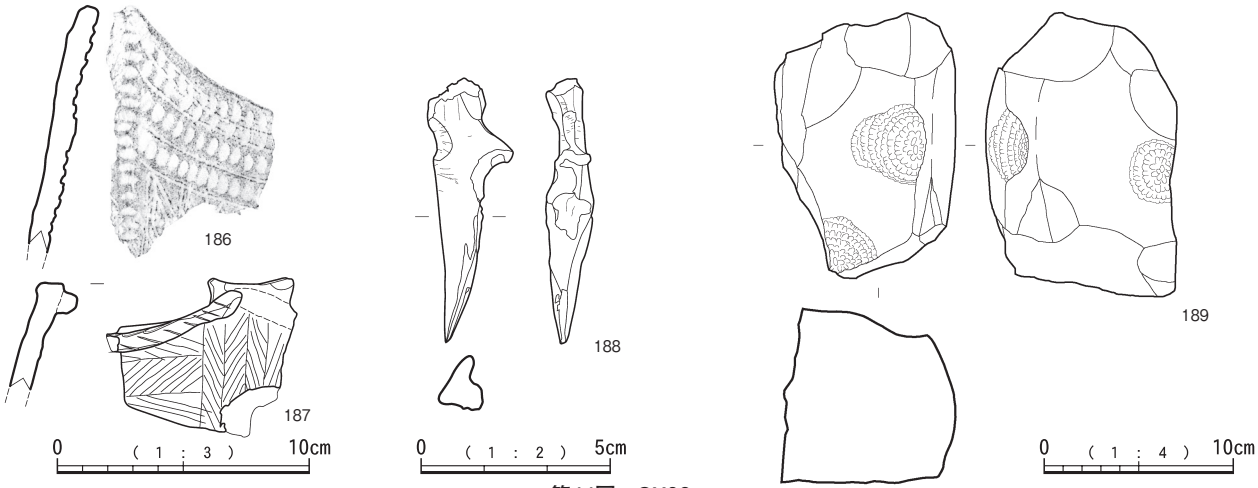
第12表　SX出土遺物観察表（１）

図番号	掲載番号	遺構名	区	層	種類	器種(最大長)	部位(最大幅)	口 / 底径(最大厚)	分類 L1	分類 L2	重量(g)	土質	備考
第 40 図	177	SX04	B101	④	縄文土器	深鉢	口縁	-	直口	舌状	-	泥質	突帯厚みナシ。面縄西洞式。
	178	SX04	B101	②	縄文土器	-	口縁	-	外反	舌状	-	砂質	-
	179	SX04	B101	①	縄文土器	-	胴部	-	-	-	-	砂質	-
	180	SX04	B101	④	縄文土器	壺	口縁	5.1	-	-	-	泥質	無文
	181	SX04	B101	④	縄文土器	-	底部	7.9	①	-	-	泥質	-
	182	SX04	B101	①	縄文土器	-	底部	6.7	①	-	-	泥質	集石 04 黒色土と接合
第 41 図	183	SX04	AB-101	①	石器	(6.8)	(9.4)	(2.2)	有溝砥石	細粒砂岩	146	-	1 面に 1 条の溝
	184	SX04	AB-101	①	石器	(3.7)	(3.7)	(3)	有溝砥石	細粒砂岩	25	-	3 面に計 5 条
第 42 図	185	SX05	A100	②	縄文土器	鉢	口縁	-	外反	舌状	-	泥質	沈線は横位
第 44 図	186	SX06	Aa99	①	縄文土器	深鉢	口縁	-	外反	方形状	-	砂質	波状口縁・嘉徳ＩＢ
	187	SX06	Aa99	①	縄文土器	-	口縁	-	外反	方形状	-	泥質	波状口縁。第 1 文様帯は縦横有軸羽状文の組み合わせ
	188	SX06	Aa99	①	骨製品	-	-	-	-	-	-	-	端部を尖らしている。
	189	SX06	A99	①	石器	(14)	(9.7)	(9.7)	台石	粗粒砂岩	1678		盃状の凹み３つ

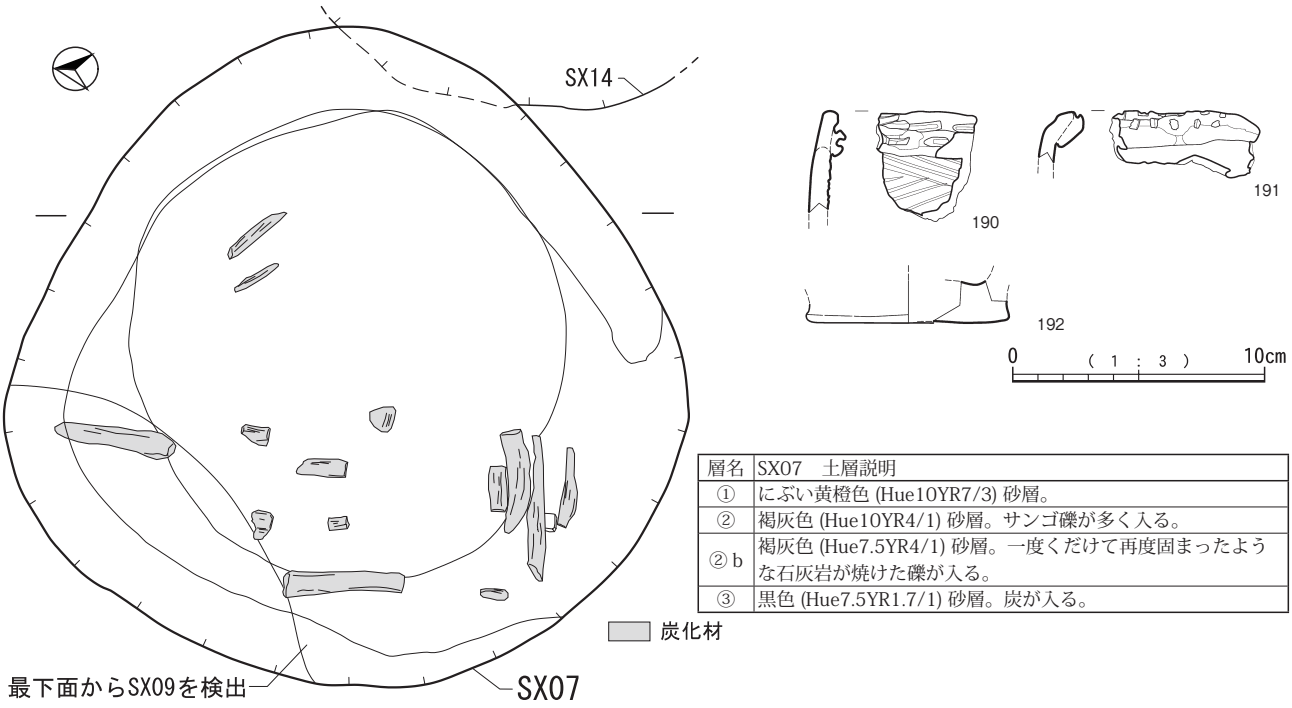




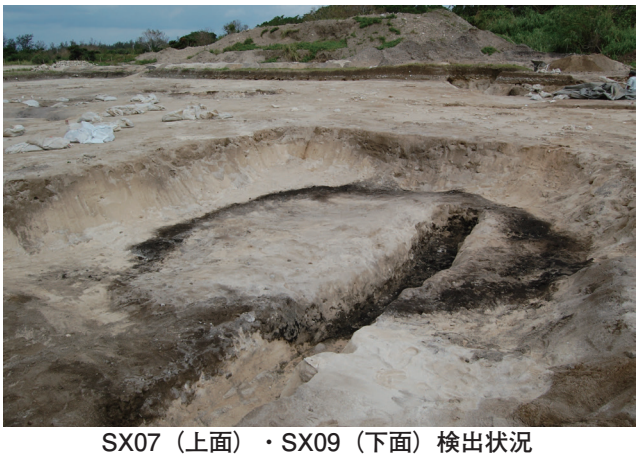
層名	SX06　土層説明
①	白砂層。
②	黒褐色 (Hue10YR3/2) 層。焼けて炭色化した石灰礫が多い。
③	褐灰色 (Hue10YR5/1) 層。焼けた石灰岩の礫の層。
④	黒色 (Hue10YR2/1) 層。礫が多く入る。
⑤	褐灰色 (Hue10YR4/1) 層。焼けた石灰岩の礫が多い。
⑥	黒褐色 (Hue10YR3/1) 層。小さな焼けた礫が入る。
⑦	褐灰色 (Hue7.5YR4/1) 層。砕けて再び固まったような石灰岩が少し入る。
⑧	黒褐色 (Hue10YR2/2) 層。
⑨	黒色 (Hue10YR1.7/1) 土層。礫は少ない。



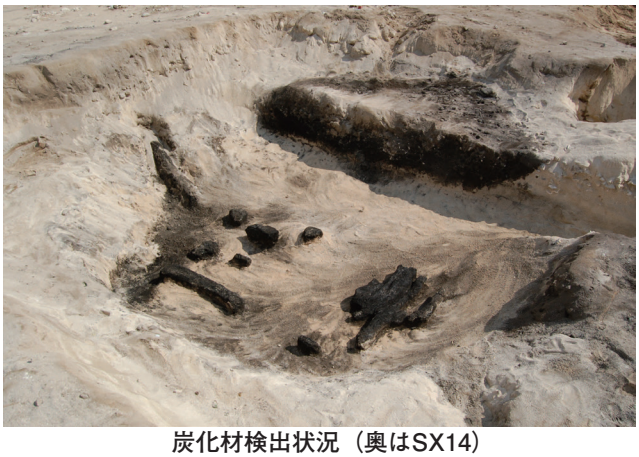
第44図　SX06



層名	SX07　土層説明
①	にぶい黄橙色 (Hue10YR7/3) 砂層。
②	褐灰色 (Hue10YR4/1) 砂層。サンゴ礫が多く入る。
②b	褐灰色 (Hue7.5YR4/1) 砂層。一度くだけて再度固まったような石灰岩が焼けた礫が入る。
③	黒色 (Hue7.5YR1.7/1) 砂層。炭が入る。



SX07（上面）・SX09（下面）検出状況



炭化材検出状況（奥はSX14）

第45図　SX07

る。SX09を切っている。また，SX14に切られている。

190～192は土坑内から出土した縄文土器である。190は面縄西洞式の口縁部である。191は全体的に摩滅している。

SX08・39（第46･47図，第13表）

C-99区で検出。SX08は直径約4.7mで深さ約0.7mである。遺構の半分はアスファルト道路側に伸びていた。調査は安全のため道路から幅を残し調査を行った。

SX39は直径約1.6mで深さ約55cmである。白砂層を挟んでSX08が切っているため，古SX39＜新SX08であり，白砂が堆積する期間の時間差がある。

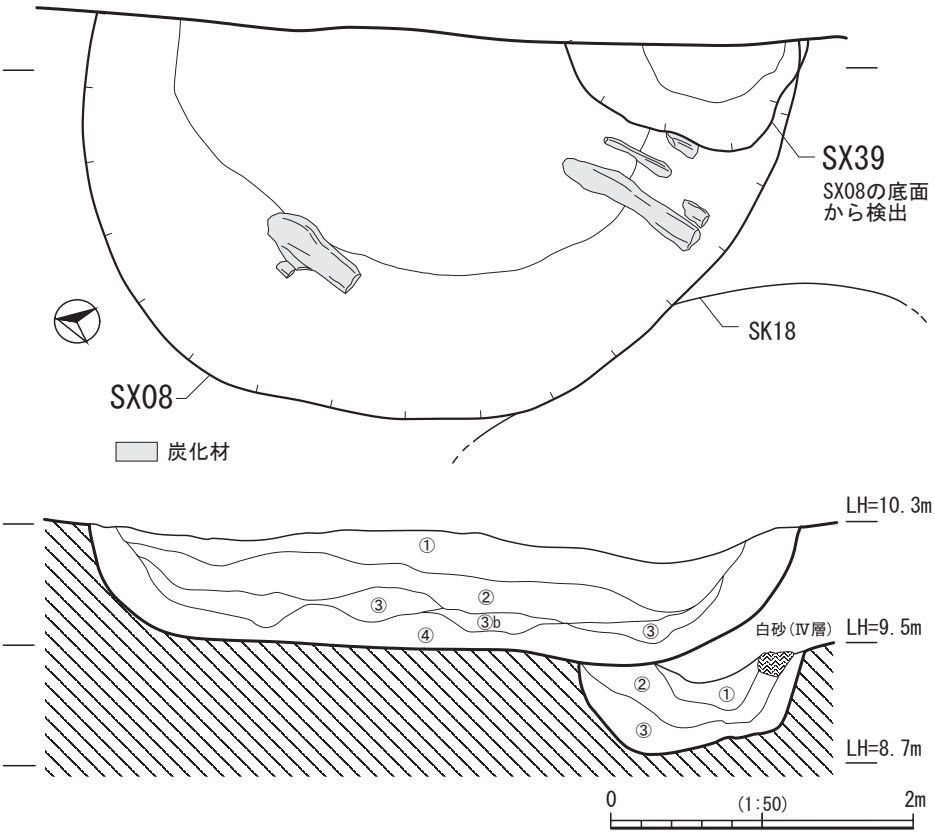
193～195はSX08から出土した石器である。193は中央部分が顕著に凹んでいる石皿である。

SX09（第48･49図，第14表）

B-100区で検出。直径約3.6×3.5mで深さ約0.8cmである。SX07に切られている。

検出面から出土した石皿・台石・磨敲石などは本遺跡を代表するような石器組成である。最下層は炭化材が並べられたような状態で出土した。

196～203は検出面で出土した石器である。196･197は円形状の磨敲石である。198・199は頁岩の礫である。側面が不定形に欠けており，敲打具として使用された可能性がある。200は石皿である。中央部が凹んでいる。



層名	SX08　土層説明
①	暗褐色 (Hue10YR3/3) 砂層。しまりはなく，貝などが混じる。白砂の層がレンズ状に混じる箇所がある。
②	浅黄橙色 (Hue10YR8/2 に近い) 砂層。
③	褐灰色 (Hue10YR4/1) 砂質層。焼けて灰色化したサンゴ礫が90％を占めている。砂と灰が混ざりややしまりがある。一度砕けて再度固まったような石灰石も入る。
③ b	褐灰色 (Hue10YR6/1) 灰層。焼けて灰色化したサンゴ礫が90％を占めている。
④	黒色砂質土層。やや粘性のあり，炭を多く検出。

層名	SX39　土層説明
①	灰黄褐色 (Hue10YR5/2) 砂層。礫入る。
②	黒褐色 (Hue10YR3/1) 砂質層。しまりあり。炭と砂の混ざった層。
③	黒色 (Hue10YR1.7/1) 砂質層。炭が入る。ややしまりあり。

SX08炭化材検出状況

第46図　SX08・39（1）

SX10・SK18（第50・51図，第14･15表）

C-99・100区で検出。SX10は直径約3.5×3.1ｍで深さ約0.9mである。SX10はSX08・14・19・SK18に切られ，SX42を切っている。

SK18は直径約3.4×3.0ｍで深さ約0.6mである。SX08・19・SK18に切られ，SX10を切っている。

204～213は縄文土器である。204はSK18より出土した口径17.4cm・底径6.8cm･高さ19.6cmの面縄西洞式の深鉢である。上部に突帯が貼り付けられているが，下段には突帯や区画沈線文は認められない。文様は中央に１本横沈線を描き，その後鋸歯風に見えるように斜線がラフに描かれている。210は口縁を肥厚させ，幅広短沈線を第１文様帯に施す。211・212は浅鉢である。

214は中央部が凹む石皿である。

SX11・12（第52図）

C-100区で検出。SX11はSX07に切られている。SX11と12の重複関係は不明瞭であり，不明である。

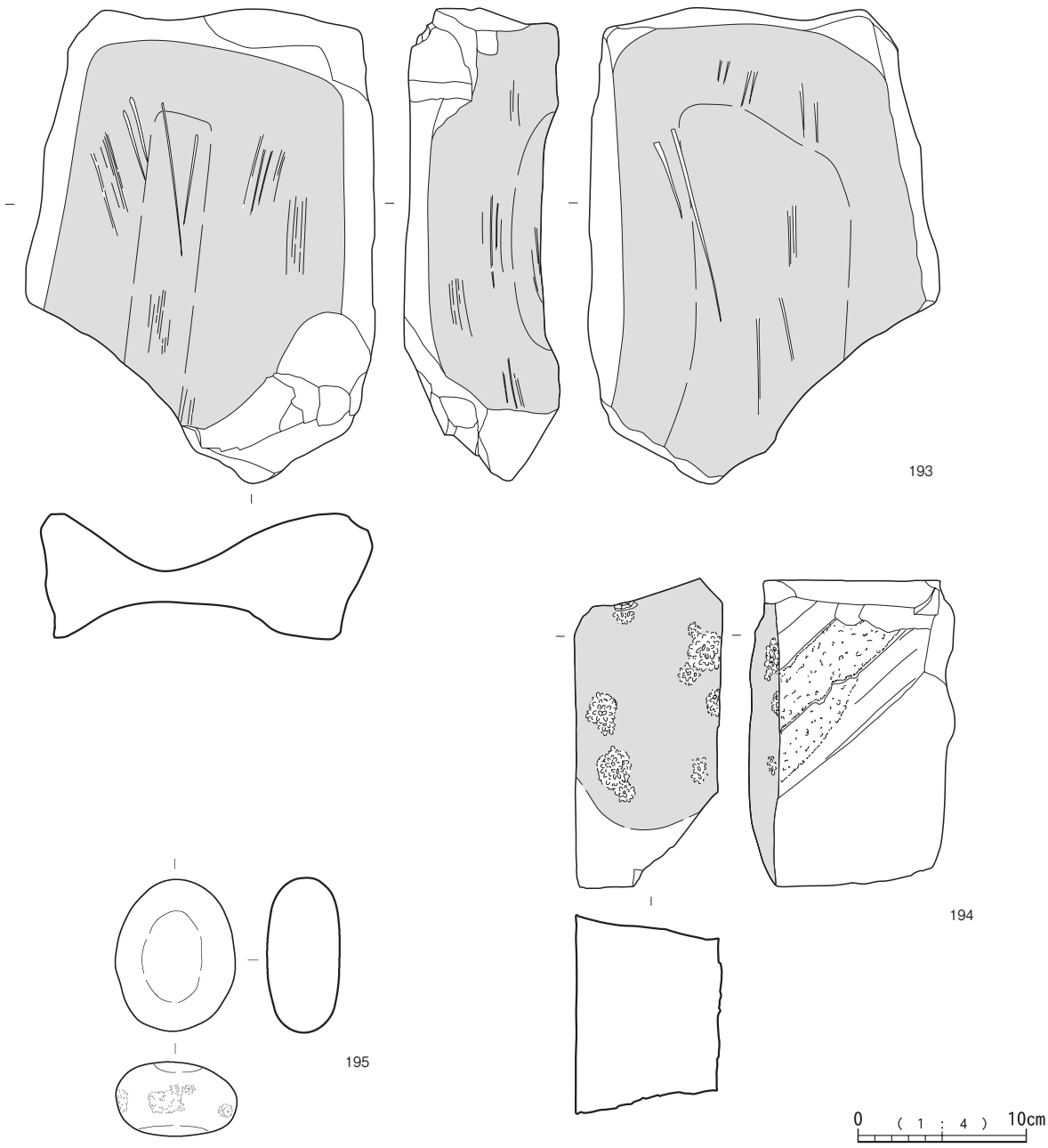
SX13・19（第53図，第16表）

SX13はC-99・100区で検出。直径約3.5×3.4ｍで深さ約0.8mである。SX13はSX19・20・40を切っている。

SX19は直径約4.3ｍで深さ約0.5mである。

215～218はSX19の①層から出土した遺物である。

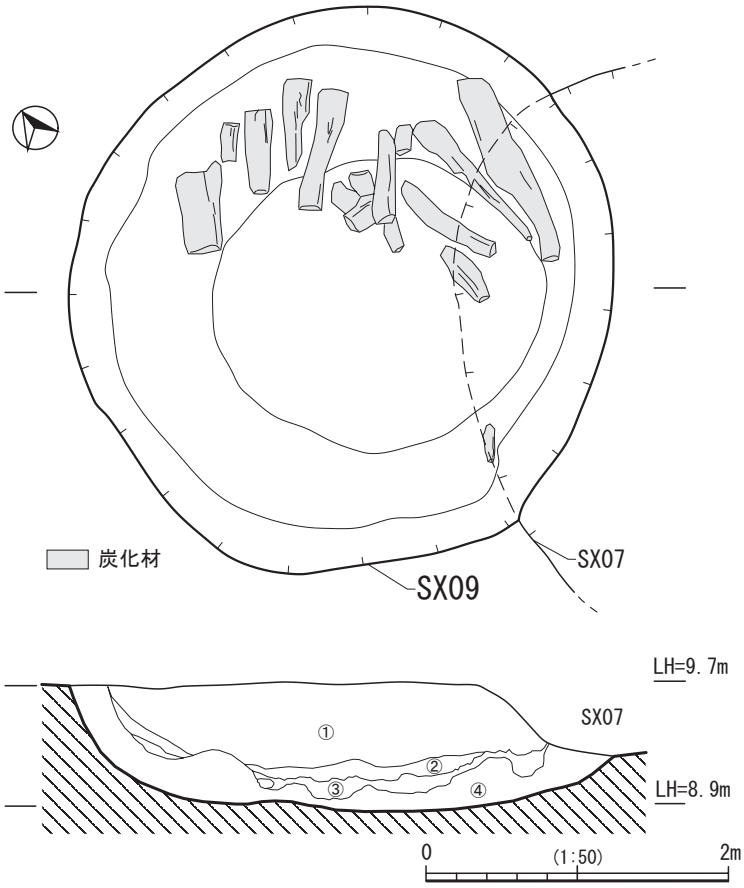
215～217は土器である。面縄西洞式の範疇の土器とみられる。218は貝製品である。スイジガイの先端を研磨し，尖らせている。



第47図　SX08・39（2）

第13表　SX出土遺物観察表（2）

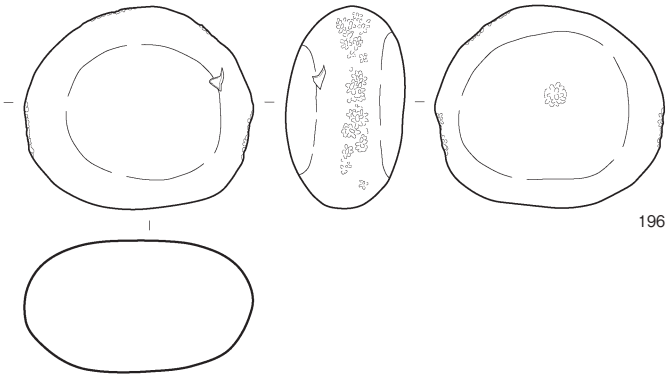
図番号	掲載番号	遺構名	区	層	種類	器種(最大長)	部位(最大幅)	口 / 底径(最大厚)	分類 L1	分類 L2	重量(g)	土質	備考
第 45 図	190	SX07	C100	-	縄文土器	深鉢	口縁	-	直口	丸状	-	砂質	横位鋸歯状沈線。突帯の上に浅い押し引き文。
	191	SX07	C100	-	縄文土器	浅鉢？	口縁	-	外反	-	-	泥質	口唇部に２段列点文。
	192	SX07	C100	-	縄文土器	-	底部	6.4	③	-	-	泥質	-
第 47 図	193	SX08	C99	-	石器	(26.7)	(20.2)	(8.5)	石皿	粗粒砂岩	4550	-	検出面出土。
	194	SX08	C99	-	石器	(18.4)	(12.2)	(8.7)	台石	細粒砂岩	2760	-	検出面出土。
	195	SX08	C99	-	石器	(9)	(7.1)	(4.4)	磨敲石	粗粒砂岩	394	-	検出面出土。

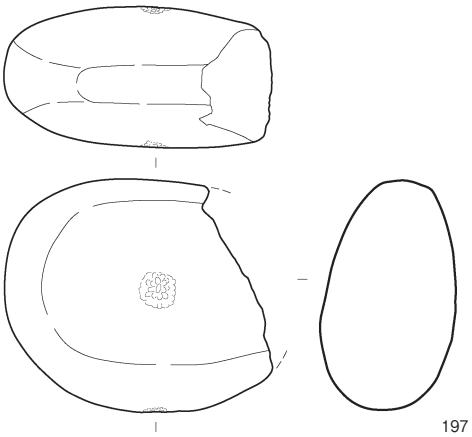


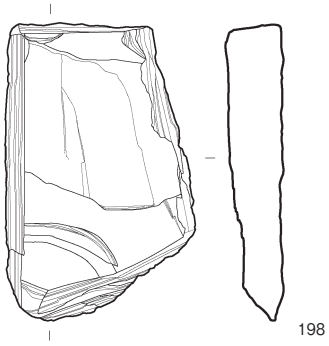
SX09検出状況

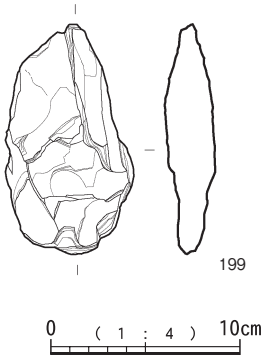
SX09炭化材検出状況

層名	SX09　土層説明
①	灰白色 (Hue10YRY8/2) 砂層。
②	黄灰色 (Hue2.5Y4/1) 砂混じり層。粘質・しまりがある。灰がたまった層と考える。
③	③層埋土に礫や石灰が再度固まったような石灰塊が多く混じる層。
④	黒色 (10YR1.7/1) 砂層。炭が多く入る。

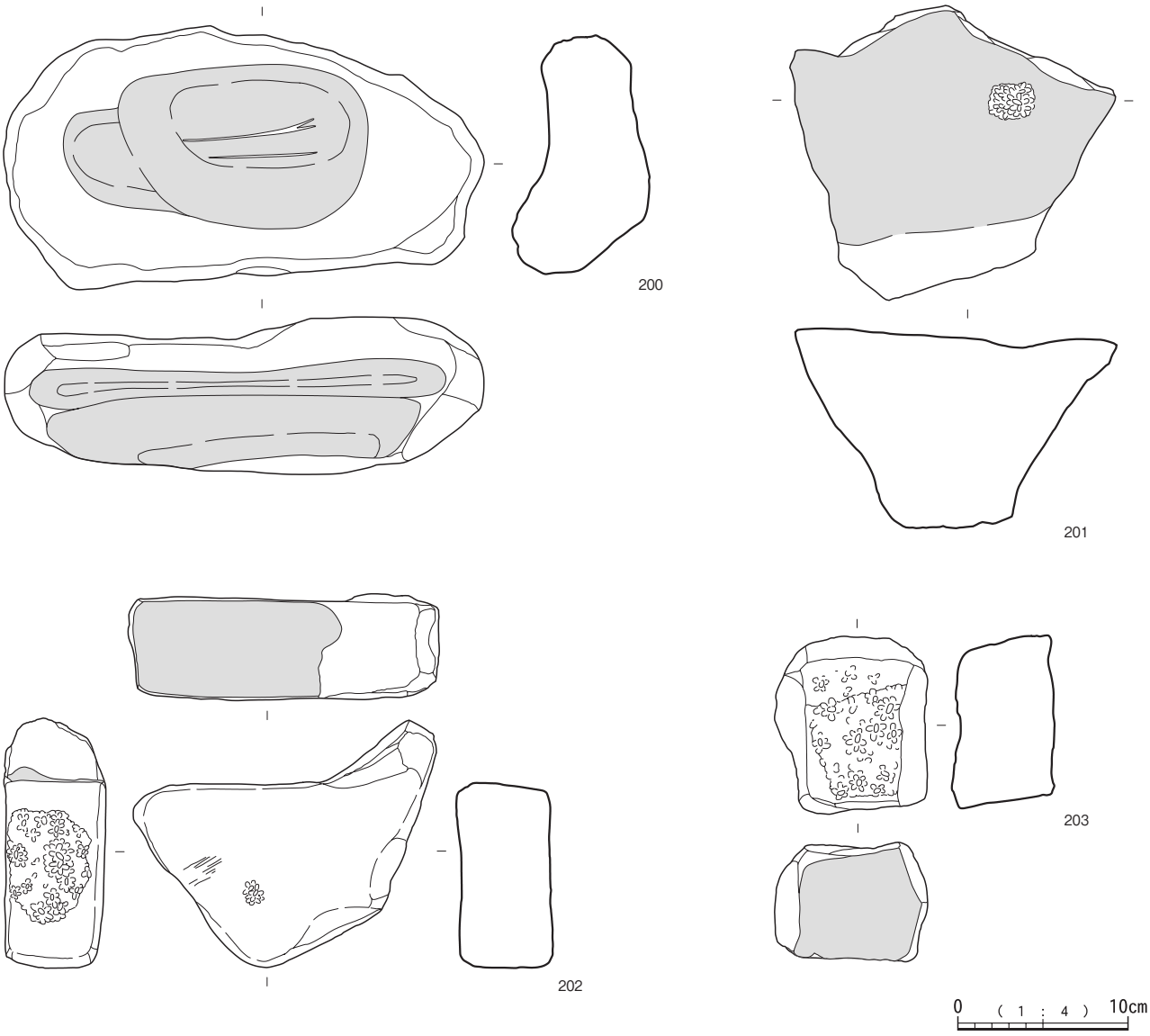








第48図　SX09（1）

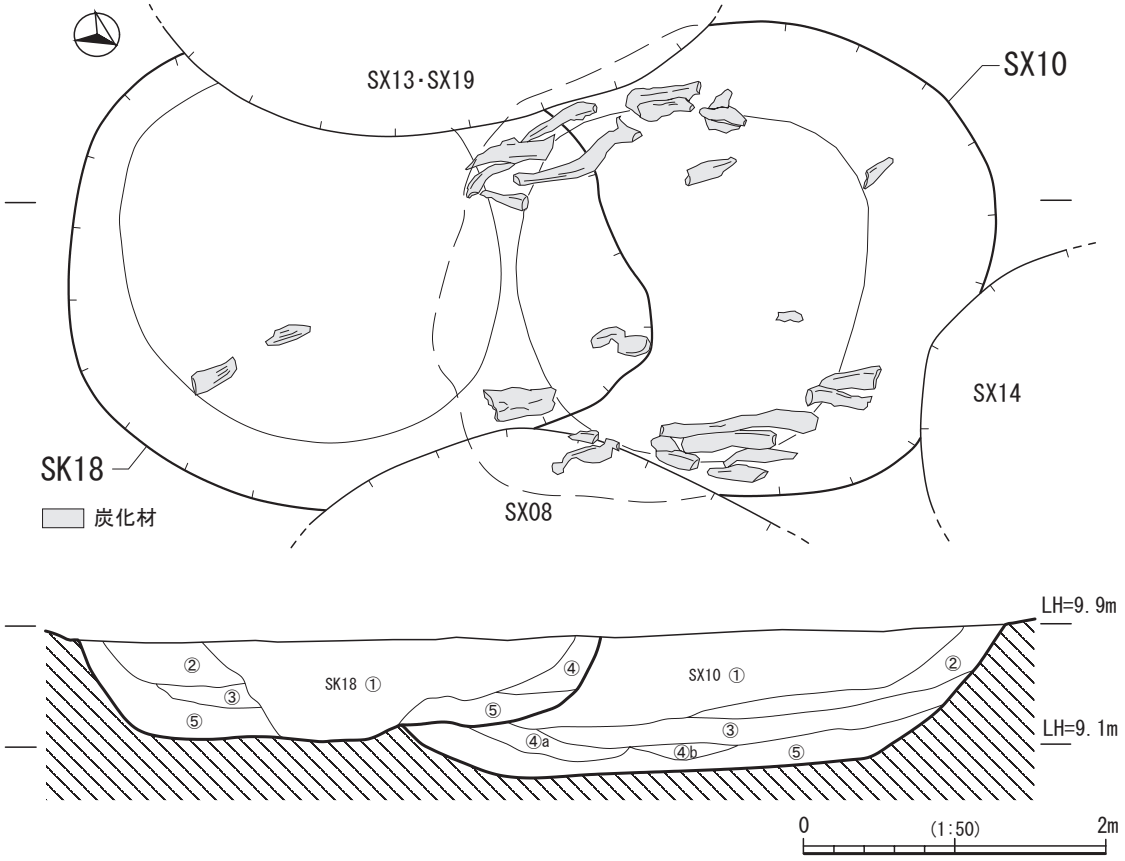


第49図　SX09（2）

第14表　SX出土遺物観察表（3）

図番号	掲載番号	遺構名	区	層	種類	器種(最大長)	部位(最大幅)	口 / 底径(最大厚)	分類 L1	分類 L2	重量(g)	土質	備考
第 48 図	196	SX09	B100	-	石器	10.7	12.1	6.9	磨敲石	粗粒砂岩	1198	-	-
	197	SX09	B100	-	石器	12.3	14.2	7.4	磨敲石	粗粒砂岩	1827	-	ｹｶﾞﾆｲｼ的特徴。
	198	SX09	B100	-	石器？	15.7	10	3	礫	頁岩	591	-	敲打具のなれの果てか。
	199	SX09	B100	-	石器？	12.1	6.8	2.5	礫	頁岩	214	-	敲打具のなれの果てか。
第 49 図	200	SX09	B100	-	石器	15.5	28.1	8	石皿	細粒砂岩	4760	-	-
	201	SX09	B100	-	石器	19.1	17.4	11.6	石皿	細粒砂岩	3450	-	-
	202	SX09	B100	-	石器	14.6	18.8	5.5	台石	細粒砂岩	1609	-	石皿からの転用か。
	203	SX09	B100	-	石器	10.1	8.9	7	敲石	粗粒砂岩	911	-	台石的用途も考えられる。
第 51 図	204	SK18・SX13	100C	確認ﾄﾚﾝﾁ	土器	深鉢	口～底部	口 17.4/底 6.8/高 19.6	内湾	丸状	-	泥質	下部区画凸帯・沈線なし

SX08・SX09出土石器



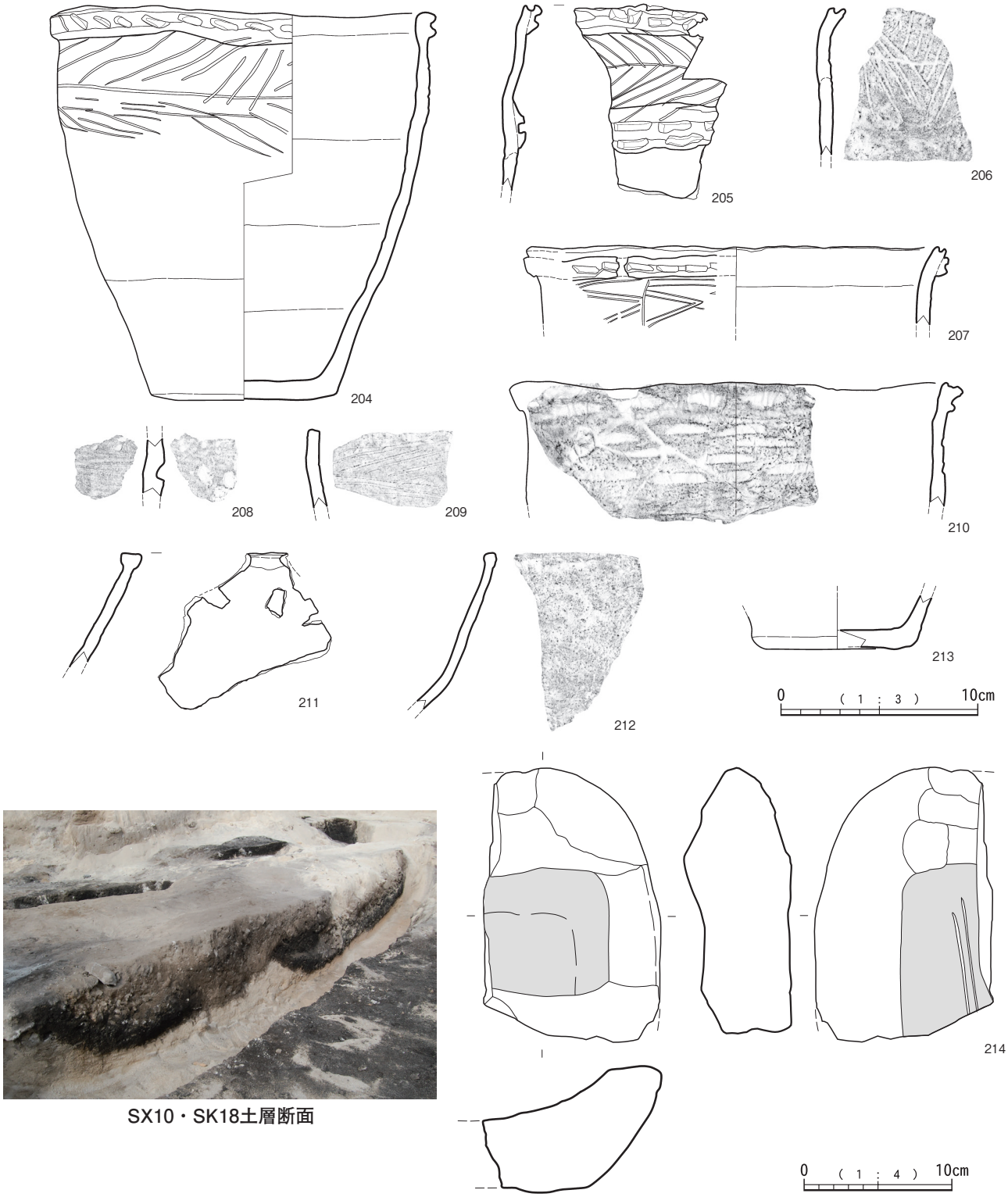
層名	SK18　土層説明
①	にぶい黄褐色 (Hue10YR4/3) 砂層。小礫，貝などが混入する。
②	①層と類似するが，やや土色が異なる。
③	褐灰色 (Hue10YR4/1) 層。白灰入る。
④	黒褐色 (10YR5/1) 砂層。焼けた礫が入る層。
⑤	黒色 (Hue10YR2/1) 砂層。炭が入る。

層名	SX10　土層説明
①	白色 (Hue10YR ～ 2.5Y8/3) 砂層。
②	灰黄褐色 (Hue10YR6 ～ 4/2) 砂層。
③	黒褐色 (Hue10YR3/1) 砂層。礫多し。
④ a	褐灰色 (10YR5/1) 灰層。石灰岩が一度くだけて再度固まったような真っ白な石灰塊が多く入る層。
④ b	褐灰色 (10YR4/1) 灰層。石灰岩が一度くだけて再度固まったような真っ白な石灰塊が多く入る層。
⑤	黒色 (Hue10YR1.7/1) 砂質層。炭が多く入る。

第50図　SX10・SK18（1）

第15表　SX出土遺物観察表（4）

図番号	掲載番号	遺構名	区	層	種類	器種	部位	口 / 底径	分類 L1	分類 L2	重量 (g)	土質	備考
第 51 図	205	SK18	C99	-	土器	深鉢	口縁	-	外反	丸状	-	泥質	口唇部にも刺突押引文。
	206	SK18	C99	-	土器	深鉢	口縁	-	内湾	方形状	-	泥質	荒い斜沈線のみで構成。
	207	SK18	C99	-	土器	深鉢	口縁	20.6	内湾	方形状	-	砂質	縦位区画線後横鋸歯風細沈線。口唇部にも刻目。
	208	SK18	C99・100	-	室川下層Ⅱ類 B	-	胴部	-	-	-	-	砂質	外面に大きな丸い刺突文＋小型列点文，内面は小型刺突文。
	209	SK18	CD99	確認トレンチ	土器	深鉢	口縁	-	内湾	方形状	-	砂質	横位沈線で区画。横斜沈線。
	210	SK18	C99	-	土器	深鉢	口縁	21.1	内湾	丸状	-	泥質	-
	211	SK18	CD99	確認トレンチ	土器	浅鉢	口縁	-	外反	-	-	泥質	-
	212	SK18	C99	-	土器	浅鉢	口縁	-	外反	方形状	-	泥質	口唇部に薄く粘土を貼り付け整形している。
	213	SK18	C99	-	土器	深鉢	底部	6.5	②	-	-	泥質	-
	214	SK18	C99	-	石器	(18.5)	(12)	(7.8)	石皿	細粒砂岩	2250	-	-



SX10・SK18土層断面

第51図　SX10・SK18（2）

SX14・15・16（第54図，第16表）

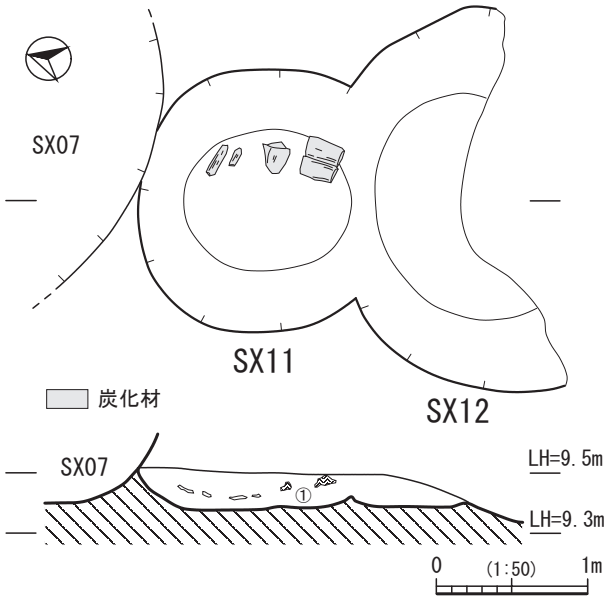
B・C-99区付近で検出。SX14・16がSX15を切っている。

SX14は直径約2.9×2.9mの円形で深さ約0.9mである。SX14はSX７・10・15・42を切っている。

SX15は直径3m前後の楕円形状であったと推察される。

SX16は直径4m前後で深さ約1mである。アスファルト道路により半分ほどの検出である。SX15・17を切っている。

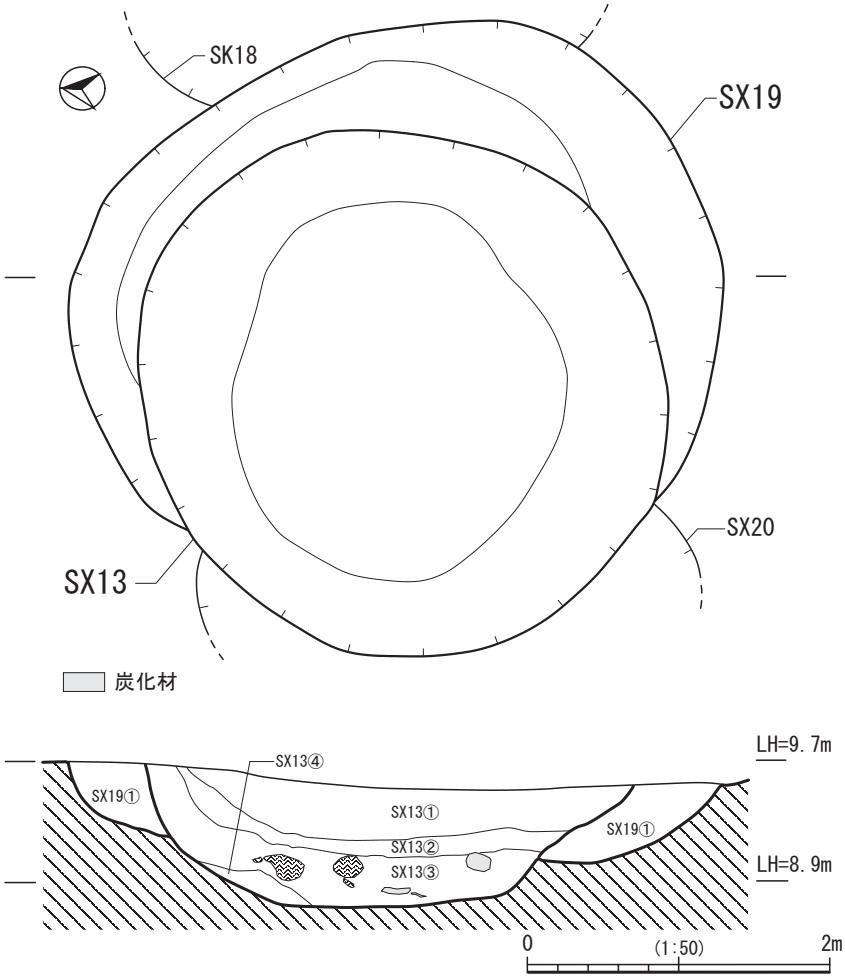
219・220は検出時に出土した石器と鉄製品である。鉄製品は断面が方形であることから釘状の製品と推定される。上層からの落ち込みの可能性がある。

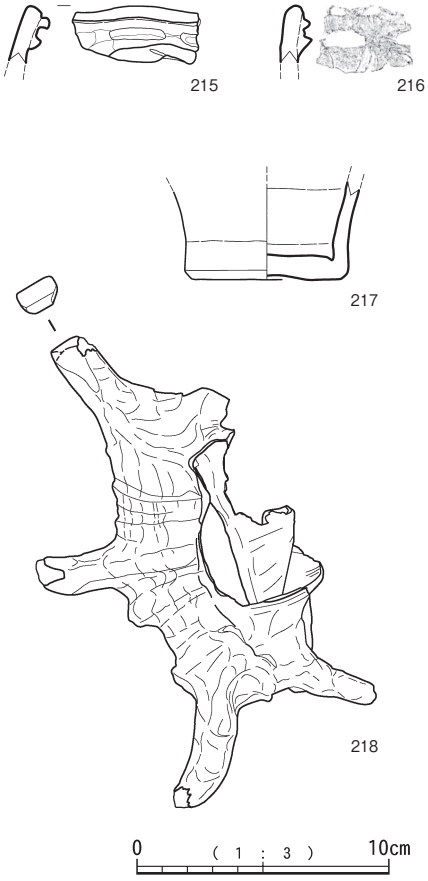


SX11･12検出（左上）、周辺遺構半裁状況

層名	SX11・12　土層説明
①	黒色 (Hue10YR1.7/1) 砂層。11・12 の埋土は同じで切りあい関係は不明であった。石灰が再度固まったような塊がみられる。

第52図　SX11・12

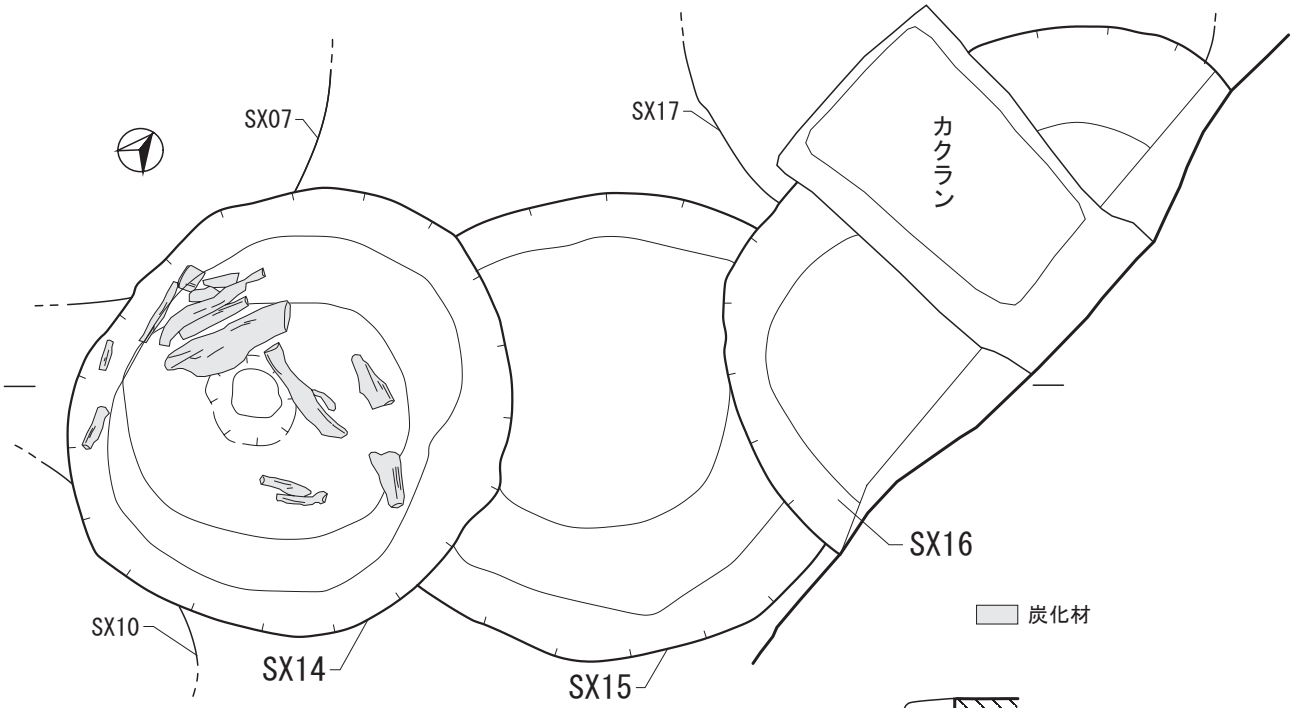




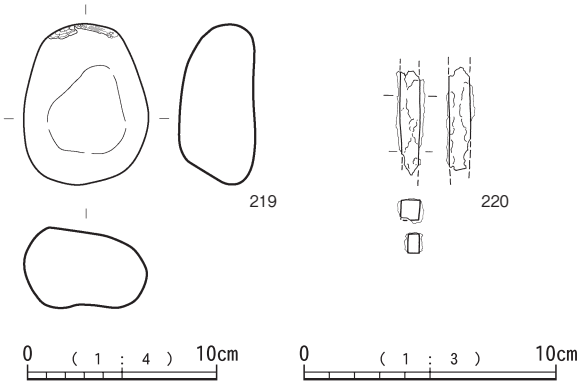
層名	SX13　土層説明
①	にぶい黄褐色 (Hue10YR4/3) 砂層。
②	黒褐色 (Hue7.5Y3/2) 砂層。焼けた炭色化したサンゴ礫が入る。また，①層の砂が小ブロック状ででまだらに入る。①層と③層の漸移層である。
③	黒色 (Hue10Y2/1) 土層。土は砂･灰･炭･石灰が混ざった印象で，しまりのある粘質のある土。大型木炭や石灰岩が一度くだけて固まったような石灰塊が多く見られる。
④	黒色 (Hue10YR2/1) 砂層。

層名	SX19　土層説明
①	黒褐色 (Hue10YR3/1) 砂層。

第53図　SX13・19



SX14･15･16土層堆積状況

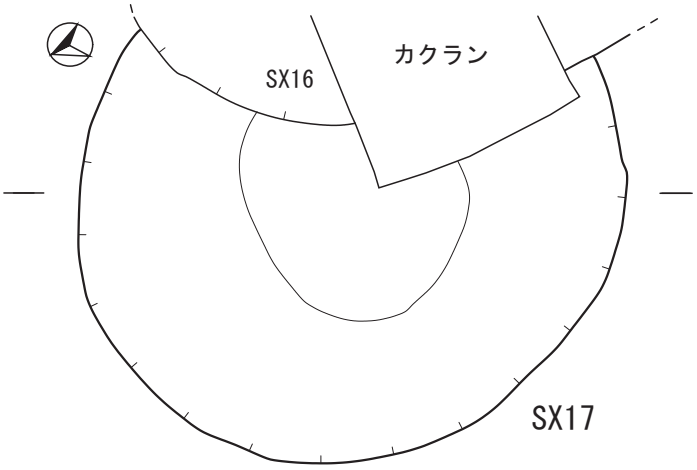


層名	SX14　土層説明
①	灰黄色 (Hue2.5YR6/2) 砂層。
②	黄灰色～黒褐色 (Hue2.5Y4/1 ～ Hue2.5Y3/1) 砂層。灰と砂が混ざった層。やや粘性があり。
③ a	黒褐色 (Hue2.5Y3/1) 砂層。やや粘性あり。礫はほとんど入らないが，石灰塊の小さなもの (1 ㎝程度) が入る。
③ b	黒色 (Hue10YR2/1) 砂層。やや粘性があり。礫はほとんど入らないが，石灰塊の小さなもの (1 ㎝程度) が入る。
④	黒色砂層。木炭が多く検出される。

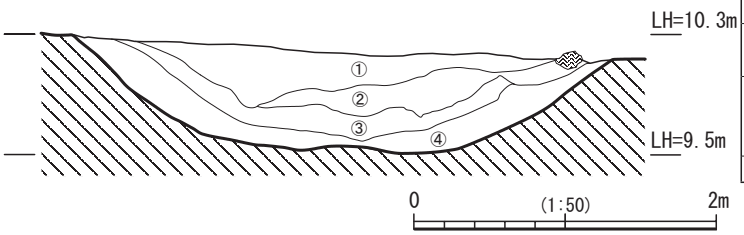
層名	SX15　土層説明
①	白砂層。
②	白砂層。熱作用で灰色化したサンゴ礫が集中する。
③ a	褐灰色 (Hue10YR6/1) 砂質層。灰と砂の混ざった層。やや粘性あり。灰色化した珊瑚礫や真っ白な石灰塊が混入する。
③ b	黒褐色 (Hue10YR3/1) 砂質層。灰と砂の混ざった層。やや粘性があり。灰色化したサンゴ礫や真っ白な石灰塊が混入。
③ c	黄灰色 (Hue2.5Y4/1) 砂質層。石灰塊の粒が混入する。灰と砂の混じった層。
③ d	黒褐色 (Hue2.5Y3/1) 砂質層。灰と砂の混ざった層。やや粘性がある。灰色化したサンゴ礫や真っ白な石灰塊が混入。
④	黒褐色砂層。礫は入らないが炭が混入する。

層名	SX16　土層説明
①	白砂層。
②	灰黄褐色 (10YR4/2) 砂層。灰色化したサンゴ礫が多く入る。
③	褐灰色 (10YR4/1) 層。灰と砂が混ざった層。粘性あり。砕けた炭灰が混じる。
④	黒色 (10YR1.7/1) 砂層。炭が混入。

第54図　SX14・15・16

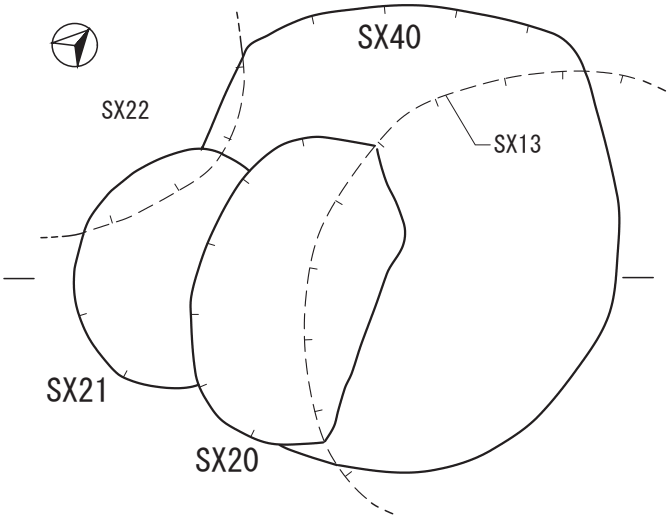


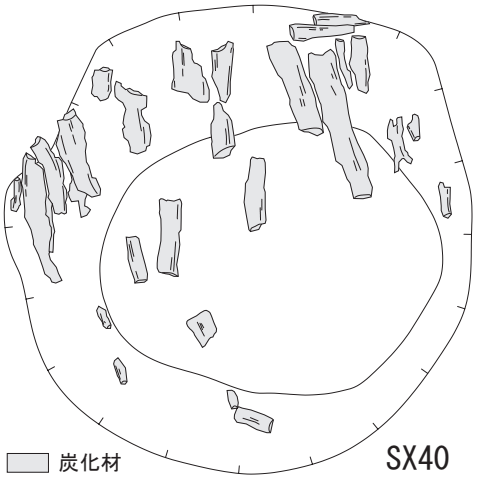
SX17土層堆積状況



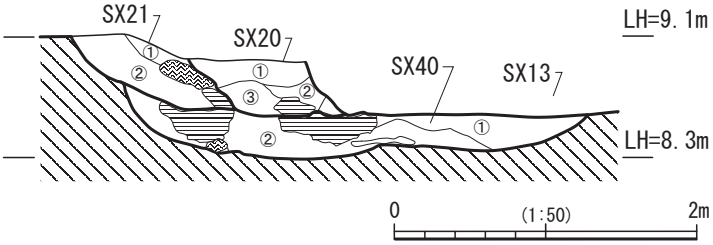
層名	SX17　土層説明
①	にぶい黄橙色 (Hue10YR7/2) 砂層。
②	暗灰黄色 (Hue2.5Y5/2) 砂層。被熱して灰色化したサンゴ礫と白砂が混じる。
③	黒褐色～黄灰色 (Hue2.5YR2/1 ～ Hue2.5Y4/1) 砂層。礫，灰，砂が混じる。灰色化したサンゴ礫や一度くだけて固まったような真っ白な石灰塊が混入。
④	黒色 (Hue10YR2/1) 砂層。炭が検出される。

第55図　SX17





SX40最下層炭化材検出状況



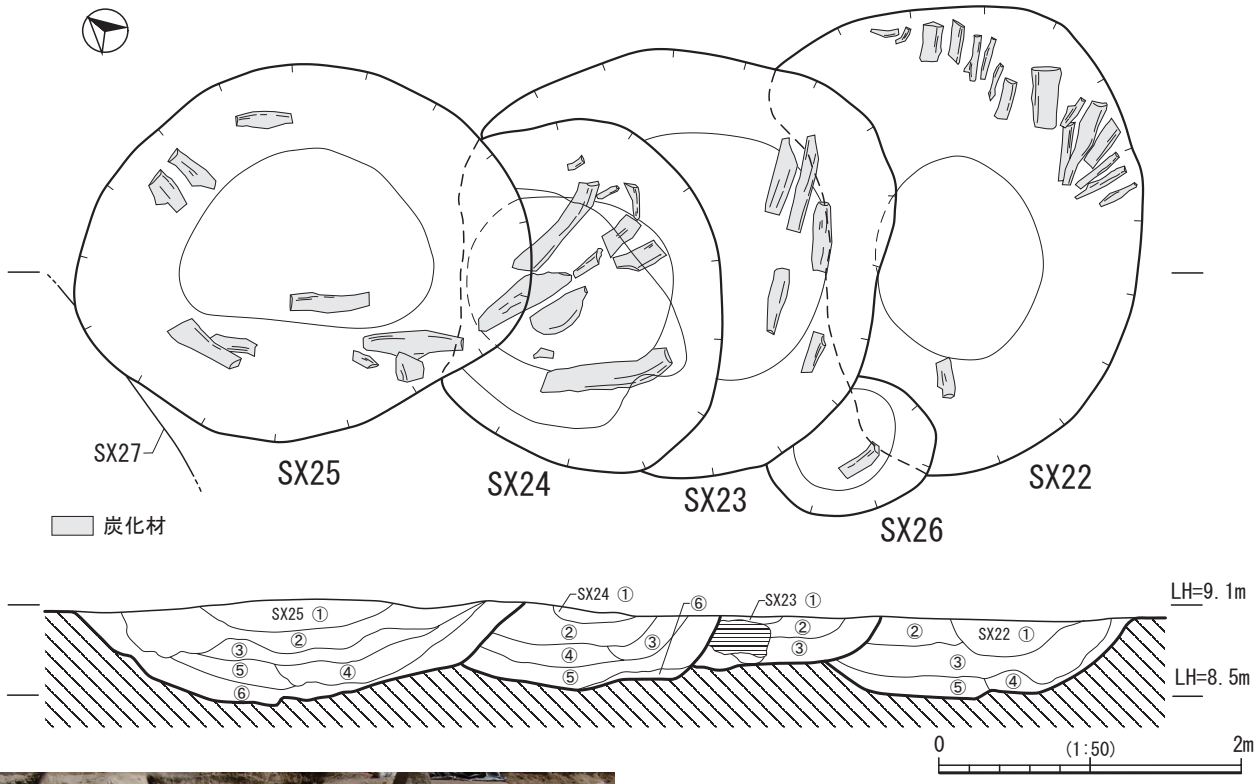
SX40炭化材検出状況

層名	SX21　土層説明
①	褐色 (Hue10YR4/1) 砂質層。灰と砂の堆積層。
②	黒色 (Hue1.7/1) 砂質層。炭が入る。

層名	SX20　土層説明
①	灰黄褐色 (Hue10YR5/2) 砂層。礫が多く混じる。
②	褐灰色砂質層。灰と砂の混ざり層。礫が入る。
③	黒色 (Hue10YR1.7/1) 砂質層。ややしまりあり。炭が入る。

層名	SX40　土層説明
①	にぶい黄橙色 (Hue10YR7/3) 砂層。炭小粒が入る。
②	黒色 (Hue10YR1.7/1) 砂質層。炭が入る。

第56図　SX20・21・40



SX22～25土層堆積状況

層名	SX25　土層説明
①	灰黄褐色 (Hue10YR4/2) 砂層。灰色化した石灰礫混入。
②	にぶい黄橙色 (10YR7/2) 砂層。1 ㎝大の炭がわずかに混入。
③	にぶい黄橙色 (Hue10YR4/3) 砂層。被熱した石灰礫層。
④	黒色 (Hue10YR1.7/1) 砂層。ややしまりあり。礫が入る。
⑤	黒褐色 (Hue2.5YR3/1) 砂質層。灰と砂の堆積層。
⑥	黒褐色 (Hue10YR2/2) 砂層。ややしまりあり。灰が多く入る。

層名	SX22　土層説明
①	灰白 (Hue10YR8/2) 砂層。
②	暗褐色 (Hue10YR3/3) 砂層。石灰礫入る。
③	灰白色 (Hue10YR7/1) 砂層。しまりあり。砂・灰・石灰塊の堆積層。
④	黒褐色砂質層。しまりややあり。
⑤	褐灰色 (Hue10YR6/1) 層。③層に似ているが礫が少ない。

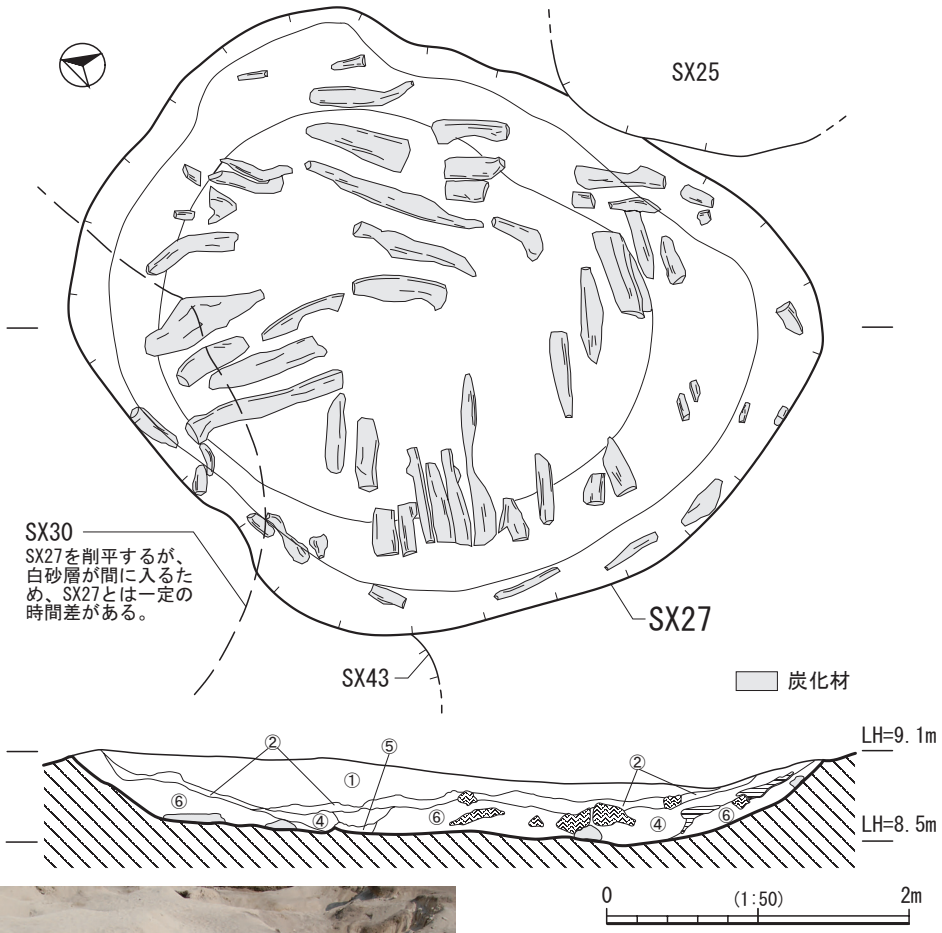
層名	SX23　土層説明
①	白砂層。
②	黒褐色 (Hue10YR3/1) 砂質層。ややしまりあり。灰と砂の堆積層。焼けた石灰礫入る。
③	黒色 (Hue10YR1.7/1) 砂質層。炭が多く混入。しまりあり。

層名	SX24　土層説明
①	黒色砂質層。ややしまりあり。
②	黒色 (Hue10YR1.7/1) 砂質層。ややしまりあり。炭・礫入る。
③	褐灰色 (Hue10YR4/1) 砂質層。灰と砂の堆積層。礫が入る。
④	黒褐色 (Hue7.5YR3/1) 砂質土層。ややしまりあり。石灰礫(白)が多く入る (80%以上)。
⑤	黒色 (Hue10YR1.7/1) 砂層。炭が混入。しまりややあり。
⑥	黒褐色砂層。ややしまりあり。

第57図　SX22・23・24・25・26

第16表　SX出土遺物観察表（5）

図番号	掲載番号	遺構名	区	層	種類	器種(最大長)	部位(最大幅)	口 / 底径(最大厚)	分類 L1	分類 L2	重量(g)	土質	備考
第 53 図	215	SX19	C100	①	土器	鉢	口縁	-	外反	丸状	-	泥質	鋸歯状
	216	SX19	C100	①	土器	鉢	口縁	-	外反	舌状	-	砂質	鋸歯状・凸帯下から施文
	217	SX19	C100	①	土器	鉢	底部	5.9	粘土貼付	上げ底	-	泥質	-
	218	SX19	C100	①	貝製品	製品	-	-	スイジガイ	-	-	-	先端を尖らせている
第 54 図	219	SX14 ～ 16	C99	検出面	石器	(8.5)	(6.6)	(4.2)	不明石製品	変成岩 23	344	-	石灰岩系からの変成岩
	220	SX14 ～ 16	C99	検出面	鉄製品	釘	-	-	-	-	-	-	-



SX27土層堆積、炭化材検出状況

層名	SX27　土層説明
①	にぶい黄橙色 (Hue10YR7/3) 砂層。
②	灰黄褐色 (Hue10YR) 砂質層。ややしまりのある灰と砂の混じった層。礫が多く入る (50%程度)。
③	褐灰色 (Hue10YR5/1) 土層。灰のたまった層。しまりあり。
④	褐灰色 (Hue10YR4/1) 砂質層。灰と砂の混ざった層。しまりあり。焼けた石灰岩や一度くだけて再度固まったような石灰塊が入る。
⑤	褐灰色 (Hue7.5YR5/1) 砂層。焼けた砂が入る。
⑥	黒色 (Hue10YR2/1) 砂質層。ややしまりがある。木灰が多く検出される層。

第58図　SX27

SX17（第55図）

B-99区で検出。直径約3.6mの円形で深さ約0.6mである。SX16に切られている。

SX20・21・40（第56図）

C-100区で検出。SX20・21は直径約2m前後の円形であったと考えられる。SX21・20・13は床面のレベルがほぼ同じのため，一時期に連続して作られた可能性が高い。

SX40は直径約3m前後の円形であったと考えられる。SX13・20・21・22に切られている。最下層から木炭が一定方向に並んだような状態で検出している。

SX22～26（第57図）

C-100区付近で検出。古22＜26＜23＜24＜25の順で重複している。いずれも直径２～３mほどで，床面に炭化材が出土している。

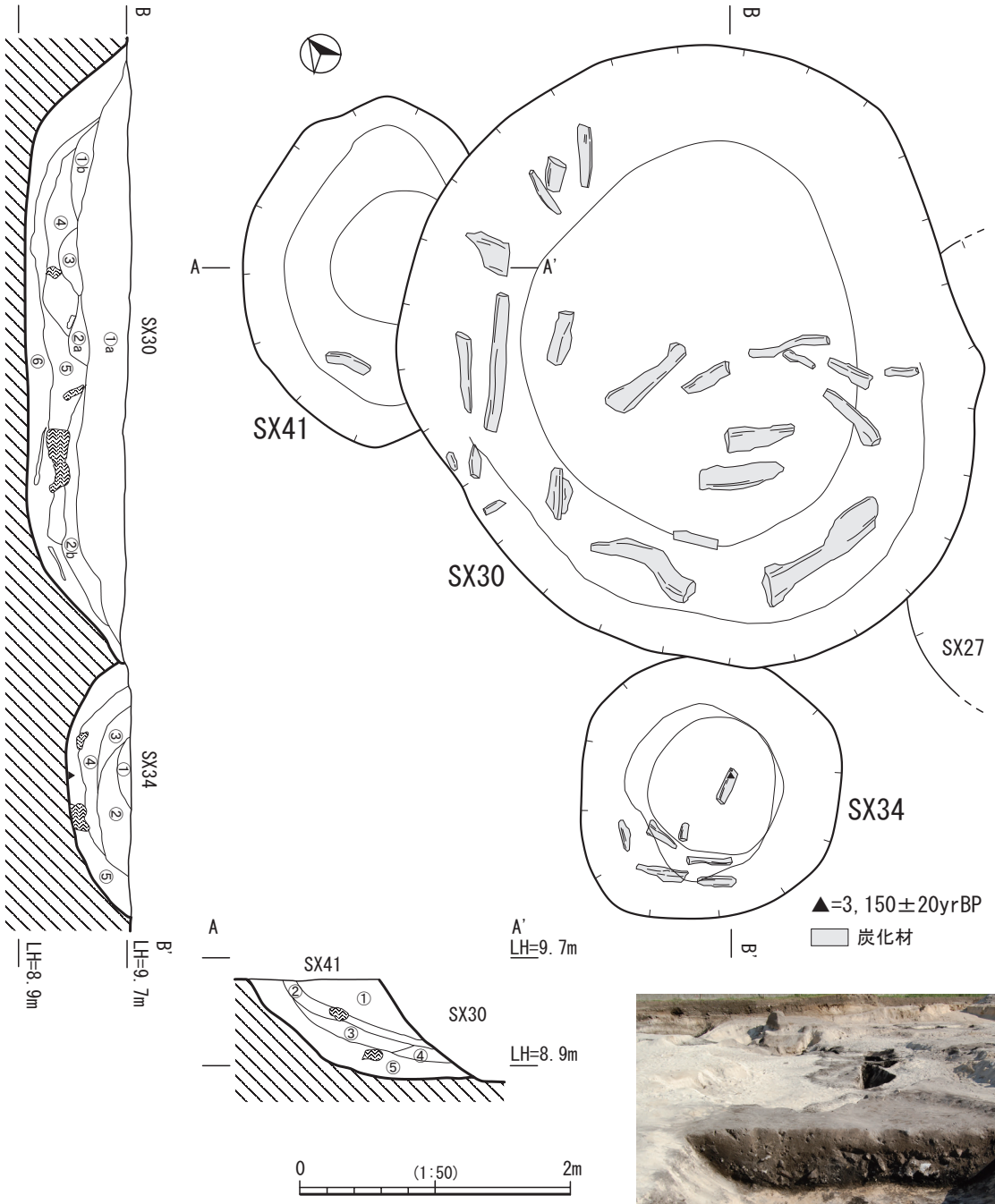
SX27（第58図）

C-101区で検出。直径約4.5×3.8mの楕円形状で深さ約0.5mである。SX43を切り，SX25に切られている。後述するSX30とは検出した高さが異なり，間に白砂が入っていた。

古SX27＜新SX30であるが，白砂が堆積する一定の時間差があると考えられる。床面には炭化材が敷き詰められたように遺構内に広がっており，倒木などではなく，意図的に敷き詰めたものと考えられる。

SX30・34・41（第59・60図，第17表）

B・C-101区付近で検出。



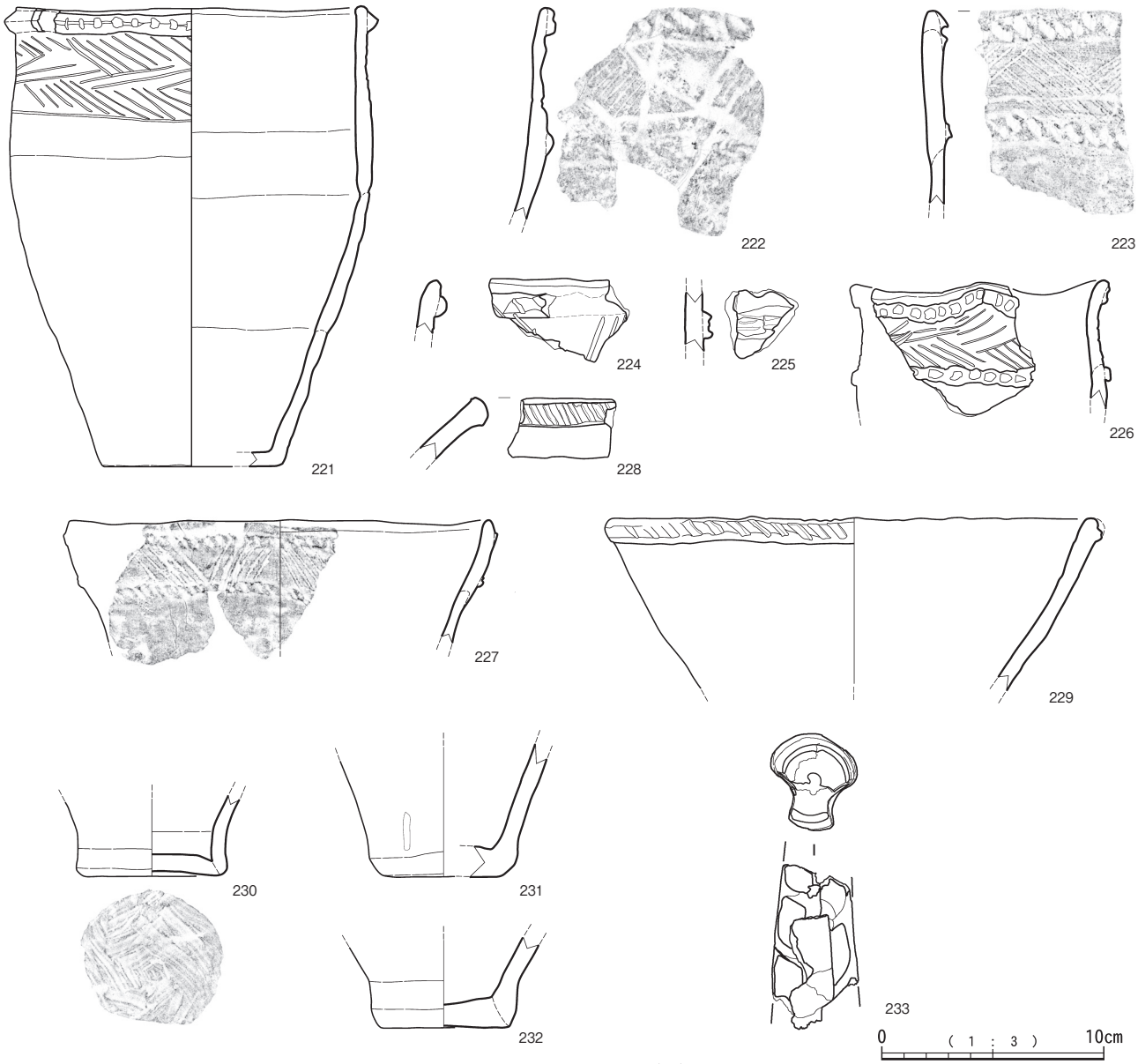
SX30土層堆積状況（写真右手はSX34）

層名	SX30　土層説明
①a	灰黄褐色 (Hue10YR4/2) 砂層。土器が多く出土する。
①b	灰黄褐色 (Hue10YR4/2) 砂層。
②a	黒褐色 (Hue2.5Y3/1) 砂質層。灰と砂の混じった層。ややしまりがある。礫が多く混入する。
②b	黒褐色 (Hue2.5Y3/2) 砂質層。灰と砂の混じった層。ややしまりがある。②a層より礫が多く混入する。
③	黒褐色 (10YR3/2) 砂層。①層と比べやや粘性がある。
④	褐灰色 (Hue10Y4/1) 砂質層。灰・白砂・炭の混じった層。ややしまりあり。
⑤	暗褐色 (Hue10YR3/1) 砂質層。ややしまりあり。1～2㎝程度の被熱した石灰礫，石灰岩が多く入る。
⑥	黒褐色 (Hue10YR2/1) 砂層。木炭片が多く入るが礫などは見られない。

層名	SX34　土層説明
①	黒色 (Hue10YR1.7/1) 土層。
②	黒褐色 (Hue7.5YR3/1) 砂質層。礫がほとんどを占める。
③	黒褐色砂質層。ややしまりあり。礫はほとんど入らない。
④	黄灰色土層。しまりあり。砂と灰の混ざった層。
⑤	黒色 (Hue10YR1.7/1) 砂層。炭が入る。

層名	SX41　土層説明
①	にぶい黄橙色 (Hue10YR7/3) 砂層。
②	暗褐色 (Hue10YR3/2) 砂層。焼けた石灰礫が入る。
③	黒色 (Hue10YR2/1) 砂質層。焼けた石灰礫が多く入る。
④	褐灰色 (Hue10YR4/1) 砂質層。灰と砂の混じった層。しまりあり。石灰礫が入る。
⑤	黒色 (Hue10YR1.7/1) 砂質層。やや粘性あり，炭が入る。

第59図　SX30・34・41（1）



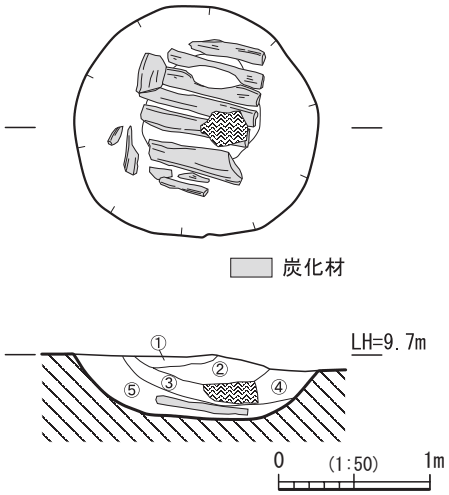
第60図　SX30・34・41（2）

第17表　SX出土遺物観察表（6）

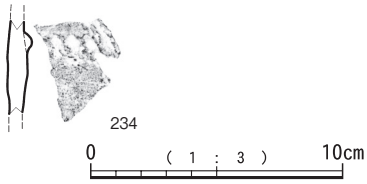
図番号	掲載番号	遺構名	区	層	種類	器種(最大長)	部位(最大幅)	口 / 底径(最大厚)	分類 L1	分類 L2	重量(g)	土質	備考
第 60 図	221	SX30	C101	① a	土器	深鉢	口～底部	口 15.8/ 底 8/ 高 20.6	内湾	方形状	-	砂質	横鋸歯状。ほぼ完形。
	222	SX30	C101	① a	土器	深鉢	口縁	-	外反	丸状	-	泥質	縦鋸歯状。マメツ。
	223	SX30	C101	①	土器	深鉢	口縁	-	直口	丸状	-	砂質	-
	224	SX30	C101	① a	土器	深鉢	口縁	-	外反	丸状	-	泥質	縦鋸歯状・幅広沈線
	225	SX30	C101	⑥	土器		胴部	-	-	-	-	泥質	-
	226	SX30	C101	①	土器	壺	口縁	-	内湾	丸状	-	泥質	ラフな施文
	227	SX30	C101	① a	土器	深鉢？	口縁	18.8	外反	丸状	-	砂質	施文帯狭い
	228	SX30	C101	①	土器	浅鉢	口縁	-	外反	丸状	-	泥質	-
	229	SX30	C101	①	土器	浅鉢	口縁	20.4	外反	丸状	-	泥質	-
	230	SX30	C101	②	土器	-	底部	6	①	-	-	泥質	-
	231	SX30	C101	① a	土器	-	底部	4.5	③	-	-	泥質	外面に沈線有
	232	SX30	C101	①	土器	-	底部	5.5	②	-	-	泥質	-
	233	SX30	C101	① a	貝製品	-	-	-	リュウキュウタケ	-	-	-	縦方向に 2 条の溝が走る

SX10　面縄西洞式土器（掲載No204）

SX30　面縄西洞式土器（掲載No221）

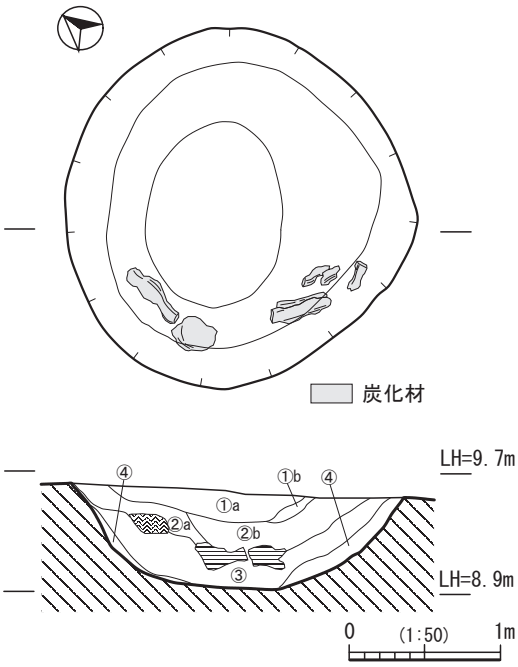


SX31炭化材検出状況

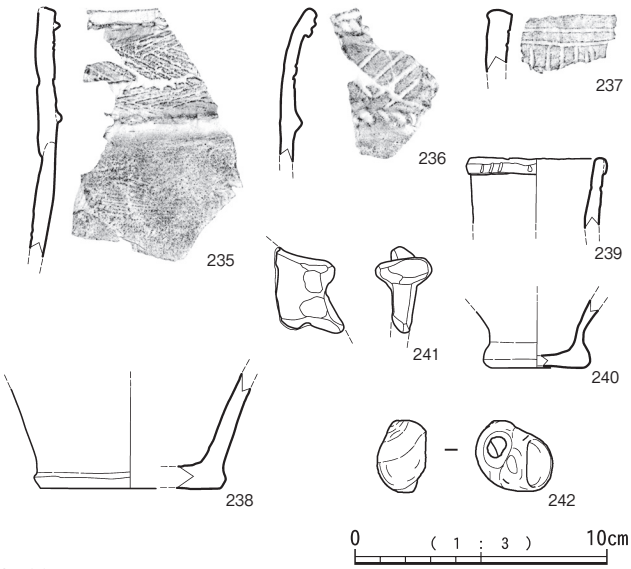


層名	SX31　土層説明
①	灰黄褐色 (Hue10YR4/2) 砂層。
②	灰黄褐色 (Hue10YR4/2) 砂層。やや暗い。焼けた珊瑚礫層。
③	黒褐色 (Hue10YR3/2) 砂質層。ややしまりあり。小さな礫・石灰岩礫が混入。
④	黄灰色 (Hue2.5Y4/1) 砂質層。灰と砂が混ざった層。しまりあり。小さな石灰礫・石灰岩礫が混入。
⑤	黒色 (Hue10YR1.7/1) 砂層。木炭が並んでいた。

第61図　SX31

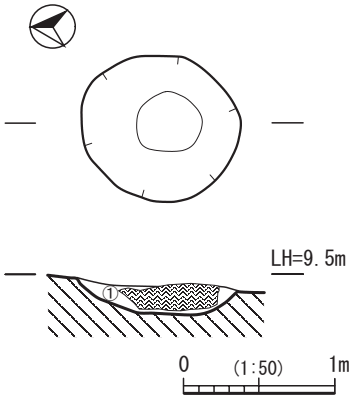


SX32土層堆積状況

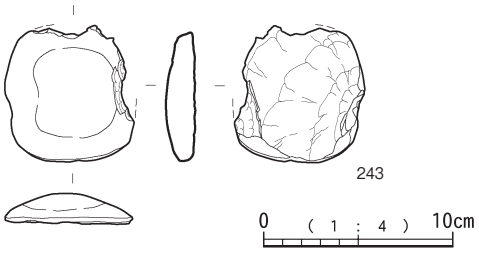


層名	SX32　土層説明
① a	暗褐色 (Hue10YR3/3) 砂層。しまりなし。貝や石灰礫が多く入る。
① b	灰黄褐色 (10YR6/2) 砂層。
② a	黒褐色 (Hue10Y3/1) 土層。灰と砂の堆積した層。しまりあり。被熱で灰化した石灰礫が入る。
② b	褐灰色 (10YR4/1) 砂質層。粘性ややあり。灰と白砂が交互に堆積した層。しまりややあり。被熱で灰色化した石灰礫が混入。
③	黒色 (Hue10YR1.7/1) 砂層。被熱で灰色化した石灰礫や灰，炭が混じる。しまりややあり。
④	黒色 (Hue10YR1.7/1) 砂層。白砂塊が斑状に入る。

第62図　SX32



層名	SX33　土層説明
①	にぶい黄褐色 (Hue10YR4/2) 砂層。



第63図　SX33

SX30は直径約4.5×4.3mの円形で深さ約0.7mである。SX34・41を切っている。

SX41の上部，①層は白砂が積もっており，SX30の壁面清掃時に検出をした。

221～233はSX30から出土した遺物である。

221～226は面縄西洞式である。221はほぼ完形で口径15.8cm・底部8cm・高さ20.6cmである。上段には突帯，下段に横位沈線が施されその間を鋸歯文で充填している。228･229は浅鉢である。口縁部に突帯を貼り付け，斜沈線を施す。

233は貝製品である。左右から縦方向に擦られ２か所抉れている。

SX33土層堆積状況（ほぼサンゴ石灰岩）

SX31（第61図，第18表）

C-101区で検出。直径約1.6×1.5mの円形で深さ約0.4mである。底面には炭化材を検出した。炭化材は直径60～80cmの長さであり，太さもほぼ同じであったため，意図的に揃えられ，並べられたものと見られる。

234は床面直上から出土した縄文土器である。突帯の上部には沈線文がわずかにみられることから，面縄西洞式ではないかと考えられる。

SX32（第62図，第18表）

C・D-101区で検出。直径約2.3mで深さ約0.6mである。

235～241は縄文土器である。235･236は面縄西洞式である。上下に突帯を持ち，間を斜沈線で充填している。235は沈線の間隔が密であるが，236は幅広である。237は直口する口縁を持つことから後期系の可能性がある。239･240はミニチュア土器である。

242はタマガイ製品である。擦って平坦にしている。

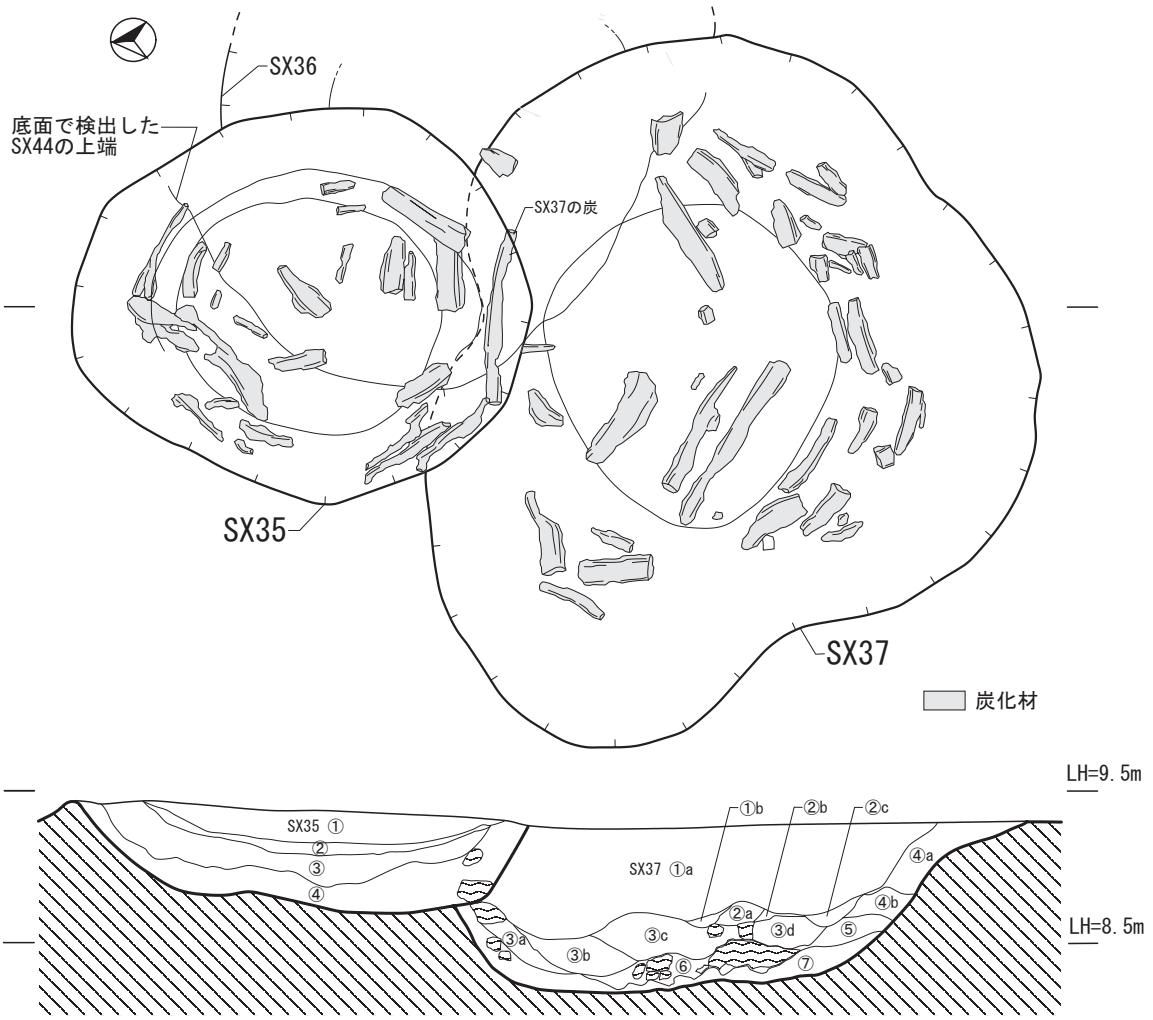
SX33（第63図，第19表）

D-101区で検出。直径約１mの円形で深さ約0.2mである。土坑内の大部分は石灰岩塊である。石灰岩の下部は青白く色が変色している部分が認められた。

243は円形状石器である。

第18表　SX出土遺物観察表（７）

図番号	掲載番号	遺構名	区	層	種類	器種(最大長)	部位(最大幅)	口 / 底径(最大厚)	分類 L1	分類 L2	重量(g)	土質	備考
第 61 図	234	SX31	C101	床面直上	土器	深鉢	胴部	-	-	-	-	泥質	刻み目は２又状工具。細い沈線で施文。
第 62 図	235	SX32	D101	①	土器	深鉢	口縁	-	直口	方形状	-	砂質	面縄西洞、突帯細い・刻目もほとんど見えない、突帯の横に横位押引き文
	236	SX32	D101	①	土器	深鉢？	口縁	-	外反	丸状	-	泥質	波状口縁。
	237	SX32	D101	①	土器	深鉢	口縁	-	直口	方形状	-	砂質	嘉徳Ⅱ
	238	SX32	D101	②	土器	-	底部	7	②	-	-	泥質	-
	239	SX32	D101	① a	土器	-	口縁	5.2	直口	舌状	-	泥質	ミニチュア土器
	240	SX32	D101	① a	土器	-	底部	3.5	②	-	-	泥質	ミニチュア土器
	241	SX32	D101	①	土器	浅鉢？	耳	-	-	-	-	泥質	-
	242	SX32	D101	①	貝製品	-	-	-	タマガイ科	-	-	-	腹面研磨



層名	SX35　土層説明
①	白砂層。
②	灰黄褐色 (Hue10YR6/2) 砂層。
③	黒色 (Hue10YR2/1) 砂質層。ややしまりあり。礫が多く入る。
④	黒色 (Hue10YR1.7/1) 砂質層。ややしまりがある。木炭多い。

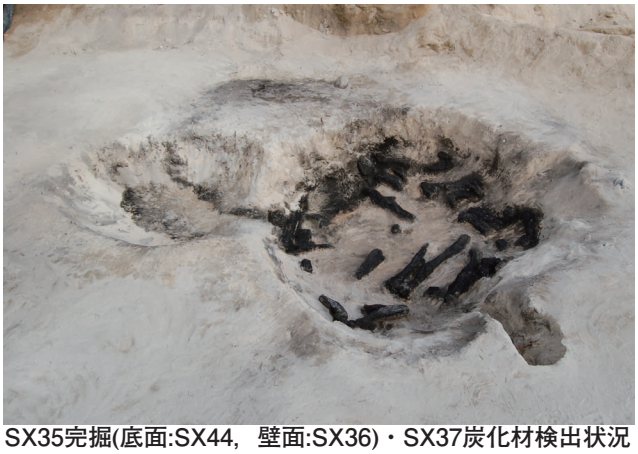
層名	SX37　土層説明
① a	淡黄色 (Hue2.5Y8/3) 砂層。
① b	浅黄色 (Hue2.5Y7/3) 砂層。炭片が入る。
② a	暗灰黄色 (Hue2.5Y4/2) 砂層。焼けた石灰礫が入る。
② b	灰黄色 (Hue2.5Y6/2) 砂層。
② c	暗黄灰色 (Hue2.5Y5/2) 砂層。焼けた石灰礫が入る。
③ a	黄灰色 (Hue2.5Y4/1) 砂質層。灰と砂の混ざった層。粘性ややあり。焼けた石灰岩が入る。
③ b	灰黄色 (Hue2.5Y6/2) 砂層。焼けた石灰礫を多く含む。
③ c	褐灰色 (Hue2.5Y5/1) 砂質層。灰と白砂の混ざった層。
③ d	暗黄灰色 (Hue2.5Y5/1) 砂質層。礫がほとんどを占める。
④ a	灰黄褐色 (Hue2.5Y5/2) 砂層。上部に脆い石灰礫が多かった。
④ b	暗灰黄色 (Hue10Y4/2) 砂層。焼けた石灰礫を多く含む。
⑤	灰黄色 (Hue2.5Y4/1) 砂質土層。焼けた石灰礫層。
⑥	黄灰色 (Hue2.5Y4/1) 砂質層。灰と砂のたまった層。
⑦	黒色 (Hue10Y1.7/1) 砂質層。ややしまりあり。木炭が入る。

SX35･37（第64図，第19表）

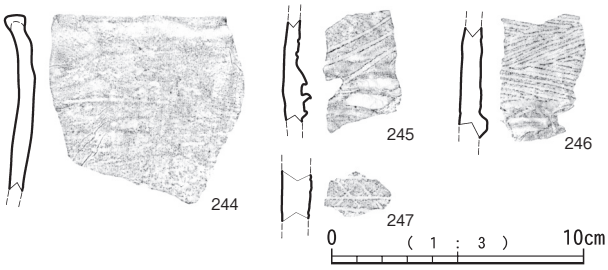
D-100区で検出。SX35とSX37は重複しており，SX35が切っている。また，SX36を切っている。

SX35は直径3m×2.6mで深さ約0.6mである。SX35の底面からSX44を検出した。

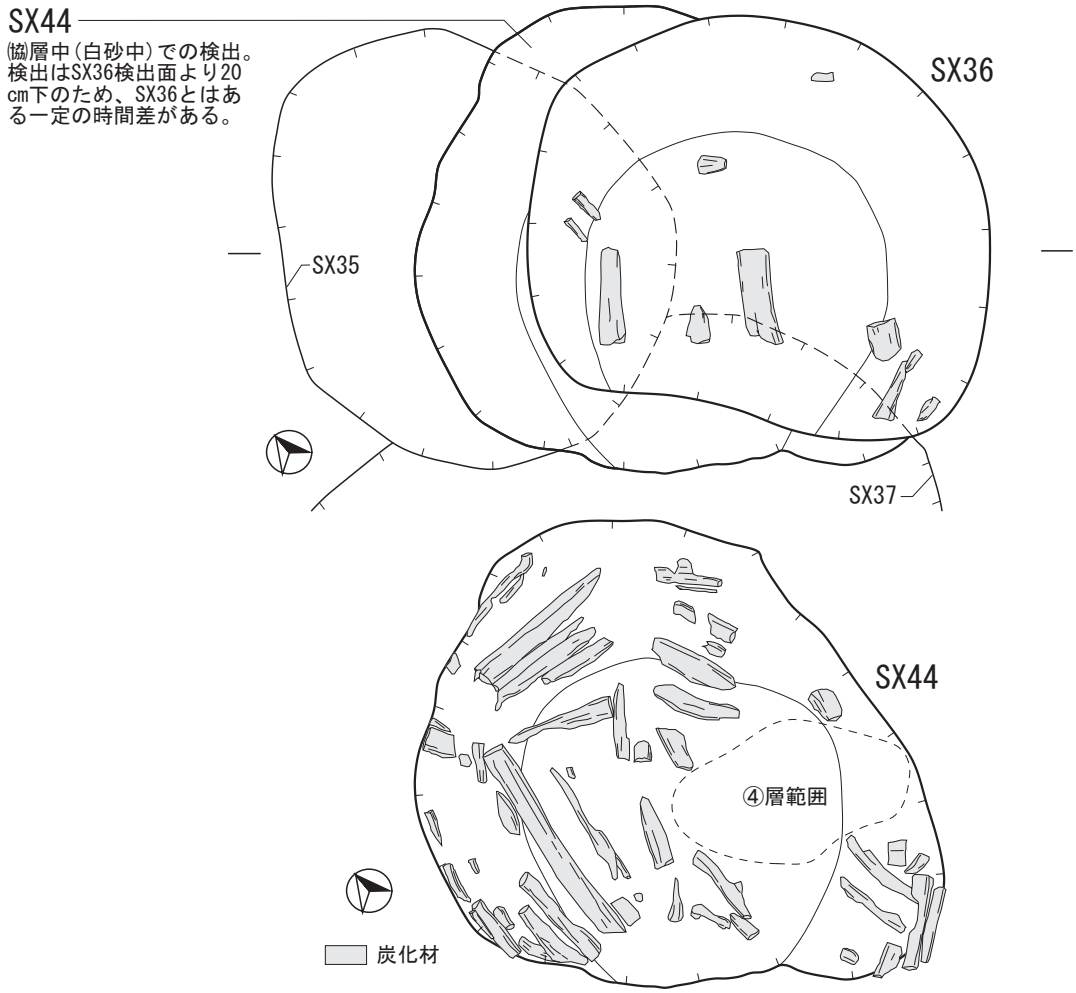
SX37は直径約4.5×4.1mで深さ1.1mである。最下層面よ



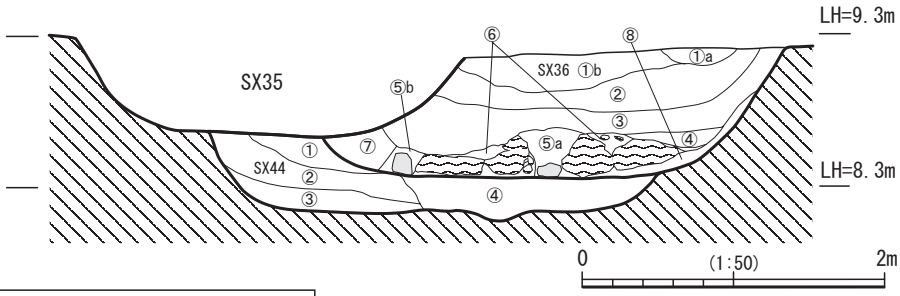
SX35完掘(底面:SX44，壁面:SX36)・SX37炭化材検出状況



第64図　SX35・37



SX44床面炭化材検出状況

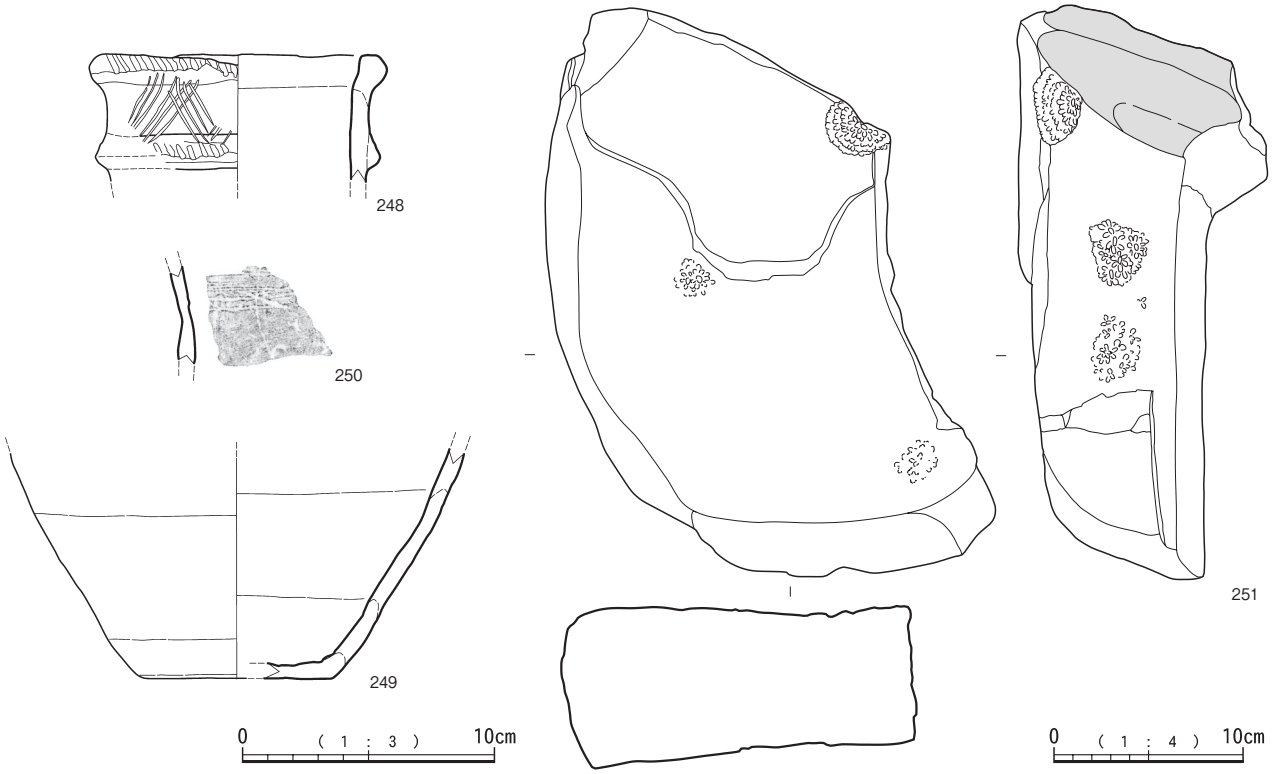


層名	SX36　土層説明
① a	黒褐色 (Hue10YR2/2) 砂層。小サンゴ礫・炭化物混入。
① b	灰黄褐色 (Hue10YR5/2) 砂層。小サンゴ礫・炭化物混入。
②	にぶい黄橙色 (Hue10YR7/2) 砂層。炭化物小片混入。
③	黒褐色 (Hue10YR3/2) 砂層。焼けた石灰岩礫が占める。
④	黒褐色 (Hue7.5YR3/1) 砂質層。ややしまりあり。灰と白砂が混じった層。
⑤ a	黒色 (Hue10YR1.7/1) 砂質層。ややしまりあり。木炭が入る。
⑤ b	黒色 (Hue10YR1.7/1) 砂質層。ややしまりあり。
⑥	褐灰色 (Hue10YR4/1) 砂層。石灰塊がほとんどを占める。
⑦	褐灰色 (Hue10YR5/1) 砂質層。灰と砂の混ざった層。
⑧	⑤層と同じ層。

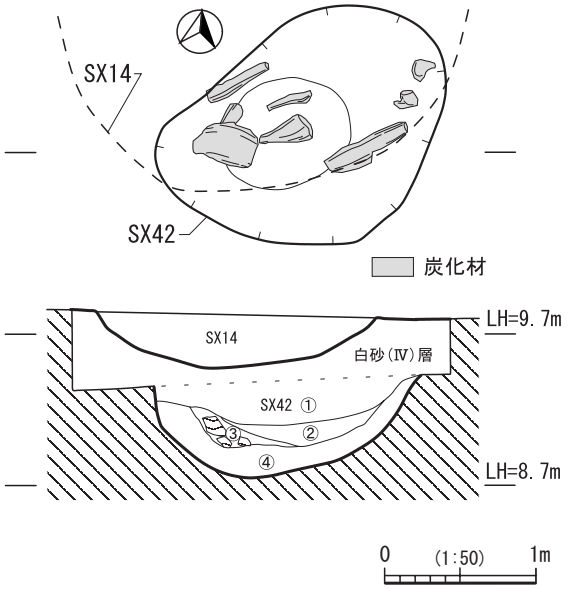
層名	SX44　土層説明
①	灰黄褐色 (Hue10YR5/2) 砂層。焼けた石灰礫が多く混入。
②	褐灰色 (Hue10YR4/1) 砂質層。灰と砂の混じった層。
③	黒色 (Hue10YR2/1) 砂質層。木炭が検出される。
④	上層からの掘り込み。炭化材が見られない範囲。

SX44炭化材検出状況

第65図　SX36・44（1）



第66図　SX36・44（2）



SX42土層堆積状況

層名	SX42　土層説明
①	白砂
②	にぶい黄褐色 (Hue10YR7/2) 砂層。焼けた石灰礫が多い。
③	褐灰色 (Hue10YR5/1) 層。灰が堆積しており，焼けた石灰岩が多く入る。
④	黒色砂質層。ややしまりあり。炭が多く混入。

第67図　SX42

り炭化材が出土している。

244～246はSX37から出土した縄文土器である。244は鉢である。245･246は面縄西洞式の胴部片である。

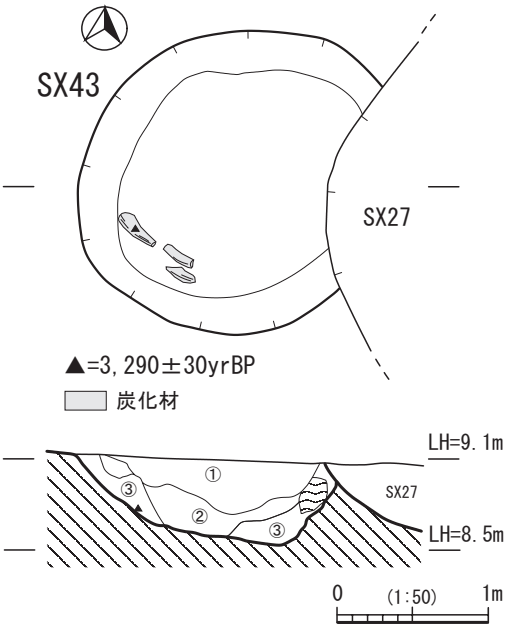
SX36・44（第65･66図，第19表）

E・D-100区で検出。SX36は直径約3mで深さ約0.8mである。SX35･37と同一レベル面の検出で，SX35･37に切られている。周辺の重複関係は古SX44＜SX36＜SX37＜新SX35である。

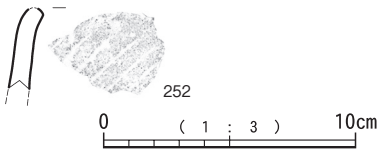
SX44は直径約3mで深さ約0.2mである。SX35～36に削平されており，上面は残っていなかった。SX44は白砂層中より検出しており，SX35～37とは白砂が堆積する間の時間差がある。また，中央付近から南側にかけて炭化物が少ない範囲（④層）が見られ，SX36構築時に壊した可能性もある。

248・249はSX44から出土した縄文土器である。248は面縄西洞式で，ラフな鋸歯文が施されている。径は小さい。

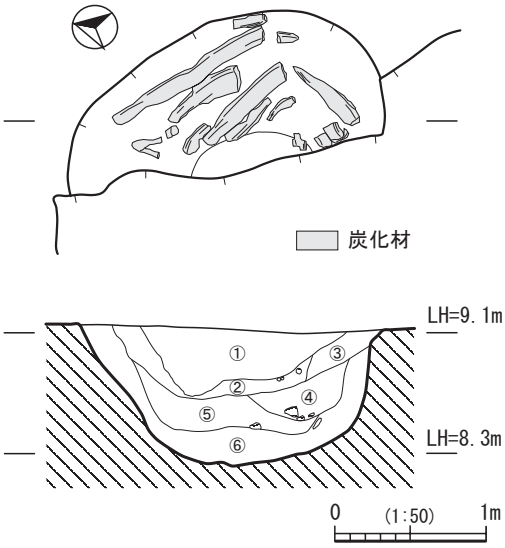
250・251はSX36から出土した遺物である。250は縄文土器の胴部である。沈線文が施されている。251は台石である。本遺跡最大の石器片である。盃状の凹みが見られる。



層名	SX43　土層説明
①	白砂層。
②	灰黄褐色～褐灰色 (Hue10YR5/2 ～ Hue10YR5/1) 砂質層。ややしまりあり。灰と砂が入った層。
③	黒褐色～黒色 (Hue10YR3/1 ～ 10YR1.7/1) 砂質層。ややしまりあり。木炭が入る。



第68図　SX43



層名	SX45　土層説明
①	にぶい黄橙色 (Hue10YR7/2) 砂層。暗褐色砂が斑状に入る。
②	黒色 (Hue10YR2/1) 砂層。①層の小ブロックが斑状に入る。砂・灰・焼けたサンゴ礫が多く入る。
③	黒褐色 (Hue10YR2/2) 砂層。焼けたサンゴ礫が混入。
④	灰褐色 (Hue10YR4/1) 砂質層。灰と砂の混じった層。粘性あり。焼けた石灰岩や石灰塊などが入る。
⑤	黒色 (Hue10YR2/1) 砂質層。②層と同色であるが，ややしまりあり。焼けた石灰礫が 40％混入。
⑥	黒色 (Hue10YR1.7/1) 砂層。木炭が検出される層。

第69図　SX45

SX42（第67図）

C-99区で検出。直径約1.8mで深さ約0.6mである。SX14に北側が削平されている。SX14とは白砂層を挟んでおり，時期差がある。

SX43（第68図，第19表）

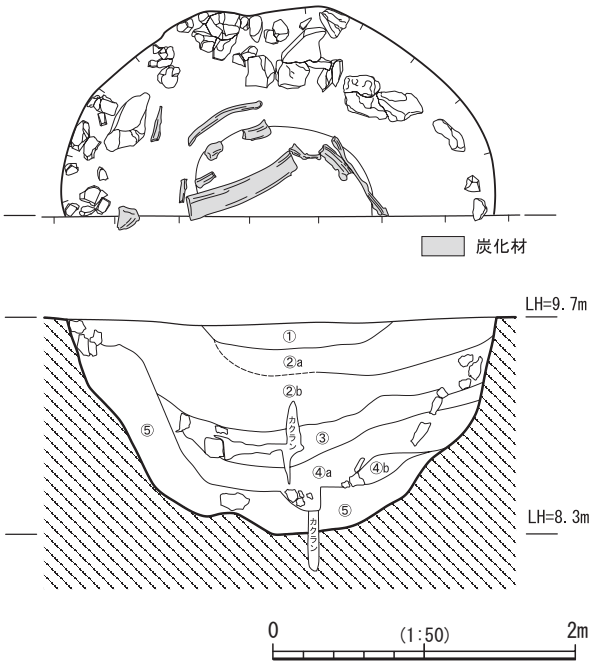
C-101区で検出。直径約２mで深さ約0.5mである。SX27に切られている。

床面直上から検出した炭化物の年代測定を行った結果，3290±30yrBPの年代がえられている。（第Ⅵ章２節参照）

252は土坑内から出土した縄文土器である。外面に沈線文が施されている。

SX45（第69図）

C・D-102区で検出。直径約2.1mで深さ約0.9mである。浸透池検査のため重機による掘削で白砂層の中から出土した。底面に炭化材が出土した。



層名	SX46　土層説明
①	灰黄褐色 (Hue10YR5/2) 砂層。にぶい黄橙色 (Hue10YR7/2) 砂がブロック状に混入。
② a	褐灰色 (Hue10YR5/2) 砂層。焼けたサンゴ礫層。
② b	にぶい黄橙色 (Hue10YR7/2) 砂層。サンゴ礫・炭混入。
③	褐灰色 (Hue10YR5/1) 砂層。砂と灰が混ざった層。石灰礫が集中する。中央付近縦方向ににぶい黄褐色 (Hue10YR4/3) 砂層が見られ樹痕のカクランと想定した。
④ a	褐灰色 (Hue10YR5/1) 砂層。③層よりも灰の混じりが多く，粘性がややある。焼けて脆くなった石灰塊が混入する。
④ b	褐灰色 (Hue10YR4/1) 砂層。④ a 層とほぼ同じであるがやや明るい。
⑤	黒色 (Hue10YR1.7/1) 砂層。木炭検出層。

第70図　SX46

SX46（第70図）

D-102区で検出。直径約2.7mで深さ約1.3mである。上部には石灰岩礫が貼り付けられたように土坑の縁に広がっていた。こちらも浸透池検査のため重機による掘削で白砂層の中から出土した。

第８節　Ⅳ・Ⅴ層検出遺物（第71～73図，第20･21表）

253～269はⅣ層（白砂層）で検出した遺物である。

253～263は縄文土器である。253は上下に突帯を貼り付け間を斜沈線で充填している。254は細い沈線を鋸歯風に描く。255～259は口縁部を肥厚させている。257は口径22.8cmを測る。ラフな鋸歯文が描かれている。リボン状突起の裏側には短沈線が施されている。

265は有溝砥石である。266はクガニイシである。268は敲石である。ほぼ全面が剥離しているが，一部自然面が残っている。部分的に研磨痕が見られる。269は板状の石製品である。平坦な形状に擦られている。

270～290はⅤ層（白砂中）で出土した遺物である。

270は室川下層式の胴部とみられる。271・272は南九州的な様相を持つ土器である。274～276は面縄西洞式の範疇に含まれる土器である。279は浅鉢の波状口縁である。

281･282は有溝砥石である。281は大型で幅広である。283･284は磨敲石である。284は片側が細く稜を持つなどクガニイシの可能性もある。287は石斧である。刃部が一方に偏る。288は円形状石器である。

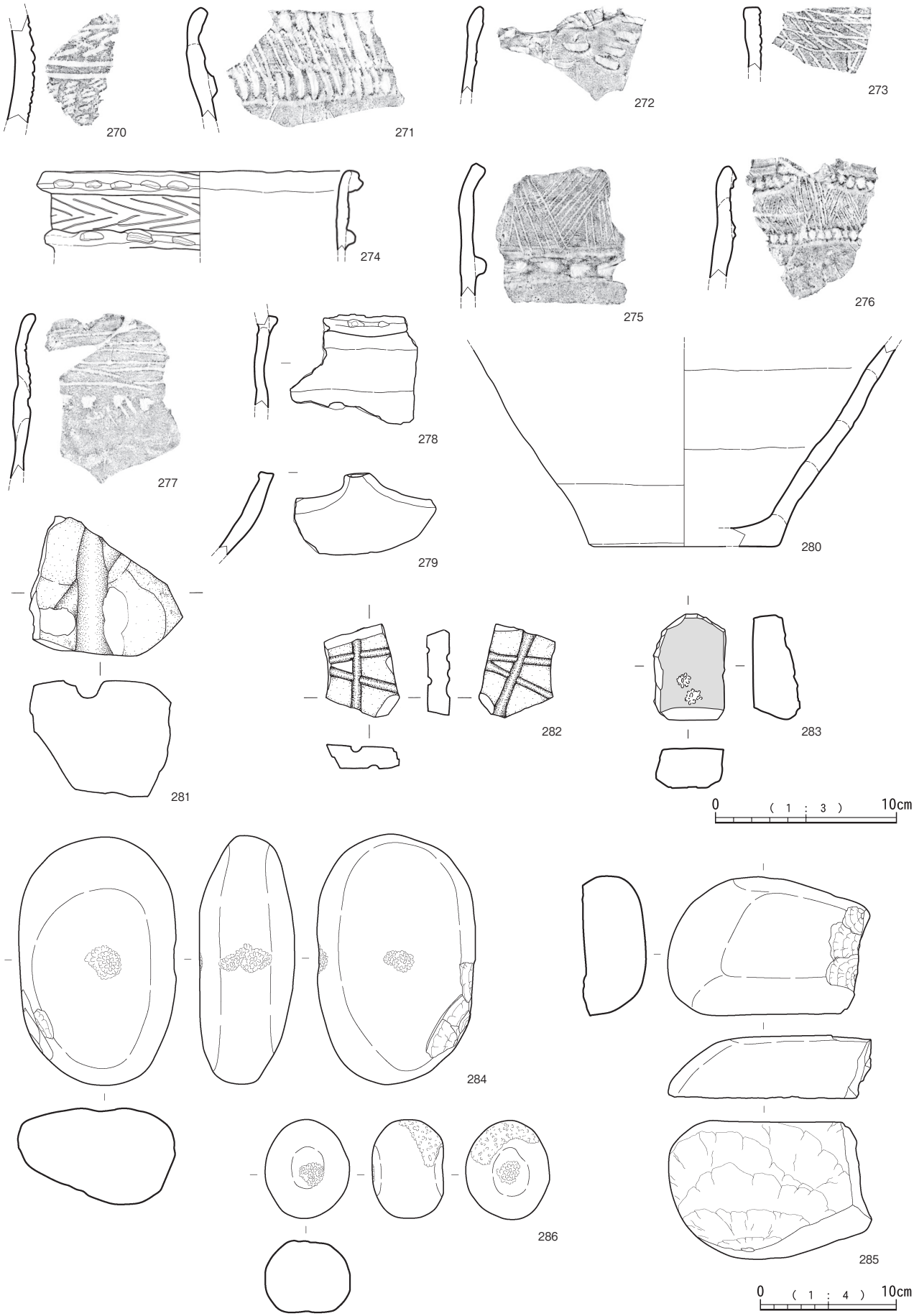
289・290は貝製品である。289はスイジガイの先端を尖らせている。290はシャコガイ製の製品で，握りやすいように擦って加工している。先端は丁寧に磨かれている。

第19表　SX出土遺物観察表（８）

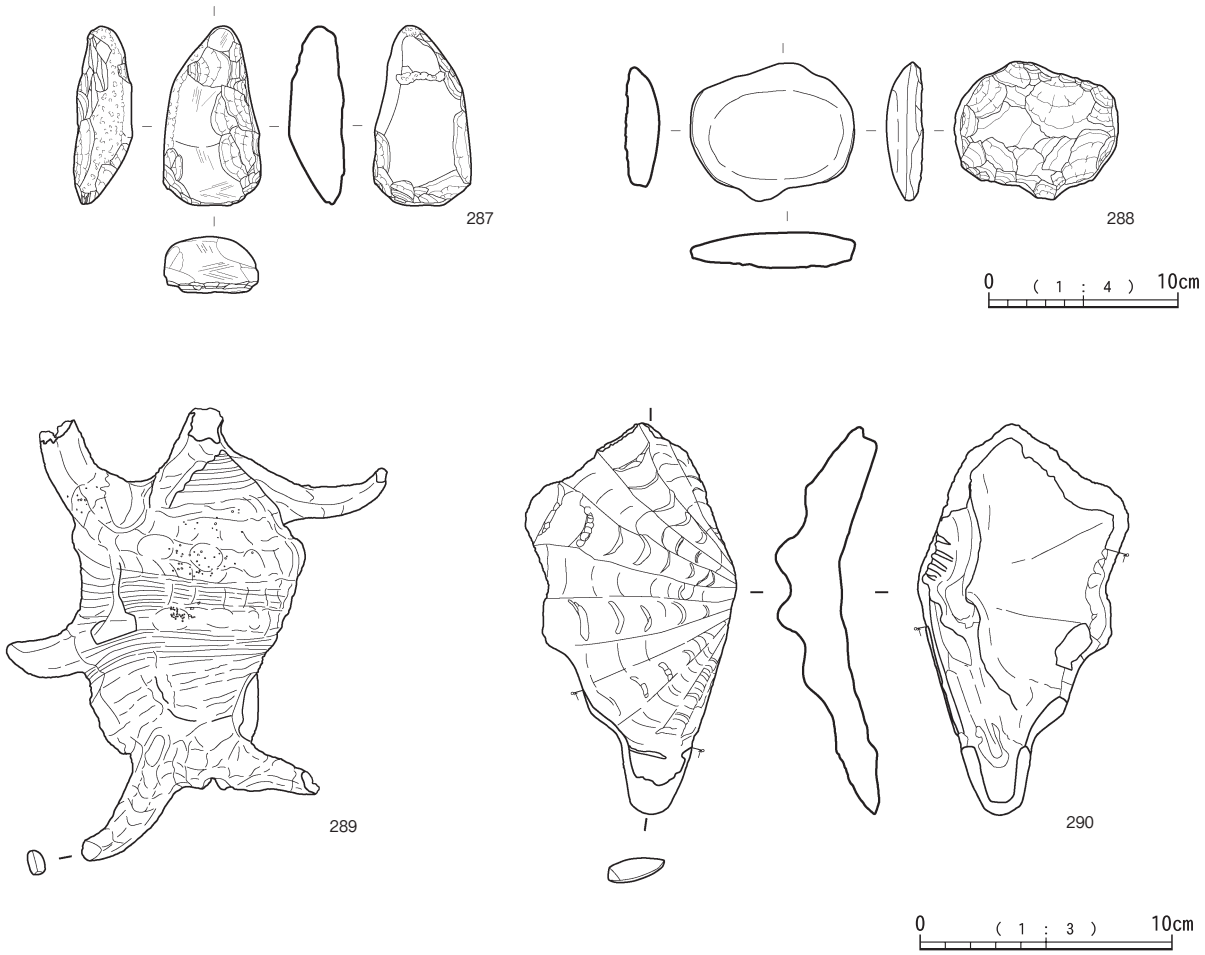
図番号	掲載番号	遺構名	区	層	種類	器種(最大長)	部位(最大幅)	口 / 底径(最大厚)	分類 L1	分類 L2	重量(g)	土質	備考
第 63 図	243	SX33	D101	一括	石器	(6.8)	(7.1)	(1.6)	円形状石器	緑色岩	103	-	-
第 64 図	244	SX37	D100	④ a	土器	浅鉢	口縁	-	直口	方形状	-	砂質	面縄西洞か
	245	SX37	D100	①	土器	-	胴部	-	-	-	-	砂質	面縄西洞
	246	SX37	D100	⑦	土器	-	胴部	-	-	-	-	砂質	面縄西洞か。第１文様帯横線で区画後斜沈線充填
	247	SX35	D100	④	土器	深鉢	胴部	-	-	-	-	砂質	器壁厚い。横位区画文後、斜沈線
第 66 図	248	SX44	C100	③	土器	深鉢	口縁部	10.7	内湾	三角	-	泥質	面縄西洞
	249	SX44	C100	上層	土器	-	底部	7.2	②	-	-	泥質	-
	250	SX36	D100	②	土器	深鉢	胴部	-	-	-	-	砂質	-
	251	SX36	D100	③	石器	(30.2)	(26.9)	(13.3)	台石	細粒砂岩	8360	-	盃状の凹み１つ
第 68 図	252	SX43	C101	①	土器	-	口縁	-	-	なし	-	砂質	嘉徳Ⅱ？

253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
0 (1 : 3) 10cm
266
267
268
269
0 (1 : 4) 10cm

第71図　Ⅳ層出土遺物



第72図　Ⅴ層出土遺物（1）



第73図　Ⅴ層出土遺物（2）

第20表　Ⅳ・Ⅴ層出土遺物観察表（1）

図番号	掲載番号	遺構名	区	層	種類	器種(最大長)	部位(最大幅)	口 / 底径(最大厚)	分類 L1	分類 L2	重量(g)	土質	備考
第 71 図	253	-	D100	Ⅳ	縄文土器	深鉢	口縁	-	外反	丸状	-	砂質	-
	254	-	B99	Ⅳ	縄文土器	深鉢	口縁	-	外反	方形状	-	砂質	-
	255	-	D100	Ⅳ	縄文土器	深鉢	口縁	-	外反	丸状	-	泥質	-
	256	-	B100	Ⅳ	縄文土器	-	口縁	-	外反	舌状	-	泥質	波状口縁
	257	-	C100	Ⅳ	縄文土器	深鉢	口～胴部	22.8	外反	方形状	-	泥質	リボン状口縁。一部凸帯輪花状。白砂下と接合。
	258	-	C100	Ⅳ	縄文土器	深鉢	口縁	-	直口	方形状	-	泥質	-
	259	-	C101	Ⅳ	縄文土器	深鉢	口縁	-	外反	舌状	-	泥質	-
	260	-	D100	Ⅳ	縄文土器	深鉢	口縁	-	外反	丸状	-	砂質	特殊形状。波状突起部分。
	261	-	C100	Ⅳ	縄文土器	-	底部	8.7	①	-	-	砂質	-
	262	-	D100	Ⅳ	縄文土器	浅鉢	口縁	-	外反	丸状	-	泥質	波状口縁
	263	-	C100	Ⅳ	縄文土器	浅鉢	口縁	17.4	外反	丸状	-	泥質	-
	264	-	B102	Ⅳ	骨製品	垂飾品	牙	-	-	-	-		イノシシ牙製品。基部に貫通穿孔(1)

第21表　Ⅳ・Ⅴ層出土遺物観察表（2）

図番号	掲載番号	遺構名	区	層	種類	器種(最大長)	部位(最大幅)	口 / 底径(最大厚)	分類 L1	分類 L2	重量(g)	土質	備考
第 71 図	265	-	C100	Ⅳ	石器	(4.5)	(4.3)	(1.2)	有溝砥石	細粒砂岩	22	-	2 面に計 6 条の溝。砥ぐための道具とは考えにくい形状。
	266	-	D101	Ⅳ	石器	(10.9)	(19.1)	(6.2)	クガニイシ	変成岩 18	2110	-	青灰色
	267	-	C100	Ⅳ	石器	(8.7)	(6.1)	(4.4)	磨敲石	粗粒砂岩	366	-	-
	268	-	DE100	Ⅳ	石器	(9)	(8.4)	(2.2)	敲石	緑色岩	240	-	円形状石器のなれの果てか。
	269	-	C100	Ⅳ	石器	(8)	(9.3)	(0.8)	不明石製品	細粒砂岩	110	-	-
第 72 図	270	-	D100	Ⅴ	縄文土器(搬入系)	-	胴部	-	-	-	-	砂質	室川下層
	271	-	C100	Ⅴ	縄文土器(搬入系)	深鉢	口縁	-	外反	方形状	-	砂質	南九州的
	272	-	C100	Ⅴ	縄文土器(搬入系)	-	口縁	-	外反	丸状	-	泥質	波状口縁。南九州的。
	273	-	D100	Ⅴ	縄文土器	-	口縁	-	-	-	-	砂質	嘉徳Ⅱ？
	274	-	C100	Ⅴ	縄文土器	深鉢	口縁	17	外反	丸状	-	砂質	-
	275	-	D100	Ⅴ	縄文土器	-	口縁	-	外反	丸状	-	泥質	-
	276	-	D100	Ⅴ	縄文土器	-	口縁	-	外反	丸状	-	泥質	-
	277	-	C100	Ⅴ	縄文土器	深鉢	口縁	-	外反	丸状	-	泥質	-
	278	-	C100	Ⅴ	縄文土器	深鉢	口縁	-	直口	舌状	-	泥質	-
	279	-	C100	Ⅴ	縄文土器	浅鉢	口縁	-	-	-	-	泥質	-
	280	-	D100	Ⅴ	縄文土器	-	底部	10	②	-	-	砂質	-
	281	-	DE100	Ⅴ	石器	(7.7)	(8.5)	(6.3)	有溝砥石	細粒砂岩	439	-	1 面に 2 条の溝。大型タイプの溝。
	282	-	C100	Ⅴ	石器	(5.1)	(4)	(1.7)	有溝砥石	細粒砂岩	39	-	2 面に 6 条の溝
	283	-	DE100	Ⅴ	石器	(5.5)	(3.9)	(2.7)	磨敲石	花崗岩	103	-	-
	284	-	D100	Ⅴ	石器	(18.2)	(11.6)	(7)	磨敲石	粗粒砂岩	2010	-	ｹｶﾞﾆｲｼ的特徴
	285	-	C100	Ⅴ	石器	(14.9)	(10.2)	(5.2)	台石	変成岩 3	1187	-	半裁の円形状石器的特徴。
	286	-	C100	Ⅴ	石器	(7.2)	(6.2)	(5.3)	磨敲石	粗粒砂岩	333	-	-
第 73 図	287	-	DE100	Ⅴ	石器	(9.5)	(5.3)	(3)	石斧	緑色岩	218	-	刃部は一方に偏るノミ状。
	288	-	DE100	Ⅴ	石器	(7.3)	(8.7)	(2)	円形状石器	変成岩 3	168	-	緑灰色
	289	-	C100	Ⅴ	貝製品	製品	-	-	スイジガイ	-	-	-	先端を尖らせている
	290	-	C100	Ⅴ	貝製品	製品	-	-	ヒレジャコ	-	-	-	先端を尖らせている

99･100･101-B･C区 Ⅳ層遺構群確認状況（西から）

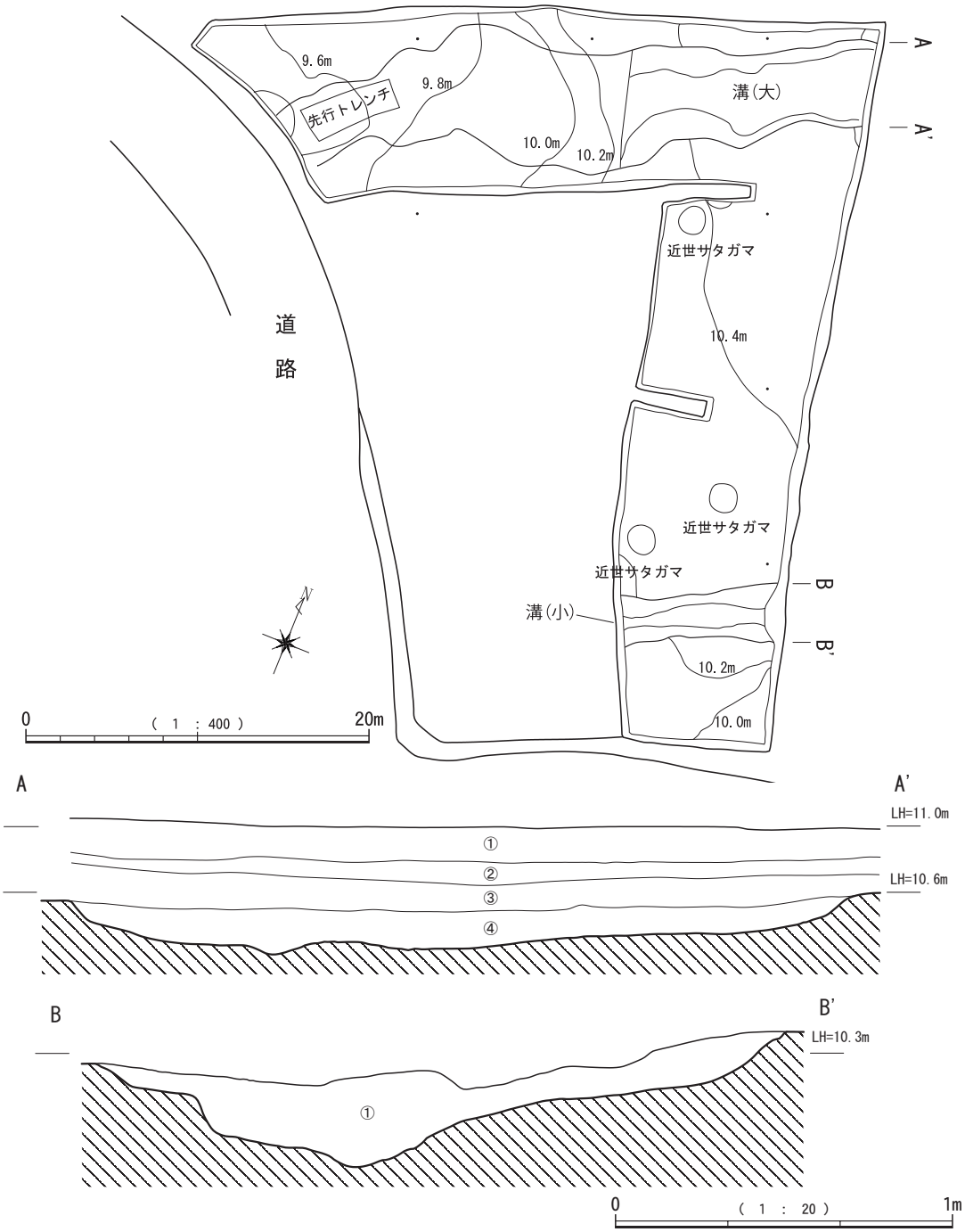
99･100-B･C区 白砂下 遺構確認状況（南から）

第９節　川尻遺跡B地点

平成24年に川尻遺跡の南端部，崩リ遺跡から見ると下段部分の地区を調査した。先行調査を入れると，土層が厚く堆積していたことから周辺を拡張し，調査に入った。

溝状遺構２条を検出したが，調査を行うと底面の凹凸が激しく立ち上がりも明瞭でなかったため，人為的な所作でなく，自然に堆積したものと判断した。

断面A-A'は全体の土層堆積状況である。自然溝の堆積は④層のみである。近世サタガマとしているものは，上面で焼土跡が見られた部分である。



土層	A-A'土層説明
①	褐色(Hue7.5YR4/2)砂質土。白砂粒多く混入。
②	褐色(Hue7.5YR4/3)砂質土。白砂粒多く混入。
③	②層に類似。白色粒の混入が多い。
④	褐色(Hue7.5YR4/4)砂質土。白砂粒多く混入。自然溝の埋土。

土層	B-B'土層説明
①	暗褐色(Hue10YR4/3)砂質土。白砂粒混入。

第74図　川尻B地点調査状況図

第Ⅴ章　平成25･26年度の調査の方法と成果

第１節　調査の概要

（1）発掘調査の方法

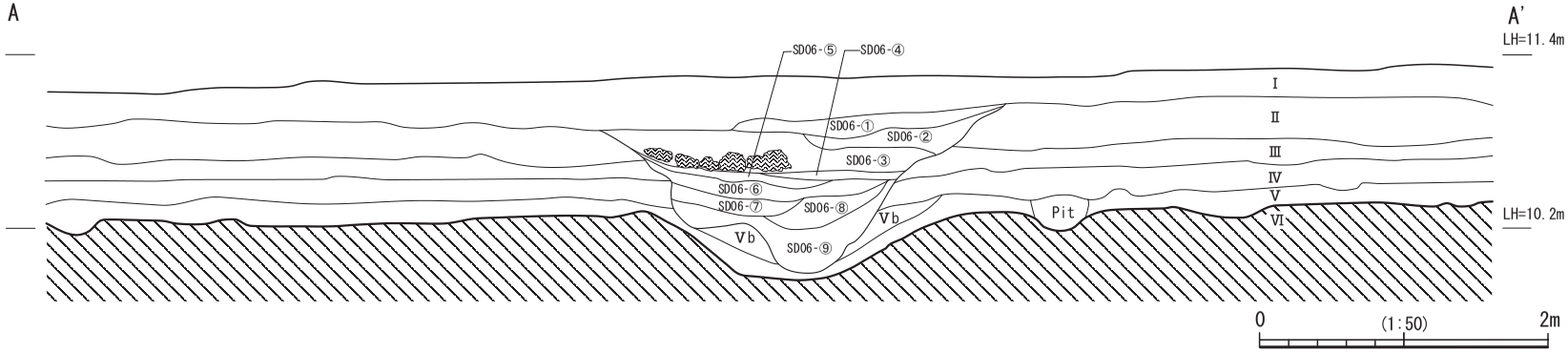
本調査は表土剥ぎ終了後，各所に先行トレンチを入れ，土層の堆積を確認しながら本調査を実施した。調査区西側の道路沿いの範囲では表土を剥ぐとすぐに白砂層が露頭した。白砂層は西側（海側）から東側（山側）に向かって深く堆積していた。

調査は10m×10mのグリッドを任意方向に設定し，開始した。以降，層ごとに遺構検出を行い，遺構を確認した際は，記録保存を行った後，人力で掘り下げを行った。

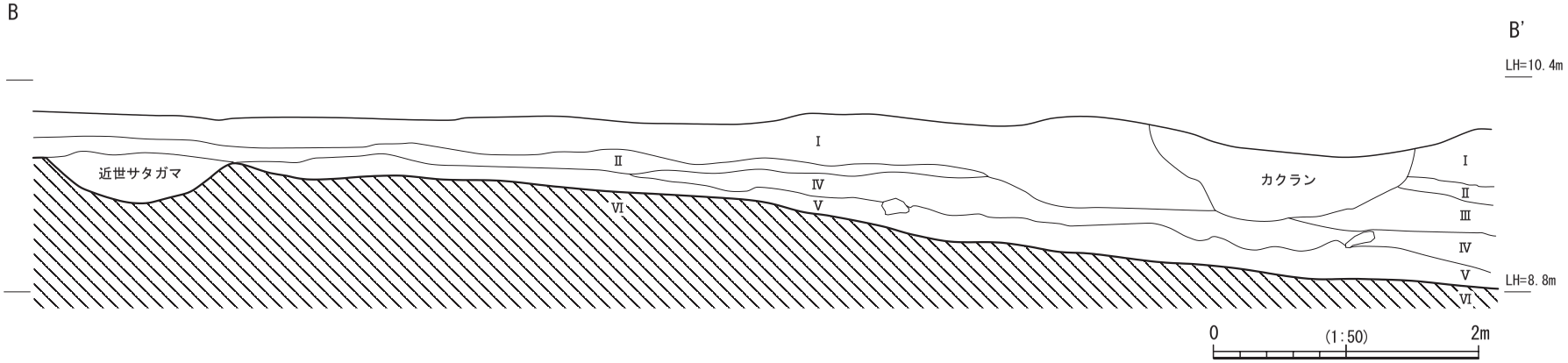
検出した遺構の記録は発掘の各過程において写真撮影や，1/10 の個別図や電子平板測量によって記録保存を図った。

第75図　平成25年調査区全景

土層断面①（H-97区　A-A'）



土層断面②（N-98区　B-B'）



第76図　土層堆積状況

層名	SD06 土層説明
①	褐色 (Hue7.5YR4/3) 砂質土層。しまりやや有。
②	暗褐色 (Hue10YR3/4) 弱粘質土層。
③	暗褐色 (Hue10YR3/4) 弱粘質土層。②より白色粒の割合が多い。多量の礫が流れ込んでいる。
④	にぶい黄橙～にぶい黄褐色 (Hue10YR4/6 ～ Hue10YR5/4) 砂質土。
⑤	褐色 (Hue10YR4/4) 砂質土。
⑥	暗褐色 (Hue10YR3/4) 弱粘質土層。
⑦	暗褐色 (Hue10YR3/4) 粘質土層。⑥より粘性が強く白色粒を多く含む。
⑧	黒褐色 (Hue10YR2/2) 粘質土層。粘性が強く，乾くとクラックが発生する。5cm 以下の小石灰岩，1mm 以下の白色粒が混入する。
⑨	暗褐色 (Hue10YR3/4) 砂質土層を基本とし，黒褐色粘質土・暗褐色粘質土が入り混じる層。

層名	A-A'，B-B' 土層説明
Ⅰ	暗褐色 (Hue10YR3/4) 土層。炭と焼土粒，白色粒を多く含む。表土。
Ⅱ	暗褐色 (Hue10YR3/3 ～ 3/4) 粘質土層。。炭と焼土粒，白色粒を多く含む。
Ⅲ	極暗褐色～黒褐色 (Hue7.5YR2/3 ～ Hue10YR3/2) 粘質土。粘性は強い。炭と焼土粒，白色粒を多く含む。
Ⅳ	暗褐色 (Hue10YR3/4) 砂質土層。粘性有。炭と焼土粒，白色粒を多く含む。遺物は貝類・土器・石器が全面に広がる層。
Ⅴ	にぶい黄褐色～褐色 (Hue10YR4/3 ～ Hue10YR4/4) 砂層。漸移層。
Ⅴb	SD06 の下にのみ確認。Ⅴ層がやや黒くシミ状になっている。
Ⅵ	浅黄橙色～にぶい黄橙色 (Hue10YR8/3 ～ Hue10YR7/4) 砂層。白砂層。

（2）発見された遺構・遺物

調査では主に古代末(9~10世紀頃)と中世(14～15世紀半ばごろ)の遺構・遺物が出土した。

古代末の遺構は土坑墓３基，ピット約1,000基などを検出し，兼久式土器を主体とする土器群や貝製品・石器などの遺物が出土している。

中世の遺構は土坑墓８基，溝状遺構２基，焼土跡４基，ピット約80基などを検出し，溝状遺構からは龍泉窯系青磁やビロースクタイプ白磁椀などの遺物が出土している。

（3）基本層位（第76図）

出土遺物から大きくⅠ~Ⅵ層に大別し，土色・土質の違いにより細分を行った。本報告では農道を挟んで北側と南側に分けて報告する。A-A'は調査区北側，B-B'は南側調査区の基本層位である。

北側は調査区西(道路側)から東(山手側)にかけてゆるやかに傾斜しており，東側に古代末の遺物包含層であるⅣ層が広がっていた。Ⅴ層を剥ぐとピット群を検出した。

南側のⅣ層はO･P-96･97区周辺のみに見られ，西側(道路側)では表土・Ⅱ層を剥ぐと白砂層を検出した。また，一部区域では近現代の住居があった見られ，攪乱を受けていた。

第77図　川尻遺跡遠景①（東から奄美大島側を望む）

第22表　表土出土遺物観察表

図番号	掲載番号	遺構名	区	層	種類	器種(最大長)	部位(最大幅)	口/底径(最大厚)	分類L1	分類L2	重量(g)	土質	備考
第78図	291	-	J99	表土	古銭	-	-	-	-	-	3	-	寛永通寶
	292	-	I100	表土	鉄製品	鍋	口縁	-	-	-	-	-	-
	293	-	K99	表土	鉄製品	鍋	口縁	-	-	-	-	-	-
	294	-	M98	I	鉄製品	鍋	口縁	-	-	-	-	-	-
	295	-	I97	表土	鉄製品	鍋	口縁	-	-	-	-	-	-
	296	-	L100	I	鉄製品	鉄鍋	脚	-	-	-	-	-	-
	297	-	J96	表土	鉄製品	鍋	底？	-	-	-	-	-	-
	298	-	H97	表土	鉄製品	板状	-	-	-	-	-	-	-
	299	-	L98	I	鉄製品	板状	-	-	-	-	-	-	-
	300	-	N99	表土	鉄製品	釘	-	-	-	-	-	-	-
	301	-	M98	I	鉄製品	釘	-	-	-	-	-	-	-
	302	-	L98	表土	銅製品	板状	-	-	-	-	6.2	-	蹴彫。鍍金？あり。
	303	-	K100	近地サ－4	鉄製品	板状	-	-	-	-	-	-	-

第２節　表土（Ⅰ層）～Ⅱ層出土資料（第78図，第22･23表）

表土からⅢ層にかけては分類・出土量のカウントを行っていない。Ⅱ層の遺構については，SD06・10，焼土跡5・6についてのみ報告する。以下特徴的な資料についてピックアップしているので紹介する。

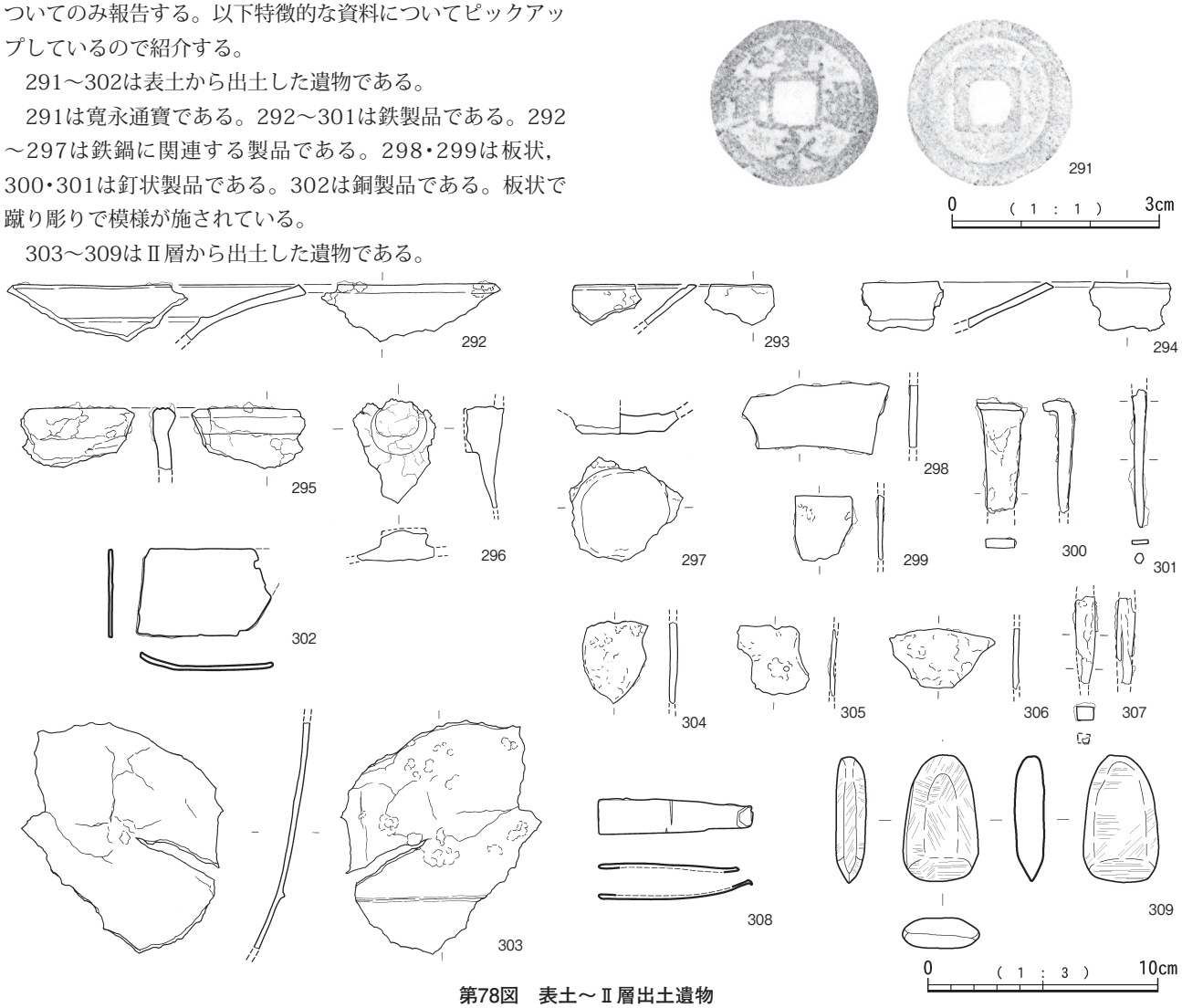
291～302は表土から出土した遺物である。

291は寛永通寶である。292～301は鉄製品である。292～297は鉄鍋に関連する製品である。298･299は板状，300･301は釘状製品である。302は銅製品である。板状で蹴り彫りで模様が施されている。

303～309はⅡ層から出土した遺物である。

303は近世サタガマから出土した鉄鍋片である。304～306は板状の鉄製品である。308は銅製品である。中央部に割取り線のような沈線が一巡している。

309は緑色製の磨製石製品である。小型の石斧状である。



第78図　表土～Ⅱ層出土遺物

第23表　Ⅱ層・溝状遺構出土遺物観察表

図番号	掲載番号	遺構名	区	層	種類	器種(最大長)	部位(最大幅)	口/底径(最大厚)	分類L1	分類L2	重量(g)	土質	備考
第78図	304	-	L99	Ⅱ	鉄製品	板状	-	-	-	-	-	-	-
	305	-	K99	Ⅱ	鉄製品	板状	-	-	-	-	-	-	-
	306	-	L99	Ⅱ	鉄製品	板状	-	-	-	-	-	-	-
	307	-	L99	Ⅱ	鉄製品	釘	-	-	-	-	-	-	-
	308	-	L98	Ⅱ	銅製品	キセル状	-	-	-	-	7.8	-	吸い口が小さい
	309	-	M97	Ⅱ	石器	(5.5)	(3.4)	(1.4)	磨製	緑色岩	41	-	ミニチュア石斧
第80図	310	SD06	K97	-	龍泉窯系青磁	椀	底部	6.0	瀬戸Ⅴ	-	-	-	外面に連弁。高台途中まで施釉。
	311	SD06	I97	-	龍泉窯系青磁	椀	底部	4.6	-	-	-	-	外面連弁。内面に印花文。高台途中まで施釉。
	312	SD06	K97	-	白磁	椀	底部	5.7	ﾋﾞﾛｰｽｸⅢ	-	-	-	内面に草花文。高台露胎。
	313	SD06	J96	-	鉄製品	鍋	口縁	-	-	-	-	-	-
	314	SD06	K97	-	鉄製品	鍋	口縁	-	-	-	-	-	-
	315	SD06	H97	-	鉄製品	鍋	胴部	-	-	-	-	-	-
	316	SD06	J96	-	鉄製品	板状製品	-	-	-	-	-	-	-

SD06・10（第79～82図，第23･24表）

H～K-96･97区付近で検出。幅約２～2.5m，深さ約１mの遺構である。２条並んで検出した。K-96，I-97区付近で重複が見られ，古SD06＜SD10新であった。出土遺物からは時期差は見られず，14-15世紀代の遺構である。

土層断面は土層図（第76図）に記載している。遺構の上部③層には多量の石灰岩が埋没していた。

SD06の上部には所々に動物骨が固まっていたため，獣骨集中箇所02・03として調査した。出土した動物骨はほぼウシで占められている。(第Ⅶ章第３節参照)

310～322はSD06から出土した遺物である。

310・311は龍泉窯系青磁である。312はビロースクタイプ白磁椀の底部である。313～315は鉄鍋である。318は棒状の鉄製品である。断面は方形状で先端付近は扁平である。

319は貝製品である。肋の一部を擦って成形している。貝匙状に仕上げている。

320は軽石を有溝砥石風に使用している製品である。321は滑石片である。322は青灰色を呈するチャートの石核である。321は滑石二次加工品である。

323～333はSD10から出土した遺物である。

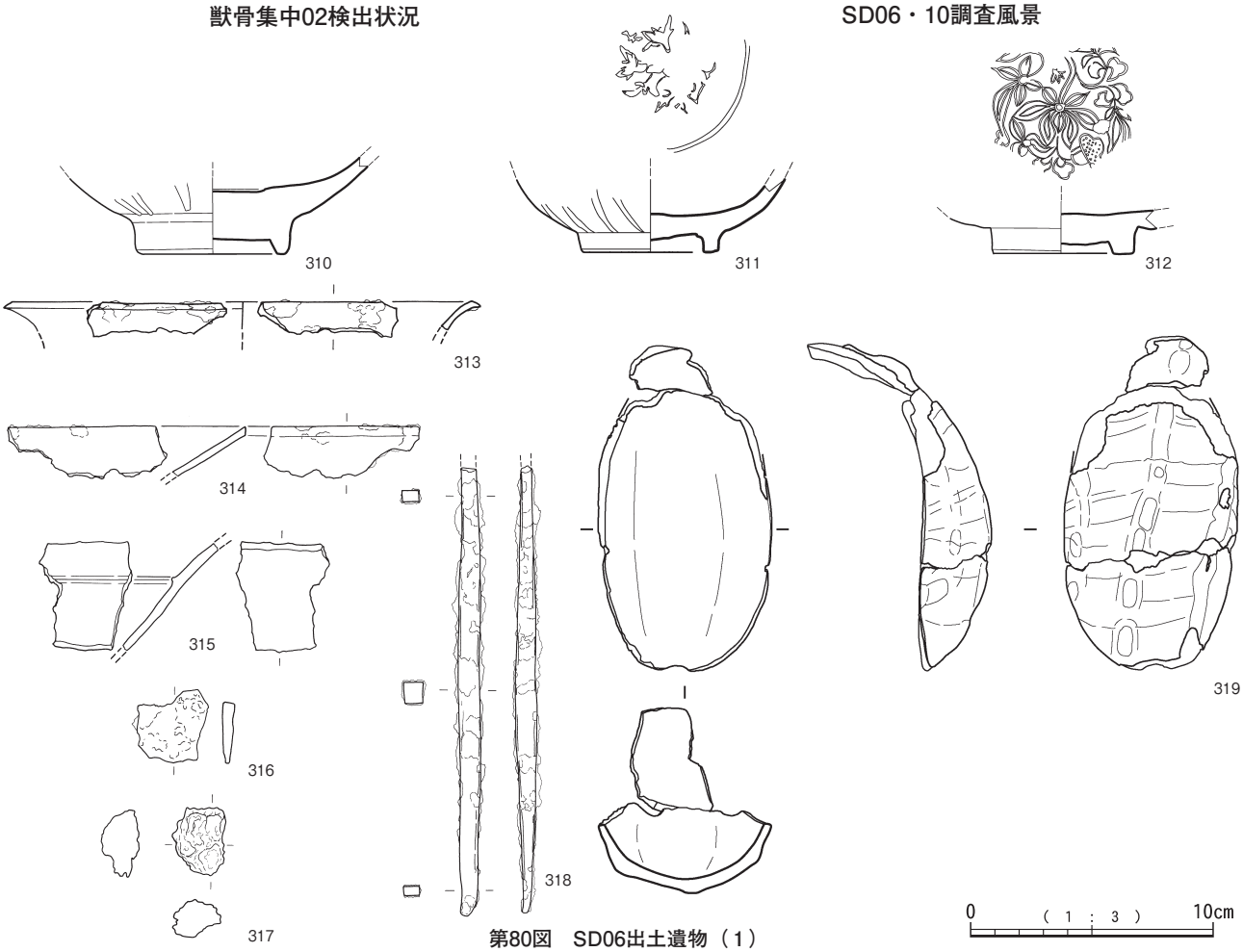
第79図　平成25年調査区北側Ⅱ・Ⅲ層検出遺構

SD06・10遠景

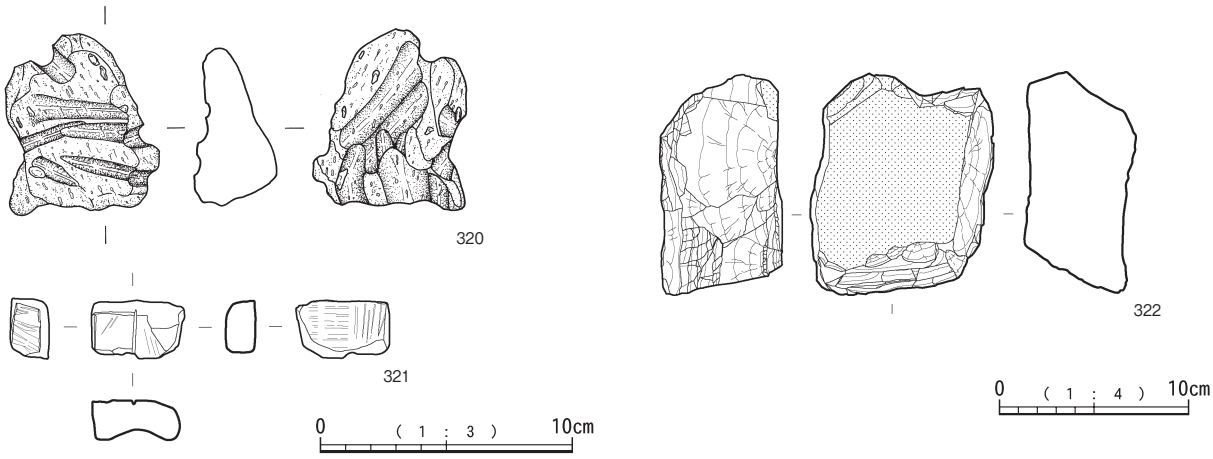
SD06土層堆積状況

獣骨集中02検出状況

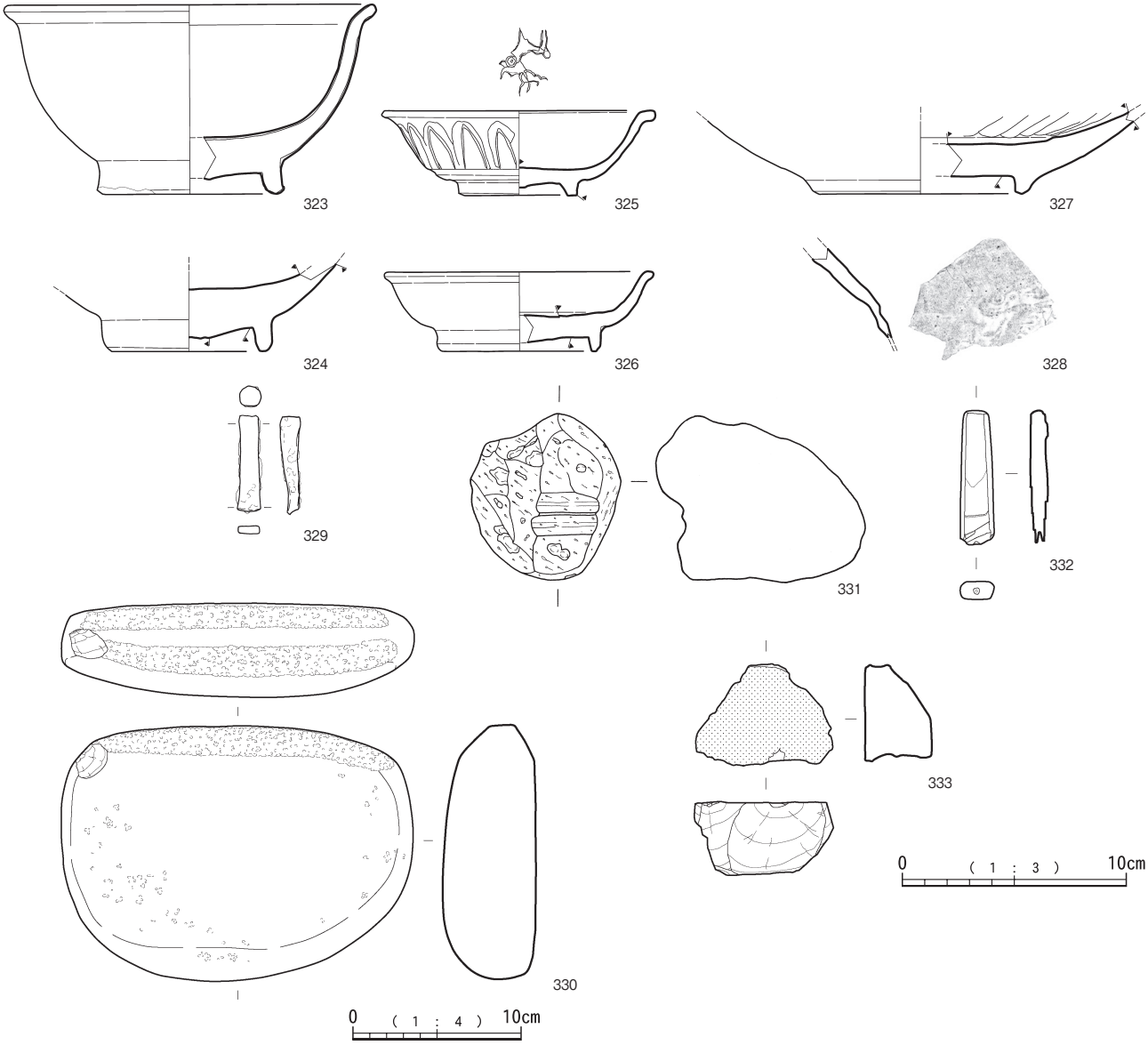
SD06・10調査風景



第80図　SD06出土遺物（1）



第81図　SD06出土遺物（2）



第82図　SD10出土遺物

323～327は龍泉窯系青磁である。椀・坏・盤が出土している。328は褐釉陶器である。外面に龍様の模様がある。

329は棒状の鉄製品である。断面は丸状であるが，下部は扁平である。

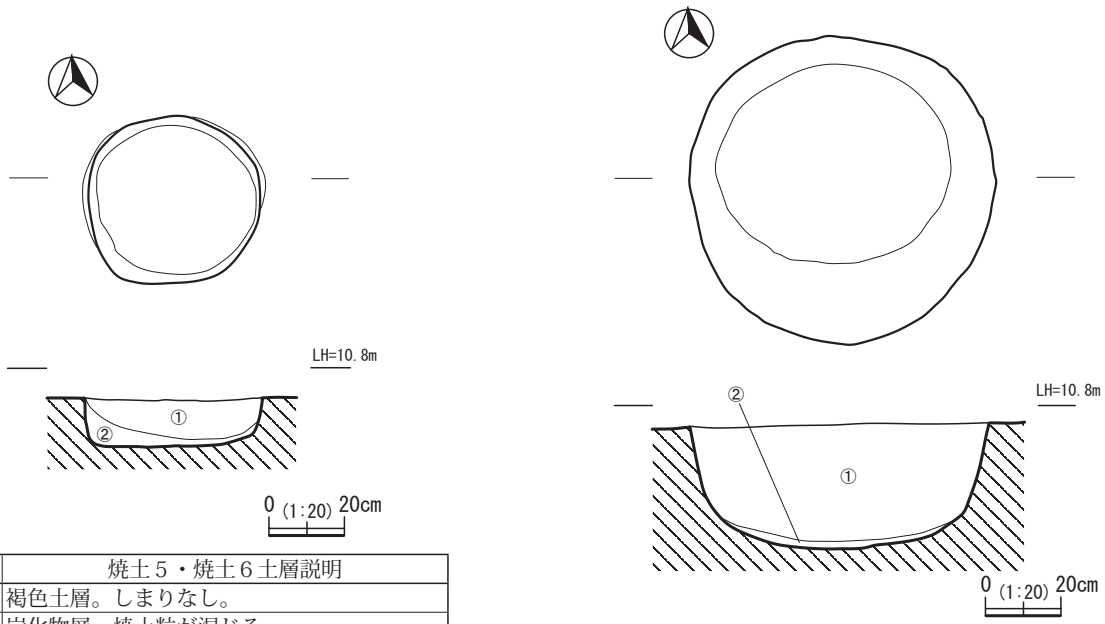
330はクガニイシである。片側を集中的に敲打し三角形状を作り出している。丁寧に磨かており，精緻である。332は頁岩製の棒状石製品である。先端には幅0.3cm×深さ0.4cm程度の穴が一つ穿たれている。

焼土跡（ST）５（第83図）

J-97区で検出。直径約0.4mで深さ0.1mである。土坑上部の一部では被熱面が見られた。

焼土跡（ST）６（第83図）

I-98区で検出。直径約0.8mで深さ0.3mである。最下層に薄く炭化物が充填する層が堆積していた。

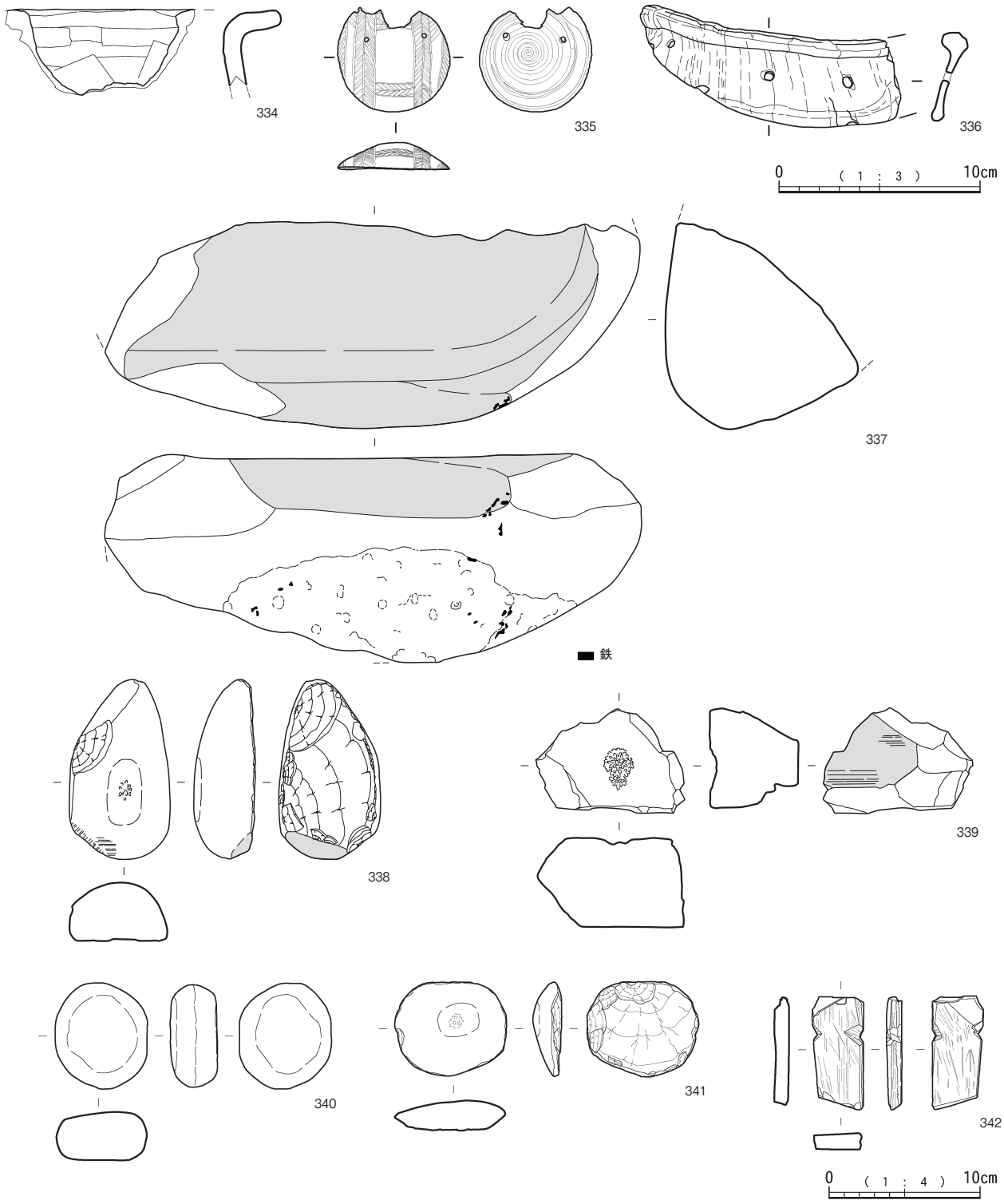


土層	焼土５・焼土６土層説明
①	褐色土層。しまりなし。
②	炭化物層。焼土粒が混じる。

第83図　焼土跡５・６

第24表　溝状遺構出土遺物観察表

図番号	掲載番号	遺構名	区	層	種類	器種（最大長）	部位（最大幅）	口／底径（最大厚）	分類L1	分類L2	重量(g)	土質	備考
第80図	317	SD06	-	-	鉄製品	鉄滓	-	-	-	-	-	-	-
	318	SD06	J99	-	鉄製品	棒状製品	-	-	-	-	-	-	-
	319	SD6	K96	-	貝製品	貝匙	-	-	ﾔｺｳｶﾞｲ	-	-	-	-
第81図	320	SD06	K96	-	軽石製品	(16.9)	(6.0)	(3.3)	有溝砥石	軽石	22	-	3面に計17条
	321	SD06	J97	-	滑石二次加工品	(2.2)	(3.7)	(1.5)	滑石	-	21	-	切り取る加工途中
	322	SD06	J97	-	石器	(11.6)	(9.7)	(6.2)	石核	チャート	1074	-	上・下面は自然の平坦面
第82図	323	SD10	-	-	龍泉窯系青磁	椀	口～底部	口16.3/底7.7/高8.4	瀬戸Ⅴ	-	-	-	高台内蛇の目釉剥ぎ。目跡付着。
	324	SD10	K96	-	龍泉窯系青磁	椀	底部	6.8	瀬戸Ⅴ	-	-	-	高台内蛇の目釉剥ぎ
	325	SD10	-	-	龍泉窯系青磁	皿	口～底部	口12/底5.3/高3.7	瀬戸Ⅳ	-	-	-	外面に連弁文
	326	SD10	-	-	龍泉窯系青磁	皿	口～底部	口12/底7/高3.5	瀬戸Ⅳ'	-	-	-	-
	327	SD10	-	-	龍泉窯系青磁	盤	底部	9.0	瀬戸Ⅳ～Ⅴ	-	-	-	幅広工具で施文
	328	SD10	K96	-	褐釉陶器	壺	胴部	-	-	-	-	-	外面に龍？
	329	SD10	H97	-	鉄製品	-	-	-	-	-	-	-	-
	330	SD10	I97	-	石器	(15.1)	(20.9)	(5.4)	ｹｶﾞﾆｲｼ	変成岩1	3290	-	-
	331	SD10	H97	-	軽石製品	(6.5)	(7.3)	(9.3)	有溝砥石	軽石	54	-	1面に2条の溝
	332	SD10	K96	-	石器	(5.9)	(1.5)	(0.8)	棒状石製品	頁岩	10	-	先端部に直径0.2×深さ0.4cmの穴
	333	SD10	J97	-	石器	(4.0)	(6.2)	(3.0)	石核	チャート	86	-	上・下面は自然の平坦面



第84図　Ⅲ層出土遺物

第３節　Ⅲ層出土資料

層一括出土遺物（第84図，第25表）

334～342はⅢ層から出土した遺物である。

334は土師器甕である。口縁を外側に長く成形する。内面にはヘラケズリ，外面にはハケ目が見られる。

335は円盤状貝製品である。イモガイ科の殻頂部を削り出し表面を研磨し，模様が施されている。文様は有軸羽状文で構成されている。文様内に貫通穿孔が２か所ある。336はヤコウガイ製品である。肋を残し上下面を丁寧に擦っており，貫通穿孔が３か所あけられている。

337～342は石器である。337は石皿である。側面に鉄が散在して付着している。340・341は円形状石器である。342は頁岩製の砥石である。首部にくびれをつくり、右側面は打製による細くて浅い溝が一条走っている。

第25表　Ⅲ層・貝だまり出土遺物観察表（1）

図番号	掲載番号	遺構名	区	層	種類	器種(最大長)	部位(最大幅)	口/底径(最大厚)	分類L1	分類L2	重量(g)	土質	備考
第84図	334	-	M98	Ⅲ-Ⅳ	土師器	甕	口縁	外反	-	-	-	砂質	胎土３
	335	-	K98	Ⅲ	貝製品	-	-	-	ｲﾓｶﾞｲ科	-	-	-	円盤状製品，文様有，貫通穿孔 (2)
	336	-	I98	Ⅲ	貝製品	-	-	-	ﾔｺｳｶﾞｲ	-	-	-	上下面が擦られる。貫通穿孔 (3)
	337	-	-	Ⅲ	石器	(35.5)	(13.7)	(13.5)	石皿	細粒砂岩	7420	-	鉄付着
	338	-	K97	Ⅲ	石器	(11.9)	(6.8)	(3.9)	円形状石器	粗粒砂岩	439	-	-
	339	-	J98	Ⅲ	石器	(6.8)	(9.8)	(6.0)	磨敲石	凝灰岩	536	-	-
	340	-	K98	Ⅲ	石器	(7.0)	(6.1)	(3.2)	不明石製品	緑色岩	246	-	円形状石器で裏未剥離
	341	-	J98	Ⅲ	石器	(6.3)	(7.4)	(2.0)	円形状石器	変成岩	126	-	-
	342	-	J98	Ⅲ	石器	(7.5)	(3.4)	(1.0)	砥石	頁岩	45	-	-
第86図	343	貝だまり１	I99	Ⅳ	貝製品	-	-	-	ﾁｮｳｾﾝｻｻﾞｴ	-	-	-	-
	344	貝だまり１	-	-	土師器	椀	底部	6.7	-	-	-	泥質	-
	345	貝だまり３	M98	Ⅳ	兼久式土器	甕	口縁	-	①	丸状	-	泥質	-
第87図	346	貝だまり４	L96	-	兼久式土器	壺	口縁	外反	丸状	-	-	泥質	注口
	347	貝だまり４	-	1619	兼久式土器	甕	底部	6.6	-	-	-	泥質	-
	348	貝だまり４	L96	-	石器	(9.1)	(6.6)	(3.4)	磨敲石	緑色岩	339	-	-
	349	貝だまり４	-	1634	石器	(8.6)	(7.7)	(4.8)	不明石製品	変成岩７	511	-	円形状石器か
第88図	350	貝だまり５	-	6841	兼久式土器	甕	胴部	20.2	③	丸状	-	泥質	7110・貝だまり６Ⅳ一括と接合
	351	貝だまり５	-	1981	兼久式土器	甕	口縁	-	③	丸状	-	泥質	-
	352	貝だまり５	K98	Ⅳ	兼久式土器	甕	口縁	-	②	丸状	-	泥質	-
	353	貝だまり５	-	7632	兼久式土器	甕	胴部	15.6	-	-	-	砂質	7054・貝だまり５Ⅳ層と接合
	354	貝だまり５	-	2265	兼久式土器	甕	口縁	-	-	方形状	-	砂質	-
	355	貝だまり５	-	3240	兼久式土器	甕	口縁	-	③	丸状	-	砂質	-
	356	貝だまり５	-	1915	兼久式土器	甕	口縁	10.1	④	丸状	-	砂質	K98 Ⅳ層と接合
	357	貝だまり５	-	2646	兼久式土器	甕	口縁	-	④	丸状	-	砂質	横位沈線で区画
	358	貝だまり５	-	6853	兼久式土器	甕	胴部	15.8	-	-	-	砂質	-
	359	貝だまり５	-	2449	兼久式土器	甕	口縁	13.7	①	舌状	-	砂質	-
	360	貝だまり５	-	2440	兼久式土器	甕	口縁	12.5	①	丸状	-	砂質	3220と接合
	361	貝だまり５	-	2184	兼久式土器	甕	胴部	-	-	-	-	砂質	沈線文で縦横に区画
	362	貝だまり５	-	2193	兼久式土器	甕	口縁	17.6	①	方形状	-	砂質	-
第89図	363	貝だまり５	-	2204	兼久式土器	壺	口縁	9.7	①	舌状	-	泥質	注口
	364	貝だまり５	-	3232	兼久式土器	壺	口縁	4.9	直口	丸状	-	泥質	注口。外器面波状沈線文
	365	貝だまり５	K98	Ⅳ	兼久式土器	壺	口縁	6.2	外反	丸状	-	泥質	-
	366	貝だまり５	-	2199	兼久式土器	甕	底部	4.2	-	-	-	砂質	-
	367	貝だまり５	-	2374	兼久式土器	甕	底部	4.5	-	-	-	砂質	-
	368	貝だまり５	-	3245	兼久式土器	甕	底部	4.9	-	-	-	泥質	圧痕？
	369	貝だまり５	-	2491	兼久式土器	甕	底部	5.4	-	-	-	砂質	-
	370	貝だまり５	-	2610	兼久式土器	甕	底部	4.0	-	-	-	泥質	充実高台風
	371	貝だまり５	K98	Ⅳ	兼久式土器	甕	底部	6.0	-	-	-	砂質	木葉痕２重。
	372	貝だまり５	K98	Ⅳ	兼久式土器	甕	底部	5.4	-	-	-	泥質	-
	373	貝だまり５	-	3430	兼久式土器	甕	底部	6.7	-	-	-	泥質	圧痕有り
	374	貝だまり５	-	3249	兼久式土器	甕	底部	6.5	-	-	-	砂質	底面形状が違う
	375	貝だまり５	-	6870	兼久式土器	土製品	胴部	-	-	-	-	泥質	方形状
	376	貝だまり５	-	2455	土師器	甕	口縁	-	-	-	-	砂質	胎土１,96I Ⅳ一括と接合
	377	貝だまり５	-	2038	土師器	甕	口縁	-	-	-	-	泥質	胎土２
	378	貝だまり５	K97	-	貝製品	有孔製品	-	-	ﾏﾀﾞﾗｲﾓ	-	-	-	殻頂部擦切
	379	貝だまり５	-	2247	貝製品	貝匙	-	-	ﾔｺｳｶﾞｲ	-	-	-	貝匙
	380	貝だまり５	K98	7613	貝製品	有孔製品	-	-	ﾔｺｳｶﾞｲ	-	-	-	貫通穿孔 (1)
	381	貝だまり５	-	1852	貝製品	有孔製品	-	-	ﾒﾝｶﾞｲ	-	-	-	貫通穿孔 (1)
	382	貝だまり５	-	2819	貝製品	有孔製品	-	-	ｳﾐｷﾞｸ科	-	-	-	貫通穿孔 (1)
	383	貝だまり５	K97	Ⅳ	鉄製品	板状	-	-	-	-	-	-	-

第４節　平成25年調査区北側Ⅳ層検出遺構・遺物

試掘・確認調査でも見られた貝と土器が多く集中する層（基本土層Ⅳ層）を包含層を掘り下げていく過程の中で発見した。それらは貝や土器が多く見られたことから貝だまり●●として調査を行った。なお，貝だまり２・３は実測可能な遺物が少なかったため，記載のみにとどめる。

なお，表内で兼久式土器の分類L1に記載されている番号は器形の形状から以下のように分類している。

①口縁部がくびれ，胴部が最大径の資料
②口縁部がくびれ，口縁と胴部が最大径の資料
③口縁部がくびれず，ほとんど張らない資料
④口縁部がくびれ，口縁が最大径の資料
⑤内湾し，胴部が最大径の資料
⑥逆ハ字状に器形が開き，口縁が最大径の資料

（1）貝だまり

貝だまり１（第86図，第25表）

I-99区で検出。約２mの範囲に遺物が広がっていた。

343は出土したチョウセンサザエの製品である。端部を擦っている。344は土師器椀である。やや摩滅している。

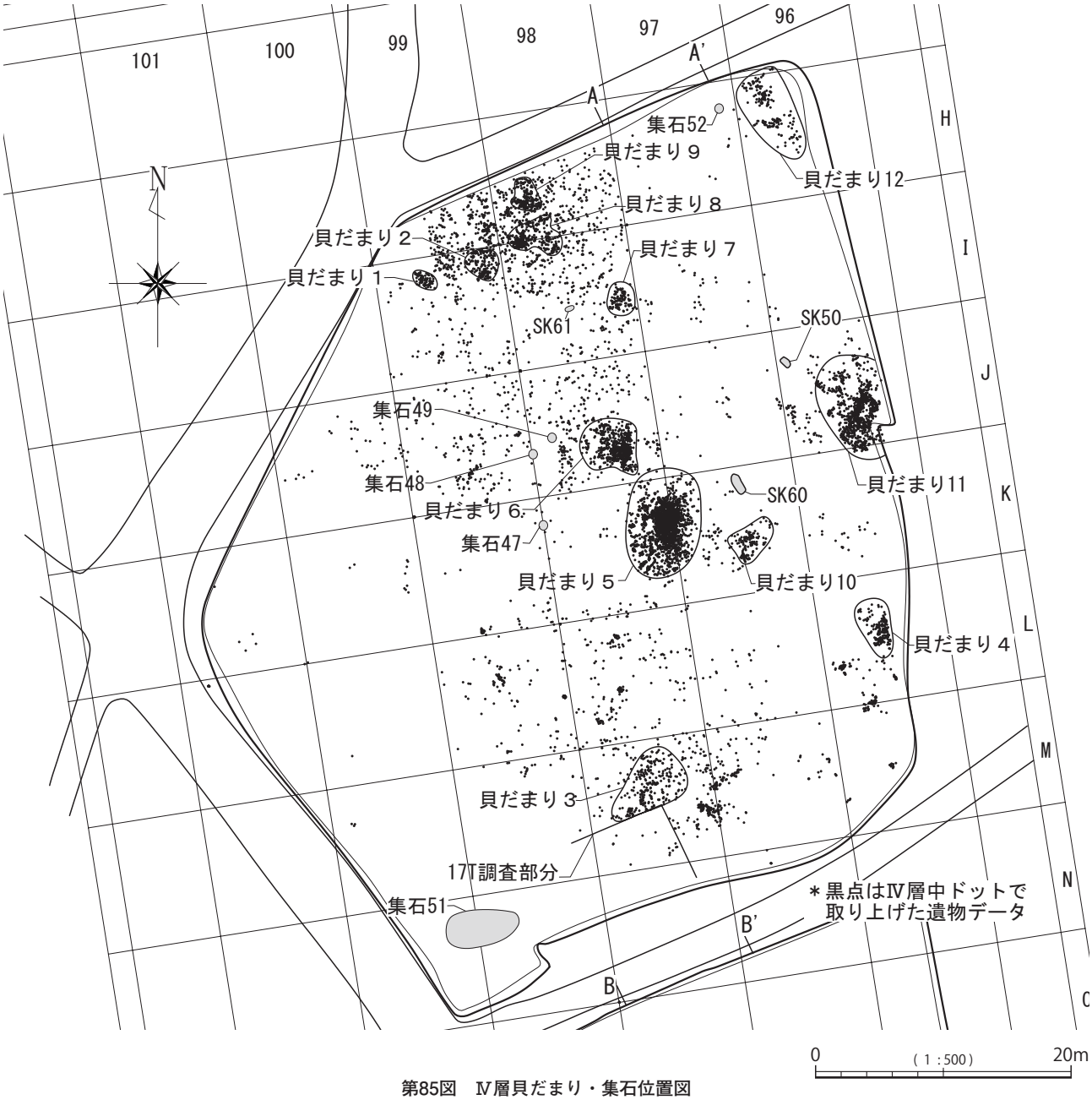
貝だまり２

I-99区で検出。約３mの範囲に遺物が広がっていた。

貝だまり３（第86図，第25表）

M-98区で検出。約５mの範囲に遺物が広がっていた。試掘確認調査16･17T連結及び17Tがこの貝だまりと同じ位置層の出土である。

345は兼久式土器の口縁部である。短い逆U字状の貼り付

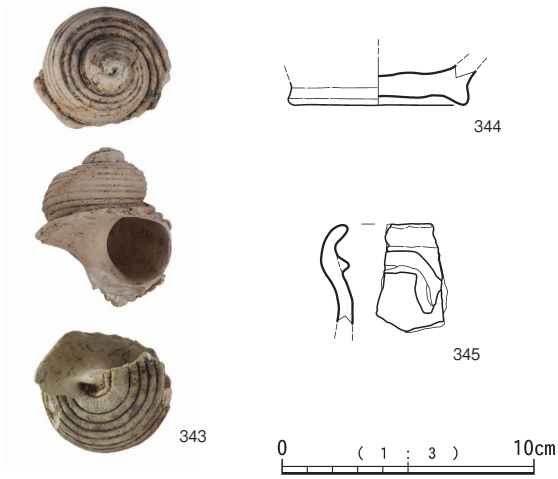


第85図　Ⅳ層貝だまり・集石位置図

貝だまり１検出状況

貝だまり３検出状況

貝だまり４検出状況



第86図　貝だまり１～３

け突帯が見られる。

貝だまり４（第87図，第25表）

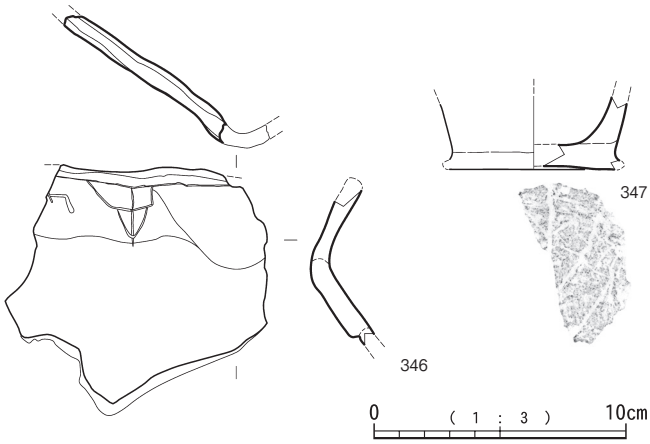
L-96区で検出。約３mの範囲に遺物が広がっていた。大部分は盛土区域に広がっていると推定される。

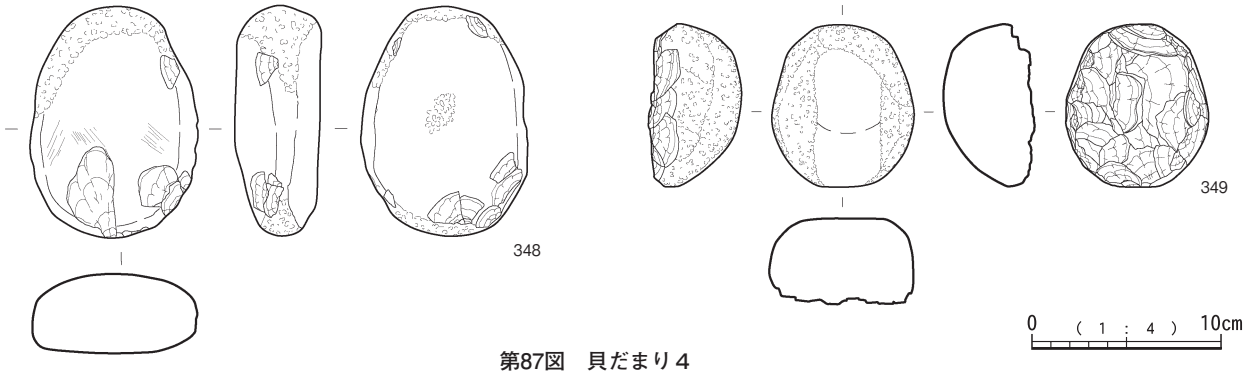
346・347は兼久式土器である。347は壺の注口部分である。細い沈線で三又状の文様が描かれている。

348･349は石器である。348は磨敲石で上下側面が良く使われている。349は半球状で多数の打痕がみられる。円形状石器の可能性もある。

貝だまり５（第88～90図，第25･26表）

K-97・98区で検出。約9×6mの範囲に遺物が広がっていた。かなりの密度で密集していた。

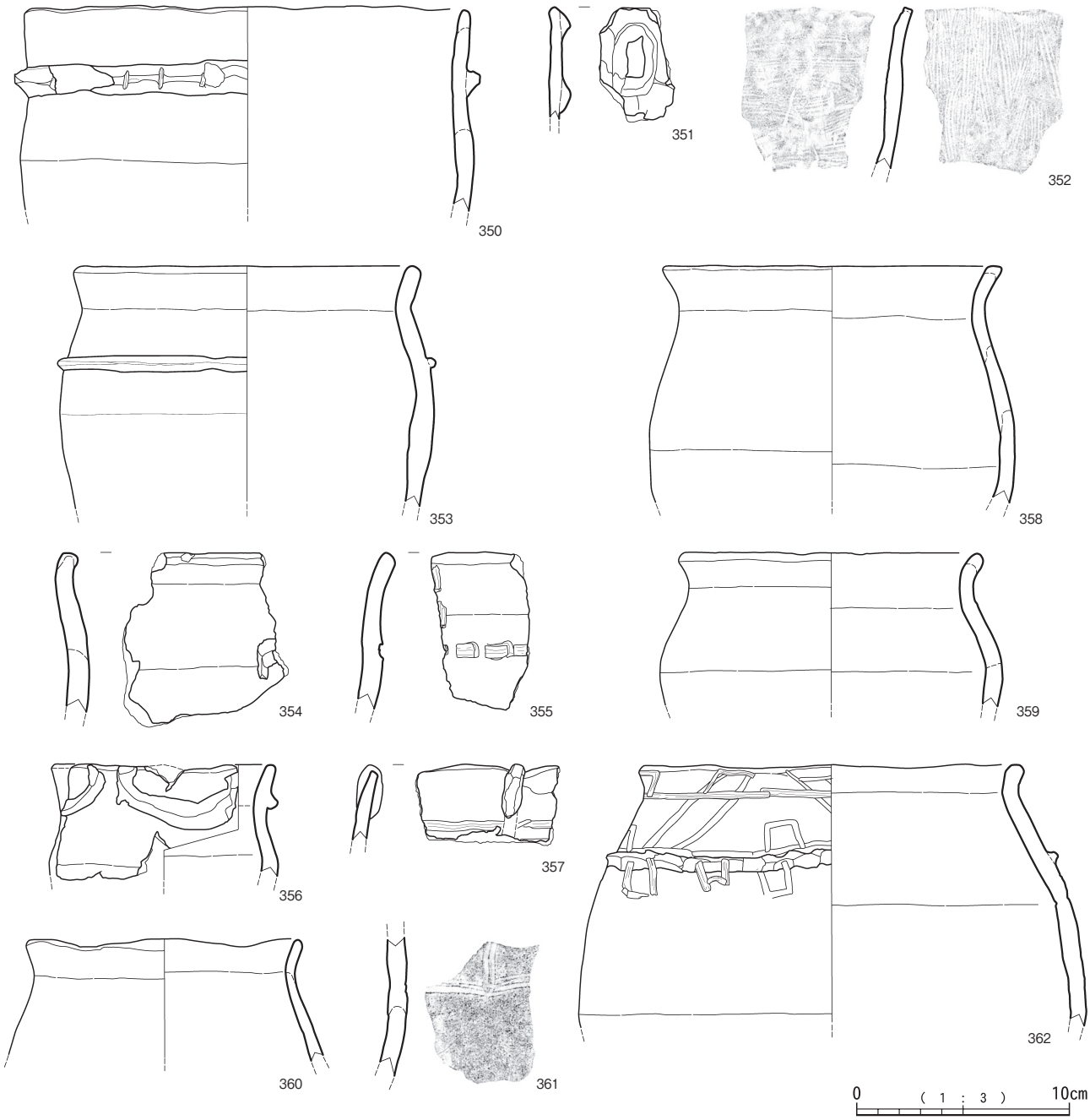




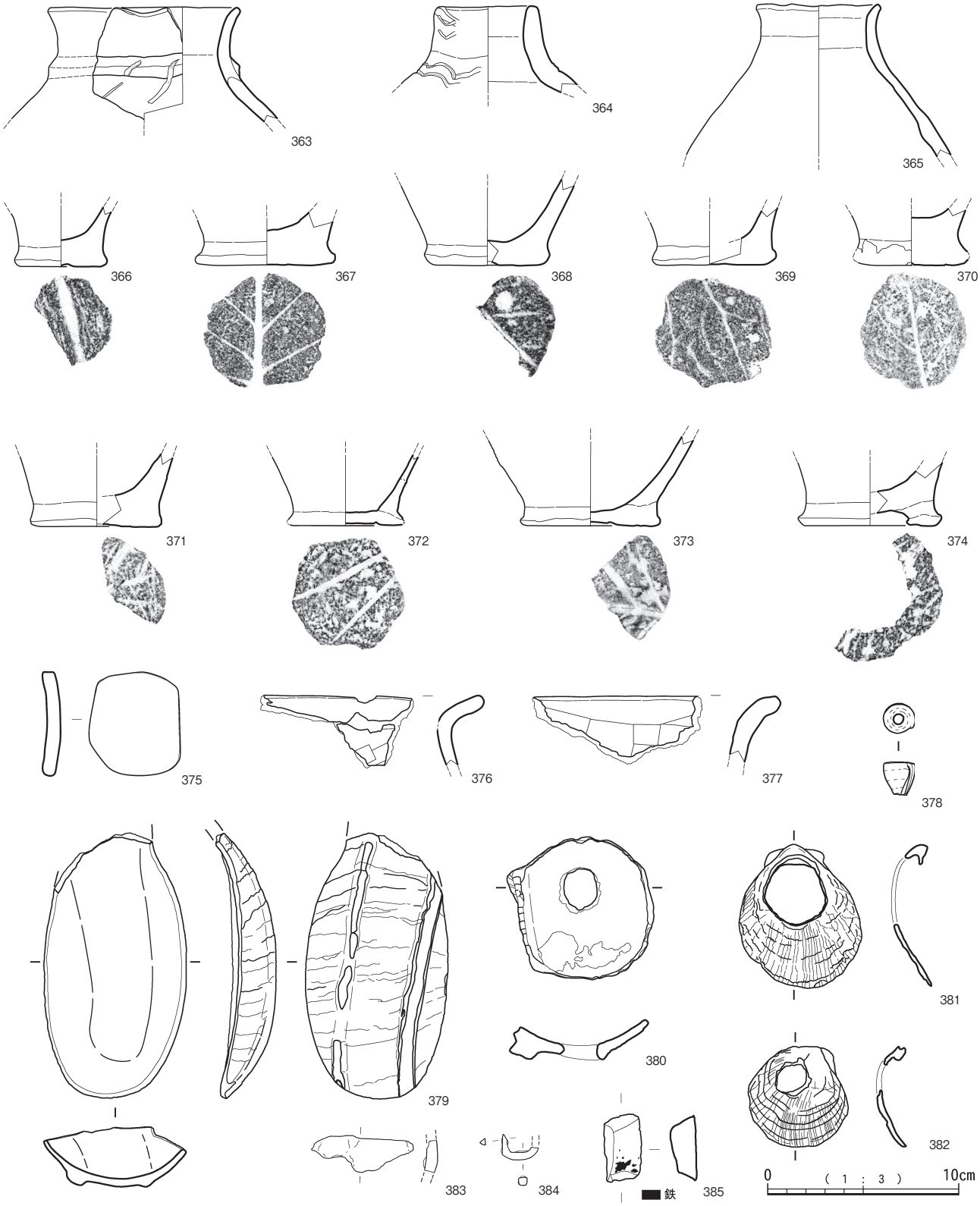
第87図　貝だまり４

貝だまり５検出状況（１）

貝だまり５検出状況（２）



第88図　貝だまり５（１）

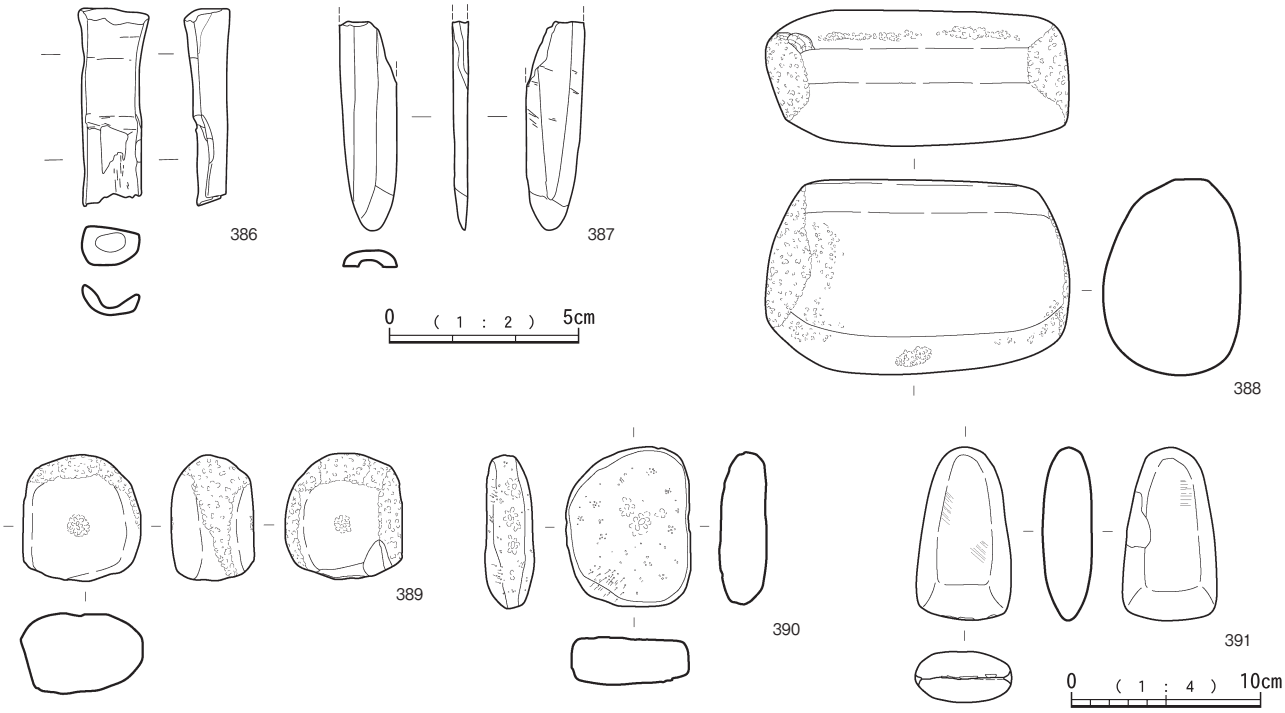


第89図　貝だまり５（２）

350～374は兼久式土器である。350はやや直口気味の口縁形状で頸部に刻目突帯文を持つ。351･356･357などU字・O字・I字型などの短い突帯が貼付られている資料もある。362は胴部に最大径を持ち，第１文様帯・第２文様帯にも施文している。出土した遺物の中で第２文様帯まで施文する数少ない資料である。355は突帯を持たず，押し引き沈線文で縦横の区画をしている。363～365は壺である。366～374は底部である。いずれも木葉痕が見られる。374は平底ではなく，円形状に粘土を貼りつけ高台風に仕上げられている。底には木葉痕がある。375は円盤状土製品である。

376・377は土師器甕である。いずれも搬入品である。

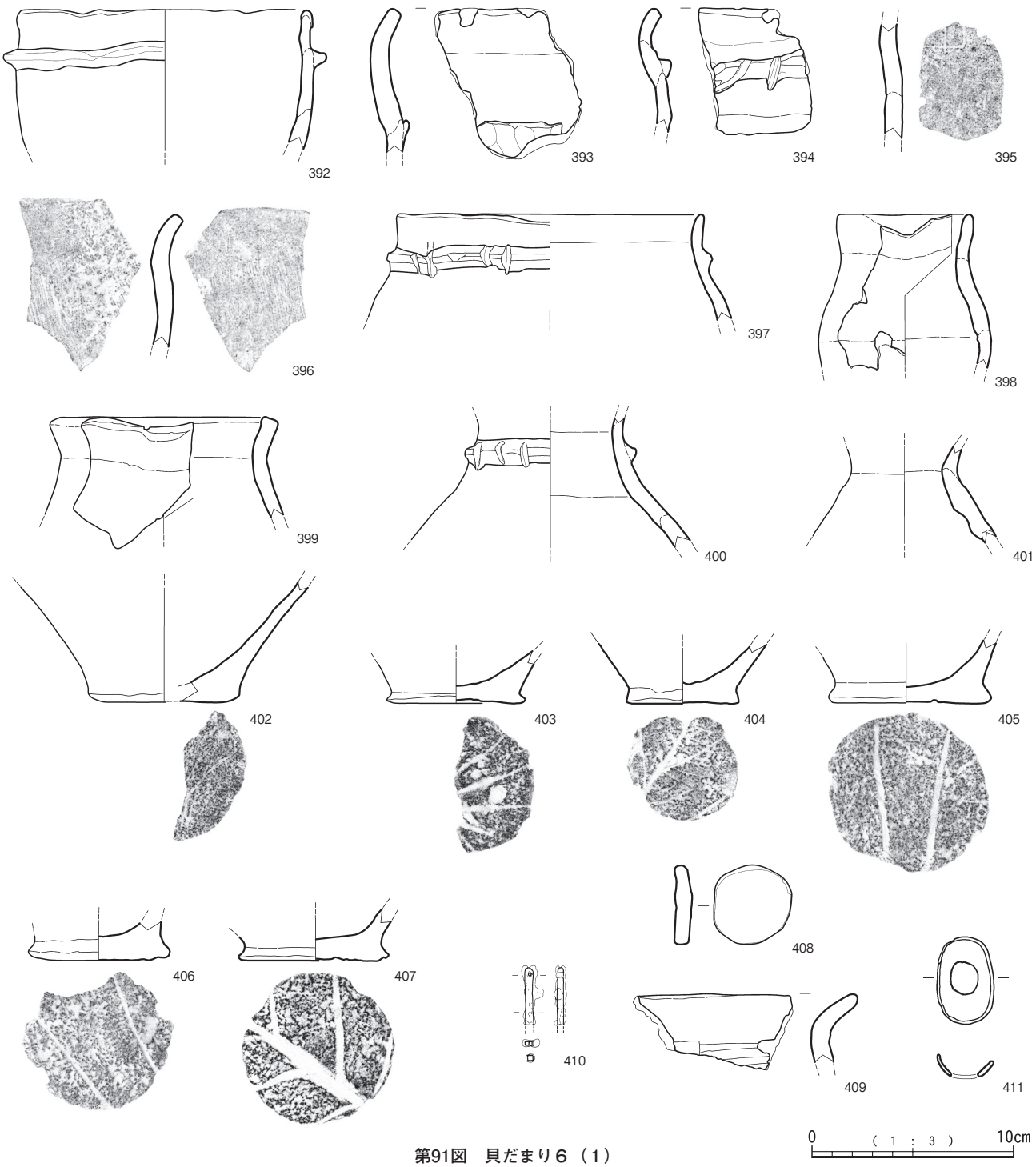
378～382は貝製品である。379は貝匙である。螺肋部分



第90図　貝だまり５（３）

第26表　貝だまり出土遺物観察表（２）

図番号	掲載番号	遺構名	区	層	種類	器種(最大長)	部位(最大幅)	口/底径(最大厚)	分類L1	分類L2	重量(g)	土質	備考
第89図	384	貝だまり５	K97	Ⅳ	鉄製品	釣針	-	-	-	-	-	-	-
	385	貝だまり５	-	2019	石器	(3.5)	(2.0)	(1.5)	金床石	細粒砂岩	13	-	鉄付着
第90図	386	貝だまり５	K98	-	骨製品	-	-	-	特殊	-	-	-	-
	387	貝だまり５	K98	-	骨製品	-	-	-	ヘラ状	-	-	-	-
	388	貝だまり５	-	1913	石器	(10.2)	(16.0)	(7.1)	ｹｶﾞﾆｲｼ	粗粒砂岩	2010	-	-
	389	貝だまり５	-	2372	石器	(6.6)	(6.3)	(4.2)	磨敲石	変成岩３	306	-	崩り遺跡では細粒閃緑岩で報告。
	390	貝だまり５	K98	6938	石器	(8.4)	(6.6)	(2.5)	敲石	ﾊﾏｻﾝｺﾞ属	149	-	-
	391	貝だまり５	K98	7675	石器	(9.0)	(5.0)	(2.6)	石斧	緑色岩	193	-	磨製石斧完品
第91図	392	貝だまり６	-	6793	兼久式土器	甕	口縁	14.0	①	丸状	-	泥質	-
	393	貝だまり６	-	8022	兼久式土器	甕	口縁	-	②	丸状	-	-	-
	394	貝だまり６	-	6678	兼久式土器	甕	口縁	-	①	丸状	-	泥質	-
	395	貝だまり６	-	3002	兼久式土器	甕	胴部	-	-	-	-	砂質	横位沈線で区画
	396	貝だまり６	J98	-	兼久式土器	甕	口縁	-	②	方形状	-	砂質	-
	397	貝だまり６	-	3060	兼久式土器	甕	口縁	14.9	-	-	-	-	J98 Ⅳ層一括・ﾄﾞｯﾄ6791と接合。
	398	貝だまり６	-	7903	兼久式土器	壺	口縁	6.3	-	-	-	泥質	片口。
	399	貝だまり６	-	7899	兼久式土器	壺	口縁	10.2	-	-	-	泥質	-
	400	貝だまり６	-	2970	兼久式土器	壺	胴部	7.2	-	-	-	泥質	-
	401	貝だまり６	-	8012	兼久式土器	壺	口縁	5.2	外反	丸状	-	泥質	-
	402	貝だまり６	-	2989	兼久式土器	壺	底部	5.7	-	-	-	泥質	-
	403	貝だまり６	-	6680	兼久式土器	甕	底部	6.0	-	-	-	泥質	圧痕？
	404	貝だまり６	-	3047	兼久式土器	甕	底部	4.9	-	-	-	泥質	-
	405	貝だまり６	-	3032	兼久式土器	甕	底部	7.4	-	-	-	泥質	-
	406	貝だまり６	J98	3055	兼久式土器	甕	底部	5.0	-	-	-	砂質	-
	407	貝だまり６	-	6684	兼久式土器	甕	底部	6.0	-	-	-	泥質	-
	408	貝だまり６	-	6796	兼久式土器	土製品	胴部	-	-	-	-	泥質	円盤状
	409	貝だまり６	-	8011	土師器	甕	口縁	-	-	-	-	砂質	胎土１
	410	貝だまり６	J98	209	鉄製品	-	-	-	-	-	-	-	釘？
	411	貝だまり６	J98	Ⅳ	貝製品	-	-	-	ﾔｺｳｶﾞｲ	-	-	-	貫通穿孔 (1)
第92図	412	貝だまり６	J98	8039	石器	(15.0)	(14.3)	(8.3)	台石	細粒砂岩	2540	-	盃状の凹み５つ
	413	貝だまり６	J98	-	石器	(10.7)	(5.2)	(5.3)	砥石	細粒砂岩	494	-	-
	414	貝だまり６	J98	8491	石器	(7.7)	(7.8)	(2.3)	円形状石器	粗粒砂岩	162	-	-



第91図　貝だまり６（１）

のみを削って成形している。破断面は丁寧に研磨されている。380～382は穿孔が見られる製品である。

383・384は鉄製品である。384は釣針である。

386・387は骨製品である。386は擦切痕がみられ加工途中品とみられる。全体的に丁寧に研磨されている。389はヘラ状製品である。こちらも丁寧に研磨されている。

385・388～391は石器である。385は鉄が付着している。388はクガニイシである。390はハマサンゴ製である。391は小型の磨製石斧である。

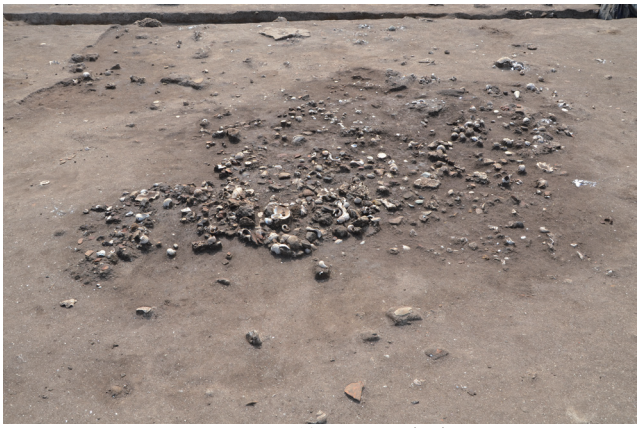
貝だまり６（第91･92図，第26･27表）

J-98区で検出。約4.5mの範囲に遺物が広がっていた。

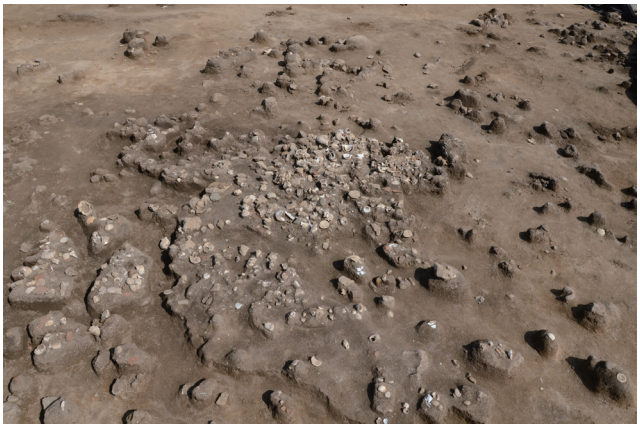
392～408は兼久式土器である。ほとんどが頸部付近に刻目突帯を持つ資料が多いが，393のように突帯を胴部の最大径付近に持つものも見られる。398～401は壺である。402～407は底部である。いずれも木葉痕が見られる。408は円盤状土製品である。粘土は兼久式土器のものと同じである。409は土師器甕である。白色の胎土で黒色鉱物が混じる。

410は鉄製品である。

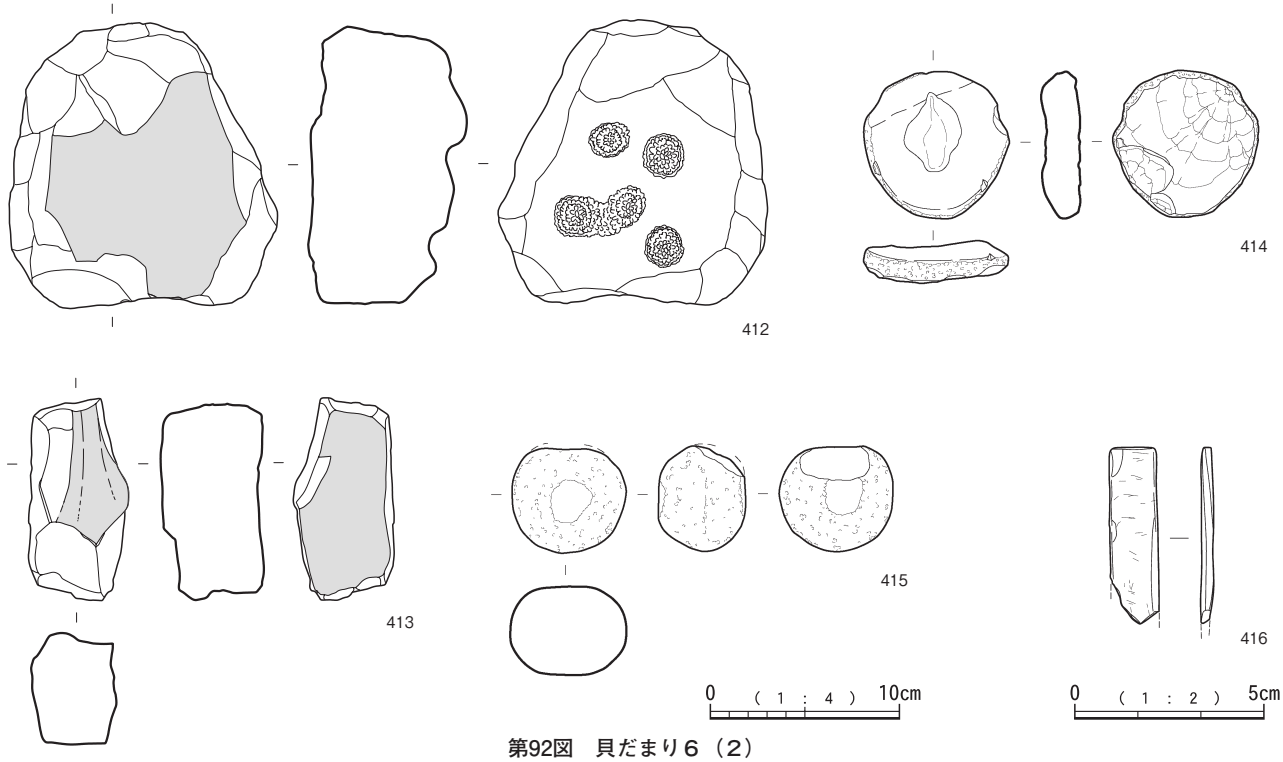
412～415は石器である。412は粗粒砂岩製の台石である。盃状の凹みが５箇所ある。415は球状石器で全面に弱く



貝だまり６検出状況（１）



貝だまり６検出状況（２）

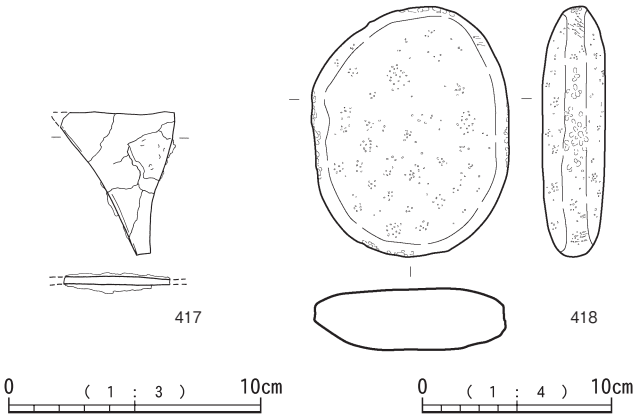


第92図　貝だまり６（２）

第27表　貝だまり出土遺物観察表（３）

図番号	掲載番号	遺構名	区	層	種類	器種(最大長)	部位(最大幅)	口/底径(最大厚)	分類L1	分類L2	重量(g)	土質	備考
第92図	415	貝だまり6	-	1432	石器	(5.4)	(6.0)	(4.2)	球状石製品	緑色岩	246	-	球状。一部に自然面が残る
	416	貝だまり6	J98	-	骨製品	-	-	-	棒状	-	-	-	-
第93図	417	貝だまり7	-	Ⅳ	鉄製品	-	-	-	板状	-	-	-	-
	418	貝だまり7	I97	-	石器	(13.1)	(10.5)	(3.2)	敲石	ﾊﾏｻﾝｺﾞ属	12	-	敲打痕に見える。
第94図	419	貝だまり8	H98	6714	土器	甕	口縁	-	③	丸状	-	砂質	弥生系か。
	420	貝だまり8	-	7814	兼久式土器	甕	口縁	-	①	-	-	砂質	-
	421	貝だまり8	-	6549	兼久式土器	甕	底部	5.2	-	-	-	泥質	-
	422	貝だまり8	-	6772	兼久式土器	甕	底部	4.0	-	-	-	泥質	-
	423	貝だまり8	-	6768	須恵器	壺	胴部	-	-	-	-	-	-
	424	貝だまり8	HI98	Ⅳ	貝製品	-	-	-	ﾘｭｳｷｭｳﾏｽｵ	-	-	-	貫通穿孔 (1)
	425	貝だまり8	I98	-	石器	(2.8)	(4.8)	(1.0)	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	頁岩	13	-	工具？
第95図	426	貝だまり9	-	7250	兼久式土器	甕	口縁	-	③	丸状	-	砂質	-
	427	貝だまり9	-	7230	兼久式土器	甕	底部	3.8	-	-	-	砂質	木葉痕が２回つく
	428	貝だまり9	-	8530	兼久式土器	甕	底部	-	-	-	-	泥質	-
	429	貝だまり9	-	7257	兼久式土器	甕	底部	5.6	-	-	-	-	-
	430	貝だまり10	K98	-	兼久式土器	甕	口縁	-	③	方形状	-	砂質	口縁三角形状

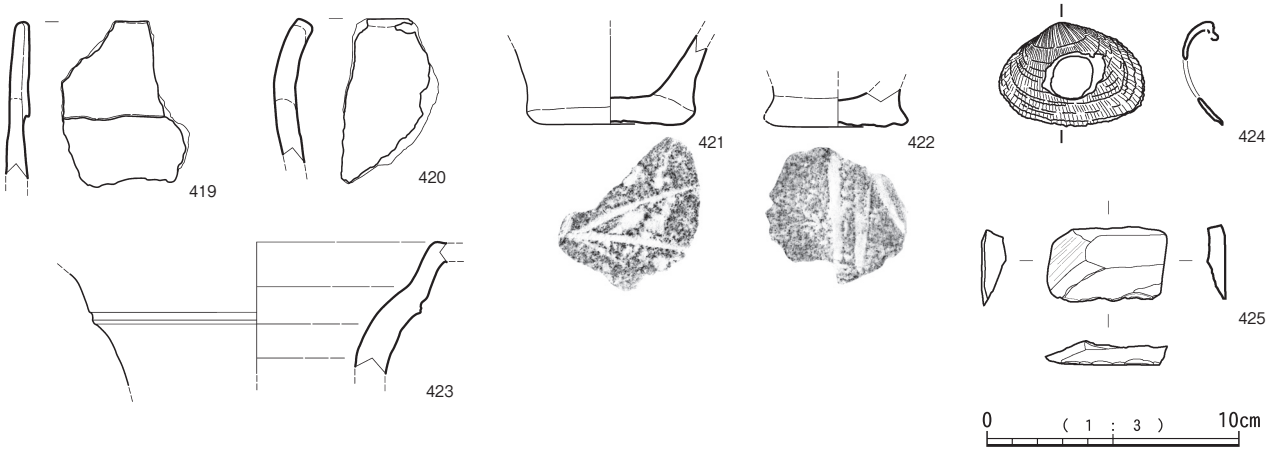
貝だまり７検出状況



第93図　貝だまり7

貝だまり８検出状況（１）

貝だまり８検出状況（２）



第94図　貝だまり８

打痕が見られる。

416は骨製品である。薄く板状に成形されている。

貝だまり７（第93図，第27表）

I-98区で検出。約2.5mの範囲に遺物が広がっていた。

417は板状の鉄製品である。418はハマサンゴを利用した敲石である。側面に敲き痕が確認できる。

貝だまり８（第94図，第27表）

I・H-98区で検出。約3.5mの範囲に遺物が広がっていた。

419は口縁部に粘土を幅広に貼り付けている。420～422は兼久式土器である。

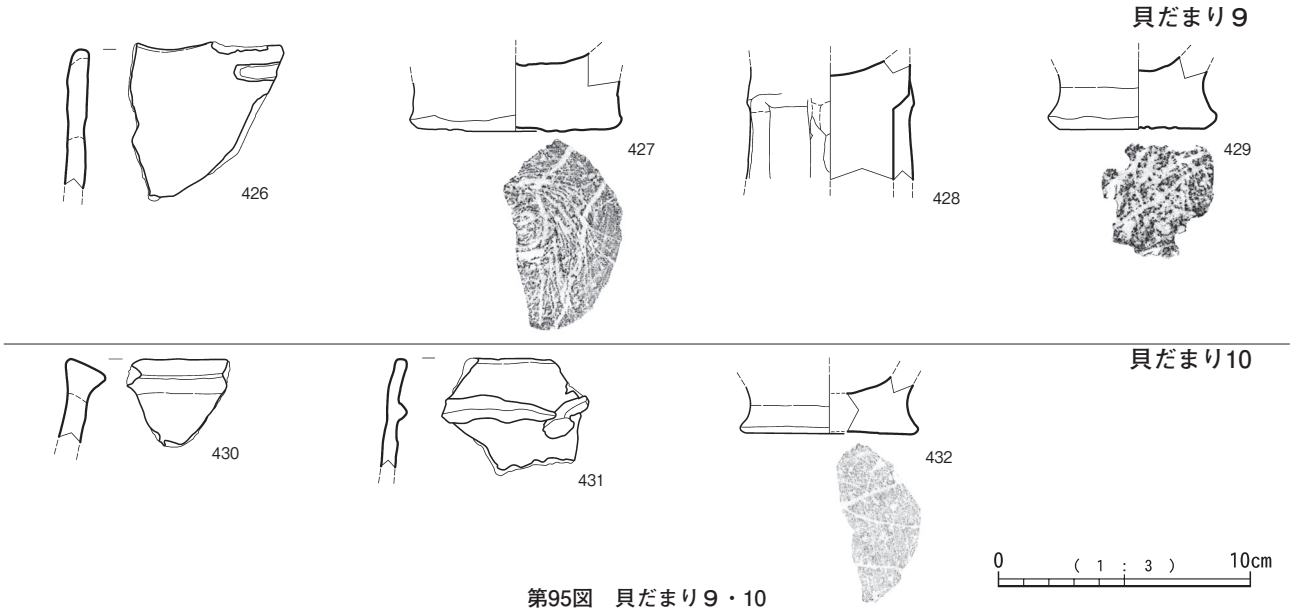
423は須恵器壺である。口縁部が破損している。

424は貝製品である。リュウキュウマスオガイの中央部に貫通穿孔がある。

425は石器である。スクレイパー状製品である。

貝だまり９（第95図，第27表）

H-98区で検出。約２mの範囲に遺物が広がっていた。



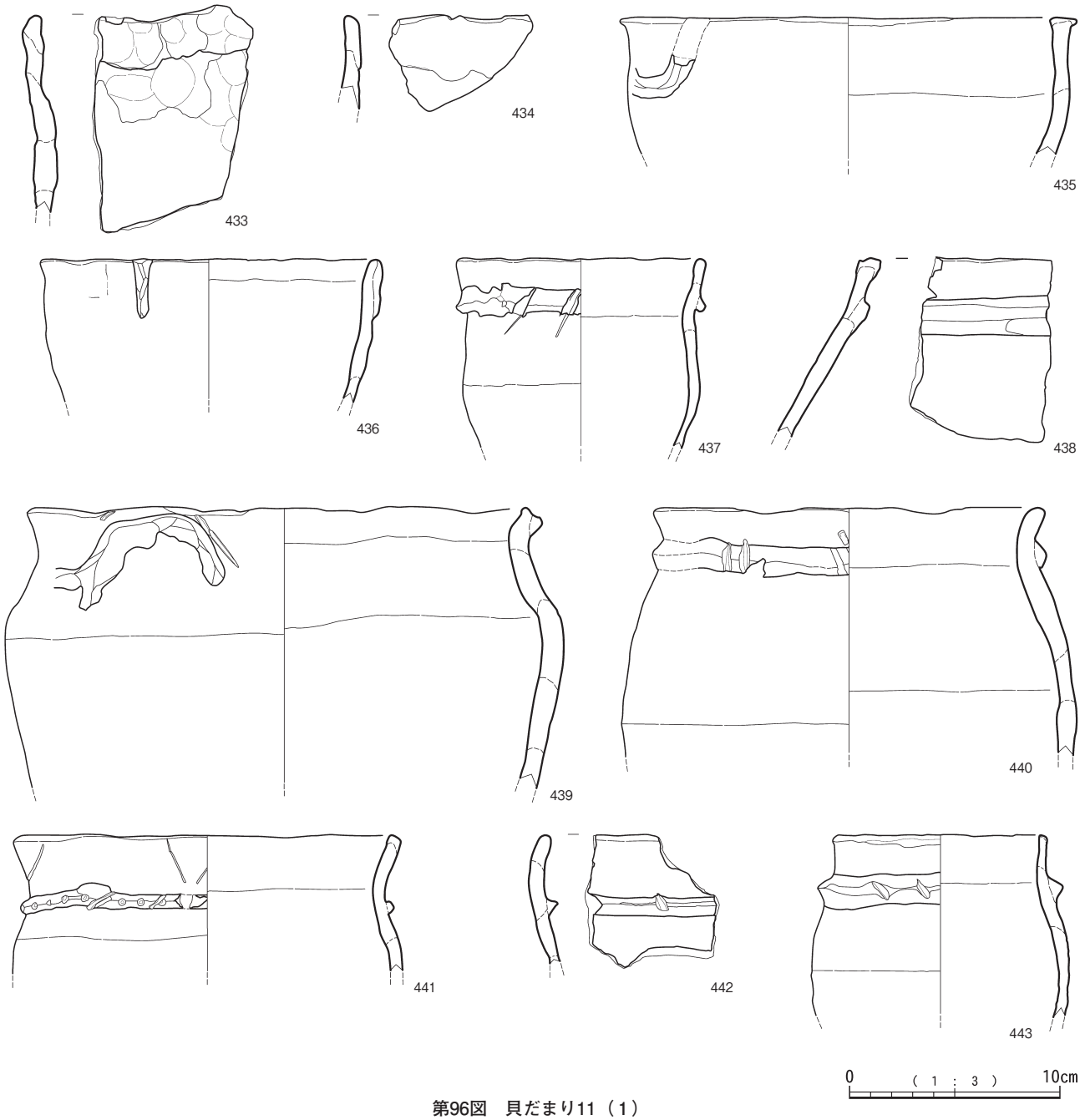
第95図　貝だまり９・10

第28表　貝だまり出土遺物観察表（４）

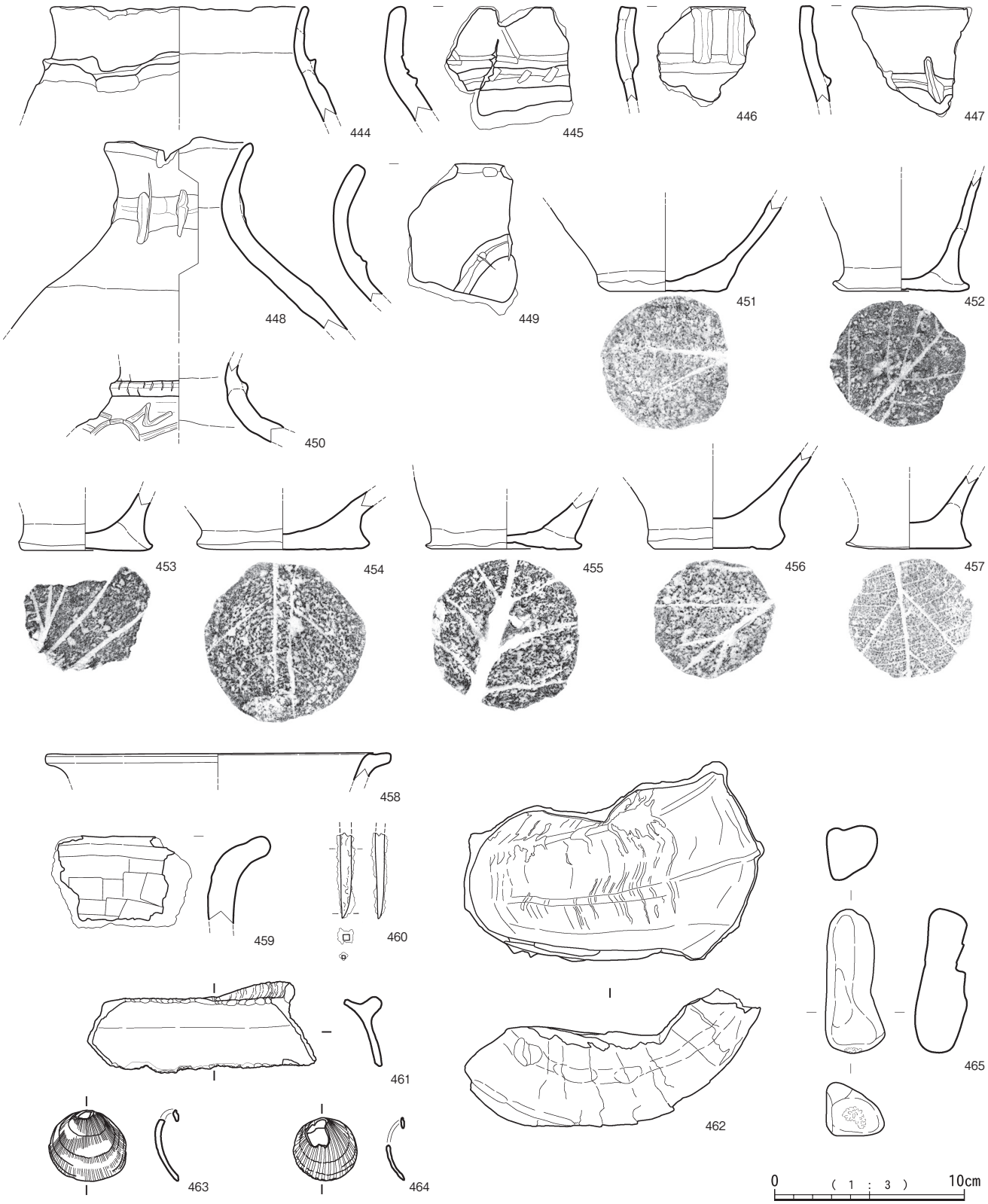
図番号	掲載番号	遺構名	区	層	種類	器種(最大長)	部位(最大幅)	口/底径(最大厚)	分類L1	分類L2	重量(g)	土質	備考
第95図	431	貝だまり10	K98	-	兼久式土器	甕	口縁	-	③	丸状	-	泥質	-
	432	貝だまり10	K98	-	兼久式土器	甕	底部	6.1	-	-	-	砂質	-
第96図	433	貝だまり11	J96	Ⅳ	兼久式土器	甕	口縁	-	③	丸状	-	泥質	粗雑。
	434	貝だまり11	-	4889	兼久式土器	壺	口縁	-	外反	丸状	-	泥質	-
	435	貝だまり11	J96	Ⅳ	兼久式土器	甕	口縁	20.0	②	方形状	-	泥質	-
	436	貝だまり11	J96	5851	兼久式土器	甕	口縁	16.1	③	舌状	-	泥質	-
	437	貝だまり11	-	4945	兼久式土器	甕	口縁	11.3	①	丸状	-	泥質	-
	438	貝だまり11	J96	Ⅳ	兼久式土器	甕×鉢	口縁	-	⑥	方形状	-	泥質	凸帯の下部のみ丁寧にナデ。
	439	貝だまり11	-	5173	兼久式土器	甕	口縁	23.5	①	丸状	-	泥質	-
	440	貝だまり11	J96	Ⅳ	兼久式土器	甕	口縁	18.0	①	丸状	-	砂質	-
	441	貝だまり11	J96	Ⅳ	兼久式土器	甕	口縁	17.8	①	丸状	-	砂質	-
	442	貝だまり11	J96	Ⅳ	兼久式土器	甕	口縁	-	①	丸状	-	砂質	-
	443	貝だまり11	J96	5501	兼久式土器	甕	口縁	9.6	①	丸状	-	泥質	-
第97図	444	貝だまり11	-	5115	兼久式土器	甕	口縁	13.4	①	丸状	-	泥質	-
	445	貝だまり11	J96	Ⅳ	兼久式土器	甕	口縁	-	①	方形状	-	砂質	-
	446	貝だまり11	-	5592	兼久式土器	甕	口縁	-	①	方形状	-	泥質	-
	447	貝だまり11	-	4895	兼久式土器	甕	口縁	-	①	方形状	-	泥質	-
	448	貝だまり11	-	4888	兼久式土器	壺	口縁	7.6	外反	丸状	-	泥質	片口
	449	貝だまり11	-	4887	兼久式土器	壺	口縁	-	外反	丸状	-	泥質	ﾄﾞｯﾄ4893･4894と接合。片口。
	450	貝だまり11	-	5177	兼久式土器	壺	胴部	6.2	-	-	-	泥質	-
	451	貝だまり11	-	5113	兼久式土器	甕	底部	5.6	-	-	-	泥質	-
	452	貝だまり11	-	5109	兼久式土器	甕	底部	5.9	-	-	-	泥質	-
	453	貝だまり11	J96	5515	兼久式土器	甕	底部	5.9	-	-	-	泥質	破断面擦痕有
	454	貝だまり11	-	5543	兼久式土器	甕	底部	7.1	-	-	-	泥質	-
	455	貝だまり11	-	5583	兼久式土器	甕	底部	7.5	-	-	-	泥質	-
	456	貝だまり11	-	5167	兼久式土器	甕	底部	5.9	-	-	-	泥質	-
	457	貝だまり11	-	5106	兼久式土器	甕	底部	5.0	-	-	-	泥質	-
	458	貝だまり11	J96	Ⅳ	須恵器	壺	口縁	18.0	-	-	-	-	-
	459	貝だまり11	J96	Ⅳ	土師器	甕	口縁	-	外反	-	-	砂質	胎土４
	460	貝だまり11	J96	5837	鉄製品	-	-	-	釘	-	-	-	-
	461	貝だまり11	J96	-	貝製品	-	-	-	ﾔｺｳｶﾞｲ	-	-	-	未製品か。
	462	貝だまり11	-	5350	貝製品	-	-	-	ﾔｺｳｶﾞｲ	-	-	-	一部研磨有
	463	貝だまり11	J96	-	貝製品	-	-	-	ﾄﾄﾞﾛｷｶﾞｲ	-	-	-	貫通穿孔 (1)
	464	貝だまり11	J96	-	貝製品	-	-	-	ｳﾁﾜｶﾞｲ	-	-	-	貫通穿孔 (1)
	465	貝だまり11	J96	5608	石器	(7.7)	(3.2)	(2.8)	敲石	細粒砂岩	83	-	-
第98図	466	貝だまり11	J96	5594	石器	(15.5)	(18.5)	(5.8)	石皿	細粒砂岩	2290	-	-
	467	貝だまり11	J96	5214	石器	(7.7)	(6.1)	(3.3)	石斧	緑色岩	249	-	磨製石斧。
	468	貝だまり11	J96	-	石器	(5.4)	(5.4)	(2.9)	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	粗粒砂岩	95	-	-

貝だまり11検出状況（1）

貝だまり11検出状況（2）



第96図　貝だまり11（1）



第97図　貝だまり11（2）

426は直口し，口縁部がやや厚みを持つ資料である。427は粘土が柔らかいうちに２回貼りつけたようで，通常の木葉痕と反時計回りに回転させた模様がついている。428は底部である。円柱状の充実高台に縦突帯が貼り付けられている。

貝だまり10（第95図，第27･28表）

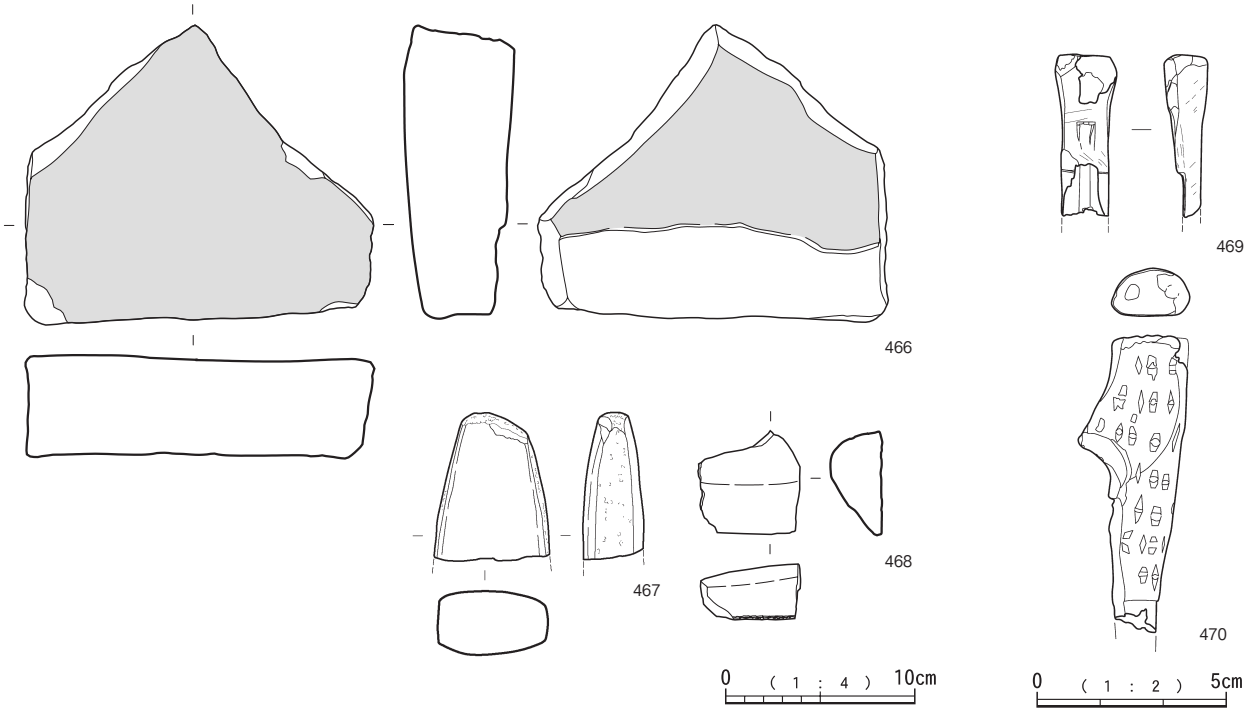
K-97区で検出。約４mの範囲に遺物が広がっていた。

430は口縁が断面三角形状を呈する土器である。

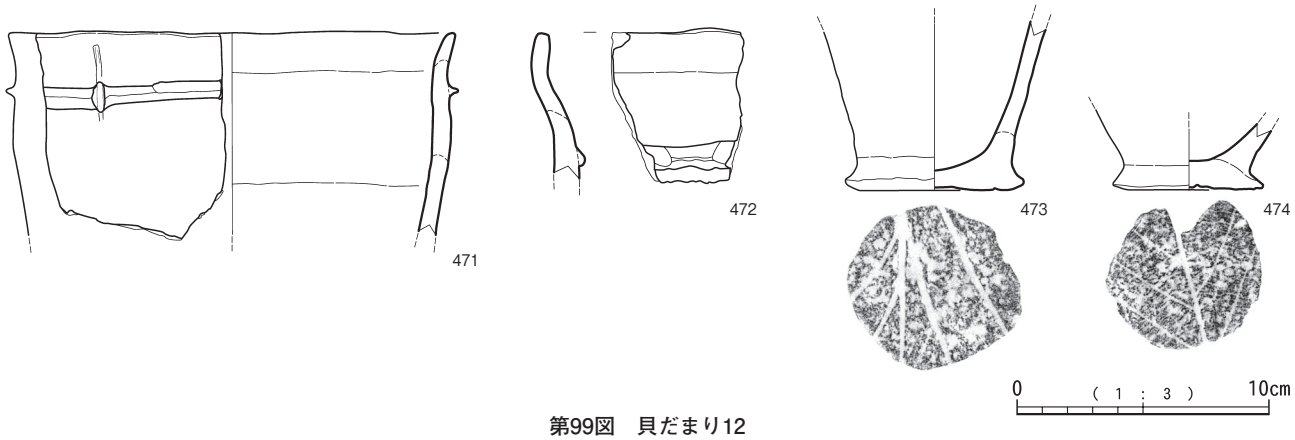
貝だまり11（第96～98図，第28表）

J-96区で検出。約８mの範囲に遺物が広がっていた。

433・434は粘土の凸凹が多くみられ，粘土紐によって突



第98図　貝だまり11（3）



第99図　貝だまり12

帯感を出している資料である。

435～457は兼久式土器である。435は口縁を平らに成形し，U字状の突帯を貼り付けている。439～444は胴部に最大径を持つ資料である。439は逆U字型に貼り付けがあり，突帯文に沿うように沈線文も施されている。441は突帯に竹菅文様の小型円形の刺突後，ラフな斜沈線が入っている。第１文様帯にはわずかに斜沈線が施される。446は縦に２条の突帯が貼り付けられ，口唇部は平坦である。448～450は壺である。448は注口である。451～457は底部である。

458は須恵器の口縁部である。459は土師器甕である。

460は鉄製品である。断面が方形で先端が尖っている。

461～464は貝製品である。461はヤコウガイの端部を連続打割し，長方形状に成形している。形態・雰囲気はⅢ層出土ヤコウガイ製品(336)に類似している。462は粗割のヤコウガイである。破断面の一部が擦れている。

465～468は石器である。465は敲石である。先端部に打痕が見られる。

469･470は骨製品である。469は貝だまり５(386)にも類似品がある。470はイノシシの尺骨を用いた製品である。文様は鋭利なもので加工されており，目のように見える。上面から背面にかけて貫通穿孔が２か所あり，紐などを通し提げられるようになっていたとみられる。全面丁寧に研磨されており，先端には段がつけれらている。同じ模様を施している資料は他にはなく，唯一の資料である。

貝だまり12（第99図，第29表）

H-96区で検出。約７mの範囲に遺物が広がっていた。

471～474は兼久式土器である。471は頸部に，472は胴部付近に突帯が貼り付けられている。473･474は底部である。

（２）Ⅳ層出土遺物

包含層出土遺物に関してグリッドごとに報告する。

H-96区（第100図，第29表）

第29表　貝だまり・Ⅳ層出土遺物観察表

図番号	掲載番号	遺構名	区	層	種類	器種(最大長)	部位(最大幅)	口/底径(最大厚)	分類L1	分類L2	重量(g)	土質	備考
第98図	469	貝だまり11	J96	-	骨製品	-	-	-	特殊	-	-	-	-
	470	貝だまり11	J96	-	骨製品	-	-	-	垂飾品	-	-	-	模様が瞳状に見える。特殊垂飾品
第99図	471	貝だまり12	-	4692	兼久式土器	甕	口縁	17.6	③	丸状	-	泥質	-
	472	貝だまり12	-	4703	兼久式土器	甕	口縁	-	①	丸状	-	泥質	-
	473	貝だまり12	-	4707	兼久式土器	甕	底部	6.0	-	-	-	泥質	-
	474	貝だまり12	-	4662	兼久式土器	甕	底部	4.9	-	-	-	泥質	-
第100図	475	-	H96	Ⅳ	兼久式土器	甕	口縁	18.4	④	丸状	-	泥質	-
	476	-	H96	Ⅳ	兼久式土器	甕	口縁	9.9	①	丸状	-	泥質	-
	477	-	H96	Ⅳ	兼久式土器	壺	底部	4.1	-	-	-	泥質	-
	478	-	H96	Ⅳ	兼久式土器	甕	底部	7.0	-	-	-	砂質	葉の形状が異なる
	479	-	H96	Ⅳ	貝製品	-	-	-	巻貝	-	-	-	３方から擦られる
	480	-	H96	Ⅳ	鉄製品	-	-	-	袋状鉄斧	-	-	-	板状
	481	-	H96	Ⅳ	鉄製品	-	-	-	-	-	-	-	板状
	482	-	H96	Ⅳ	石器	(9.7)	(5.3)	(2.6)	石斧	変成岩4	190	-	-
	483	-	H96	Ⅳ	古銭	開元通寶	-	-	-	-	2.4	-	-
	484	-	I96	Ⅳ	兼久式土器	甕	口縁	18.6	①	方形状	-	泥質	-
	485	-	I96	Ⅳ	兼久式土器	甕	口縁	-	③	丸状	-	砂質	-
	486	-	I96	Ⅳ	土製品	-	-	-	-	-	-	泥質	円盤状土製品
	487	-	I96	Ⅳ	兼久式土器	甕	底部	4.7	-	-	-	砂質	-
	488	-	I96	Ⅳ	兼久式土器	甕	底部	6.1	-	-	-	泥質	-
	489	-	I96	Ⅳ	兼久式土器	甕	底部	6.1	-	-	-	泥質	-
第101図	490	-	J96	Ⅳ	兼久式土器	甕	口縁	19.4	①	丸状	-	砂質	-
	491	-	J96	Ⅳ	兼久式土器	甕	口縁	13.6	⑥	丸状	-	泥質	-
	492	-	J96	Ⅳ	土製品	-	-	-	-	-	-	泥質	土錘状製品
	493	-	J96	5226	鉄製品	-	-	-	釣針	-	-	-	-
	494	-	J96	Ⅳ	鉄製品	-	-	-	釣針	-	-	-	-
	495	-	J96	Ⅳ	銅製品	-	-	-	板状	-	9.9	-	模様？有
	496	-	J96	Ⅳ	貝製品	-	-	-	ｲﾓｶﾞｲ科	-	-	-	-
	497	-	J96	Ⅳ	貝製品	-	-	-	ﾒﾝｶﾞｲ	-	-	-	-
	498	-	J96	Ⅳ	貝製品	-	-	-	ﾄﾄﾞﾛｷｶﾞｲ	-	-	-	-
	499	-	J96	Ⅳ	貝製品	-	-	-	ｳﾁﾜｶﾞｲ	-	-	-	-
	500	-	J96	Ⅳ	骨製品	-	-	-	-	-	-	-	扁平。ヘラ状先端。
	501	-	J96	5595	石器	(11.5)	(19.0)	(6.8)	ｹｶﾞﾆｲｼ	細粒砂岩	2400	-	-
	502	-	J96	5597	石器	(10.9)	(9.4)	(6.8)	磨敲石	粗粒砂岩	1118	-	-
	503	-	J96	940	石器	(11.0)	(8.0)	(5.9)	敲石	細粒砂岩	643	-	-
第102図	504	-	K96	Ⅳ	兼久式土器	土製品	-	-	-	-	-	泥質	円盤状土製品
	505	-	K96	Ⅳ	石器	(10.7)	(5.7)	(2.7)	不明石製品	頁岩	230	-	敲打具か
	506	-	L96	975	貝製品	-	-	-	ﾒﾝｶﾞｲ	-	-	-	貫通穿孔(1)
	507	-	L96	Ⅳ	貝製品	-	-	-	ｵｵﾍﾞｯｺｳｶﾞｻ	-	-	-	貫通穿孔(1)
	508	-	M96	Ⅳ	兼久式土器	甕	口縁	-	⑥	方形状	-	砂質	-
	509	-	M96	Ⅳ	トドロキガイ	-	-	-	-	-	-	-	貫通穿孔(1)
	510	-	JK96	6572	貝製品	-	-	-	ﾔｺｳｶﾞｲ	-	-	-	貝匙未製品，連続打割，肋除去
	511	-	I97	Ⅳ	石器	(17.2)	(13.2)	(6.9)	台石	細粒砂岩	2640	-	鉄付着
	512	-	K97	Ⅳ	兼久式土器	甕	口縁	17.0	①	丸状	-	泥質	凸帯？瘤状に少し盛り上がる
	513	-	K97	5233	兼久式土器	甕	胴部	13.3	-	-	-	泥質	-
	514	-	K97	4601	兼久式土器	壺	口縁	5.0	-	丸状	-	泥質	頸部に沈線文
	515	-	J96	Ⅳ	銅製品	-	-	-	-	-	-	-	先端蛤刃状
	516	-	K97	Ⅳ	貝製品	-	-	-	ﾏｶﾞｷｶﾞｲ	-	-	-	殻頂部，磨滅
	517	-	K97	Ⅳ	貝製品	-	-	-	ﾁｮｳｾﾝｻｻﾞｴ	-	-	-	-
第103図	518	-	K97	6905	石器	(8.0)	(9.8)	(9.0)	球状	粗粒砂岩	1048	-	自然面が一部残る
	519	-	K97	Ⅳ	軽石製品	(5.0)	(3.8)	(3.4)	不明	軽石	11	-	ヨーヨー型
	520	-	L97	4602	兼久式土器	甕	口縁	19.3	②	丸状	-	泥質	-
	521	-	L97	Ⅳ	兼久式土器	甕	口縁	-	④	方形状	-	砂質	-
	522	-	L97	Ⅳ	兼久式土器	甕	口縁	-	①	方形状	-	砂質	-

475～478は兼久式土器である。476は小型の土器である。凸凹が目立つ。478はこれまでに見られた底部の木葉痕とは異なる資料である。

480・481は鉄製品である。480は袋状鉄斧である。刃部は弧状で両刃である。

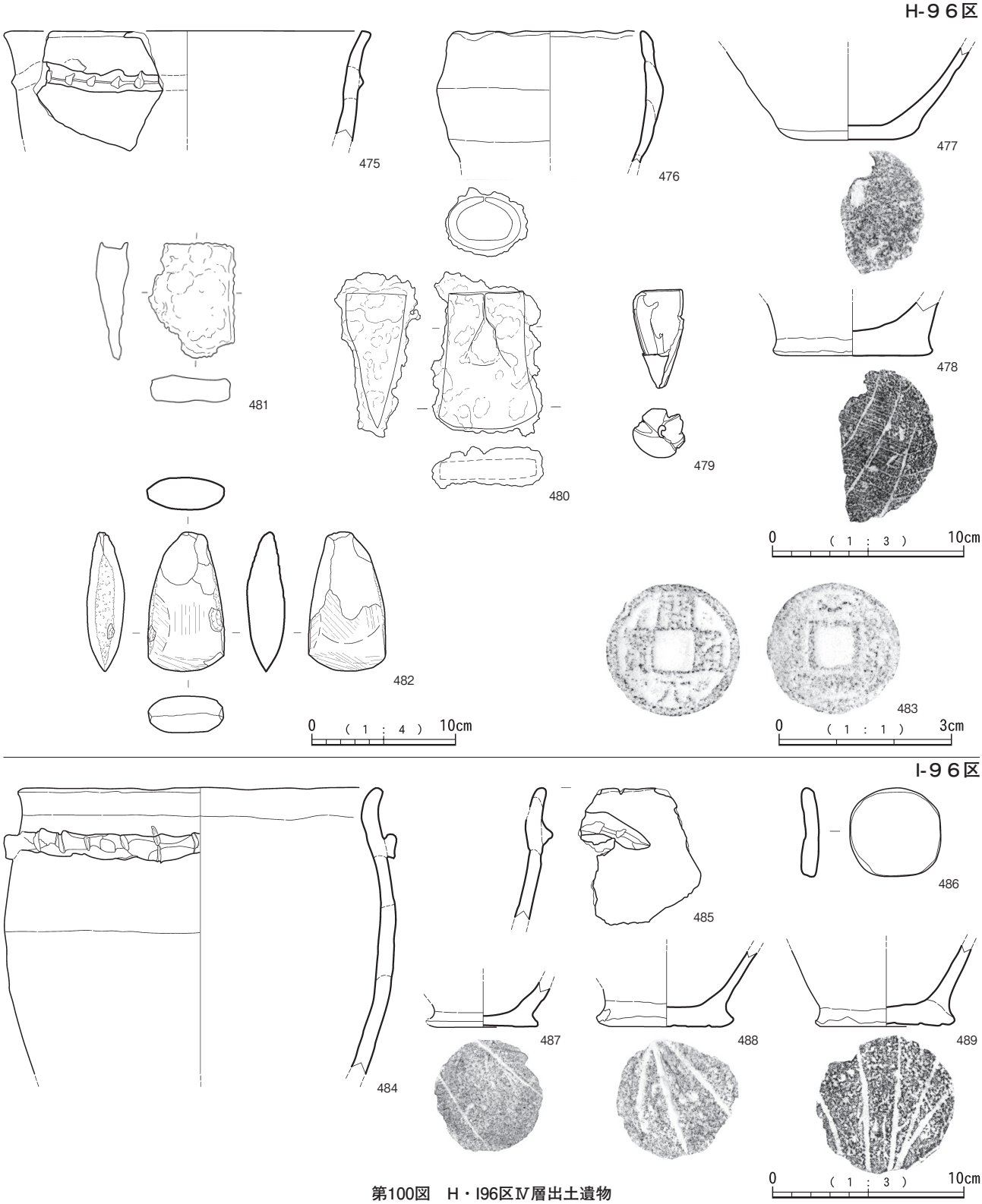
482は基部が狭まる小型の石斧である。483は開元通寶である。背面には上月が見られる。

I-96区（第100図，第29表）

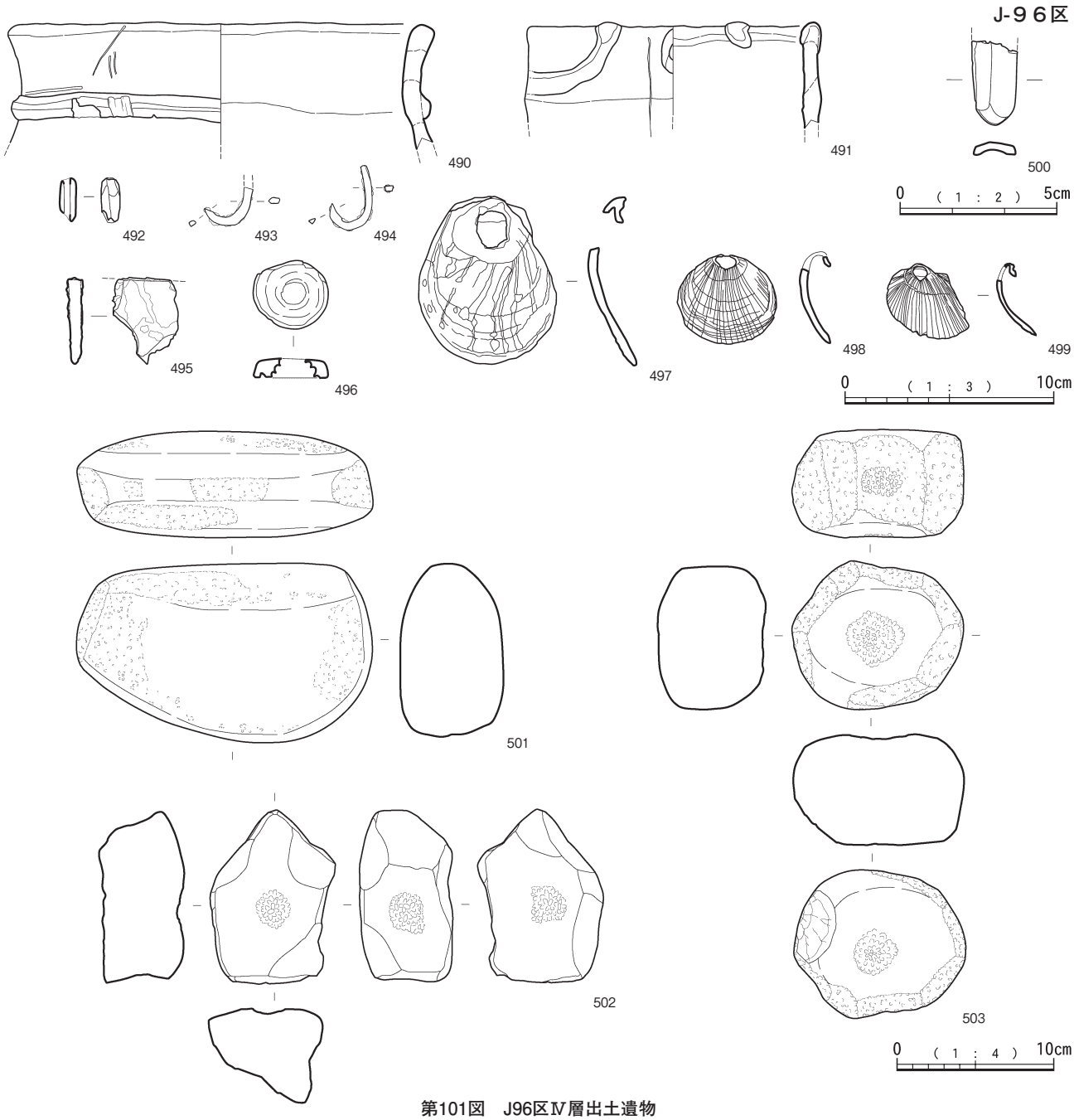
484～489は兼久式土器である。484は口径18.6cmを測る。頸部はあまりくびれない。刻目突帯が貼り付けられている。487～489は底部である。486は土製品である。

J-96区（第101図，第29表）

490・491は兼久式土器である。490は第１文様帯にも浅



第100図　H・I96区Ⅳ層出土遺物



第101図　J96区Ⅳ層出土遺物

く沈線文が施されている。492は中央部に貫通穿孔がある土垂である。

493・494は鉄製の釣針である。495は板状の銅製品である。鏡などの破片の可能性もある。

496～499は貝製品である。いずれも貫通穿孔がある。

501～503は石器である。501は細粒砂岩製のクガニイシである。敲打と研磨で一方側面を細く加工している。稜についても同様の技法で整形している。502・503は各面の中央付近に打痕が見られる。

K-96区（第102図，第29表）

504は土製品である。多角形である。505は頁岩を石材とする不明石製品である。先端部は剥離している。

L-96区（第102図，第29表）

506はメンガイ製品である。507はオオベッコウガサ製の製品である。貝の両端が擦られ，直線的になっている。

M-96区（第102図，第29表）

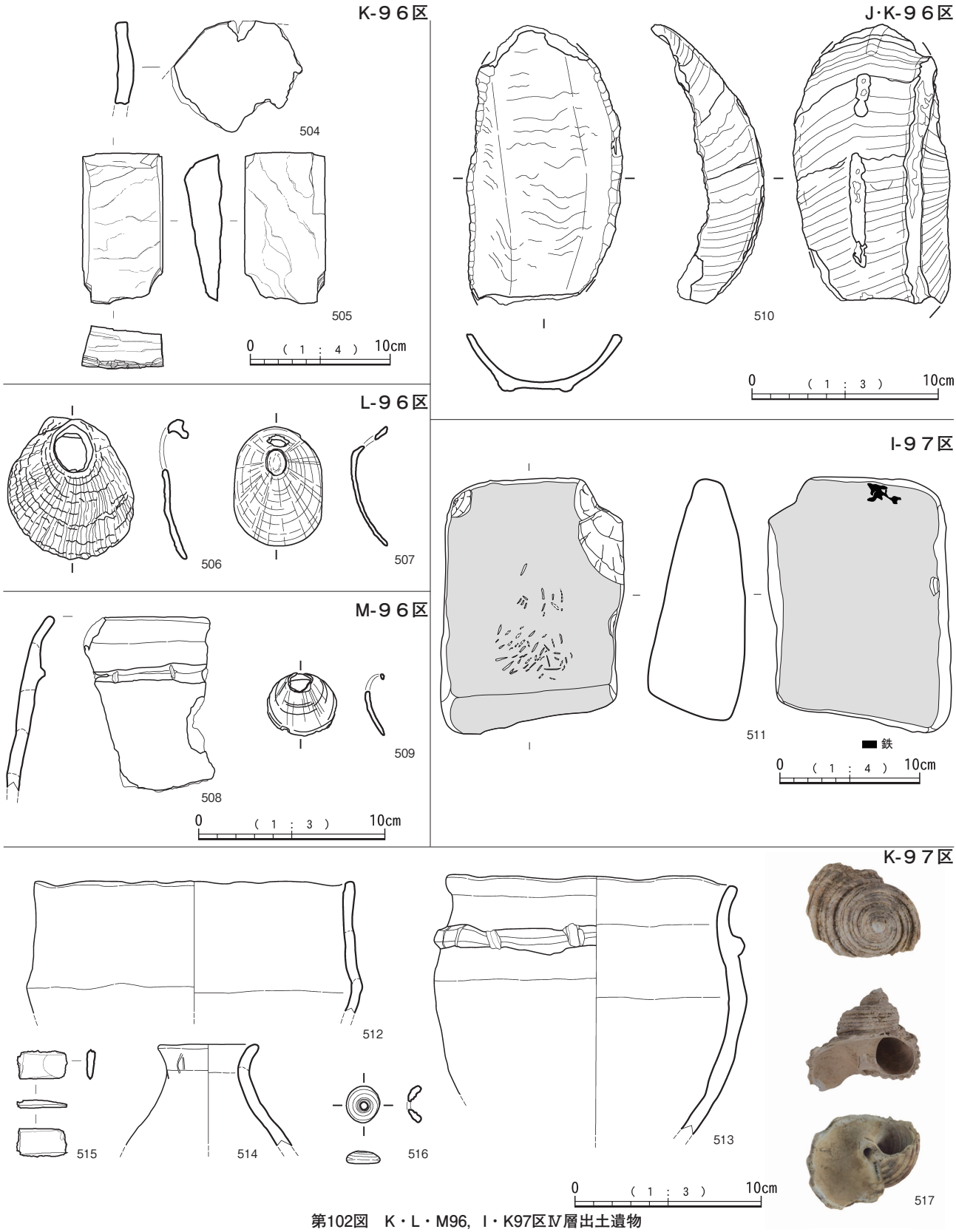
508は兼久式土器である。やや開く器形をしている。509はトドロキガイ製品である。

J・K-96区（第102図，第29表）

510はヤコウガイ未製品である。螺肋の部分を削って成形している。端部は連続打割が見られる。

I-97区（第102図，第29表）

511は細粒砂岩製の台石である。表面は平滑であり、先の



第102図　K・L・M96，I・K97区Ⅳ層出土遺物

尖った道具の敲打痕が集中する箇所がある。縁辺部に鉄の付着が確認できる。

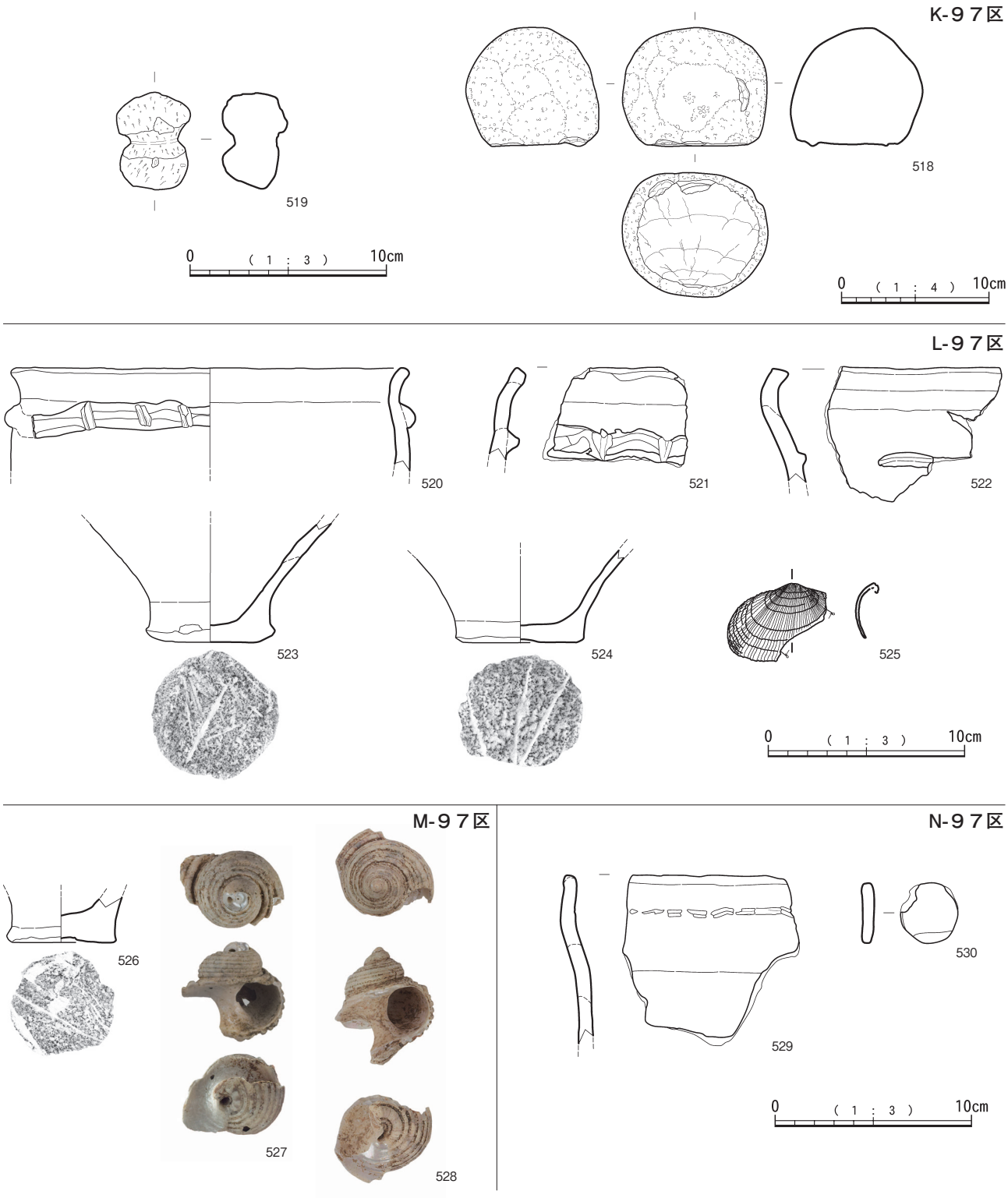
K-97区（第102･103図，第29表）

512～514は兼久式土器である。512は口縁が直線的なもので513はやや外反する資料である。

515は銅製品で刃部状に尖っている所がある。

516・517は貝製品である。517はチョウセンサザエの胴部片を擦っている。

518・519は石器である。518は球状の石器で一部が割れて平坦になっている。519は軽石製で中央部が凹んでいる。



第103図　K～N97区Ⅳ層出土遺物

L-97区（第103図，第29・30表）

520～524は兼久式土器である。520は口径19.3cmを測る大型の甕である。523はラッパ状に開く底部である。

525はリュウキュウマスオガイの胴部を擦っている資料である。

M-97区（第103図，第30表）

526は兼久式土器の底部である。

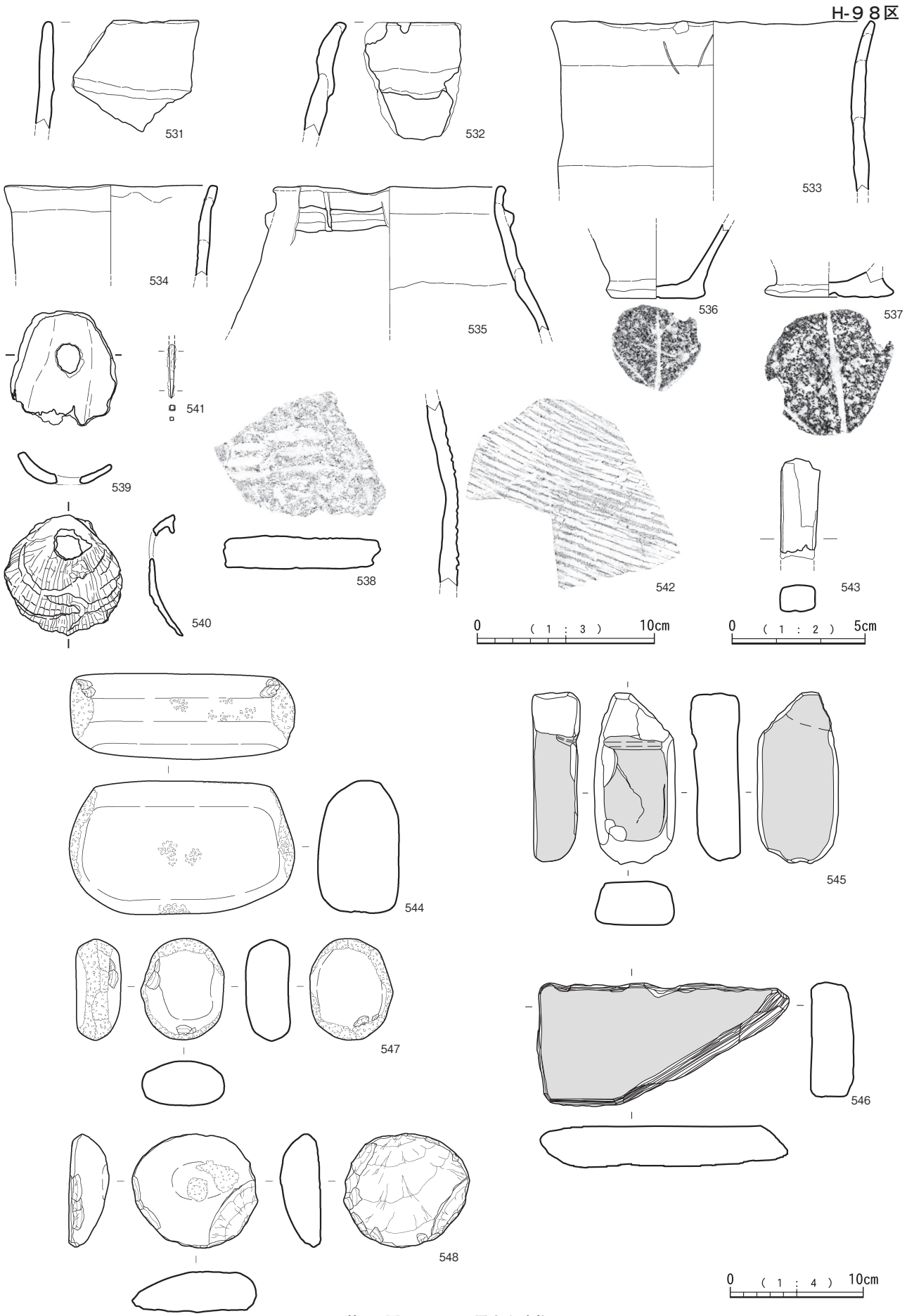
527・528はチョウセンサザエ製の製品である。貝の腹部のみが摩滅し，丸くなっている。

N-97区（第103図，第30表）

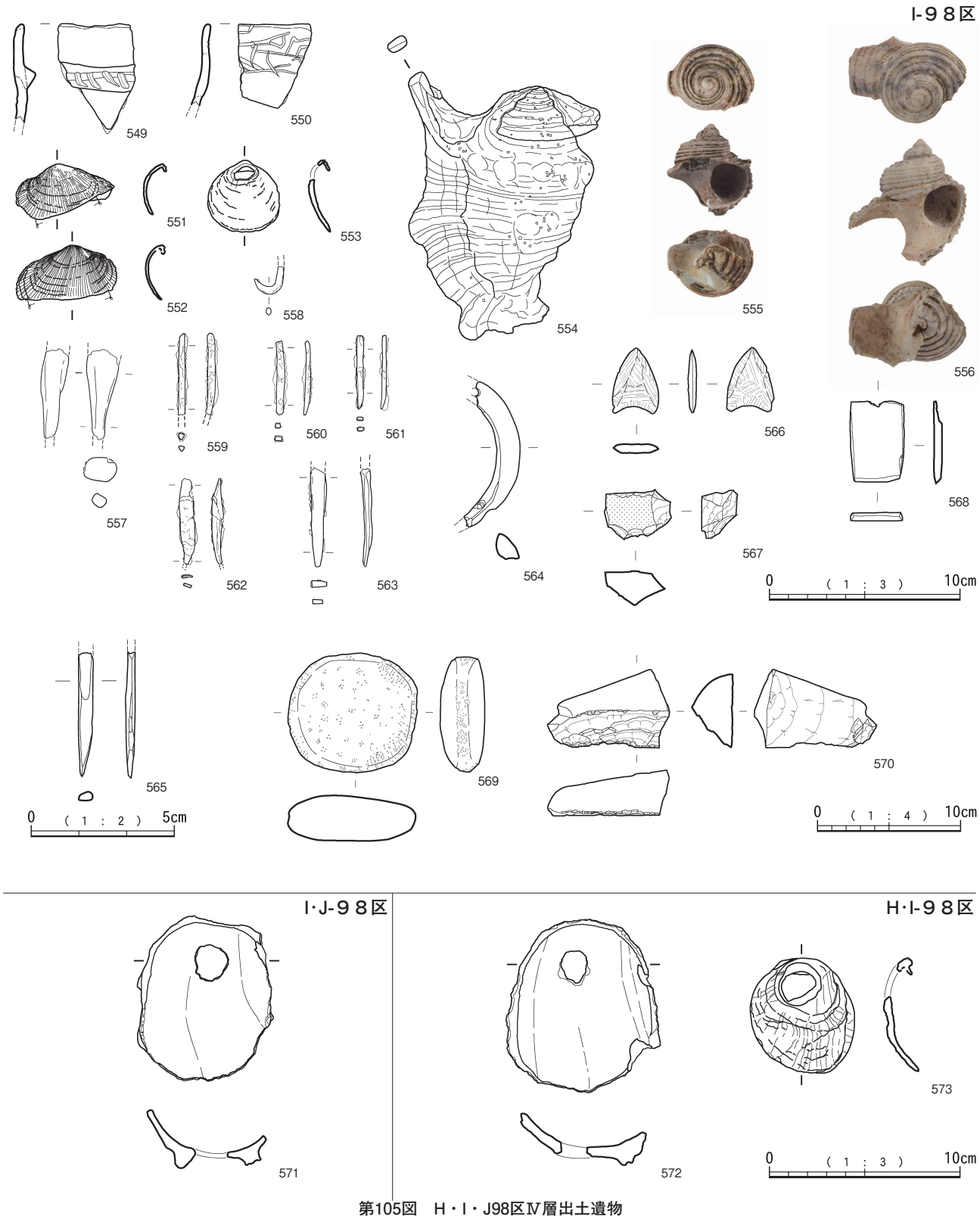
529は兼久式土器の口縁部である。頸部に２又状工具で施文している。530は円盤状の土製品である。

H-98区（第104図，第30表）

531～537は兼久式土器である。531は口縁下にわずかな凸起がある。532は粘土の貼り付け部分をわざと残し，突帯



第104図　H98区Ⅳ層出土遺物



第105図　H・I・J98区Ⅳ層出土遺物

風に見せている資料である。

535はほとんどくびれず内傾する壺である。

538は土盤である。内面に並行状の凹みが見られる。

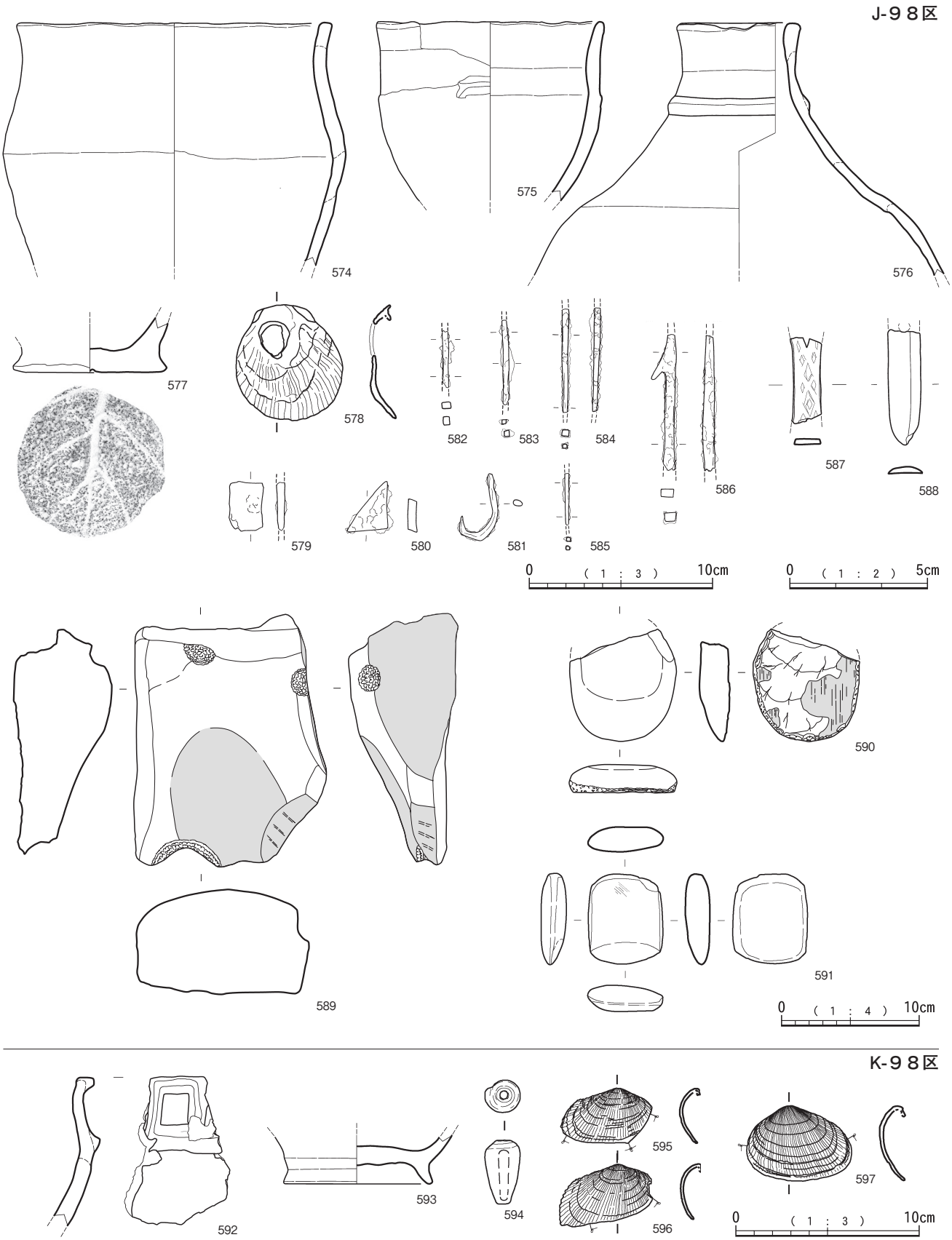
539･540は貝製品である。いずれも穿孔されている。

541は棒状鉄製品である。542は須恵器壺である。543は骨製品である。方形状に加工されている。

544～548は石器である。544はクガニイシである。研磨により一方側面を細くし稜を作っている。両側面が多く敲かれている。545は粗粒砂岩製の砥石である。浅い溝が１条横位に見られる。

I-98区（第105図，第30表）

549･550は兼久式土器である。550はラフに文様が描かれている。



第106図　J・K98区Ⅳ層出土遺物

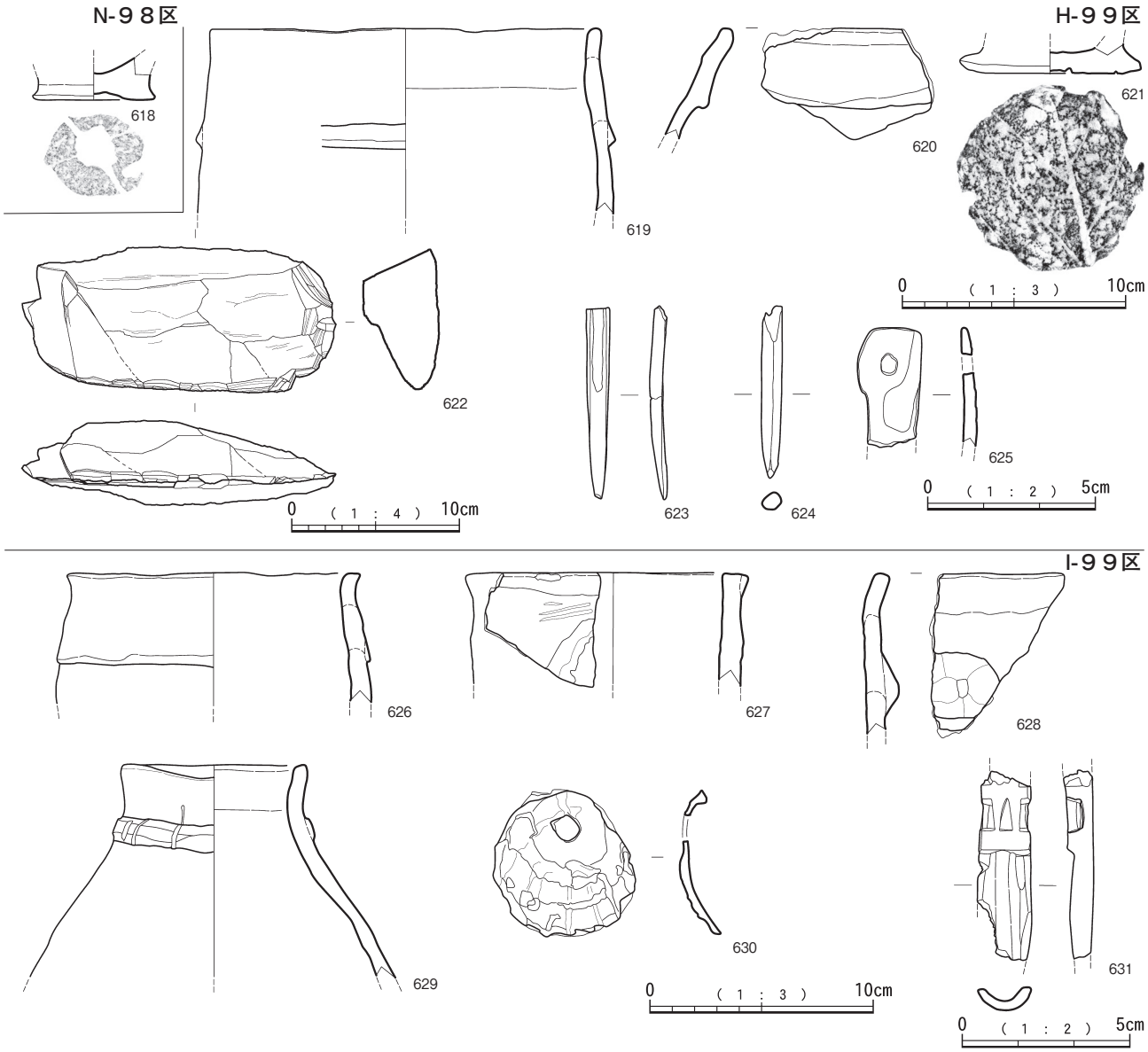
551～556は貝製品である。

557～563は鉄製品である。558は釣針である。559～563は鉄釘である。562･563は先端が扁平になっている。

564･565は骨製品である。564はイノシシの牙製品で基部と先端に１か所づつ穿孔がある。

566～570は石器である。566は磨製石鏃である。569はハマサンゴ製の敲石である。

第107図　L・M98区Ⅳ層出土遺物



第108図　N98，H・I99区Ⅳ層出土遺物

I・J-98区（第105図，第30表）

571は上部に穿孔がある。端部も連続打割されている。

H・I-98区（第105図，第30表）

572･573は穿孔を持つ貝製品である。

J-98区（第106図，第30･31表）

574～577は兼久式土器である。575はわずかな凸起をもつ資料で，一部には短い突帯が貼り付けられている。576は頸部に厚さの薄い突帯を頸部に貼り付けている。

578は貝製品である。メンガイ製で１か所穿孔がある。

579～586は鉄製品である。581は釣針，582～585は棒状，586は銛の先端である。

587は骨製品である。菱形の模様が対称に描かれている。上側には切込みも入れられている。

589～591は石器である。589は細粒砂岩製の石皿である。盃状の凹みが３箇所ある。590は裏側の平坦面が擦れている。591は方形の石斧的形状を持つが側面は滑らかで刃部を持たない。

K-98区（第106図，第31表）

592は兼久式土器である。方形状の突帯が方形状に口縁部に貼り付けられている。593は土師器椀の底部である。

594～597は貝製品である。

L-98区（第107図，第31表）

598～600は兼久式土器である。598は器壁が他のものよりやや厚い。短い突帯を貼り付けている。

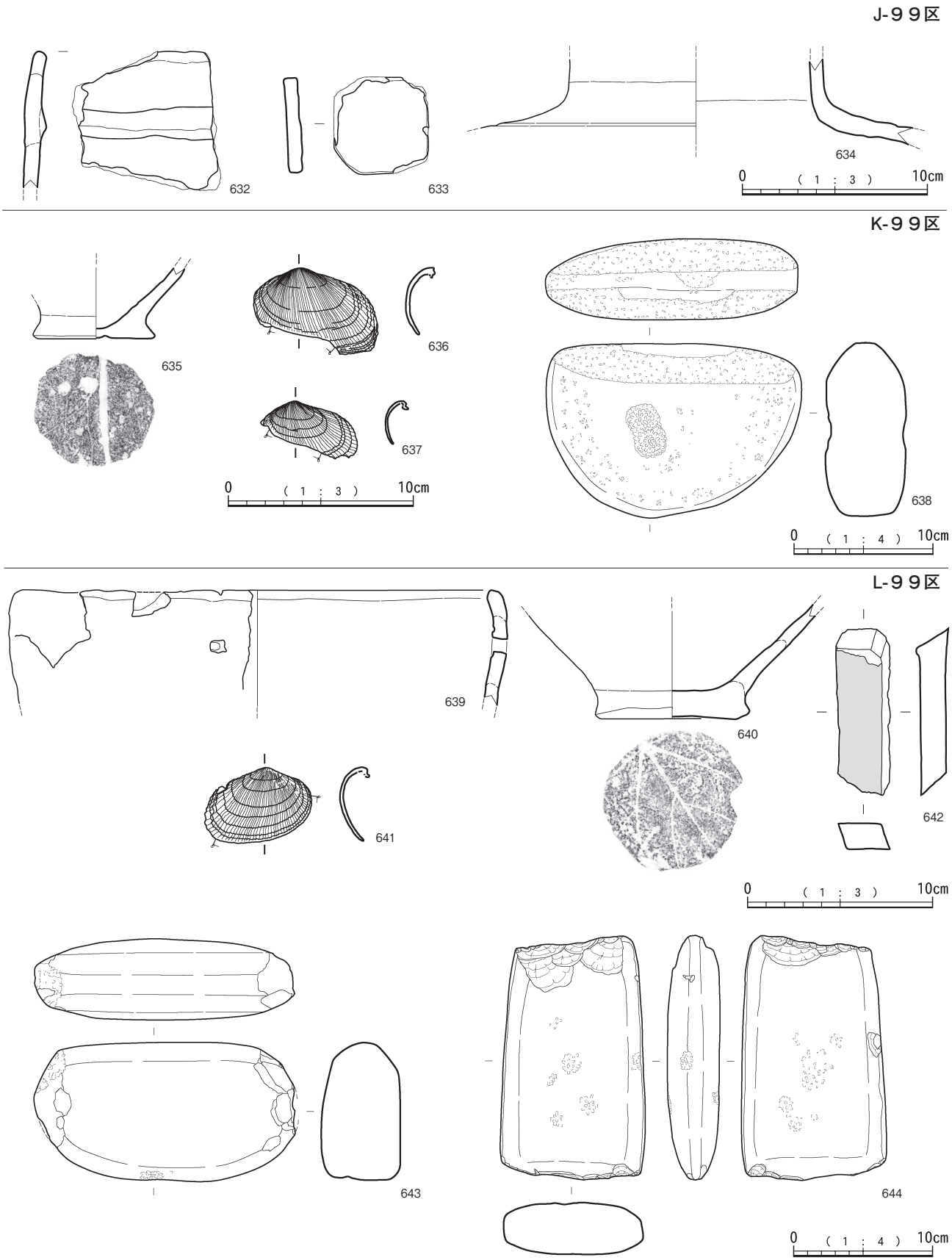
601は貝製品である。貫通穿孔が見られる。

602･603は石器である。602は石灰岩製の敲石である。

M-98区（第107図，第31表）

604～610は兼久式土器である。604は粘土をずらして成形し，突帯風にしている資料である。606は短い突帯の上・横に押し引き沈線文が施されている。610は壺の胴部かと思われる。Aに似た模様が描かれれいる。

611は土師器椀の口縁部である。612・613は鉄製品である。方形状の断面を持つ。



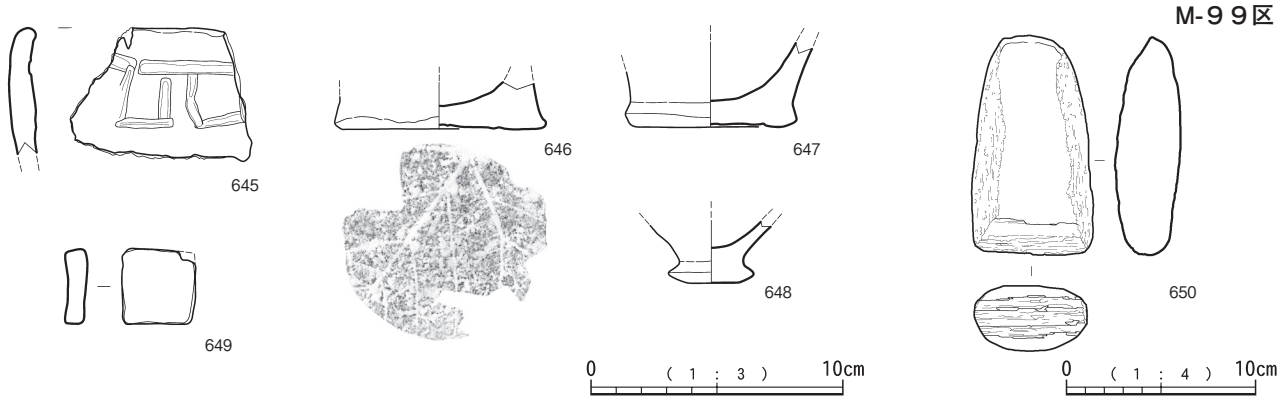
第109図　J・K・L99区Ⅳ層出土遺物

614は石器である。円盤状の小型製品である。

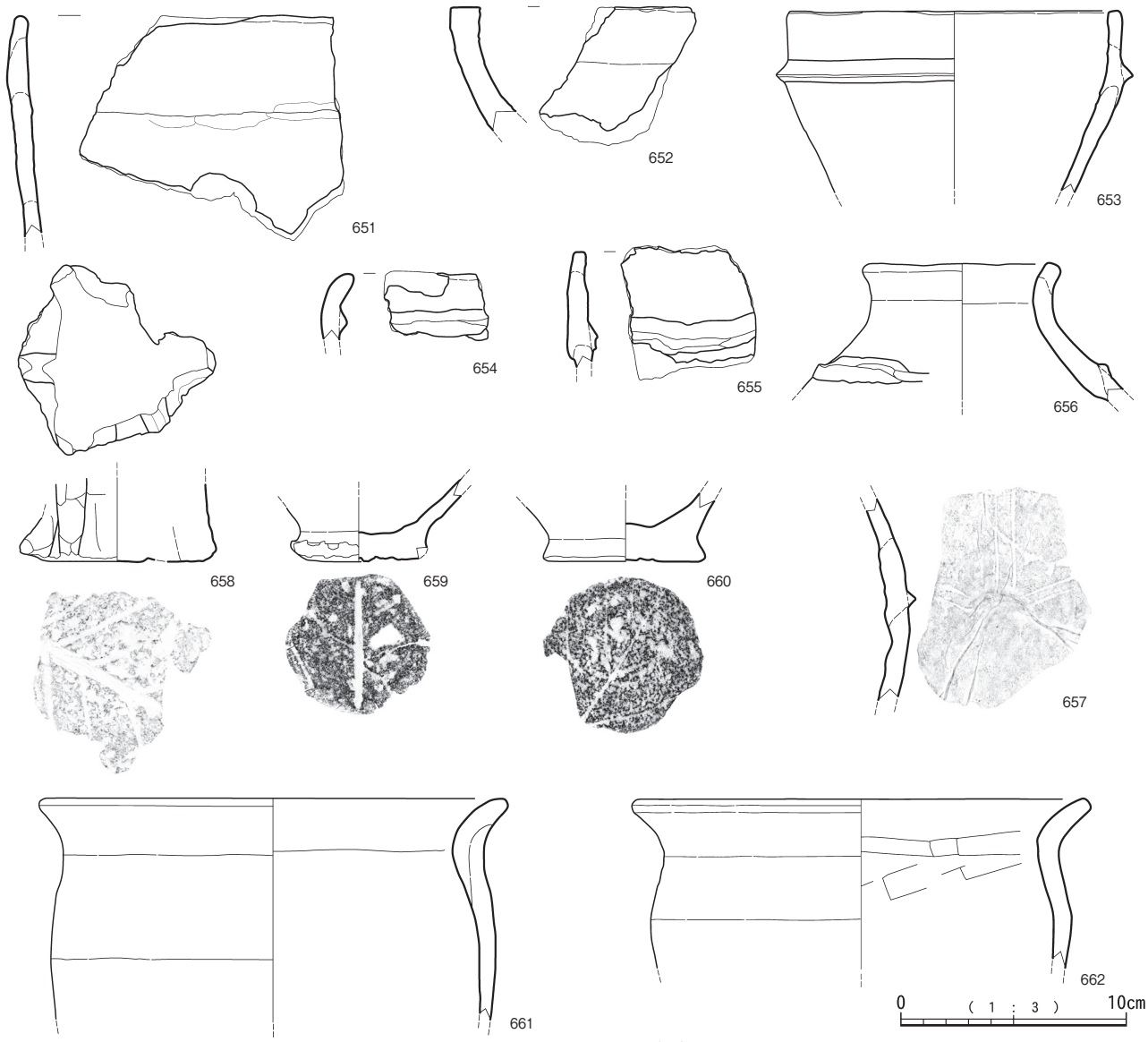
615～617は貝製品である。

N-98区（第108図，第31表）

618は兼久式土器の底部である。底面には凹みがあり，種子痕のように見える。



第110図　M99区Ⅳ層出土遺物



第111図　Ⅳ層出土遺物（1）

H-99区（第108図，第31･32表）

619～621は兼久式土器である。619は口縁が直口気味で，頸部のくびれがほとんど無く，胴部に突帯を持つ資料である。

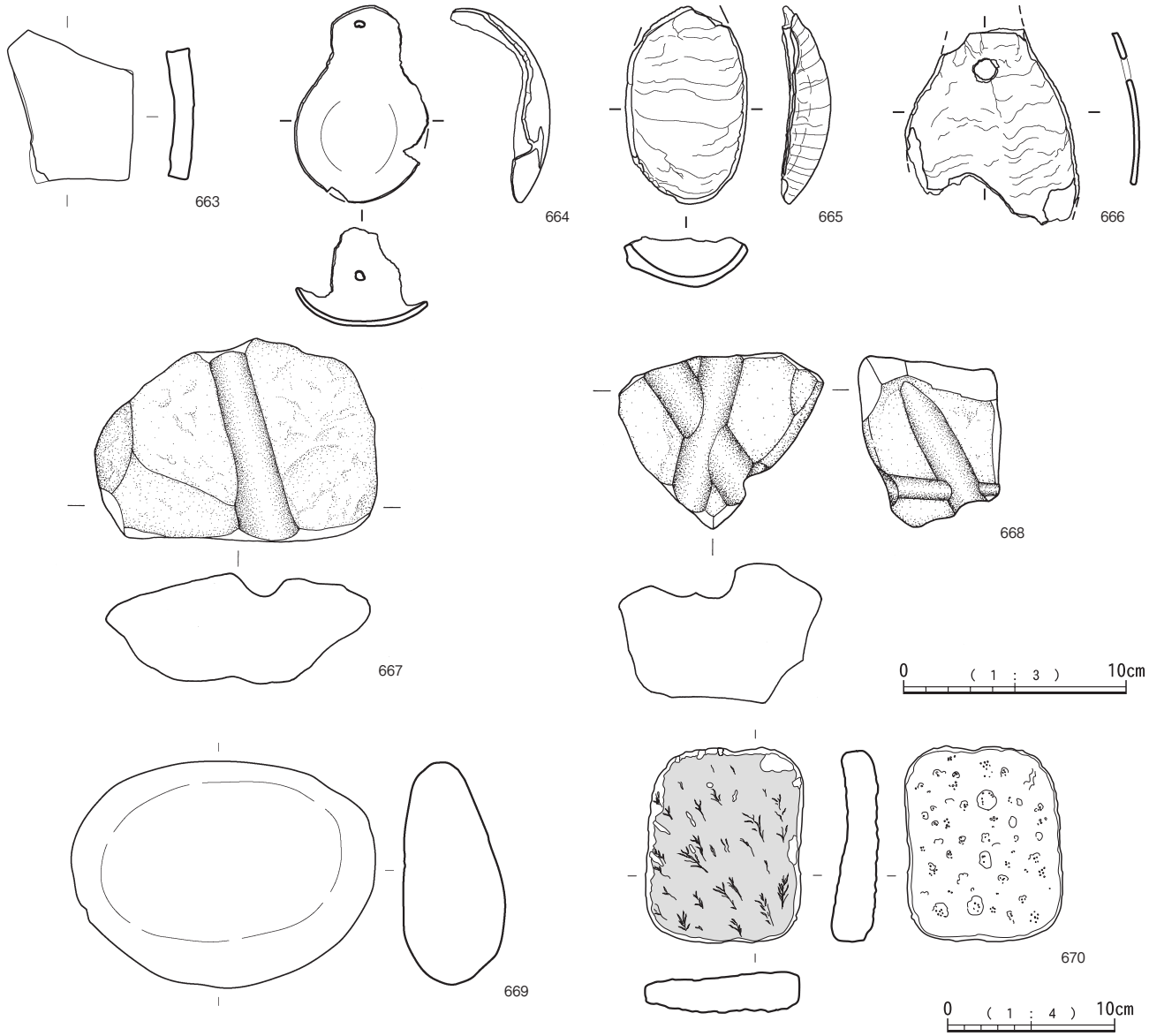
622は頁岩製の打製敲打具である。刃部は使用によりかけており、形状からは手斧的な用途が想定できる。

623・624は骨針状の製品である。

I-99区（第108図，第32表）

626･629は兼久式土器である。626は粘土をナデて段をつけている。627は口縁を短い逆L字型に成形している。

630はメンガイ製の貝製品である。



第112図　Ⅳ層出土遺物（2）

631は骨製品である。骨を切って形作ってる。類似する資料として貝だまり５(386)・貝だまり12(469)がある。

J-99区（第109図，第32表）

632は兼久式土器である。633は土製品である。８面体に加工したものとみられる。634は肩が張る大型の壺である。

K-99区（第109図，第32表）

635は兼久式土器の底部である。636･637はリュウキュウマスオガイの腹部の一部を擦った貝製品である。

638はDを横に倒したような形状をするクガニイシである。

L-99区（第109図，第32表）

639は内湾する土器である。復元径25.4cmを測る。貫通穿孔が１か所見られる。641は貝製品である。

642～644は石器である。644は不明石製品である。長方形のプレート型を呈する。磨製だが、全体的に荒さが残る。

M-99区（第110図，第32表）

645～649は兼久式土器である。645は弱い沈線で施文されている。649は方形状の土製品である。

650は頁岩製の石斧である。刃部は摩耗している。

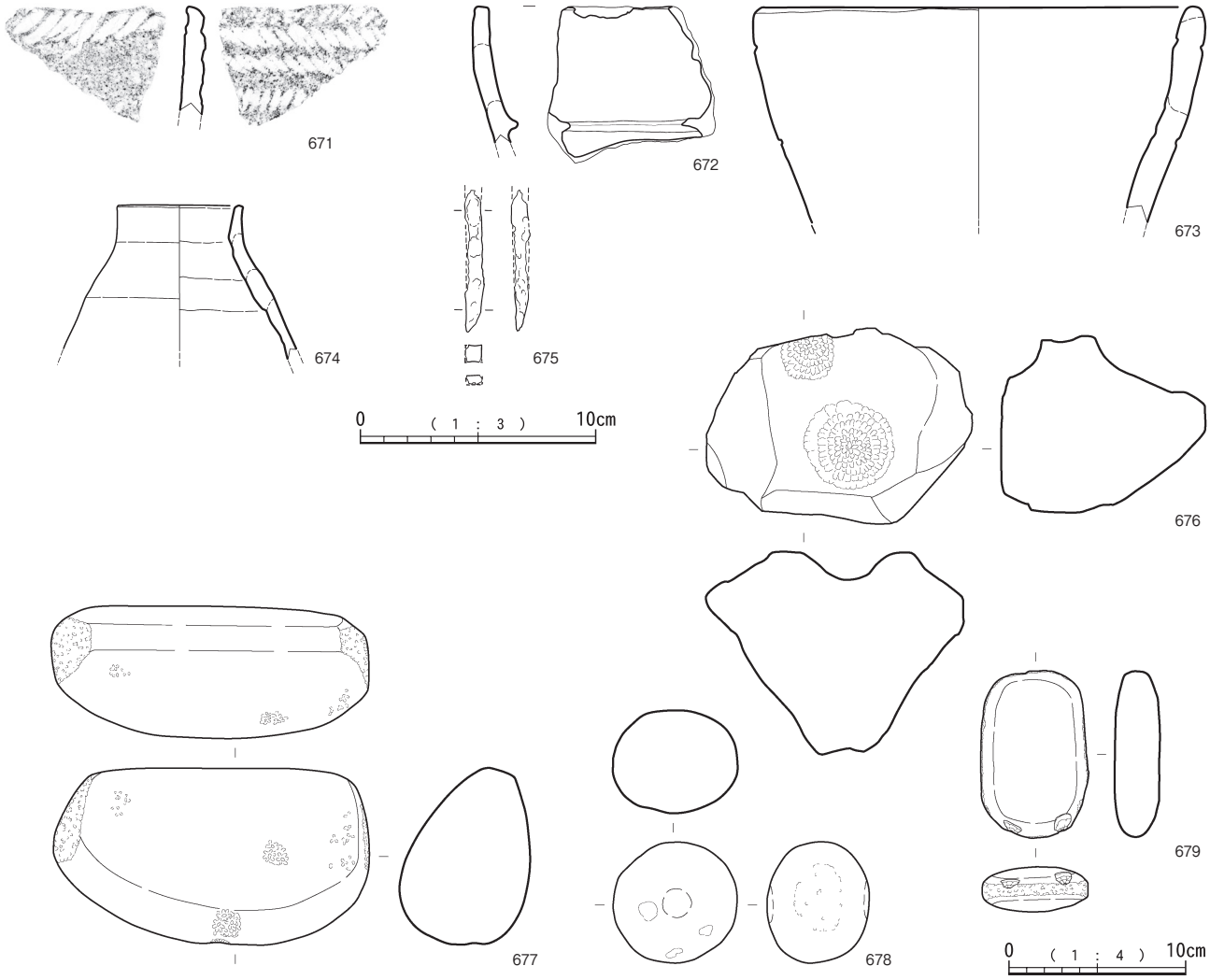
（３）Ⅳ層出土遺物（第111･112図，第32表）

層一括の遺物を紹介する。

651は胴部をわずかにつまんで突起を形成している。652は胎土が他の土器とは異なる資料である。653～660は兼久式土器である。653は羽釜状の土器である。658は６か所縦突帯が貼り付けられた底部であったとみられる。底面には兼久式土器と同じ木葉痕が見られる。

661･662は土師器甕である。663は須恵器である。破断面が擦られており，摩滅している。

664～666は貝製品である。664はホシダカラ製の貝匙で



第113図　Ⅳ－Ⅴ層出土遺物

ある。柄の部分に穿孔が１か所ある。665･666はヤコウガイ製の貝匙片である。

667～670は石器である。667･668は有溝砥石である。いずれも幅広である。670はミドリイシを利用した不明石製品である。四角形の板状を呈し、上面は平滑である。裏面は未加工（未使用）でテーブルサンゴの形状をそのまま残す。

（４）Ⅳ-Ⅴ層出土遺物（第113図，第33表）

671は縄文後期系の土器である。口唇部に太く短い沈線が連続して施文されている。

672～674は兼久式土器である。673は逆ハ字状に開く器形である。674は壺である。

675は鉄製品である。釘の先端部分と見られる。

676～679は石器である。

（５）Ⅴ層出土遺物（第114図，第33表）

Ⅳ層からⅥ層（白砂層）にかけての漸移層である。

680～685は兼久式土器である。いずれも胴部に最大径を持つような器形をしている。口縁部がくびれ，突帯をもつ680やあまりくびれず突帯を持たない681，胴部に突帯を持つ682などが見られる。685は円盤状土製品である。胎土は兼久式土器の泥質と同様である。

686は棒状鉄製品である。先端付近は扁平になっている。

687～690は石器である。689はハマサンゴを利用した敲石である。サンゴを利用した石器は使用痕跡が曖昧なものが多いが、敲きによる凹みが明瞭に観察できる貴重な資料である。

（６）Ⅳ-Ⅵ層出土遺物（第115図，第33表）

691･692は兼久式土器の底部である。

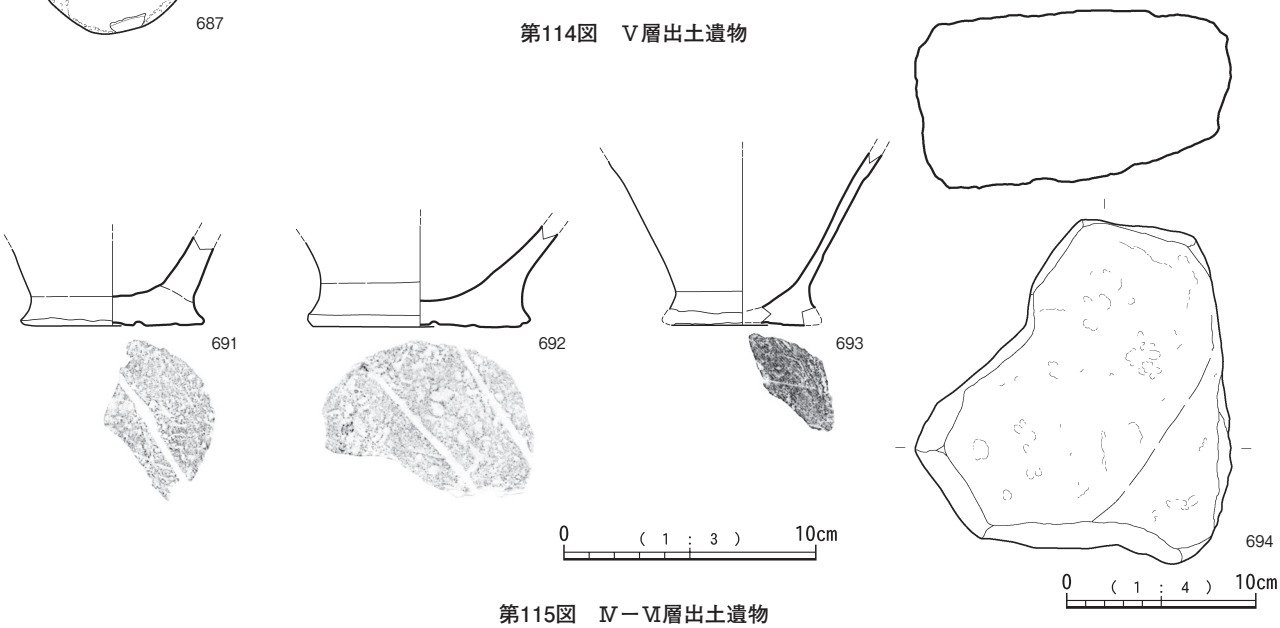
（７）Ⅵ層出土遺物（第115図，第33表）

白砂層で検出した遺物である。

693は逆ハ字状に開く兼久式土器の底部である。

694はビーチロック製の台石である。擦痕や敲打痕は石質上明瞭ではない。

第114図　Ⅴ層出土遺物



第115図　Ⅳ－Ⅵ層出土遺物

第30表　Ⅳ層出土遺物観察表（1）

図番号	掲載番号	遺構名	区	層	種類	器種(最大長)	部位(最大幅)	口/底径(最大厚)	分類L1	分類L2	重量(g)	土質	備考
第103図	523	-	L97	4611	兼久式土器	甕	底部	3.0	-	-	-	泥質	-
	524	-	L97	3884	兼久式土器	甕	底部	5.7	-	-	-	泥質	-
	525	-	L97	Ⅳ	貝製品	-	-	-	ﾘｭｳｷｭｳﾏｽｵ	-	-	-	R，端部擦痕
	526	-	M97	3758	兼久式土器	甕	底部	5.1	-	-	-	泥質	圧痕有り
	527	-	M97	Ⅳ	貝製品	-	-	-	ﾁｮｳｾﾝｻｻﾞｴ	-	-	-	-
	528	-	M97	Ⅳ	貝製品	-	-	-	ﾁｮｳｾﾝｻｻﾞｴ	-	-	-	-
	529	-	N97	Ⅳ	兼久式土器	甕	口縁	-	①	丸状	-	泥質	頸部少し上に連続短沈線
	530	-	N97	Ⅳ	兼久式土器	-	-	-	土製品	-	-	泥質	-
第104図	531	-	H98	8502	兼久式土器	甕	口縁	-	③	-	-	砂質	-
	532	-	H98	5789	兼久式土器	甕	口縁	-	③	丸状	-	砂質	-
	533	-	H98	6122	兼久式土器	甕	口縁	17.6	③	方形状	-	砂質	-
	534	-	H98	6114	兼久式土器	甕	口縁	11.4	③	丸状	-	泥質	貝８と９の間
	535	-	H98	8397	兼久式土器	壺	口縁	12.5	-	-	-	泥質	-
	536	-	H98	6113	兼久式土器	甕	底部	4.3	-	-	-	泥質	貝８と９の間
	537	-	H98	5784	兼久式土器	甕	底部	5.3	-	-	-	泥質	-
	538	-	H98	8379	土盤	-	-	-	-	-	-	泥質	-
	539	-	-	5672	貝製品	-	-	-	ﾔｺｳｶﾞｲ	-	-	-	貫通穿孔 (1)
	540	-	-	6531	貝製品	-	-	-	ｳﾐｷﾞｸ科	-	-	-	貫通穿孔 (1)
	541	-	H98	7164	鉄製品	-	-	-	棒状	-	-	-	貝溜まり９付近
	542	-	H98	5835	須恵器	壺	-	-	-	-	-	-	貝だまり⑨横、5836と接合
	543	-	H98	Ⅳ	骨製品	-	-	-	棒状	-	-	-	クジラ骨
	544	ドット	H98	5773	石器	(10.0)	(16.8)	(6.0)	ｹｶﾞﾆｲｼ	深成岩	2100	-	軽い変成作用が見られる石材
	545	ドット	H98	5768	石器	(12.9)	(6.1)	(3.8)	砥石	粗粒砂岩	457	-	首部に一条の溝（くびれ）
	546	ドット	H98	7823	石器	(9.2)	(19.1)	(3.0)	磨石	片状砂岩	746	-	砥石の可能性有
	547	ドット	H98	5778	石器	(7.6)	(6.2)	(3.3)	石製品	緑色岩	272	-	円形状石器で裏未剥離
	548	層一括	H98	-	石器	(8.5)	(9.6)	(3.0)	円形状石器	粗粒砂岩	303	-	白っぽい石材を利用
第105図	549	-	I98	Ⅳ	兼久式土器	甕	口縁	-	③	丸状	-	泥質	-
	550	-	I98	Ⅳ	兼久式土器	甕	口縁	-	⑥	丸状	-	泥質	-
	551	-	I98	Ⅳ	貝製品	-	-	-	ﾘｭｳｷｭｳﾏｽｵ	-	-	-	L，端部擦痕
	552	-	I98	Ⅳ	貝製品	-	-	-	ﾘｭｳｷｭｳﾏｽｵ	-	-	-	R，端部擦痕
	553	-	I98	Ⅳ	貝製品	-	-	-	ﾄﾄﾞﾛｷｶﾞｲ	-	-	-	貫通穿孔 (1)
	554	-	I98	Ⅳ	貝製品	-	-	-	ｽｲｼﾞｶﾞｲ	-	-	-	利器
	555	-	I98	Ⅳ	貝製品	-	-	-	ﾁｮｳｾﾝｻｻﾞｴ	-	-	-	-
	556	-	I98	Ⅳ	貝製品	-	-	-	ﾁｮｳｾﾝｻｻﾞｴ	-	-	-	-
	557	-	I98	10050	鉄製品	-	-	-	棒状	-	-	-	-
	558	-	I98	6890	鉄製品	-	-	-	釣り針	-	-	-	-
	559	-	I98	6891	鉄製品	-	-	-	棒状	-	-	-	-
	560	-	I98	6967	鉄製品	-	-	-	棒状	-	-	-	-
	561	-	I98	Ⅳ	鉄製品	-	-	-	棒状	-	-	-	-
	562	-	I98	Ⅳ	鉄製品	-	-	-	棒状	-	-	-	-
	563	-	I98	Ⅳ	鉄製品	-	-	-	釘	-	-	-	-
	564	-	I98	Ⅳ	骨製品	垂飾品	-	-	-	-	-	-	両端部に穿孔有
	565	-	I98	Ⅳ	骨製品	棒状	-	-	-	-	-	-	骨針状製品先端
	566	-	I98	5229	石器	(3.5)	(2.5)	(0.4)	石鏃	泥岩	2	-	磨製石鏃
	567	-	I98	Ⅳ	石器	(2.6)	(3.5)	(1.8)	石核	チャート	17	-	上面は自然の平坦面。暗灰色。
	568	-	I98	Ⅳ	石器	(4.2)	(2.9)	(0.4)	不明石製品	頁岩	9	-	小型ノミ状製品
	569	-	I98	Ⅳ	石器	(8.3)	(9.0)	(3.1)	敲石	ﾊﾏｻﾝｺﾞ属	223	-	-
	570	-	I98	Ⅳ	石器	(5.5)	(8.5)	(3.0)	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	細粒砂岩	126	-	-
	571	-	IJ98	6314	貝製品	-	-	-	ﾔｺｳｶﾞｲ	-	-	-	貫通穿孔 (1)
	572	-	HI98	6162	貝製品	-	-	-	ﾔｺｳｶﾞｲ	-	-	-	貫通穿孔 (1)
	573	-	HI98	6990	貝製品	-	-	-	ｳﾐｷﾞｸ科	-	-	-	貫通穿孔 (1)
第106図	574	-	J98	5487	兼久式土器	甕	口縁	16.6	①	丸状	-	砂質	-

第31表　Ⅳ層出土遺物観察表（2）

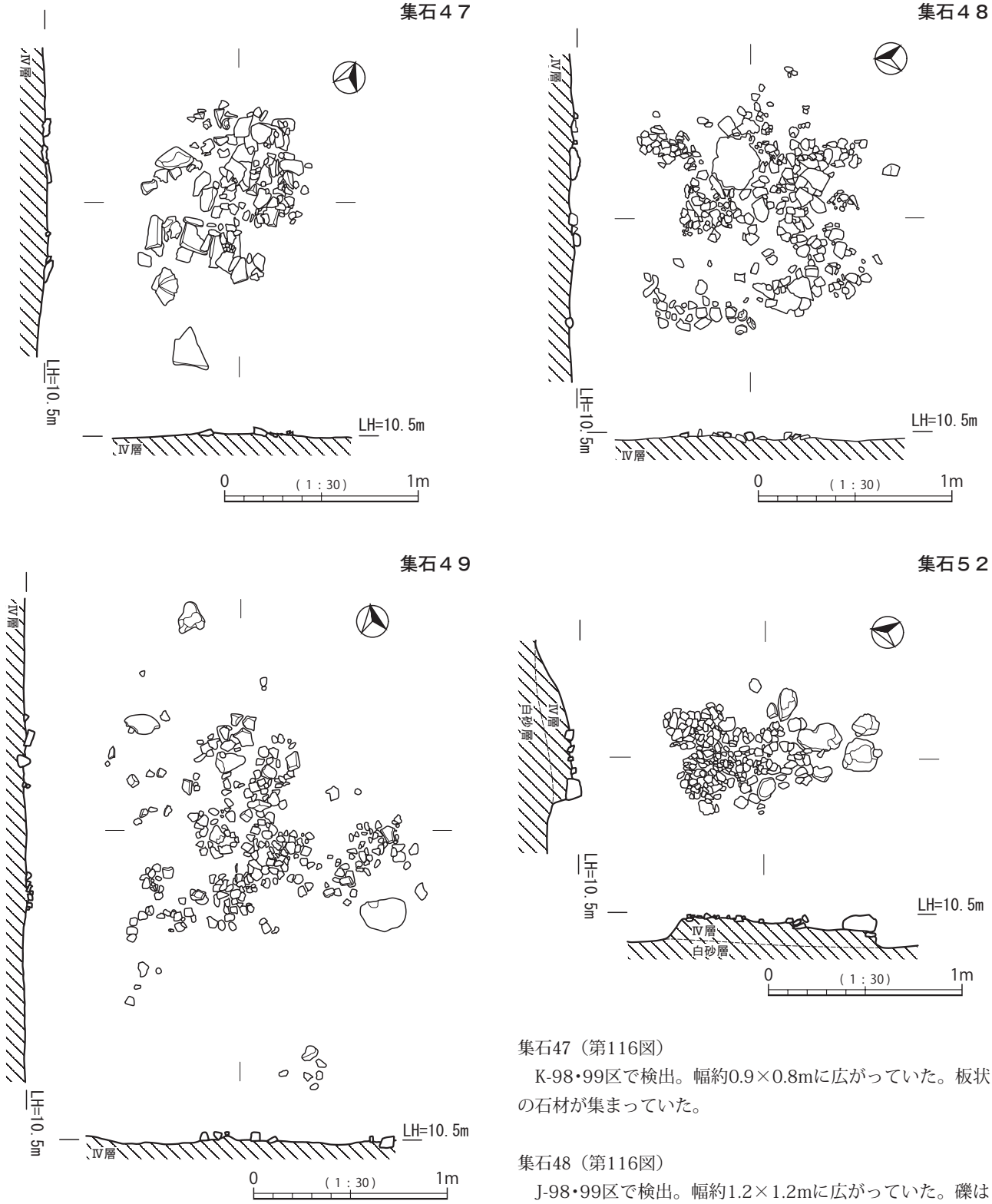
図番号	掲載番号	遺構名	区	層	種類	器種(最大長)	部位(最大幅)	口/底径(最大厚)	分類L1	分類L2	重量(g)	土質	備考
第106図	575	-	J98	Ⅳ	兼久式土器	甕	-	12.0	-	-	-	-	-
	576	-	J98	6761	兼久式土器	壺	口縁	6.3	-	-	-	泥質	注口
	577	-	J98	6718	兼久式土器	甕	底部	7.0	-	-	-	砂質	-
	578	-	J98	6665	貝製品	-	-	-	ｳﾐｷﾞｸ科	-	-	-	貫通穿孔 (1)
	579	-	J98	-	鉄製品	-	-	-	板状	-	-	-	-
	580	-	J98	5228	鉄製品	-	-	-	板状	-	-	-	-
	581	-	J98	-	鉄製品	-	-	-	釣針	-	-	-	-
	582	-	J98	-	鉄製品	-	-	-	棒状	-	-	-	-
	583	-	J98	-	鉄製品	-	-	-	棒状	-	-	-	-
	584	-	J98	8248	鉄製品	-	-	-	棒状	-	-	-	-
	585	-	J98	-	鉄製品	-	-	-	棒状	-	-	-	-
	586	-	J98	5227	鉄製品	-	-	-	銛	-	-	-	漁具か。貝だまり５付近で出土。
	587	-	J98	Ⅳ	骨製品	-	-	-	-	-	-	-	貝札のような文様
	588	-	J98	Ⅳ	骨製品	-	-	-	-	-	-	-	扁平。ヘラ状先端。
	589	-	J98	6085	石器	(18.3)	(14.0)	(7.6)	石皿	細粒砂岩	2160	-	盃状の凹み３つ
	590	-	J98	6361	石器	(8.2)	(7.7)	(2.2)	円形状石器	変成岩７	329	-	裏側剥離面にスリによる調整が見られる
	591	-	J98	Ⅳ	石器	(6.4)	(5.4)	(1.8)	不明石製品	緑色岩	93	-	石斧型ミニチュア製品
	592	-	K98	6074	兼久式土器	甕	口縁	-	1	方形状	-	泥質	凸帯がコ字型
	593	-	K98	Ⅳ	土師器	椀	底部	7.9	-	-	-	泥質	9c後半ごろ
	594	-	K98	Ⅳ	貝製品	-	-	-	ｲﾓｶﾞｲ科	-	-	-	殻頂研磨
	595	-	K98	Ⅳ	貝製品	-	-	-	ﾘｭｳｷｭｳﾏｽｵ	-	-	-	R，端部擦痕
	596	-	K98	Ⅳ	貝製品	-	-	-	ﾘｭｳｷｭｳﾏｽｵ	-	-	-	R，端部擦痕
	597	-	K98	Ⅳ	貝製品	-	-	-	ﾘｭｳｷｭｳﾏｽｵ	-	-	-	L，端部擦痕
第107図	598	-	L98	Ⅳ	兼久式土器	口縁	甕	16.0	⑥	方形状	-	砂質	-
	599	-	L98	Ⅳ	兼久式土器	口縁	甕	12.5	①	丸状	-	砂質	-
	600	-	L98	Ⅳ	兼久式土器	口縁	甕	-	⑥	丸状	-	砂質	-
	601	-	L98	Ⅳ	貝製品	-	-	-	ｳﾁﾜｶﾞｲ	-	-	-	貫通穿孔 (1)
	602	-	L98	1032	石器	(11.4)	(7.8)	(6.0)	敲石	石灰岩	674	-	磨敲石の模倣品か
	603	-	L98	Ⅳ	石器	(5.6)	(5.5)	(4.1)	球状石製品	緑色岩	206	-	-
	604	-	M98	Ⅳ	兼久式土器	口縁	甕	-	③	丸状	-	泥質	-
	605	-	M98	Ⅳ	兼久式土器	口縁	甕	-	⑥	方形状	-	砂質	-
	606	-	M98	Ⅳ	兼久式土器	口縁	甕	-	③	丸状	-	砂質	-
	607	-	M98	Ⅳ	兼久式土器	口縁	甕	-	①	方形状	-	砂質	-
	608	-	M98	Ⅳ	兼久式土器	頸部～胴部	壺	11.3	-	-	-	泥質	-
	609	-	M98	Ⅳ	兼久式土器	頸部～胴部	壺	-	-	-	-	泥質	-
	610	-	M98	Ⅳ	兼久式土器	胴部	壺	-	-	-	-	泥質	Aの字状
	611	-	M98	Ⅳ	土師器	口縁	椀×坏	14.4	-	-	-	泥質	-
	612	-	M98	Ⅳ	鉄製品	-	-	-	棒状	-	-	-	-
	613	-	M98	Ⅳ	鉄製品	-	-	-	釘状	-	-	-	-
	614	-	M98	1016	石器	(8.3)	(8.2)	(4.0)	不明石製品	緑色岩	447	-	円形状石器で裏未剥離
	615	-	M98	Ⅳ	貝製品	-	-	-	ｲﾓｶﾞｲ科	-	-	-	腹面研磨・背面下部研磨穿孔 (1)
	616	-	M98	Ⅳ	貝製品	-	-	-	ｳﾐｷﾞｸ科	-	-	-	貫通穿孔 (1)
	617	-	M98	Ⅳ	貝製品	-	-	-	ﾁｮｳｾﾝｻｻﾞｴ	-	-	-	-
第108図	618	-	N98	Ⅳ	兼久式土器	甕	底部	5.0	-	-	-	泥質	-
	619	-	H99	8410	兼久式土器	甕	口縁	17.2	-	-	-	砂質	8413と接合
	620	-	H99	8433	縄文土器	深鉢	口縁	-	-	-	-	泥質	泉川に類例
	621	-	H99	8407	兼久式土器	甕	底部	6.0	-	-	-	泥質	-
	622	-	H99	8573	石器	(8.7)	(18.8)	(4.5)	打製敲打具	頁岩	819	-	握斧的用途
	623	-	H99	Ⅳ	骨製品	棒状	-	-	-	-	-	-	骨針状製品の先端
	624	-	H99	Ⅳ	骨製品	棒状	-	-	-	-	-	-	骨針状製品の先端

第32表　Ⅳ層出土遺物観察表（3）

図番号	掲載番号	遺構名	区	層	種類	器種(最大長)	部位(最大幅)	口/底径(最大厚)	分類L1	分類L2	重量(g)	土質	備考
第108図	625	-	HI99	Ⅳ	骨製品	-	-	-	-	-	-	-	貫通穿孔 (1)
	626	-	I99	6255	兼久式土器	甕	口縁	12.9	③	方形状	-	泥質	-
	627	-	I99	7379	兼久式土器	甕	口縁	10.6	③	方形状	-	泥質	-
	628	-	I99	6715	兼久式土器	甕	口縁	-	①	丸状	-	砂質	-
	629	-	I99	5805	兼久式土器	壺	口縁	7.9	-	-	-	泥質	-
	630	-	I99	Ⅳ	貝製品	-	-	-	-	-	-	-	貫通穿孔 (1)
	631	-	I99	Ⅳ	骨製品	特殊	-	-	-	-	-	-	トリ？軽い。
第109図	632	-	J99	6027	兼久式土器	甕	口縁	-	③	丸状	-	砂質	-
	633	-	J99	Ⅳ	兼久式土器	-	-	-	土製品	-	-	泥質	-
	634	-	J99	6080	弥生系土器	-	胴部	14.5	-	-	-	泥質	-
	635	-	K99	Ⅳ	兼久式土器	甕	底部	6.1	-	-	-	泥質	-
	636	-	K99	Ⅳ	貝製品	-	-	-	ﾘｭｳｷｭｳﾏｽｵ	-	-	-	L，端部擦痕
	637	-	K99	Ⅳ	貝製品	-	-	-	ﾘｭｳｷｭｳﾏｽｵ	-	-	-	L，端部擦痕
	638	-	K99	639	石器	(12.5)	(18.4)	(5.8)	クガニイシ	粗粒砂岩	2100	-	-
	639	-	L99	3139	土器	鍋	口縁	25.4	⑤	方形状	-	砂質	貫通穿孔 (1)
	640	-	L99	3142	兼久式土器	甕	底部	7.2	-	-	-	泥質	-
	641	-	L99	Ⅳ	貝製品	-	-	-	ﾘｭｳｷｭｳﾏｽｵ	-	-	-	R，端部擦痕
	642	-	L99	3145	石器	(9.0)	(3.0)	(1.2)	砥石	泥岩	65	-	-
	643	-	L99	1184	石器	(10.1)	(18.7)	(5.8)	ｸｶﾞﾆｲｼ	変成岩17	1910	-	花崗岩質
	644	-	L99	3698	石器	(17.5)	(10.4)	(3.7)	不明石製品	変成岩３	1219	-	両刃タイプの大型石斧か
第110図	645	-	M99	Ⅳ	兼久式土器	甕	口縁	-	③	丸状	-	砂質	-
	646	-	M99	-	兼久式土器	甕	底部	7.7	-	-	-	泥質	破断面を擦って加工している
	647	-	M99	Ⅳ	兼久式土器	甕	底部	5.6	-	-	-	泥質	-
	648	-	M99	Ⅳ	兼久式土器	甕	底部	1.9	-	-	-	泥質	-
	649	-	M99	Ⅳ	土製品	-	-	-	-	-	-	泥質	方形状。
	650	-	M99	Ⅳ	石器	(11.5)	(6.5)	(3.5)	石斧	頁岩	-	-	打製石斧。刃部は摩耗。
第111図	651	-	-	-	兼久式土器	甕	口縁	-	③	丸状	-	泥質	くびれない
	652	-	-	-	縄文土器？	甕	口縁	-	①	方形状	-	砂質	胎土６（褐色・粒荒白色粒が混入。器壁厚い。）
	653	-	-	-	兼久式土器	甕	口縁	14.4	⑥	丸状	-	砂質	-
	654	-	-	-	兼久式土器	甕	口縁	-	外反	丸状	-	泥質	-
	655	-	-	-	兼久式土器	甕	口縁	-	③	丸状	-	砂質	-
	656	-	-	-	兼久式土器	壺	口縁	8.0	外反	丸状	-	泥質	373と接合。凸帯はつまんで成形.
	657	-	-	-	兼久式土器	壺	胴部	-	-	-	-	泥質	-
	658	-	-	-	兼久式土器	甕	底部	6.9	-	-	-	砂質	３足が貼りついている。特殊器形。
	659	-	-	-	兼久式土器	甕	底部	2.0	-	-	-	泥質	-
	660	-	-	-	兼久式土器	甕	底部	6.6	-	-	-	砂質	-
	661	-	-	-	土師器	甕	口縁	20.4	-	-	-	砂質	-
	662	-	-	-	土師器	甕	口縁	19.8	-	-	-	砂質	-
第112図	663	-	-	-	須恵器	壺	胴部	-	-	-	-	-	-
	664	-	-	3947	貝製品	-	-	-	ﾎｼﾀﾞｶﾗ	-	-	-	貝匙
	665	-	-	3948	貝製品	-	-	-	ﾔｺｳｶﾞｲ	-	-	-	貝匙
	666	-	-	226	貝製品	-	-	-	ﾔｺｳｶﾞｲ	-	-	-	脆い。貝匙か。貫通穿孔 (1)
	667	-	-	Ⅳ	石器	(9.0)	(11.8)	(4.9)	有溝砥石	細粒砂岩	604	-	１面に１条の溝。大型タイプ。
	668	-	-	Ⅳ	石器	(7.7)	(9.0)	(6.3)	有溝砥石	細粒砂岩	401	-	２面に計４条
	669	-	-	523	石器	(13.5)	(18.2)	(6.2)	台石	粗粒砂岩	2250	-	-
	670	-	-	271	石器	(11.6)	(9.5)	(2.5)	不明石製品	ﾐﾄﾞﾘｲｼ属	347	-	板状。表面は平滑で裏面は自然面。

第33表　Ⅳ～Ⅵ層，遺構出土遺物観察表

図番号	掲載番号	遺構名	区	層	種類	器種(最大長)	部位(最大幅)	口/底径(最大厚)	分類L1	分類L2	重量(g)	土質	備考
第113図	671	-	M98	Ⅳ～Ⅴ	縄文土器	深鉢	口縁	-	-	-	-	砂質	-
	672	-	I99	Ⅳ～Ⅴ	兼久式土器	甕	口縁	-	③	方形状	-	砂質	-
	673	-	I99	Ⅳ～Ⅴ	兼久式土器	甕	口縁	18.6	⑥	丸状	-	泥質	縄文土器？
	674	-	I99	Ⅳ～Ⅴ	兼久式土器	壺	口縁	5.0	外反	丸状	-	泥質	-
	675	-	K98	Ⅳ～Ⅴ	鉄製品	-	-	-	鉄釘	-	-	-	-
	676	-	H96	Ⅳ～Ⅴ	石器	(11.0)	(15.0)	(11.5)	凹石	細粒砂岩	1828	-	盃状の凹み２つ
	677	-	HI99	Ⅳ～Ⅴ	石器	(10.0)	(17.8)	(7.4)	ｹｶﾞﾆｲｼ	変成岩	2100	-	-
	678	-	I99	Ⅳ～Ⅴ	石器	(7.0)	(6.8)	(5.8)	球状石製品	緑色岩	420	-	-
	679	-	H96	Ⅳ～Ⅴ	石器	(9.4)	(6.0)	(2.5)	不明石製品	変成岩	242	-	小判型
第114図	680	-	J98	Ⅴ	兼久式土器	甕	口縁	14.3	①	丸状	-	砂質	-
	681	-	M98	Ⅴ	兼久式土器	甕	口縁	15.6	①	丸状	-	砂質	M99 Ⅵと接合
	682	-	MN98	Ⅴ	兼久式土器	甕	胴部	-	-	-	-	-	-
	683	-	J98	Ⅴ	兼久式土器	壺	口縁	7.6	外反	丸状	-	泥質	-
	684	-	J98	Ⅴ	兼久式土器	壺	口縁	5.8	直口	丸状	-	泥質	-
	685	-	K99	Ⅴ	土製品	-	-	-	-	-	-	泥質	-
	686	-	K99	Ⅴ	鉄製品	-	-	-	棒状	-	-	-	-
	687	-	M96	Ⅴ	石器	(7.5)	(8.5)	(9.5)	球状石製品	粗粒砂岩	867	-	一部に自然面が残る
	688	-	N97	Ⅴ	石器	(5.5)	(6.0)	(6.8)	球状石製品	粗粒砂岩	358	-	-
	689	-	MN97	Ⅴ	石器	(9.8)	(8.1)	(4.9)	敲石	ﾊﾏｻﾝｺﾞ属	326	-	-
	690	-	M99	Ⅴ	石器	(7.5)	(2.0)	(1.7)	砥石	細粒砂岩	39	-	-
第115図	691	-	I96	Ⅳ～Ⅵ	兼久式土器	甕	底部	6.5	-	-	-	泥質	-
	692	-	I96	Ⅳ～Ⅵ	兼久式土器	甕	底部	8.1	-	-	-	泥質	-
	693	-	I96	Ⅵ	兼久式土器	甕	底部	5.2	-	-	-	泥質	-
	694	-	I97	Ⅵ	石器	(16.7)	(18.2)	(9.8)	台石？	ﾋﾞｰﾁﾛｯｸ	3290	-	材質上、使用痕は観察しづらい
第117図	695	集石51	N99100	-	石器	(9.4)	(12.6)	(7.7)	ｹｶﾞﾆｲｼ	花崗岩	1296	-	-
	696	集石51	N99100	-	礫	(4.3)	(3.2)	(0.9)	-	粗粒砂岩	18	-	ペットストーン的用途か
第118図	697	SK41	I96	-	龍泉窯系青磁	椀	口縁	-	瀬戸Ⅳ'	-	-	-	-
	698	SK41	I96	-	龍泉窯系青磁	椀	底部	4.9	瀬戸Ⅳ'	-	-	-	-
	699	SK41	I96	-	龍泉窯系青磁	椀	底部	5.2	瀬戸Ⅳ'	-	-	-	-
	700	SK41	I96	-	兼久式土器	甕	口縁	-	外反	舌状	-	泥質	-
	701	SK41	I96	-	兼久式土器	壺	口縁	-	外反	丸状	-	泥質	-
	702	SK41	I96	-	兼久式土器	壺	胴部	-	-	-	-	泥質	-
	703	SK41	I96	-	兼久式土器	甕	底部	5.3	-	-	-	砂質	-
	704	SK41	I96	-	兼久式土器	甕	底部	5.0	-	-	-	泥質	-
	705	SK41	I96	-	兼久式土器	甕	底部	8.2	-	-	-	泥質	-
	706	SK41	I96	-	兼久式土器	甕	底部	5.5	-	-	-	砂質	-
	707	SK41	I96	-	骨製品	-	-	-	-	-	-	-	-
	708	SK41	I96	-	石器	(6.0)	(6.5)	(5.8)	球状石製品	粗粒砂岩	344	-	一部自然面が残る
第119図	709	SK45	J96	-	龍泉窯系青磁	椀	口縁	-	瀬戸Ⅴ	-	-	-	雷文
	710	SK45	J96	-	兼久式土器	壺	口縁	-	内湾	舌状	-	泥質	-
	711	SK45	J96	-	兼久式土器	壺	胴部	-	-	-	2	泥質	-
	712	SK45	J96	-	兼久式土器	甕	底部	5.9	-	-	-	泥質	-
第121図	713	SK60	K97	-	骨製品	特殊	-	-	-	-	-	-	貫通穿孔(1)。全体的に摩滅。
	714	SK60	K97	-	骨製品	特殊	-	-	-	-	-	-	貫通穿孔(1)。全体的に摩滅。
第123図	715	P0908	J96	N	兼久式土器	甕	口縁	15.6	⑥	丸状	-	砂質	-
	716	P0833	J96	N	兼久式土器	甕	口縁	-	①	丸状	-	砂質	-
	717	P0833	J96	N	兼久式土器	甕	底部	7.0	-	-	-	砂質	-
	718	P1001	H97	N	鉄製品	-	-	-	鑿	-	-	-	-



第116図　集石47～49・52

（８）集石

Ⅳ層上面で礫が集中する部分を検出した(位置は第85図を参照)。いずれも掘り込み面は確認できなかった。

集石47（第116図）

K-98・99区で検出。幅約0.9×0.8mに広がっていた。板状の石材が集まっていた。

集石48（第116図）

J-98・99区で検出。幅約1.2×1.2mに広がっていた。礫は全てサンゴ石灰岩であった。礫に赤色化など被熱した痕跡はは見られなかった。

集石49（第116図）

J-98区で検出。幅約1.1×1.4mに広がっていた。礫は全てサンゴ石灰岩で細片化したものが多かった。一部やや被熱しているものが見られた。

集石47検出状況

集石48検出状況

集石49検出状況

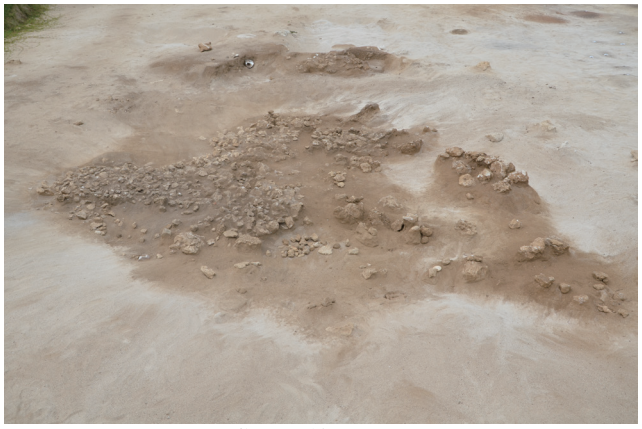
集石52（第116図）

H-97区で検出。幅約0.6×1.1mに広がっていた。礫は全てサンゴ石灰岩で細片化していた。礫に赤色化などは見られなかった。

集石51（第117図，第33表）

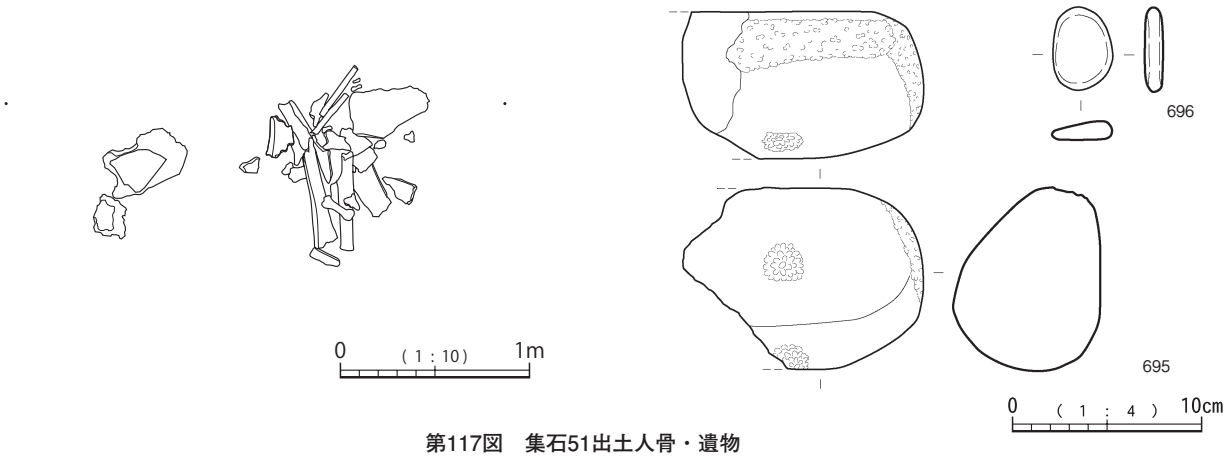
N-99・100区で検出。白砂層で検出。上面にサンゴ礫が固まっていた。遺構内からは動物骨・ヤコウガイ・近世施釉陶器などが出土。土坑中央部白砂が盛り上がっている付近から人骨片が出土した。

695・696は石器である。

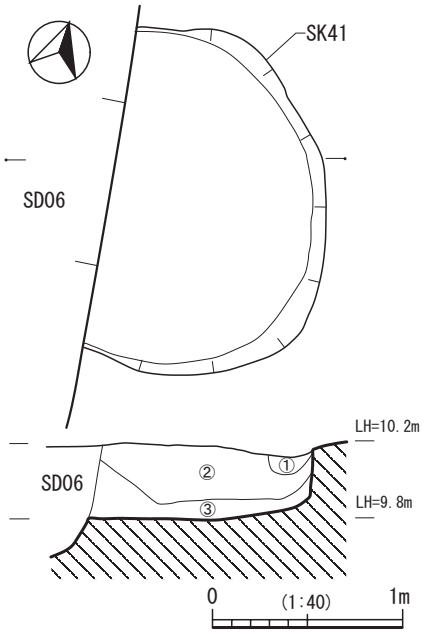


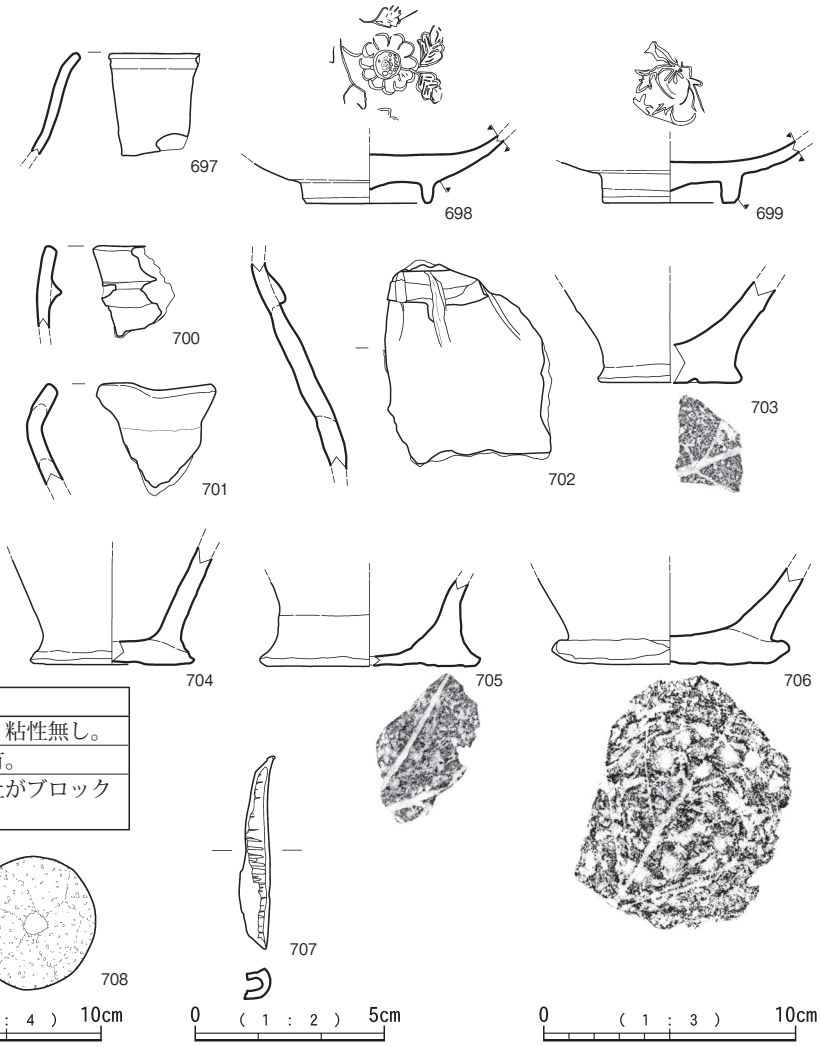
集石51検出状況

集石51土層堆積状況



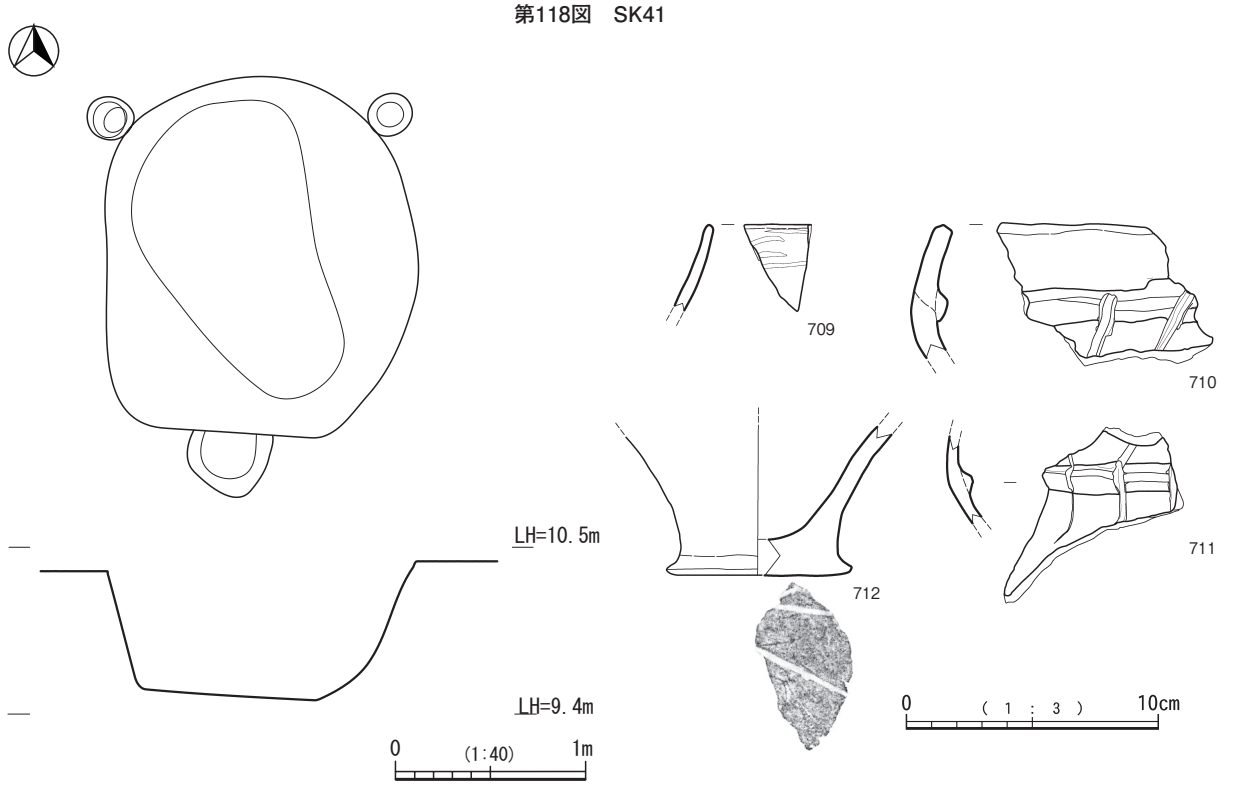
第117図　集石51出土人骨・遺物



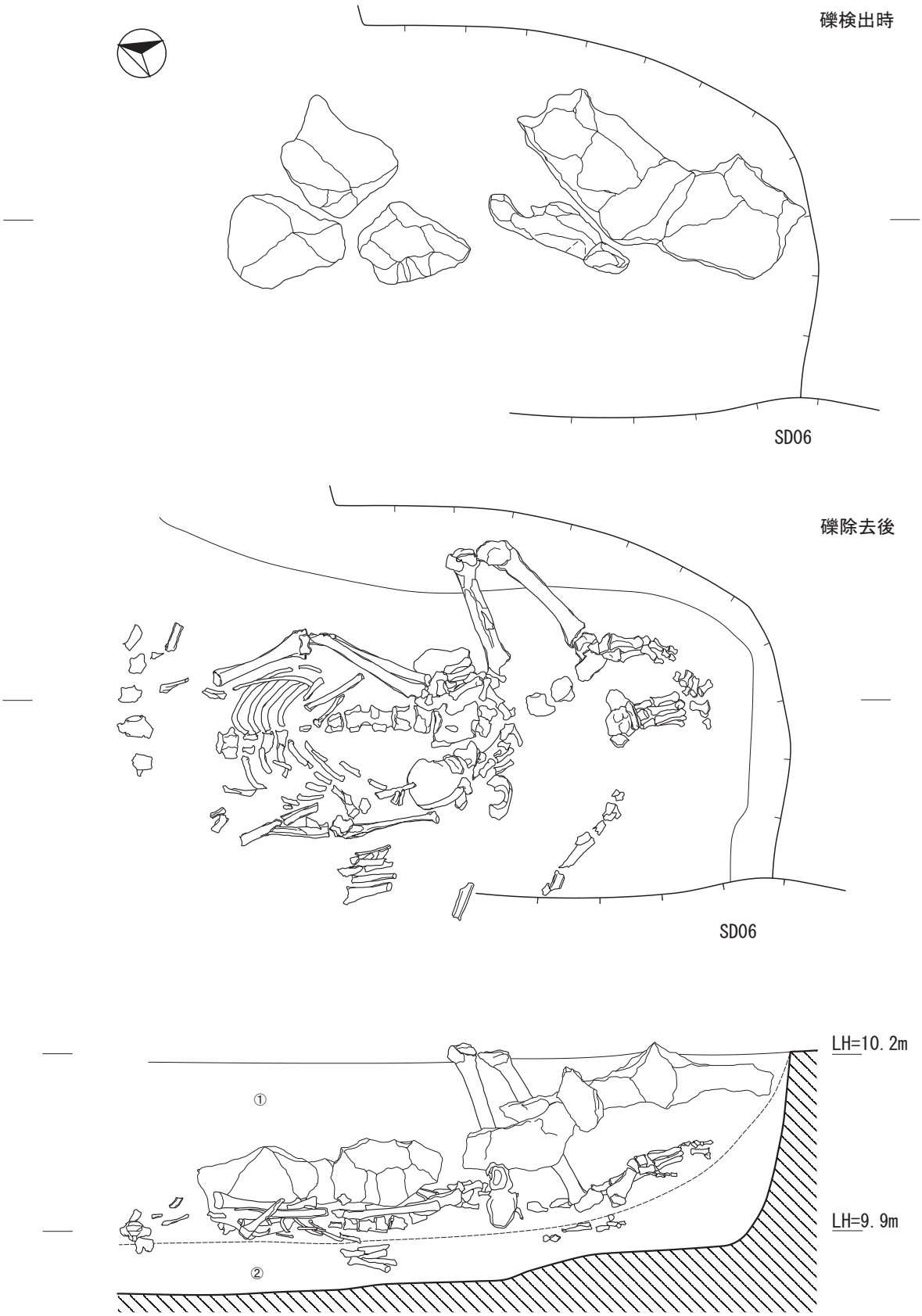


層	SK41土層説明
①	褐色(Hue10YR4/4)砂質土。しまり弱く粘性無し。
②	暗褐色(Hue10YR3/4)砂質土。しまり有。
③	暗褐色(Hue10YR3/4)砂質土。暗褐色土がブロック状に入る。焼土を含む。

第118図　SK41



第119図　SK45



土層	SK50 土層説明
①	褐色砂層。乾くと白砂層と同じ色に見える。
②	白砂層との境目が曖昧な砂層。

第120図　SK50

SK50検出状況（サンゴ礫有）

SK50人骨検出状況（サンゴ礫除去後）

SK60検出状況（左上：人骨検出状況（サンゴ礫有）左下：人骨検出状況（サンゴ礫除去後）
右：左右足首付近にリュウテン各１，左足膝蓋下付近に獣骨製品）

（9）土坑

SK41（第118図，第33表）

I-96区のⅥ層で検出。SD06に切られていた。土坑内から龍泉窯系青磁や兼久式土器が出土している。

697～699は龍泉窯系青磁である。698・699内には印花文が見られる。高台内面は露胎である。

700～706は兼久式土器である。701･702は壺である。

707は動物骨に多数の擦痕が見られる資料である。

708は球状石器である。全面使用されている。

SK45（第119図，第33表）

J-96区のⅥ層で検出。土坑内から龍泉窯系青磁や兼久式土器が出土している。

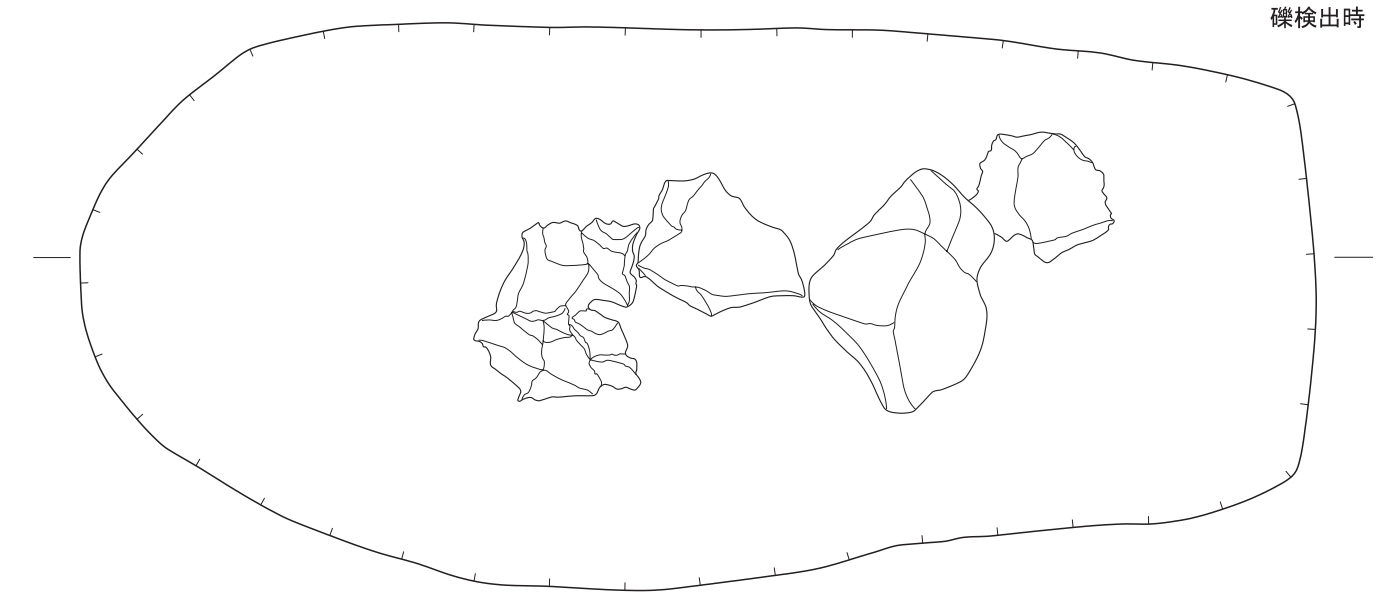
709は雷文帯椀である。710～712は兼久式土器である。

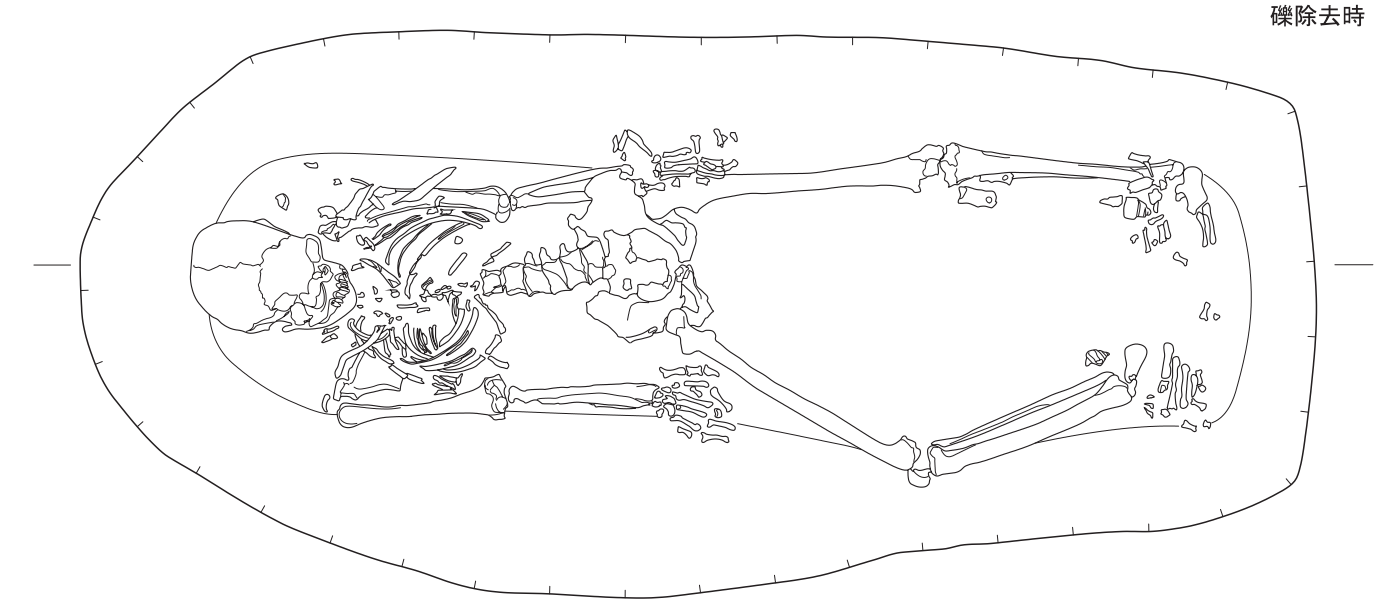
（10）土坑墓

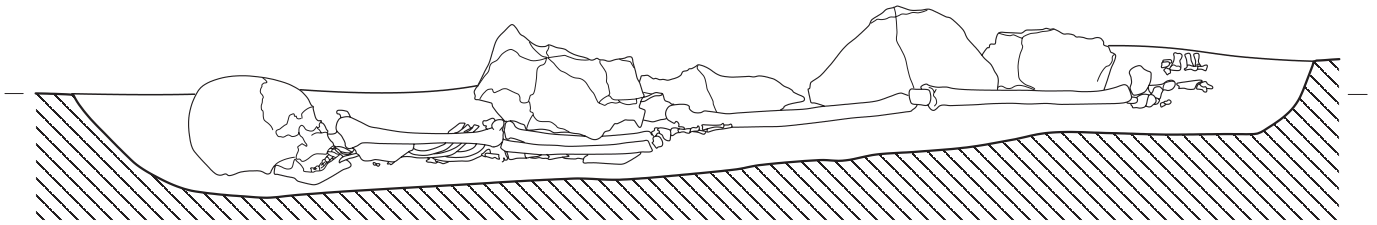
SK50（第120図）

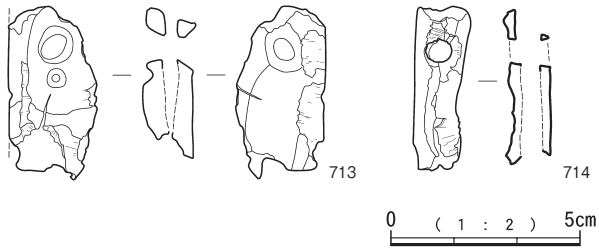
J-96区のⅥ層で検出。土坑の上部にはサンゴ石灰岩が見られた。隣接するSD06に切られている。SD06の下層確認のためにサブトレンチを入れたところ，Ⅵ（白砂）層中から頭骨を検出した。大雨のため，頭骨と上半身の骨がいくつか流出し，現位置を保たなかったため，図化はしていない。人骨については以下のとおりである。

埋葬方法は仰臥立膝屈葬で副葬品はない。熟年の男性で両









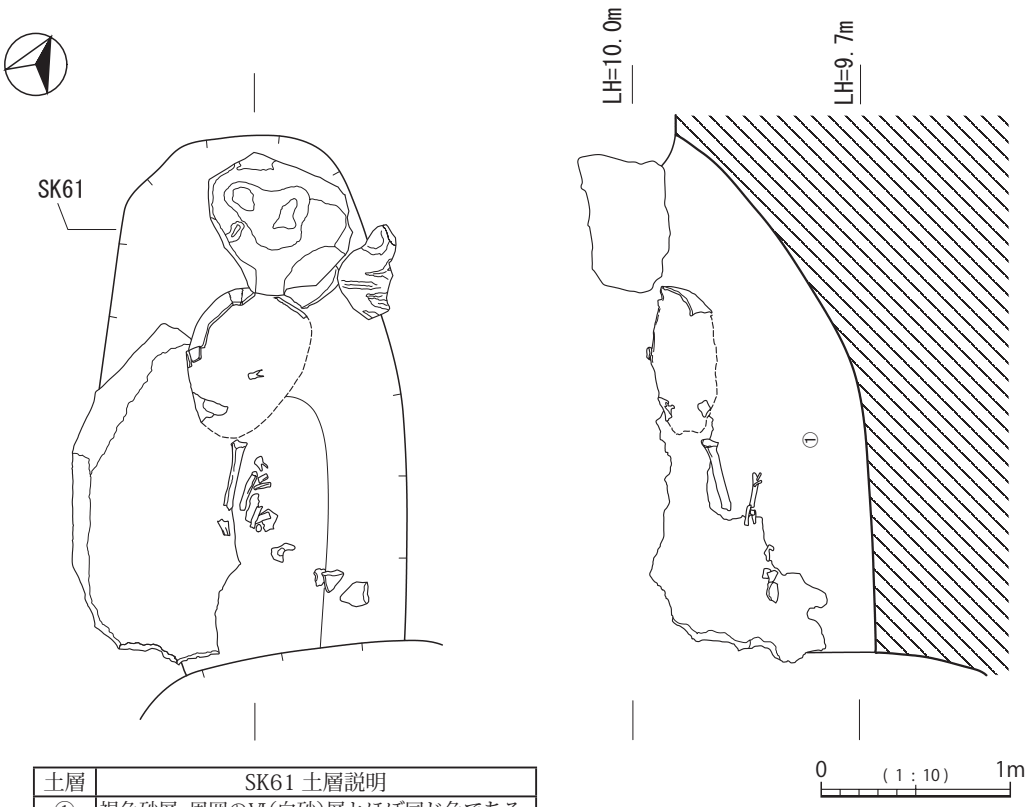
0 (1 :10) 50cm

手は甲を上にして骨盤の上に置かれている。

SK60（第121図，第33表）

K-97区のⅥ層で検出。長軸1.6m×短軸0.7mである。土坑の上にはサンゴ石灰岩が見られ，掘り下げると人骨を検出し

第121図　SK60



土層	SK61 土層説明
①	褐色砂層。周囲のⅥ(白砂)層とほぼ同じ色である。

第122図　SK61

た。土層はⅥ（白砂）層とほぼ同じ埋土で明瞭な掘り込みラインは見えなかった。人骨については以下のとおりである。

埋葬方法は仰臥伸展葬。右足がやや曲がり，両足で石灰岩を挟むようにしている。

副葬品は左膝下付近に骨製品（713・714），左右足首付近にリュウテンが置かれていた。リュウテンは未加工である。

熟年の女性である。眉弓の突出弱く，歯の喪失が多い。頭骨外板の縫合の癒合は認められない。右膝蓋骨に変形性関節炎が認められ，左右の足指先は内側を向いている。

SK61（第122図）

I-98区で検出。長軸0.7m×短軸0.3mである。土坑の内には大きなサンゴ礫が配置されていた。土坑内からは人骨が出土した。３歳程度の幼児の骨とみられ，頭骨などがわずかに出土した。胴部～下半身の骨は確認できなかった。

土層はⅥ（白砂）層とほぼ同じ埋土で明瞭な掘り込みラインは見えなかった。

（11）ピット出土資料（第123･124図，第33･34表）

715～735はピットから出土した遺物である。

埋土N

715～717は兼久式土器である。715は短いU字状の突帯を貼り付ける。

718は鉄製品である。鑿状で先端に行くにつれて幅広になっていく。

SK61検出状況（サンゴ礫有）

719はヤコウガイ製品である。貝の肋がある突起部のみを研磨している。くびれ状に成形され，柄部が折れている。

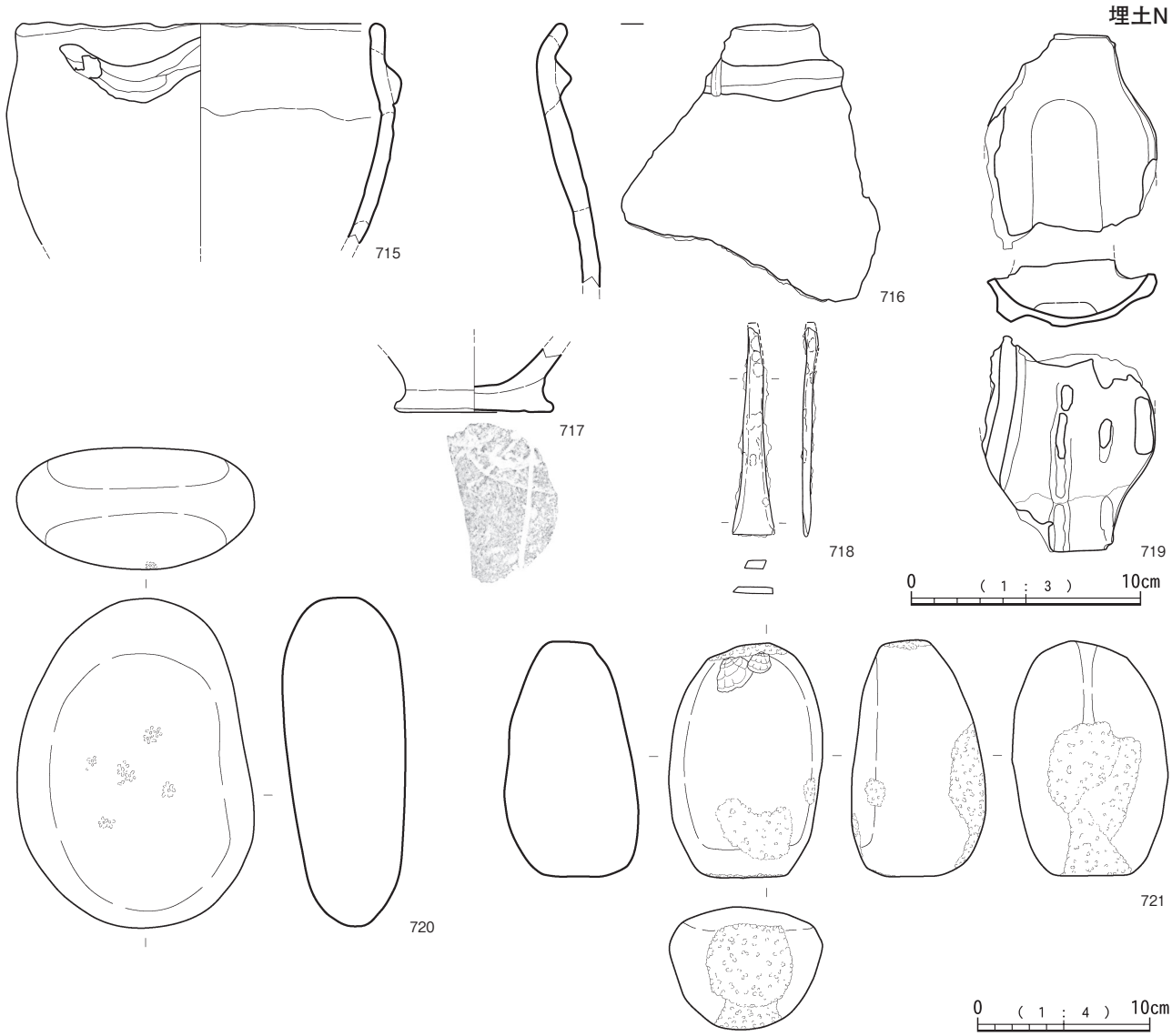
720･721は石器である。721は上下面を敲いている。

埋土O

722～726は兼久式土器である。722は逆「く」字状に内湾し，頸部はくびれない。723はやや太めの突帯を貼り付け，第１文様帯に縦方向に沈線を施している。

727は骨製品である。逆三角形状に切込みが入れられ穴が穿かれている。

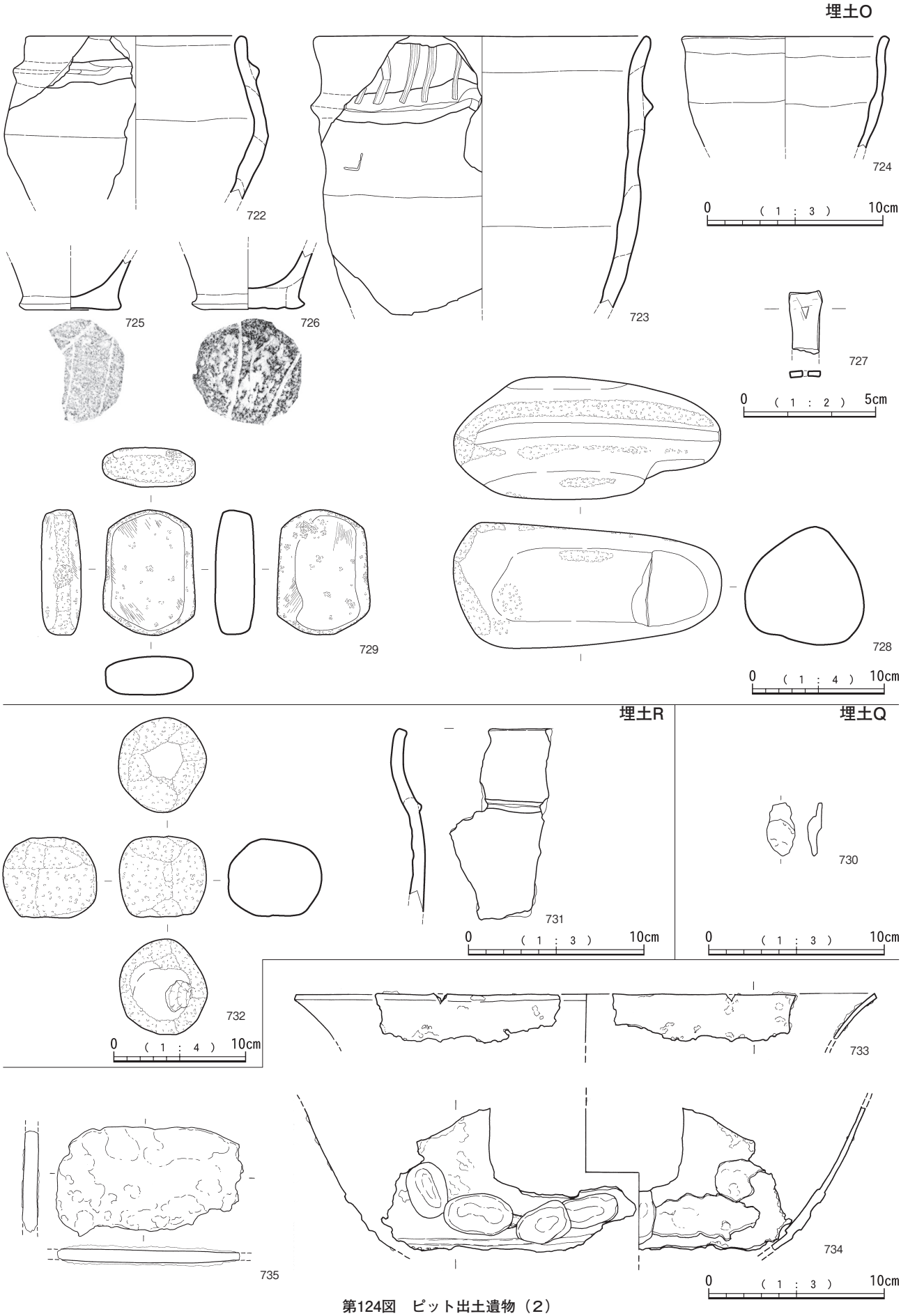
728･729は石器である。728は他のクガニイシよりも断面が扁平ではないが，意図的に断面が三角形状になる様に成形していることからクガニイシに含めている。729は火山岩系の石材で側面に多くの打痕が見られる。



第123図　ピット出土遺物（1）

第34表　ピット出土遺物観察表

図番号	掲載番号	遺構名	区	層	種類	器種(最大長)	部位(最大幅)	口/底径(最大厚)	分類L1	分類L2	重量(g)	土質	備考
第123図	719	P0514	L99	N	貝製品	貝匙	-	-	ﾔｺｳｶﾞｲ	-	-	-	-
	720	P1135	-	N	石器	(19.1)	(13.7)	(7.1)	磨敲石	変成岩5	3000	-	野間花崗片麻岩似
	721	P0862	I97	N	石器	(13.6)	(9.0)	(7.2)	不明石製品	粗粒砂岩	1365	-	敲石風
第124図	722	P1343	J98	O	兼久式土器	甕	口縁	12.0	①	-	-	泥質	-
	723	P1307	J97	O	兼久式土器	甕	口縁	18.8	③	丸状	-	砂質	-
	724	P1448	K99	O	兼久式土器	甕	口縁	11.3	③	-	-	泥質	-
	725	P1354	K98	O	兼久式土器	甕	底部	5.6	-	-	-	泥質	-
	726	P1131	I97	O	兼久式土器	甕	底部	5.2	-	-	-	泥質	-
	727	P1585	K98	O	骨製品	-	-	-	板状	-	-	-	貫通穿孔 (1) 穿孔部逆三角形状。
	728	P1299	K98	O	石器	(9.6)	(20.3)	(9.2)	ｹｶﾞﾆｲｼ	粗粒砂岩	2400	-	-
	729	P1392	-	O	石器	(13.5)	(7.0)	(3.0)	磨敲石	火山岩系	377	-	軽度の圧力変成が見られる火山岩。
	730	P1537	K100	Q	鉄製品	-	-	-	板状	-	-	-	-
	731	P0605	L97	R	兼久式土器	甕	口縁	-	②	方形状	-	砂質	-
	732	P0546	L98	R	石器	(6.0)	(6.7)	(7.2)	球状石製品	粗粒砂岩	422	-	-
	733	P0045	J96	-	鉄製品	-	-	-	鉄鍋	-	-	-	-
	734	P0072	M98	-	鉄製品	-	-	-	鉄鍋	-	-	-	-
	735	P1000	I97	-	鉄製品	-	-	-	-	-	-	-	-



第124図　ピット出土遺物（2）

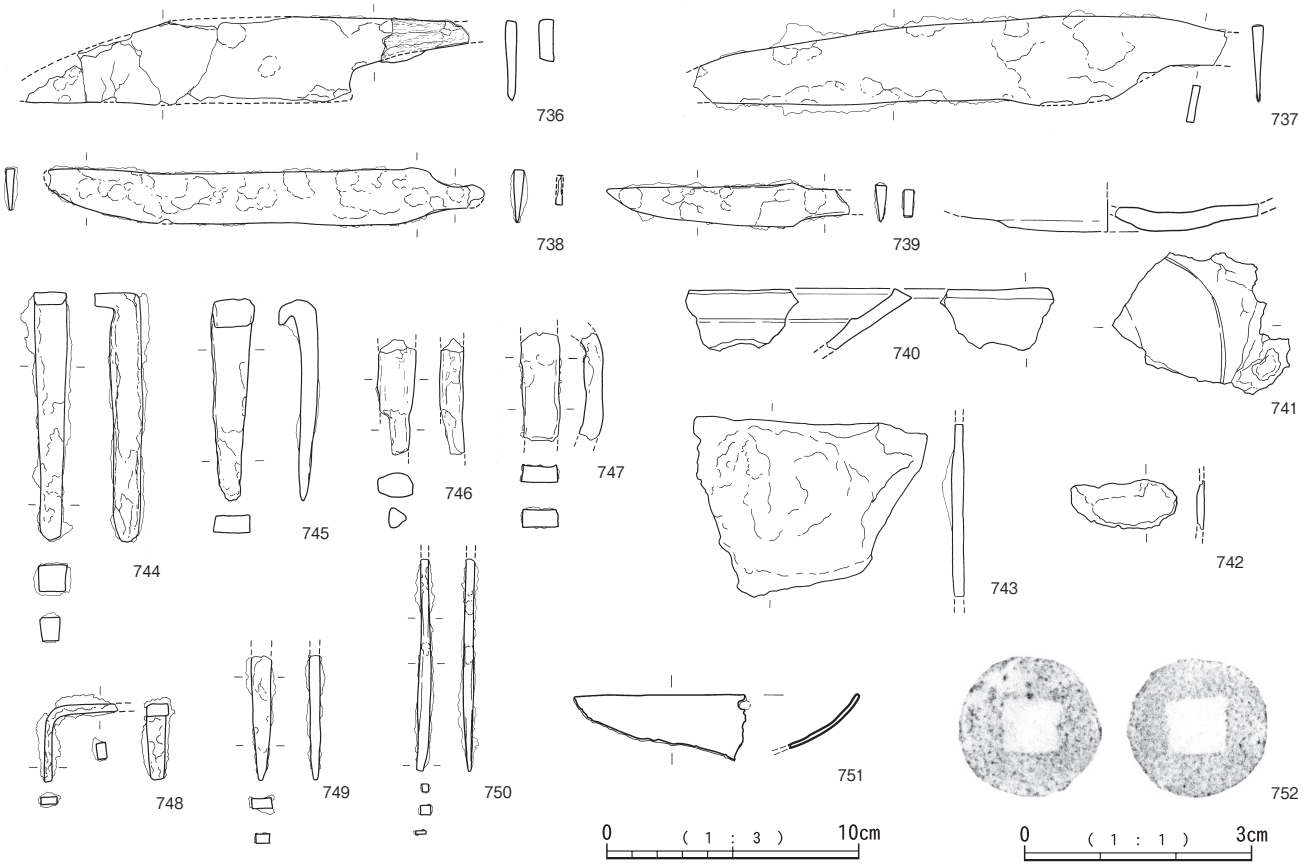
第５節　H25調査区南側（第125図）

N～P-96・97区の周辺には北側で見られた古代末の包含層であるⅣ層を検出し，その下からピットが出土している。O～R-99・100区周辺は堆積が浅く，表土を剥ぐとすぐにⅥ

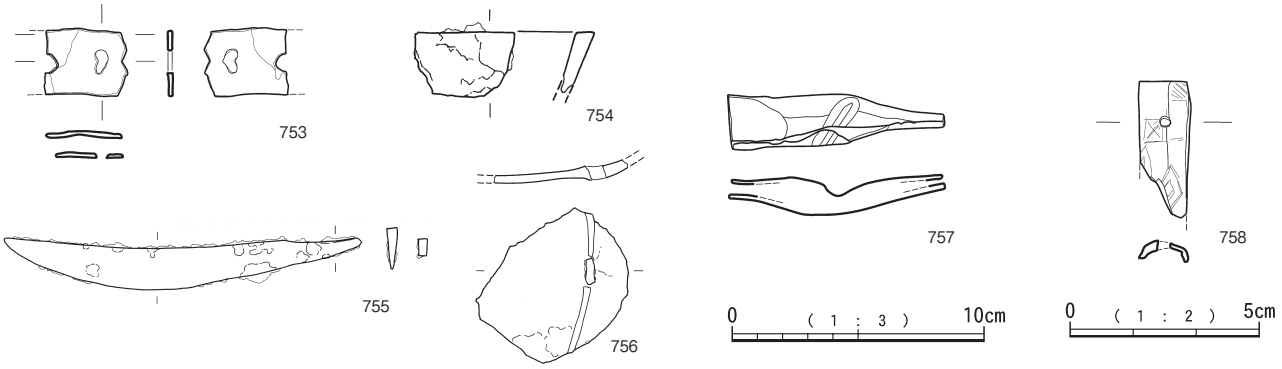
第125図　南側調査区Ⅱ層･土坑墓遺構配置図

U-98区付近カクラン層検出状況（中央は古井戸）

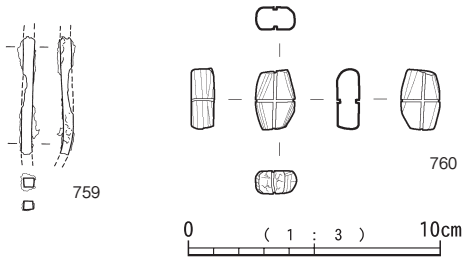
Ⅱ層検出状況（SD07･08･11検出状況）



第126図　表土・カクラン範囲白砂層出土遺物



第127図　Ⅱ層・SD08出土遺物



第128図　獣骨集中01出土遺物

（白砂）層が出土した。また，S～V-97～100区付近には近代～現代の住居があったようで，カクランを受けていた。Ⅱ層の遺構については，特徴的であったSK21・獣骨集中01について報告する。その他については，遺物のみ紹介する。

（1）表土・カクラン範囲出土遺物（第126図，第35表）

特に特徴的であった資料を紹介する。

736～739は刀子である。736･737は出刃包丁状である。

740～750は鉄製品である。740は内面に段を持つ口縁部である。744･745は鉄釘である。748は90°に曲がる製品である。

751は銅椀である。上部に貫通穿孔が見られる。752は無文銭である。

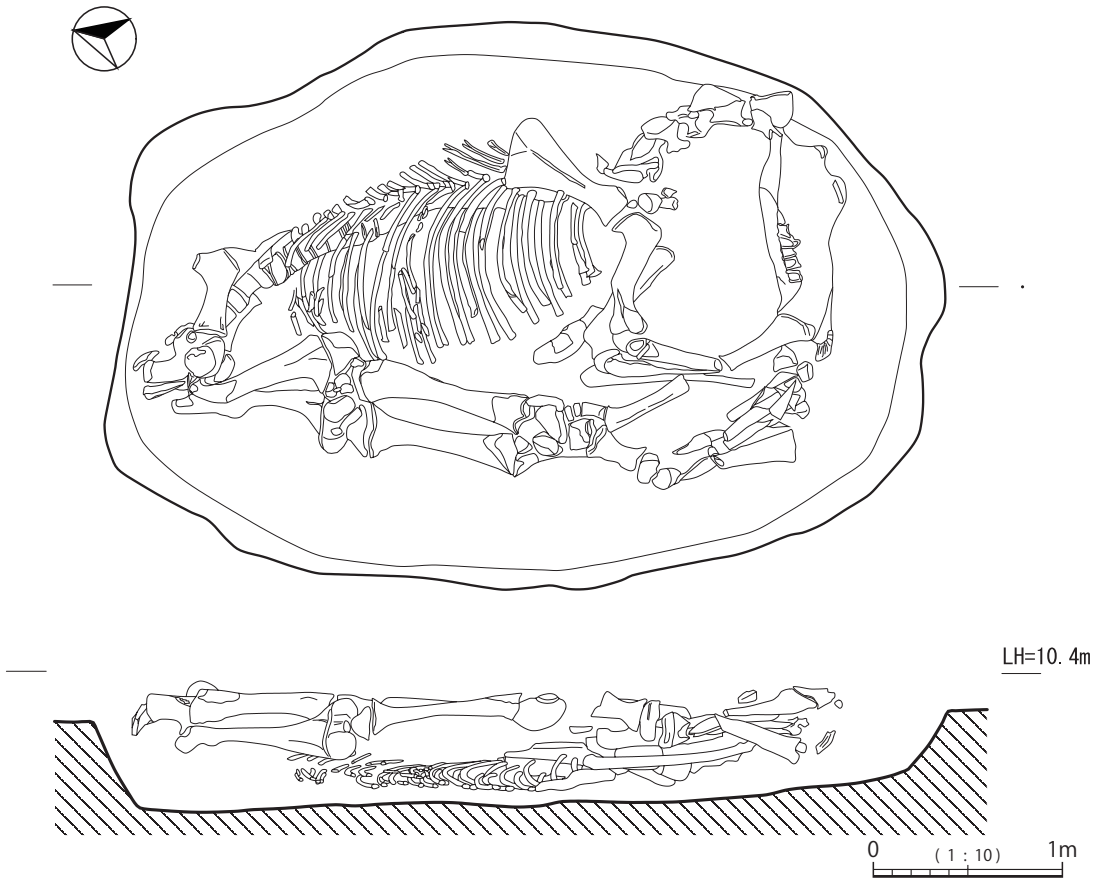
（2）Ⅱ層検出遺構・遺物（第127図，第35表）

表土を除去すると調査区を横断するようなSD08やSD07・11を確認した。

753･754はSD08から出土した遺物である。753は銅製品

第35表　表土～Ⅳ層出土遺物観察表

図番号	掲載番号	遺構名	区	層	種類	器種(最大長)	部位(最大幅)	口/底径(最大厚)	分類L1	分類L2	重量(g)	土質	備考
第126図	736	-	R100	表土	鉄製品	-	-	-	刀子	-	-	-	包丁
	737	-	T99	表土白砂直上	鉄製品	-	-	-	刀子	-	-	-	包丁
	738	-	-	-	鉄製品	-	-	-	刀子	-	-	-	-
	739	一括	R100	表土	鉄製品	-	-	-	刀子	-	-	-	-
	740	-	T99	ⅤⅥ白砂直上	鉄製品	-	-	-	鍋	-	-	-	-
	741	-	S99	白砂直上　表土Ⅵ	鉄製品	-	-	-	鍋	-	-	-	-
	742	SD06	J96	-	鉄製品	-	-	-	板状	-	-	-	-
	743	-	U100	Ⅵ	鉄製品	-	-	-	板状	-	-	-	-
	744	一括	T100	Ⅰ	鉄製品	-	-	-	釘	-	-	-	-
	745	-	T100	白砂上	鉄製品	-	-	-	釘	-	-	-	-
	746	-	T100	白砂上	鉄製品	-	-	-	棒状	-	-	-	-
	747	-	T100	白砂上	鉄製品	-	-	-	釘	-	-	-	-
	748	一括	S99	Ⅰ・Ⅴ	鉄製品	-	-	-	釘？	-	-	-	カスガイ状
	749	一括	T99	Ⅰ・Ⅴ・Ⅵ	鉄製品	-	-	-	釘	-	-	-	-
	750	一括	O100	Ⅰ	鉄製品	-	-	-	鑿	-	-	-	-
	751	-	T98	白砂直上	銅製品	-	-	-	銅椀	-	5.8	-	-
	752	-	V100	表土	古銭？	-	-	-	無文	-	0.1g未満	-	-
第127図	753	SD08	O98	-	銅製品	-	-	-	八双金具	-	-	-	-
	754	SD08	O98	-	鉄製品	-	-	-	鍋	-	-	-	-
	755	-	R98	-	鉄製品	-	-	-	刀子	-	-	-	-
	756	-	O98	Ⅱ	鉄製品	-	-	-	鍋	-	-	-	-
	757	-	P97	Ⅱ	銅製品	-	-	-	キセル状製品	-	2.3	-	-
	758	-	P98	Ⅱ	骨製品	-	-	-	-	-	7.5	-	菱形模様が彫られている
第128図	759	獣骨数中箇所01	-	-	鉄製品	不明	-	-	釘	-	-	-	-
	760	獣骨数中箇所01	-	-	滑石製品	-	-	-	-	-	-	-	-
第130図	761	人骨集中箇所02	O99	-	鉄製品	-	-	-	釘	-	-	-	-
	762	人骨集中箇所02	O99	-	鉄製品	-	-	-	釘	-	-	-	-
	763	人骨集中箇所02	O99	-	鉄製品	-	-	-	釘	-	-	-	-
	764	人骨集中箇所02	O99	-	鉄製品	-	-	-	釘	-	-	-	-
	765	人骨集中箇所02	O99	-	鉄製品	-	-	-	釘	-	-	-	-
第131図	766	SK023	-	-	龍泉窯系青磁	椀	底部	5.9	瀬戸Ⅴ	-	-	-	外：片彫り連弁，内：圏線＋印花文
第139図	767	-	O97	Ⅳ	兼久式土器	甕	口縁	16.2	①	方形状	-	砂質	-
	768	-	O97	Ⅳ	兼久式土器	壺	口縁	8.7	外反	丸状	-	泥質	-
	769	-	O97	Ⅳ	石器	(8.1)	(4.9)	(3.4)	磨敲石	片状砂岩	229	-	黒雲母の層が観察できる軽い変成作用が見られる石材
	770	-	O98	Ⅳ	須恵器	甕	胴部	-	-	-	-	-	-
	771	-	O98	Ⅳ	兼久式土器	甕	底部	6.8	-	-	-	砂質	-
	772	-	P96	Ⅳ	兼久式土器	甕	口縁	19.6	⑥	丸状	-	泥質	-
	773	-	P96	Ⅳ	兼久式土器	甕	口縁	20.2	③	丸状	-	泥質	-
	774	-	P96	Ⅳ	兼久式土器	甕	口縁	14.7	①	-	-	泥質	-
	775	-	P96	Ⅳ	兼久式土器	壺	底部	6.3	-	-	-	泥質	-
	776	-	P96	Ⅳ	兼久式土器	壺	底部	1.2	-	-	-	砂質	-



第129図　SK21

SK21仔馬検出状況

獣骨集中01検出状況

である。ハート形の穴が開いている。754は鉄鍋の口縁部片である。

755・756は包含層から出土した銅製品である。755は基部から先端にかけてほぼ直線的で刃部が弧状に湾曲している。

757・758はⅡ層から出土した遺物である。757は銅製品である。キセルのように見えるが吸い口部分が非常に狭くなっており，別の製品であった可能性もある。

758は骨製品である。半竹状に擦られ，曲面に◇・□・×等の文様構成が見られる。

土坑・SK21（第129図）

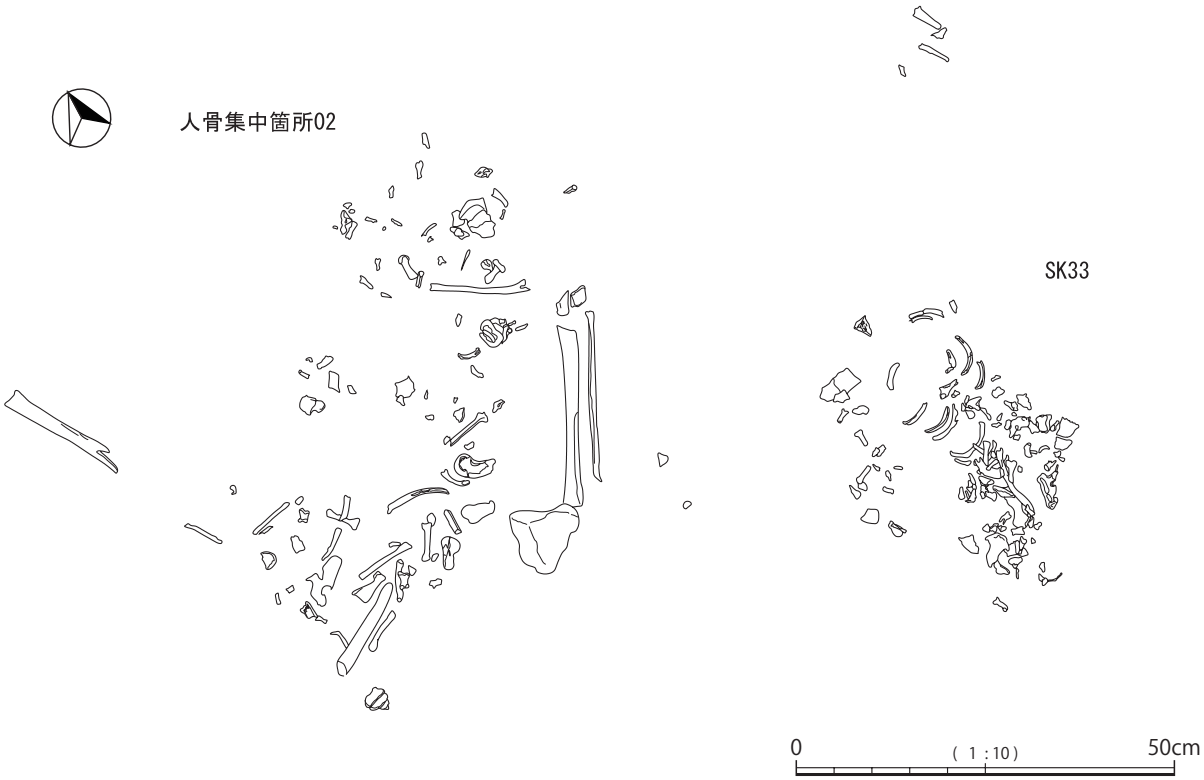
S-96区で検出。長軸約105cm×短軸約72cmである。

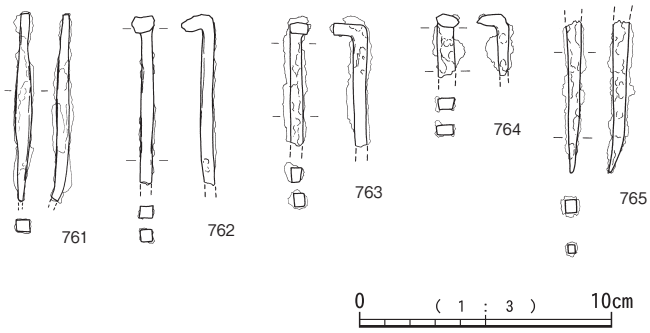
仔馬の全身の骨格である。キカイウマかと思われる。頭骨の上に薩摩焼、脚部の付け根部分には近世施釉陶器が見られた。土坑内は暗褐色土(Hue10YR3/3)の白砂粒を多く含む層であった。動物骨については第Ⅶ章第２節に詳報がある。

獣骨集中箇所01

Q-100区で検出。動物骨が固まっていたが掘り込み面は確認できなかった。ウシが大多数を占めていたがイノシシ・ネコがわずかに見られた(第Ⅶ章第２節参照)。

759は鉄釘片である。760は十字型の溝を持つ小型の滑石製品である。





第130図　人骨集中02出土遺物

人骨集中02鉄釘出土状況

（3）Ⅵ（白砂）出土遺構・遺物

SK33･人骨集中箇所02（第130図，第35表）

R-98区で検出。Ⅵ（白砂）層の上に人骨片が散乱していた。掘り下げると比較的解剖学的位置を保つ人骨が出土した。

SK33（人骨集中箇所01）

埋葬方法は不明で副葬品はない。未成人で性別は不明である。頭骨と骨盤から下の骨は検出されなかった。

人骨集中箇所02

埋葬方法は不明で副葬品はない。年齢は不明で成人である。少なくとも２体分の人骨片がある。

人骨のほとんどが解剖学的位置を保つことなく，無造作な配列で出土。その中に歯は確認できるが，頭蓋骨・頸椎・胸椎が検出されていない。短い骨は完形だが，長い骨は両端が割れた状態で出土している。

出土遺物

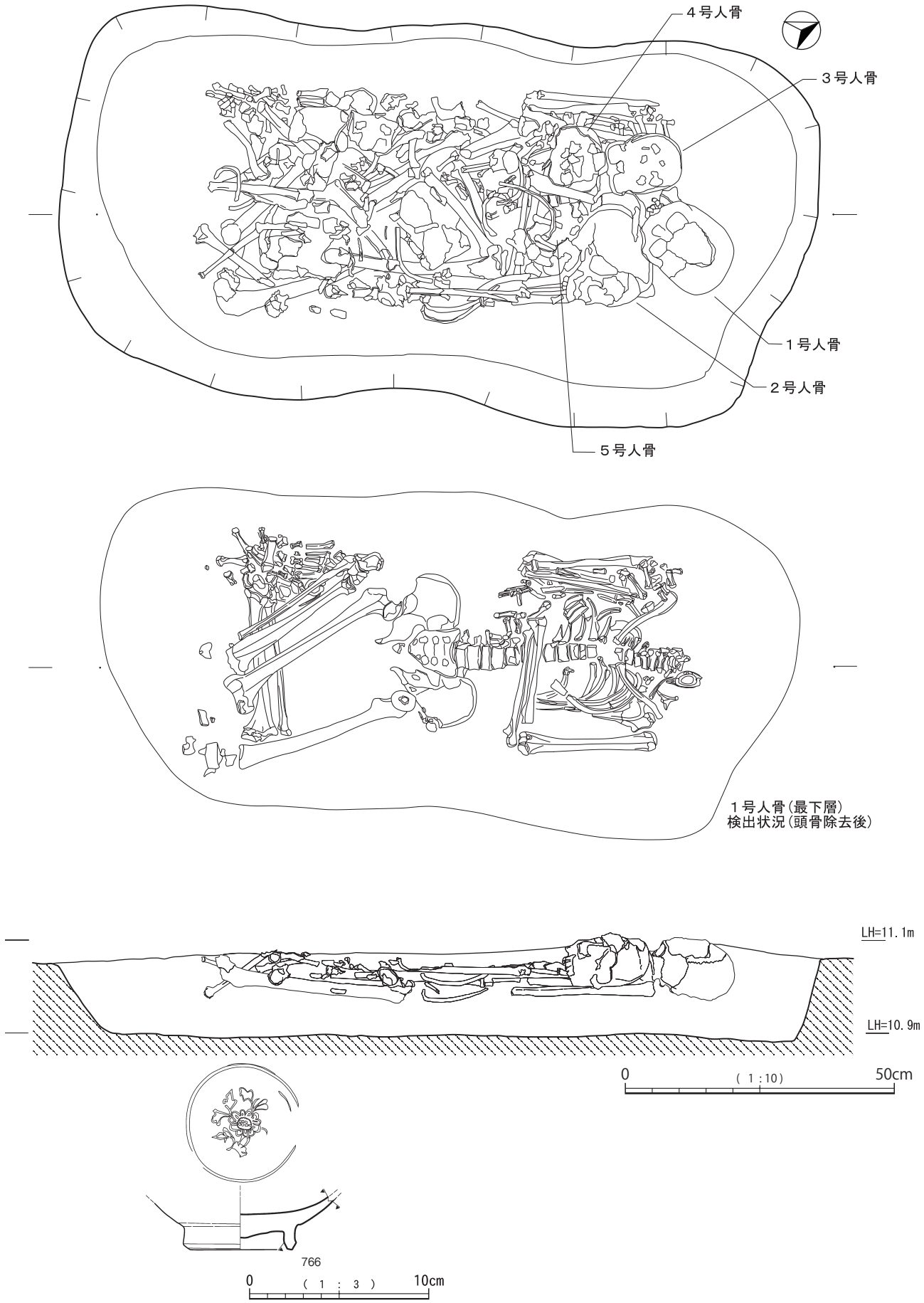
761～765は人骨集中箇所02から出土した鉄製品である。いずれも釘とみられる。木棺等に使われていた可能性がある。

SK23（第131図，第35表）

O・P-99・100区で検出。長軸1.6m×短軸0.8mである。人骨は少なくとも５体が狭い範囲内に重なっていた。釘等は見つかっていないが，人骨が幅約0.5mの長方形状に整っていたことから木棺等の容器に埋納されていたと考えられれる。１号人骨以外は追葬されており，１号人骨の胸の上に４体分頭骨が置かれていた。620±20BPの年代測定結果がえられている（第Ⅵ章第５節参照）。

１号人骨（最下層）

埋葬方法は仰臥屈葬で副葬品はない。熟年の男性である。頭骨～足まで骨がそろっており，解剖学的位置を保ってい


４号人骨
３号人骨
１号人骨
２号人骨
５号人骨
１号人骨（最下層）
検出状況（頭骨除去後）
LH=11.1m
LH=10.9m
0
（１:10）
50cm
766
0
（１：３）
10cm

第131図　SK23

SK23人骨検出状況(１)

SK23人骨検出状況(２)

SK23最下層人骨検出状況

る。

２号人骨

埋葬方法は不明で副葬品はない。壮年の女性である。

３号人骨

埋葬方法は不明で副葬品はない。熟年の女性である。

４号人骨

埋葬方法は不明で副葬品はない。７～８歳頃の小児である。

５号人骨

埋葬方法は不明で副葬品はない。1.5歳頃の幼児である。

観察所見

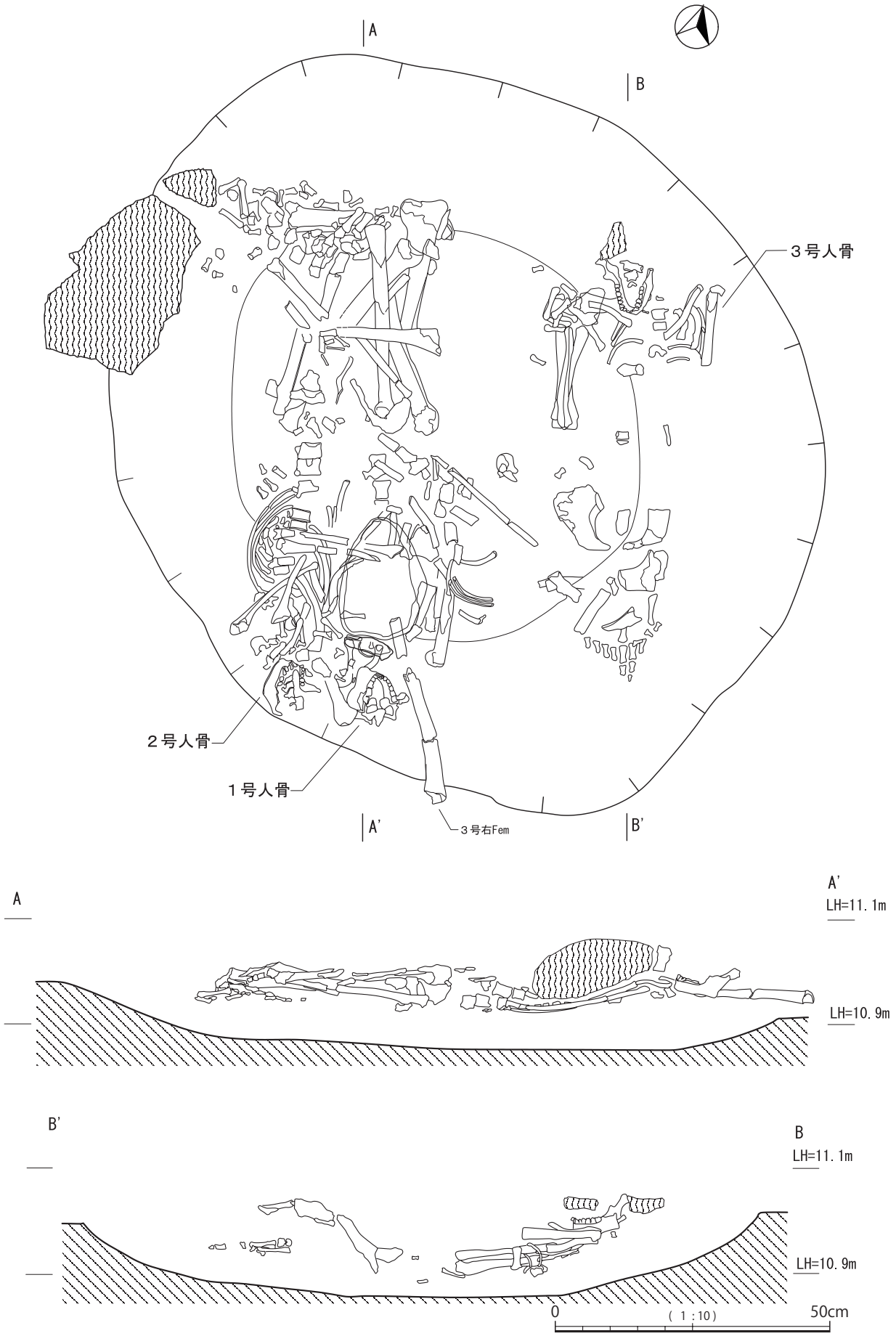
１号人骨は解剖学的位置を保ったまま全て揃っていた。２～５号人骨についてはまるで１号人骨に抱きかかえられるように頭骨が胸の上に集中していた。どの段階で追葬されたのかは不明である。

出土遺物

766はSK23検出時に出土した龍泉窯系青磁椀である。底径5.9cmで内面には圏線と印花文が施されている。高台内部は露胎である。

SK27（第132図）

P･Q-99区で検出。約1.3mの楕円形状の土坑である。人骨は３体出土した。2体重複している下の人骨を１号，上に乗っていた人骨を２号，単体で出土した人骨を３号として調査を行った。１号人骨の胸の上にはサンゴ礫が乗っていた。外して掘り下げると骨が細片化しており，部位の把握は困難


A
B
３号人骨
２号人骨
１号人骨
A'
３号右Fem
B'
A
A'
LH=11.1m
LH=10.9m
B'
B
LH=11.1m
LH=10.9m
0
(1 : 10)
50cm

第132図　SK27

SK27人骨検出状況（１）

SK27人骨検出状況（２）

SK27人骨１～３号検出状況（サンゴ礫除去後）

であった。600±20BPの年代測定結果がえられている（第Ⅵ章第５節参照）

１号人骨

埋葬方法は仰臥ぎみで副葬品はない。壮年の男性である。

頭骨は意図的に引き抜かれた可能性がある。左足が動いている。左右の前腕・手は検出できなかった。

２号人骨

埋葬方法は仰臥葬。副葬品はない。壮年の女性である。

左右とも立膝のためか，脛骨・腓骨が大腿骨の上にある。左右大腿骨・腓骨などの骨が動いている。胸椎に不連続な部分がある。左肩甲骨が検出できなかった。

３号人骨

埋葬方法は仰臥屈葬，立膝である。副葬品はない。熟年の女性である。

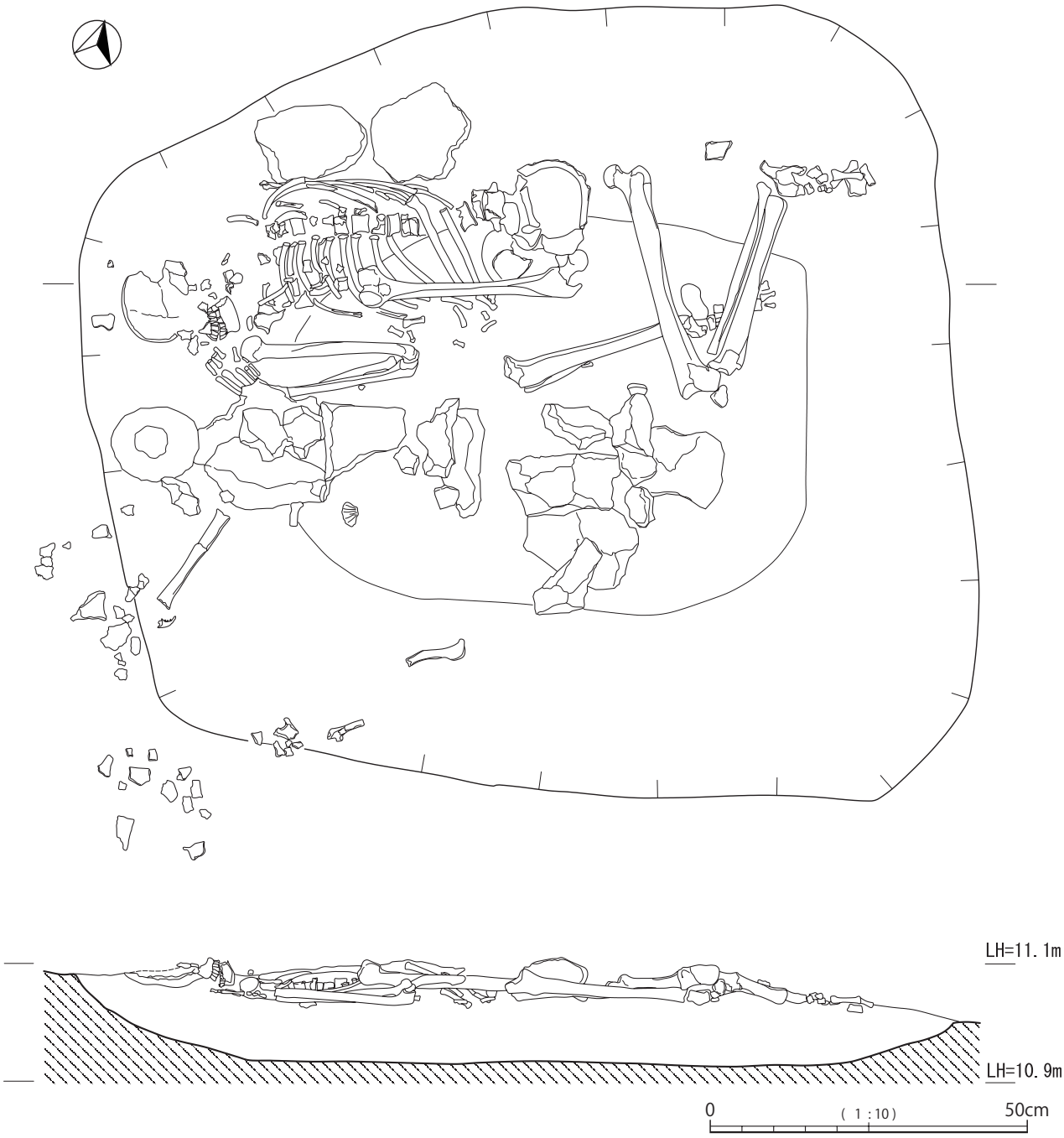
胸の下半分～腹部にかけて人骨が検出されなかった。胸椎の不連続が認められる。右大腿骨・腓骨が動いており，脛骨の大半と左の橈骨・尺骨・手・脛骨・腓骨は検出できなかった。

観察所見

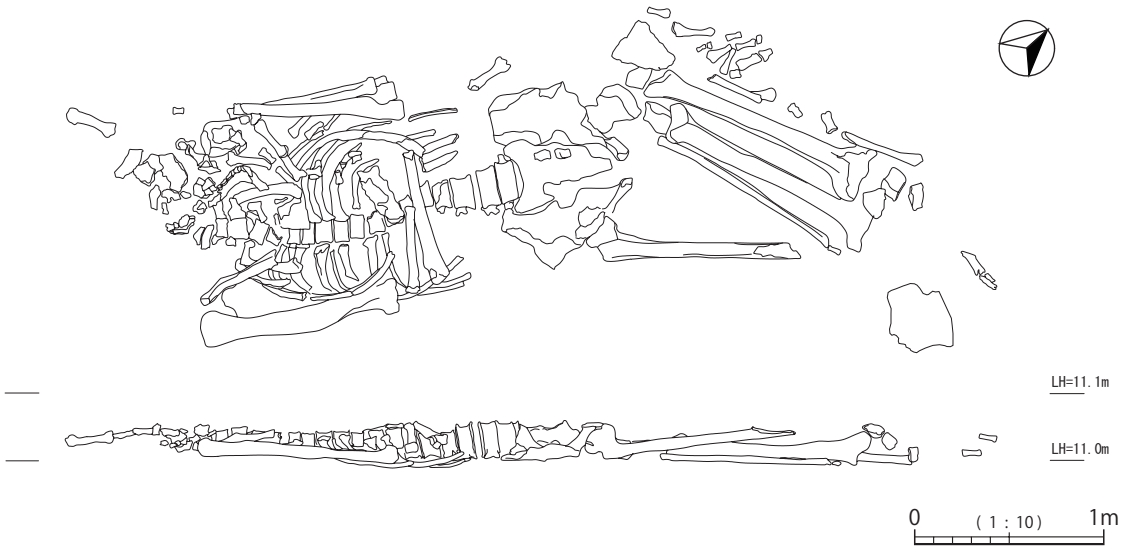
３体とも環椎が残るが，下顎を除き頭蓋片は残存していなかった。１号人骨と３号人骨の頸椎の並びは解剖学的位置関係を保っている。

SK28（第133図）

O-99･100区で検出。長軸約1.5m×短軸約1.3mの隅丸方形状である。土坑中央付近に2列の石灰岩を確認した。石



第133図　SK28



第134図　SK29

灰岩は幅約0.4mで，その間に挟まれるように人骨が出土した。

人骨は壮年後期の男性である。側臥屈葬で副葬品はない。膝を立てていたのか右膝蓋骨が外れ，大腿骨の位置がずれている。サンゴ石灰岩を棺状に利用した事例である。

土坑の南側には解剖学的な位置を保たない人骨が散乱していた。

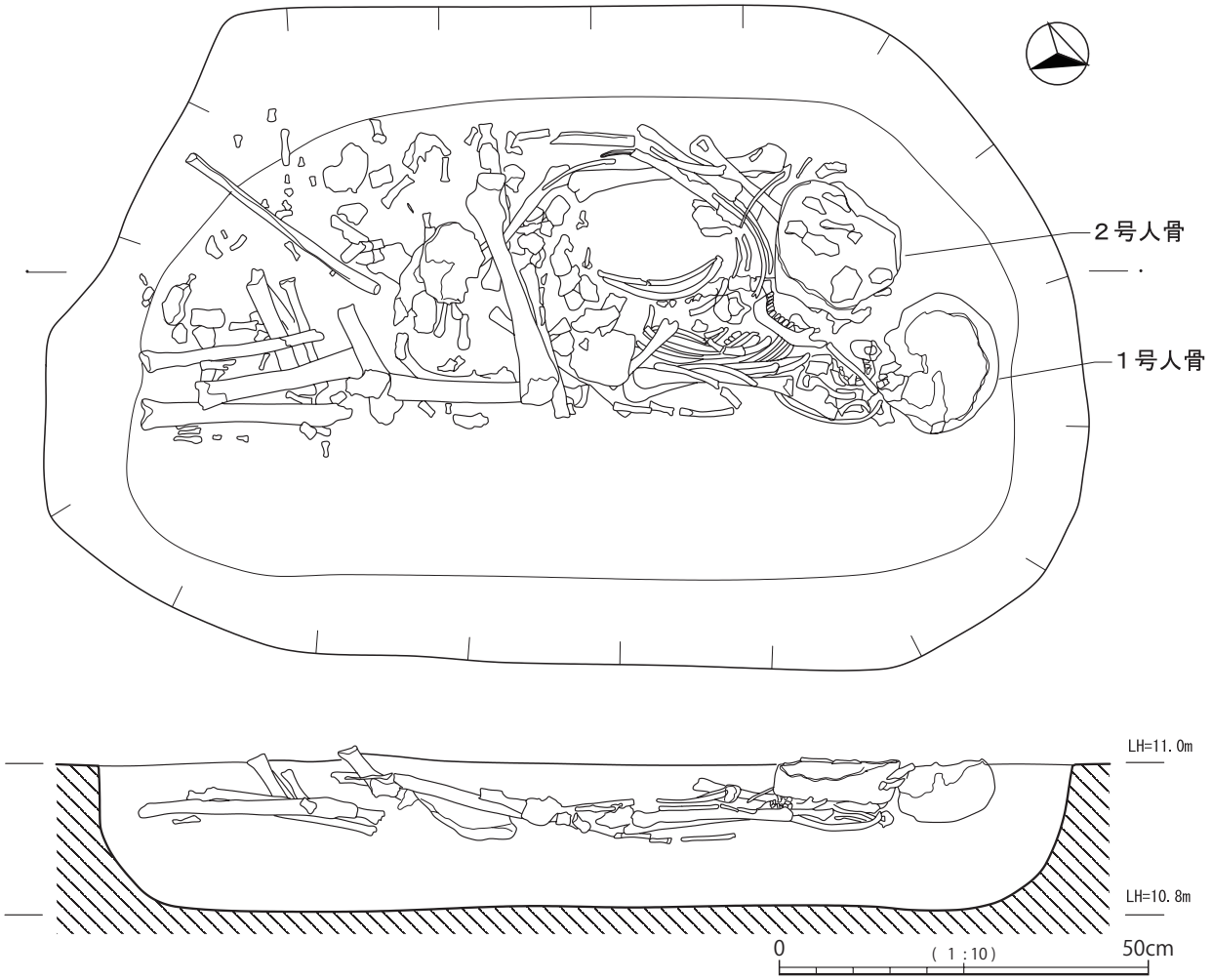
SK29（第134図）

P-99区で検出。土坑は地山（白砂層）とほぼ同じ埋土で明瞭な掘り込みラインは見えなかった。

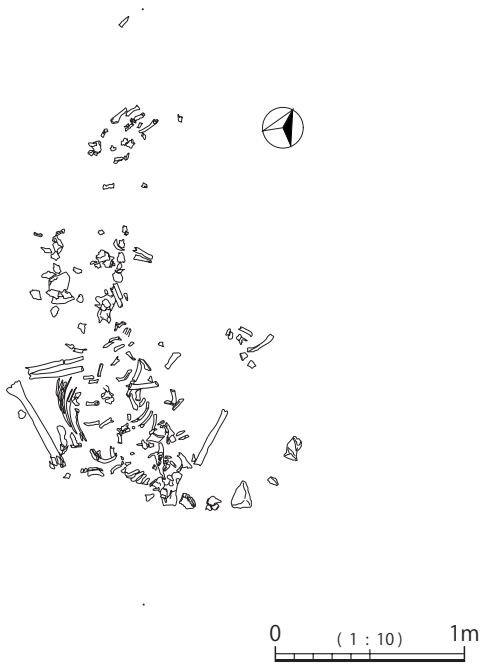
出土した人骨の埋葬方法は仰臥屈葬で副葬品はない。壮年後期の男性である。

頭蓋骨は顔面から脳頭蓋の大半を欠く。第3頸椎と第4頸椎の間で不自然な離開が認められる。右上腕骨の骨体部に骨折治癒痕が認められる。年代測定によると590±20BPである（第Ⅵ章第５節参照）。

SK29・SK30・SK31人骨号検出状況



第135図　SK30



第136図　SK31

SK30（第135図）

O･P-99区で検出。長軸1.4m×短軸0.9mである。土坑内から人骨が２体重なるように出土した。初葬を１号，追葬されたものを２号人骨として取り上げた。検出した人骨は幅40cmほどにまっすぐ並んでいることから，木棺に納められていた可能性が高い。600±20BPの年代測定結果がえられている（第Ⅵ章第５節参照）

１号人骨

埋葬方法は仰臥屈葬で副葬品はない。壮年の男性である。

下半身骨盤から下が解剖学的位置関係を保っている。頭蓋・下顎・椎骨・肋骨が動かされている。左右の腕と頭の位置が不整合である。立膝の姿勢で埋葬されたと思われる。

２号人骨

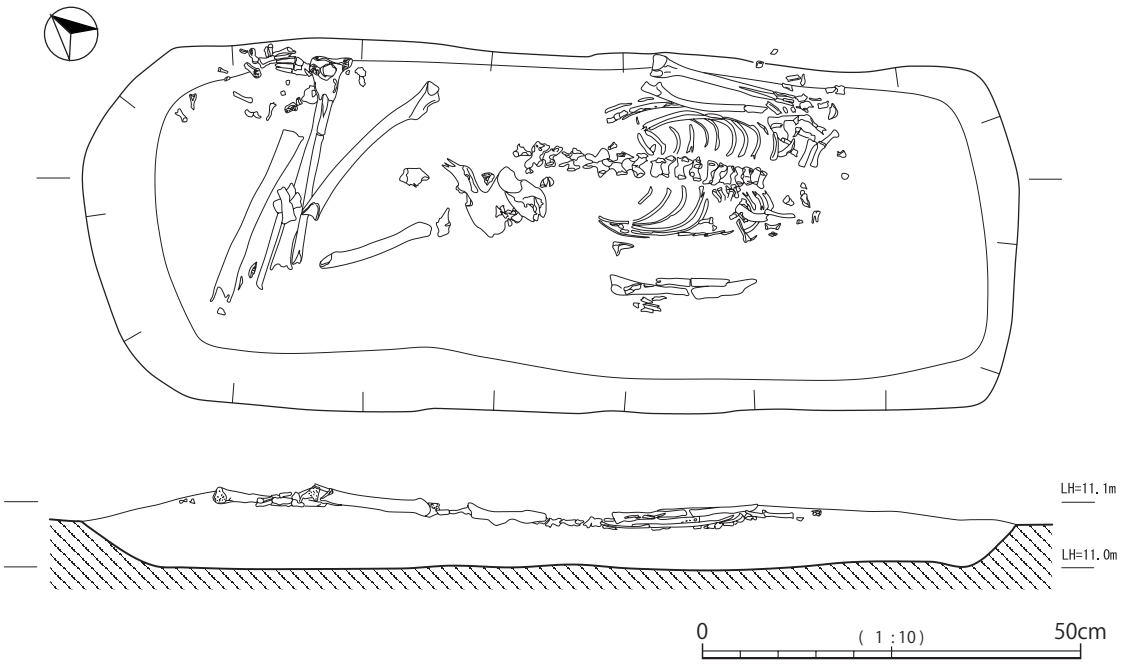
埋葬方法は仰臥葬で右足がやや曲がり，両足で石灰岩を挟むようにしている。副葬品はない。15才頃の若年の男性である。

１号人骨より残っている骨が少ない。頭と右上腕を除く，ほとんどの骨が解剖学的位置関係を保っていない。

推定されるSK30埋葬手順

①１号人骨埋葬，白骨化

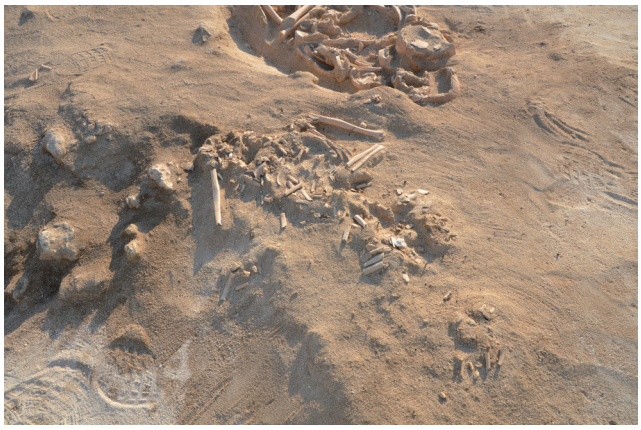
②２号人骨追葬の際，１号人骨の頭骨・椎骨・肋骨を移動



第137図　SK32

SK29人骨検出状況

SK30人骨検出状況



SK31人骨検出状況

SK32人骨検出状況

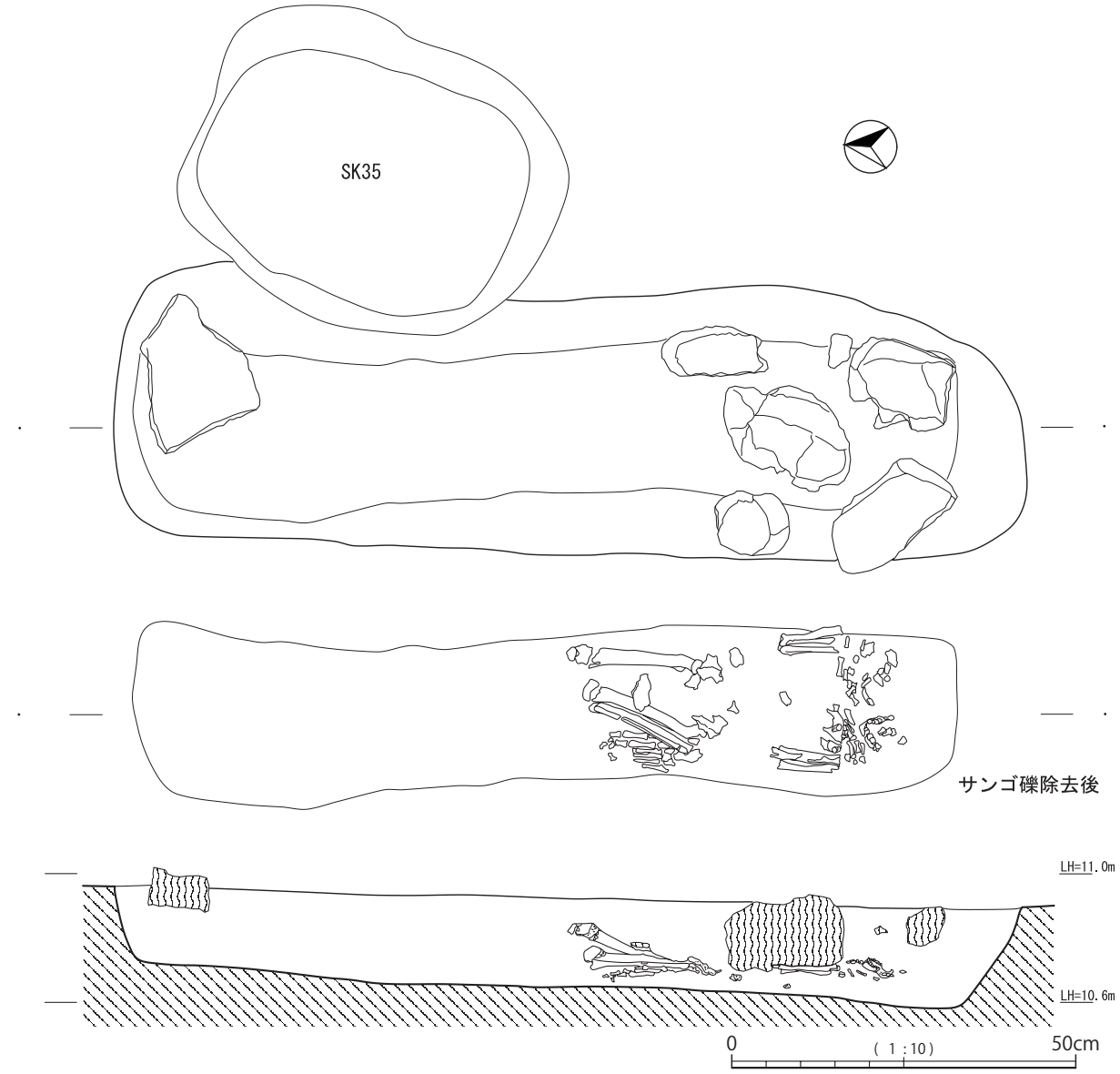
③２号人骨の埋葬

④２号人骨の白骨化後，２号人骨のほぼ全身を移動

SK31（第136図）

O･P-99区で検出。土坑は地山（白砂層）とほぼ同じ埋土で明瞭な掘り込みラインは見えなかった。人骨については以下のとおりである。

埋葬方法は仰臥葬で副葬品はない。10歳頃の小児である。下半身は消失している。頭骨の周辺に小さな石灰岩が見られる。



SK34サンゴ礫検出状況

SK34人骨検出状況

第138図　SK34

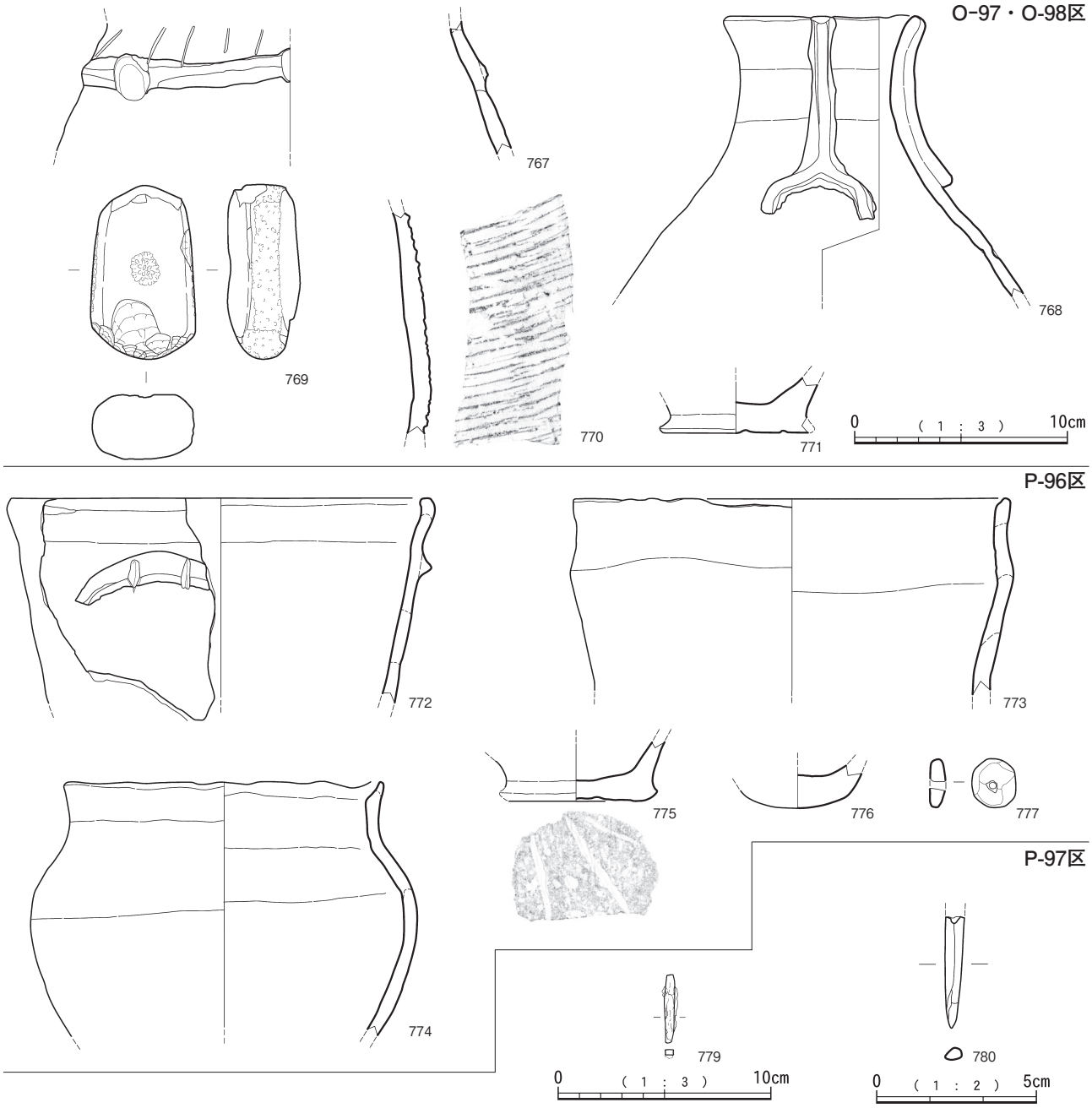
SK32(第137図)

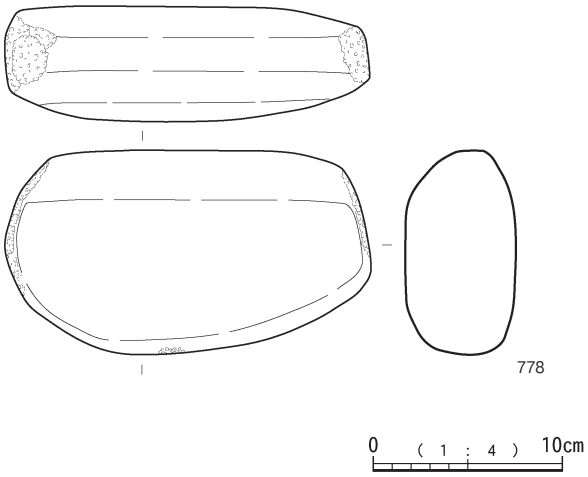
O-99区で検出。長軸約1.5m×短軸約0.5mである。人骨については以下のとおりである。

埋葬方法は仰臥屈葬で副葬品はない。壮年の女性である。頭骨は遺存していなかった。左寛骨に妊娠痕が見られる。

SK34（第138図）

P-99区で検出。長軸約1.4m×短軸約0.5mである。土坑の



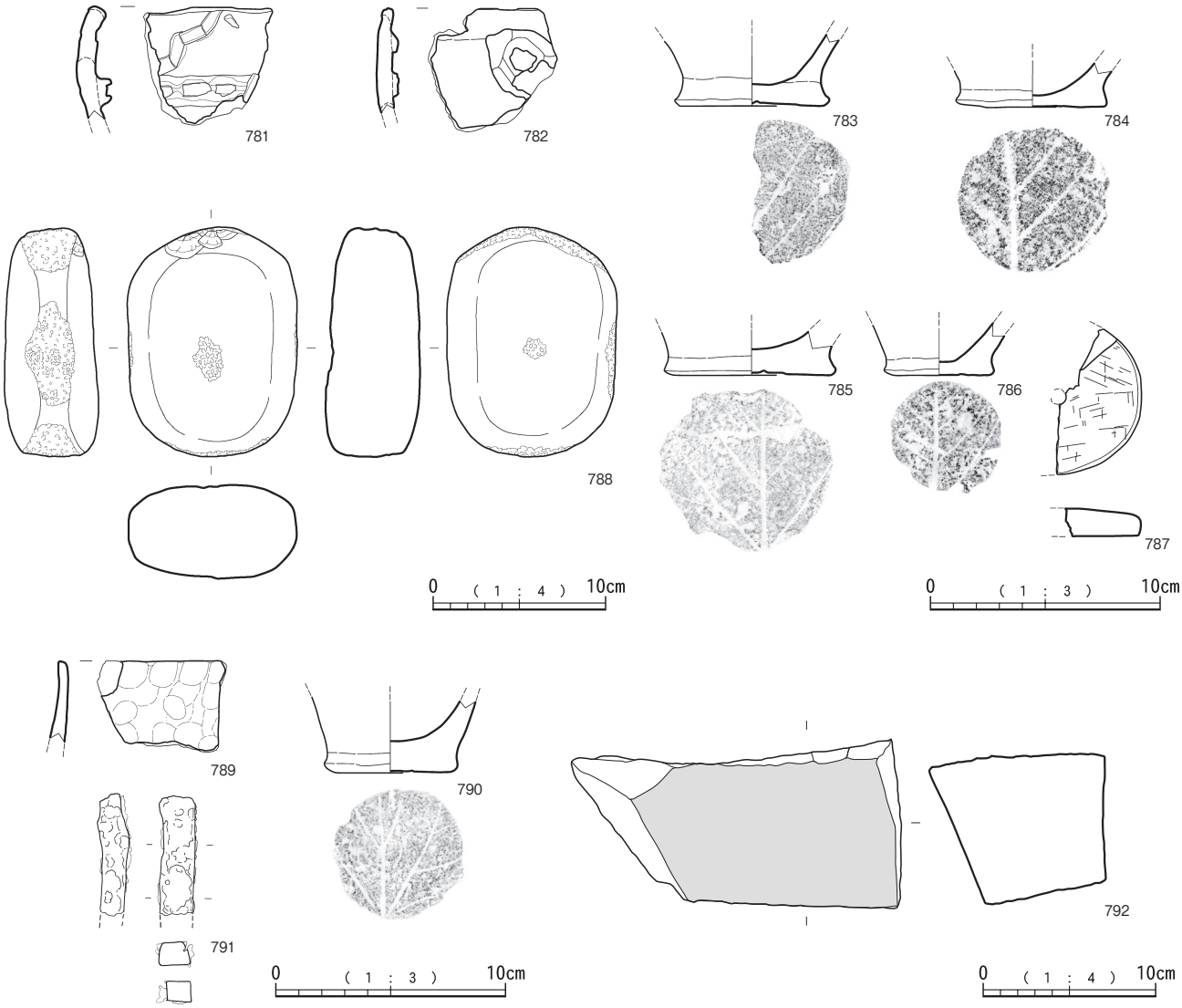


上にはサンゴ石灰岩が見られ，掘り下げると人骨を検出した。石灰岩は人骨の周囲に５個見られ，南側に偏って出土した。北側の石の下には人骨は出土しなかった。

人骨の埋葬方法は仰臥屈葬。両肘・両膝を強く曲げている。副葬品はない。年齢は若年(20歳前)で男性と考えられる。頭骨・肋骨・椎骨はほとんど検出できなかった。

下顎取上時，下顎の下から椎骨が検出されなかったため，脳頭骨を意図的に持ち去った可能性が高い。これらのことから，白骨化した後に掘り返し，部分的に取り上げを行い，最後に石灰岩を配置し埋葬したと考えらえる。

第139図　Ⅳ層出土遺物



第140図　Ⅴ-Ⅵ層出土遺物

第６節　Ⅳ層出土遺物（第139図，第35･36表）

O-97区

767･768は兼久式土器である。768は突帯に指で押圧し，幅広の刻目風にしている。突帯の上部には沈線文が施されている。768は壺である。769は磨敲石である。左右両面に打痕が見られ，下部はつぶれている。

O-98区

770は須恵器甕である。771は兼久式土器の底部である。

P-96区

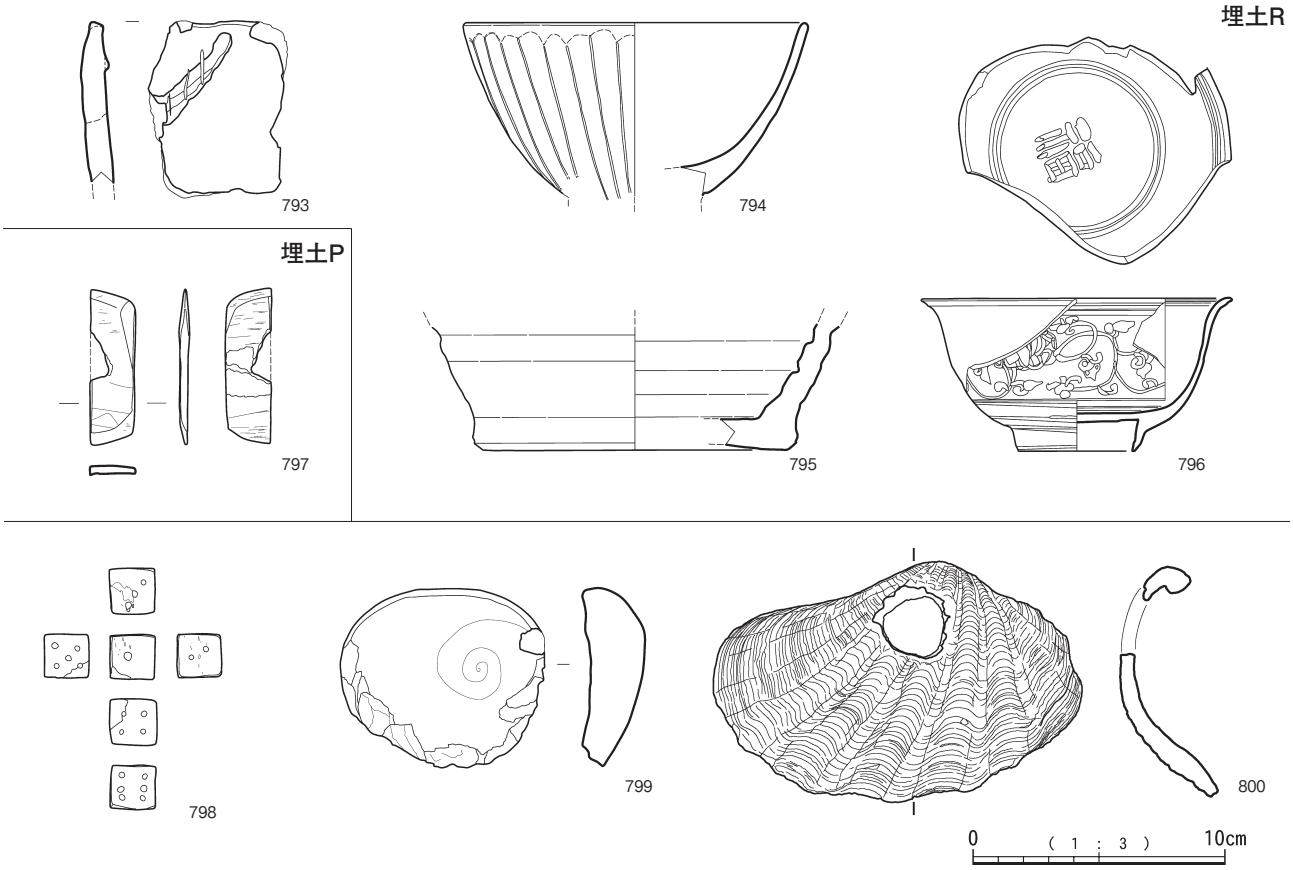
772～777は兼久式土器である。772・773は口縁がやや開く器形で774は胴部に最大径を持つ土器である。776は尖底気味である。壺の底部と思われる。777は土製品である。

P-97区

778は左右両端が叩かれたクガニイシである。779は鉄製品である。780は骨製品である。棒状製品の先端である。

第36表　Ⅳ層～Ⅴ層出土遺物観察表

図番号	掲載番号	遺構名	区	層	種類	器種(最大長)	部位(最大幅)	口/底径(最大厚)	分類L1	分類L2	重量(g)	土質	備考
第139図	777	-	P96	Ⅳ	土製品	-	-	-	-	-	-	泥質	円形状。中央貫通穿孔(1)
	778	-	P97	Ⅳ	石器	(10.9)	(19.3)	(6.0)	ｸｶﾞﾆｲｼ	変成岩1	2350	-	-
	779	-	P97	Ⅳ	鉄製品	-	-	-	棒状	-	-	-	-
	780	-	P97	Ⅳ	骨製品	棒状	-	-	-	-	-	-	骨針状製品の先端
第140図	781	-	R97	Ⅳ～Ⅴ	兼久式土器	甕	口縁	-	外反	丸状	-	砂質	-
	782	-	O98	Ⅴ	兼久式土器	甕	口縁	-	③	丸状	-	砂質	-



第141図　ピット出土遺物

第37表　Ⅴ層・Ⅵ層・ピット出土遺物観察表

図番号	掲載番号	遺構名	区	層	種類	器種(最大長)	部位(最大幅)	口/底径(最大厚)	分類L1	分類L2	重量(g)	土質	備考
第140図	783	-	O98	Ⅴ	兼久式土器	甕	底部	6.0	-	-	有り	泥質	-
	784	-	R99	Ⅴ	兼久式土器	甕	底部	5.2	-	-	有り	泥質	-
	785	-	R100	Ⅴ	兼久式土器	甕	底部	6.8	-	-	-	砂質	-
	786	-	R100	Ⅴ	兼久式土器	甕	底部	4.1	-	-	-	泥質	-
	787	-	R100	Ⅴ	骨製品	円盤状	-	-	-	-	-	-	中央部に貫通穿孔(1)
	788	-	R100	Ⅴ	石器	(13.3)	(9.8)	(5.4)	磨敲石	粗粒砂岩	1193	-	-
	789	-	O98	Ⅵ	兼久式土器	甕	口縁	-	直口	方形状	-	泥質	-
	790	-	R100	Ⅵ	兼久式土器	甕	底部	5.0	-	-	厚い	泥質	-
	791	一括	99・100-W	Ⅵ	鉄製品	-	-	-	棒状	-	-	-	-
	792	-	O・P-96・97	Ⅵ	石器	(8.8)	(19.2)	(10.2)	石皿	粗粒砂岩	2700	-	-
第141図	793	P0223	-	R	兼久式土器	甕	口縁	-	③	-	-	砂質	-
	794	P0453	Q99	R	龍泉窯系青磁	椀	口縁	13.5	瀬戸Ⅵ	-	-	-	-
	795	P0453	Q99	R	褐釉陶器	-	底部	12.1	-	-	-	-	-
	796	P0453	Q99	R	染付	椀	口～底	口12.4/底4.6/高6.5	小野B1	-	-	-	-
	797	P0219	Q100	P	骨製品	板状	-	-	-	-	-	-	櫛の基部？
	798	P0110	Q99	-	骨製品	特殊	-	-	-	-	-	-	サイコロ
	799	P0384	R99	-	貝製品		-	-	ﾔｺｳｶﾞｲ蓋	-	-	-	直径82mm
	800	-	-	-	貝製品	-	-	-	ｼｬｺｶﾞｲ	-	-	-	-

第７節　Ⅴ層出土遺物（第140図，第36･37表）

R-97区

781は兼久式土器で，第１文様帯に押引文が見られる。

O-98区

782・783は兼久式土器である。782の口縁はやや直口し，円形状に突帯が貼り付けられている。

R-99区

784は兼久式土器の底部である。

R-100区

785･786は兼久式土器の底部である。いずれも類似する木葉痕が残っている。787は円盤状骨製品である。中央部に貫通穿孔が見られる。

788は石器である。方形状で上下左右の側面に敲打痕が見られれる。

第8節　Ⅵ層出土遺物（第140図，第37表）

789･790は兼久式土器である。789は器表面が丁寧にナデ消されておらず指頭圧痕が多く見られる。

791は棒状鉄製品である。断面は方形状である。

792は粗粒砂岩製の石皿である。

第9節　ピット出土遺物（第141図，第37表）

埋土P（ピットの埋土等については，第Ⅷ章を参照）

797は骨製品である。厚みは薄く，真弧の横側部分に形態は類似する。

埋土R

793は兼久式土器である。直口し，短い突帯が貼り付けられいる。

794は龍泉窯系青磁椀である。口縁部付近には厚めに釉がかかり，連弁の上端の形状はやや不明瞭である。795は褐釉陶器の底部である。796は染付椀である。外面には唐草文，内面には圏線と「福」の字が描かれている。染付椀小野B1類に相当する。

埋土不明

798は骨製のサイコロである。表と裏の合計が７になる様につくられている。一天地六東五西二南三北四の雌サイコロである。

799はヤコウガイ蓋製品である。800はシャコガイ製品である。上部に貫通穿孔が見られる。

H24 SX27･38検出状況

H24 SX44 木炭検出作業風景

H25 高倉氏・村上氏・堂込氏現地指導風景

H25 I･J-98･99区 Ⅵ層ピット完掘状況